
IS...The top of Asia

直通特急

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS: The top of Asia

【Nコード】

N5085S

【作者名】

直通特急

【あらすじ】

注意：設定の不具合が多数発生いたしましたためこの作品は今後更新いたしません。

修正版として書いております、どうぞこちらにお進み下さい。

<http://ncode.syosetu.com/n1036u/>

1話 入学

俺はいまとある学校の門の前に立っている。何でも俺は世界で2人目の男性のIS操縦者：だそうだ。まだまだ実感なんてわきやしない。

「ぺっ!!」

学校の門に唾を俺は吐いた。悔しかったからだ。そうだ自己紹介をするのを忘れるところであつた。俺の名前は石井章^{イシイ アキノリ}？だ。俺は中学三年間を地元の中学が荒れてて行きなくなつたから…いわゆる中学受験というやつをしてお国の建てた中学即ち国立の中学校に進学したのだ。もともと俺は自慢になつてしまつて申し訳ないのだが勉強は出来た。それこそ小学6年で微分積分が分かつているくらいだったから。まあ、俺の入学した年はたまたま女子の方が成績が断然よかった。と言つても勉強だけが出来るやつばかりで人間性は乏しかった。国立中学と言つことだけあつて帰国子女だと言つた外国人の同級生とも親しい仲になつていた。男友達の方が意外と仲良くなつていたと俺は思う。さっき女子の人間性が乏しかったと言つたのはここあるのだ。

「チヨンなら出来るでしょ？。これぐらい」

「ダメだよ。チヨンじゃ出来ないって」

「あつ、そうか!!」

在日の彼等はそうやって女子どもに馬鹿にされていた。でも、試しに話してみればみんな心はかなり澄んでいて非常にいいやつであつ

た。まもなくして俺と知り合った彼等は男友達を作ることが出来た。勿論自分から勇気を出して話したというのもあったが…。

それで中学三年生になると俺の中学の男女抗争は激化の一途をたどった。奇しくもそのころ歴史の時間で俺達は‘東西冷戦’を習っていた真つ最中であつたから。男子は同盟を…そう、ソ連が昔、他の共産圏の国と組んでいた経済相互援助会議、COMECONのように…。勿論女子も例えるならNATOのような強力な同盟を組んで俺達と対立していた。そんな中とんでもない事件が起こってしまったのだ。最後の年の合唱コンクール。まあ今ではどこの中学でもあるそうで俺の学校にもご多分に漏れずちゃんと毎年10月に開催されていた。こういうときはみんな同盟を組んでいた俺達男性陣はこぞつてサボリ、練習に出て歌わなかった。そんなある日のこと俺はとある女子が泣いた理由を俺の所為にされそうになつたのだ。

「しく…しく…」

「アンタが泣かせたんでしょ。石井謝りなさいよ!!!。」

「こいつが勝手に泣いたのが悪いんだろ?。況してや俺が…俺達が泣かせた理由はなんだって言うんだよ!!。なあ朴^{パク}?。」

この朴というのは俺達の友人でさっき言った在日朝鮮人の朴優一^{パク ゆういち}であつた。彼は韓国人の父と日本人の母の間に生まれたもんだからお互いの国の読み方を取った名前になっていたのだ。

「そうだなあ…うん…僕等には関係ないんじゃない?。だって練習ちゃんと出てるし。石井だけ責められるのもおかしいよ。」

「みんなは?。」

「俺も賛成だ。石井をお前達いい風にしくんでじゃねーぞ!」

「俺も同感だよ!」

「僕も!」

とうとう終いには女性から僕に平手打ちが飛んでくる始末。男性陣の怒りは一気に上昇した。まさに国王の横暴に激怒した市民革命のようである。

「お前等は何もするな!、ここは俺が何とかする」

男性陣を静止させると俺は

「俺を殴ったことを後悔させてやるから楽しみにしておけ」

と女性陣に言うと言り返り

「なあみんな!、これで女子がどんな奴らか分かったことだし麻雀とでも行こうか!」

「賛成!」

との俺とそのほかの男性陣とのかけ声のも俺達は練習を一齐に抜け出して下校していった。その後の合唱コンクールには俺達のクラスからは男子は一人も出ず異例の女子だけの出場となった。それでも俺達に学校の先生は何も言っでは来なかった。匙を投げられたというわけではない、元々この事件は女子の一人が俺に平手打ちをしたからと言う理由で男子が出なかったと先生達が認めてくれて俺達の無罪放免としてくれたからだ。これは他クラスの女子に怯えてい

た男性陣にも大きな影響を与えた。

俺は将来鉄道の運転士になりたかった。これは小さい頃に線路脇に住んでいたからだろう。親父も母さんも学校の先生もなりたいたならなれと僕の職業に関しては大賛成であった。成績もあるだろうがこのご時世これだけ自分の将来を考えている人間もそうそう少ないのだろう。俺はだから国立鉄道大学校附属高等鉄道学校を受けることにしたのだ。この学校はつい最近出来た鉄道系の大学校で文部科学省が認めている大学校の一部である。長引く不況のせいでＪＲ各社は軒並み業績が悪化、ＪＲ北海道、ＪＲ四国、ＪＲ九州、ＪＲ貨物の４社同時の経営危機によりさすがの国も動かざる得なくなったようだった。５年前にＪＲは国有化され再び国鉄となったのだ。と言っても監督者が国になっただけで今まで通り北海道部門、東日本部門、東海部門、西日本部門、四国部門、九州部門、貨物部門と各部門ごとに分けられて実質的には昔のＪＲ各社のそれぞれの経営範囲と重なっていた。

その国有化事業の一環で設立されたのがこの国立鉄道大学校だった。国有化を機にＪＲ各社の職員は全員が国家公務員に任命された。勿論鉄道大学校に受かってても国家公務員と同等の扱いを受けられるようになっていた。具体的には鉄道員の育成を目指した学校であり大学院の運転士課程まで進めば無条件で卒業すれば国鉄なり私鉄なりの鉄道会社の運転士になれるのだ。俺にピッタリな学校だと思ってくれた読者の方は非常に素晴らしいことである。付属の高等鉄道学校も偏差値で言うところと６９とかなり高かった。だが俺にとってはそんなことはチヨロいもんだった。しかも基本的に行くのは男ばかりだからこれで女ともおさらば出来るし…野球部もあるから…。

にもかかわらず運命は過酷なものであった。たまたま入試会場で火災事故が起こってしまったのだ。それで急遽代替予定地として選ばれたのがあの共学と言ってるが実質女子校のＩＳ学園だったのだ。

勿論俺も仕方がないから入試に出た。試験も手応えはばっちりでは吉報を待つばかりと意気揚々にして帰ろうとしたとき、ISが俺に反応してしまったのだ。その所為で俺は強制的にこの国立IS学園に入学させられたのだ。朴も韓国に帰って行ってしまった。仕事の都合と朴の親父さんのお母さんの調子が悪くなったそうだからだ。

「鉄道の勉強もない、男子も殆どいない、野球部もない…ないない尽くしか…。」

俺はもう一度学校に向かって唾を吐くとそう呟きながら学校の門を踏んだ。これからどんな生活が俺を待ち受けているのだろうか…。

1話 入学（後書き）

読者の皆様、初めまして。人生で二度目の作品執筆となります直通特急でございます。まだまだ拙い部分もあるかと思いますがよろしくお願いいたします。

2話 自己紹介

入学式もほどほどに俺は教室に向かった。男子は同じクラスの方がいいという学校側の配慮で1年1組に俺も配属された。あいいうえお順にも関わらず俺ともう一人の男子学生は前後の席順になることが出来た。

「俺は織斑一夏だ。おじむら いちかよろしくな」

「こつちこそ…だな。俺は石井章？いしいあきのりだよ」

「そうそう、俺と…先生が来たみたいだな」

「ああ」

ここの学校の先生は女性の先生しかない。まあISを操縦出来るのが今まで女性しかいなかったんだから当然だろう。担任と副担任が女性と言うことは別に俺は気にしない。というか憎んでも男性の先生に変わるというわけではないのだから憎む必要性を感じない。

「皆さん、入学おめでとう。私が副担任の山田真耶です」

みんなの無反応さに山田先生はあたふたしているようだ。

”おいおい…国立の先生つてもつとまともなはずだろ…”

いちいち俺も不満に思いながら話を聞いていた。先生の話だと担任の先生はまだ会議中とのことだそうだ。この学校は全寮制だから寮でもこんな調子だと気が狂いそうである。まあいちいち面倒なこと

には首を突っ込まないようにすればいいだけのことだ。すると早速担任と思われる織斑先生がドアを開けて教室に入ってきた。どうもこのISと言う世界では織斑先生は超有名な人なのである。ここに来るまでISのことなんてまるっきり興味がなかったから俺は知らないが…。

「そつえばまだ自己紹介が終わっていなかったな。次は誰だ？」

「えっと…石井君ですね」

「よし石井、お前だ」

山田先生と織斑先生の指示を受けて俺は立ち上がった。

「石井章？です。よろしくお願いします…」

まああくまで面倒なことに関わりたくはないからこれぐらいのことにしておこう。ルックスからしたら織斑の方が俺の数十倍…いや比較するのが失礼なくらい上だ。人気をあいっぴり持って行かせればまあいいだろう。昔、南海にいたときに野村克也氏が

”王、長嶋が太陽の下で咲くひまわりなら、俺はしよせん野に咲く月見草”

という名言を残したが俺もそれに従うことにしよう。俺なんか月見草でも勿体ないぐらいだ…まあ好きな花のライラックにでもしておいてもらおうか。

どこの学校でも同じだが初日というのは時間の経つスピードが非常に早いものだ。もう昼食の時間である。ここには学食があって無料利用出来るとのことだ。

「石井、一緒に食べないか？」

「そうだな…俺はいいや」

「腹減ってないのか？、体調でも悪いのか？」

「いや…なんていうか…行くところがあるって言えばいいのかなあ？、男子の更衣室に用があるんだ」

「そうか…」

「お前も大変そうだな」

「全くだよ。今も…」

そんなことを言っているといろんな人に織斑は連行されていった。そのどさくさに紛れて俺も静かに更衣室に向かった。

”思った通り、これは広くて使いやすそうだな”

この男子更衣室はムダにとてつもなく大きい。例えるならプロ野球のロッカールームの凡そ2〜3倍はあるだろう。勿論ロッカーもそれなりに多いが何にも使われていないところも多々ある。ここに来たの理由は素振りをしたかったからだ。

”まあ…裸足でもいいか”

ここには冷水器もあるからいつでも水が飲めるしシャワールームもある。休み時間はここにいれば女子の集中もないし、まあ俺にとっ

てはオアシスであるのだ。

”さて…”

俺は早速素振りを開始した。これから3年間こういう風に生活すると思うと誠に残念である。俺はスポーツは下手な方だ。野球部でも下手の横好きで野球をしていた。勿論練習も一所懸命にしていたから普通にこなすことぐらいなら出来るようになっていた。だから高校でも普通に野球を楽しみたかった。

”ここに…あと7人男子が来ればなあ…”

そんなことをが叶うはずもないのを俺も十分に知っている。まあ俺もここにくればいつでも素振りが出来るから…まあいつか。すると後ろの方から織斑がパンを持ってきてくれた。

「どうしたんだ？、お前意外とたくさん食べるんだな」

「何言ってるんだよ、お前の分を貰ってきてやったんだよ」

「済まないな。あの中で食べ物を食べる気にはなれなくてな」

「わかるよ…その気持ち」

織斑は俺がそう言うのと偉く落ち込んでいた。まあこの辺は察するべきなのだろう。

「素振りか？」

「ああ…中学の時は野球部だったからな」

「まあ頑張れや。俺は…剣道をしていたんだけどな」

「共通点がないわけでもないな。集中力が肝心だから…どっちも」

「ああ!!」

「これからよろしくな」

「こちらこそ」

俺と織斑は改めて挨拶と握手を交わした。気がつくともう午後の授業開始10分前、俺は急いでシャワーを浴びて制服に着替えて教室に戻った…。

3話 紹介された人物

急いで俺と織斑は寮に戻った。なんてったって、腐っても男子生徒、な訳だから。いろいろと大変なのだ。

「なあ石井」

「ん？」

「さっきから後ろがさ…」

「ああ、わかってるさ」

「お互いに頑張ろうな」

「こちらこそだな」

後ろからたくさんの女子についてこられては俺達としても非常に気が重たい。まあ俺は話しかけられないような演技というか自分の設定をこなしているためさほど問題はないのだが…。

「石井君だよな？」

「え、ええ…何か？」

「その縦長の袋つてもしかして野球のバット？」

「はい。中学までやっていたので」

「そうなんだ… あつそれから私の…」

「ああ… すいません。急いでるんでこれで」

「おい石井!!」

「悪い織斑、先に行ってるわ」

俺はそう言つとその場から走り去つた。危うく

”他にも何かあるんですか?”

といちいち人を逆なでするような言葉を発してしまいそうになるところであつた。危ない危ない… 中学で培つた者はあまりにも今の俺にとつては大きいようだ。

”それにしてもあの人… あんなに丈が長い制服着てて問題ないのか?”

さつき話した人はどうも同じクラスの人のおうだったが… 制服の上半身の… 手の部分の丈があまりにも長いのだ。なんというか買い間違えたのだろうか。

「おい石井、酷いぜゝおいて行くだなんて」

「悪い悪い。今度からは気をつけるから許してくれよ」

後ろから織斑が猛スピードで追いかけてきた。その後ろからは女子もそれなりに歩くスピードを速めて俺等を追いかけてくる。

「急ぐか？ 織斑」

「ああ、そうするか」

俺と織斑はそう確認し合うと寮まで駆け抜けた。女子が俺達に敵うはずがなかった。あつという間に突き放された。

寮に着くと早速俺達はさっき学校で配られた紙を見た。部屋割りが書いてあるのだ。

「あれ？、織斑と俺は別々の部屋か…」

「そうみたいだな」

「それじゃあまた後で」

「ああ」

俺は番号の部屋に向かった。

「これじゃあまるで個室の寝台車だな、えつと…ああここだここだ」

中に入るとベッドが…二つあったのだが一方にはシーツなどの設備がされていなかった。

「どういうことだ？」

荷物を置いてほっと一息していると山田先生が俺の部屋にやってきた。

「こんばんは石井君」

「ああ、こんばんは先生。あの…この部屋は？」

「それが…もうすぐ転校生が来るの。それまではあなただけになる
みたいなの」

「それって…個室と？」

「そういうことになるわ」

「わかりました。わざわざありがとうございます」

「それじゃあまた明日ね」

そう言うのと山田先生は俺の部屋を去っていった。それと入れ替わる
ように織斑が…誰かを連れて部屋を訪れた。

「よお」

「どうしたんだ？、何か用か？」

「紹介したいやつがいてな」

「そうか…」

「こちらは篠ノ之箒^{しののへはづき}、俺の幼なじみなんだ」

「篠ノ之だ。一夏の幼なじみだ。よろしくな」

「俺は石井章？です。」

「石井」

「どうしたんだ織斑？」

「さっきから気になってたんだけど、どうしてお前は女子と話すときは敬語なんだ？」

「そう賤けられてね…自分でも心がけてるんだ」

「そうなのか」

「篠ノ之さん。これからよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ」

そう挨拶を交わすと織斑と篠ノ之さんは部屋を出て行った。

”やれやれ…久しぶりに女子と話をしたな。まあこれぐらいなら許容範囲かな？”

そんなことを思いながら食事の時間まで俺はシャワーを浴びることにした…。

4話 素振り

シャワーを浴びようと思ったのだがよくよく考えたらまだ太陽が地平線から半分近く顔を出している。まだまだ日没まではたくさん時間もありそうだ…というよりあるか。

”素振り…行くか”

俺はそう思い、汗かきついでに外に出ることにした。幸いなことに誰にも見つからなかった。どうやら織斑の部屋の方が騒がしくなっていたから女子がこの近くに誰もいなかったのだ。織斑には悪いがどさくさに紛れて俺は外に飛び出した。

既に部活動も終わっている時間で俺だけしか外にはいない。この場所は脇に一応水も流れている。まあ汗をかいたら顔をぬぐうことぐらいなら、しても大丈夫だろう。

”よっしゃ!!”

俺は早速素振りを行った。俺の目標というか尊敬している選手は日本人なら大下弘選手と王貞治選手、韓国人ならオリックスの李承^{イソンヨ}？選手とLGの李晋暎^{イジンヨ}選手だ。中学で朴だとか言った韓国人とも仲がよかった影響がとても強い。だが李承？だけは俺には特別な思いがあるのだ。俺が初めて野球を観に行ったのは今から5年前丁度中学に進学した直後であった。その時は李承？選手は巨人にいたのだが俺の見た試合で初めてホームランを見せてくれたのが李承？選手だったのだ。だからそれ以来ずっと俺は憧れている。打撃のフォームも真似しているぐらいだから。

「ほう、元気なやつだな」

「ああ、織斑先生」

後ろを見るとそこには織斑先生がいた。あんまり女性とは話しはしたくないのだが…先生にはそういうわけにもいかない。

「ここで練習していたらダメですか？」

「いや、そんなことはない。時間や規則さえ守ってくれば私は何も言わないつもりだ。私はお前や一夏のいる寮の寮長を担当している。だから…規則は守るようにな」

「わかりました…」

そう俺が言い返すと先生は言うってしまった。するとなにやら女性の黄色い声がたくさん聞こえた…織斑先生の追っかけのようである。

”厄介だな…”

俺はひとまず壁の影に隠れた。ここならひとまず見つかる心配はないだろう。

”野球部…作りたいなあ…。ソフトボール部はあるけど、だいぶ野球とは違うし況してやいるのは女子だけだ…俺には無理だな”

意外と追っかけ組が引き上げるのには時間がかかった。その所為で気がつくともう日も暮れてしまっていた。

”全くもつ…”

俺は不満に思いながら部屋に戻っていった。部屋には… 勿論誰もいなかった。まあここには一応自分の持ってきたパソコンもあるからいつでも遊ぼうと思えば遊べる。俺は滅法弱いが麻雀が好きだ。将棋や囲碁と同じで頭を使うからとっても面白いのだ。

「まあ… 久しぶりに麻雀でもやろうかな？」

俺がそう呟くと外からノックの音が聞こえた。もうシャワーを済ませているから別に相手に不快な思いをさせることもないだろう。

「はい」

「石井、晩飯行こうぜ!!」

外にいたのは織斑だった。丁度俺も空腹になっていた頃だった。

「うん、そうするか!」

俺と織斑は談笑を交わしながら食堂に向かった…。

5話 民族主義

ここの晩飯は…学食な訳だが

「美味しいな、ここの飯は!!」

「だろ？」

「ああ…ヘタな料理屋よりはいいぞ!」

と言う俺の会話からも分かるようにとても美味しいのだ。今日は無難に日替わり定食にしておいたのだがこの太刀魚タチウオの唐揚げがとてもいい。脂がのついていて絶品だ。

「この魚何て言うか分かるか？」

織斑は急に俺に話を振ってきた。まあ俺も肉より魚の方が好きだからいつ頃が旬だとか何にすれば美味しいだとかと言った基本的な知識はある。

「タチウオだよ、この時期が旬なんだ」

「へえ、お前って意外な事に詳しいんだな!」

「意外か？」

「ああ」

「そうか…」

俺と織斑はすぐに意気投合した。今も笑いあいながら食事をしている。まるで居酒屋で飲んでいるようだ。

「はははは！、そうだったのか。悪かったな、助けてやれなくて」

「今度からは頼むよ」

「わかった。でも…」

「でも？」

「織斑、今日の俺を見ていて分かっただろ？。俺：女が嫌いなんだよ」

「どうして？」

「まあ…俺は一応だけど中学は受験して行っただけけどその学校は帰国子女を取っていてさ…だから…」

そう言おうとした瞬間、織斑の隣に女子が座ってこようとした。

「おりむゝおりむゝ。あれ？、石井君も一緒？」

「あつ…いえ、俺はこれで…じゃあな織斑。また後で…」

「あつ！、おい！！」

俺は食器を片付けて急いで部屋に戻っていった。

「石井君ってさ、何だか私たちを敬遠してないかな？」

「そうだね、ああいうのイヤになっちゃうわ」

「でも…どうしてなんだろう？、織斑君分かる？」

「えっ！？、いや…どうなんだろうな。今度聞いてみるよ」

” 一体どうして石井は女子が…いや女が嫌いなんだろうな？”

織斑自身も自分にそう投げかけていた。そうそう、このお三方の紹介をするのを忘れていた。一応名前だけは覚えている。おりむゝおりむゝと織斑に話しかけたのは布のほとけ本音さん、続いて俺のことを嫌がってくれているのは谷本たにもと癒子さん、そして俺を心配してくれているのが鷹月たかづき静しづ寐さんである。3人とも何でかは知らないが仲がいみみたいだ。

” やれやれ…これだから女は疲れるんだよなあ。団体行動大好きだから”

そんなことを思いながら部屋に戻る途中、俺は…とある女子とすれ違った。同じクラスだったことは覚えている。

「ちょっと！！」

「何ですか？」

俺は野球で培った、相手に威圧感を与える目で聞き返す。

「私わたくしとすれ違ったのに日本の男性は挨拶もしないのですか？」

「少なくとも俺はそうですけど…」

「んまあ！！。呆れかえってもものも言えませんか」

「そうですか。それでは、ごきげんよう」

そう言う俺はその場から立ち去ろうとした。

「まだ話は終わっていませんわ！」

「まだ何か？」

「オホン…私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ」

「なるほど…俺は石井章？です。代表候補生のあなた様に無礼な行動を取って申し訳ございませんでした。以後慎みます」

「おっほっほ。そうしていただけると私としても嬉しい限りですわ」

「それではこれで」

「ええ」

こんな事で俺が折れるとでも思っているのだろうか。俺はどうも聴く音楽も少なからず中学の時は他のやつとは変わっていて世界中の国歌を聴いていた。だから今も曲を聴けば代替のどこの国化くらいは分かる。10曲ぐらいはしかも歌うことが出来るのだ。勿論それは英語圏に限ったことではない。朴なんかもいたから韓国の国歌も

教えてもらえたり、他にもギリシャだとかアイルランドだとかいった国も歌うことが出来る。俺は静かに反対側に去ろうとするさんにアイルランドの国歌である‘兵士の歌’を歌った。この歌は1916年のイースター蜂起失敗後イギリスに拘禁されたアイルランド人たちが、とらえた者たちへの反抗として歌われたものだ。

「

Soldiers are we, whose lives are
pledged to Ireland. (その命をアイル
ランドに捧げた)

Some have come from a land beyond
the wave. (波の彼方の国からやってきた者もい
る)

Sworn to be free, (自由を誓え)

no more our ancient sireland,
shall shelter the despot and the
slave. (もはや我らの父祖からの土地に専制君主も奴
隷も残させない)

Tonight we man the gap of danger
(今宵我らは危険な崖に臨む)

In Erin's cause, come woe or
weal (エリンのために、不幸か幸福か)

Mid cannons' roar and rifles

pearl、(「真ん中の大砲」がうなり、ライフルが響く)

We'll chant a soldier's song.)

我らは兵士の歌を歌う)

「

俺が歌うと案の定オルコットさんはご立腹のようであった。

「なんなんですかあなたは？。いきなり歌を歌い出したと思ったら
寄りにもよってアイルランドの国歌なんて」

「さすがヨーロッパの人間は民族主義的ですね」

「なっ！！」

オルコットさんはそう言うと怒りながらどこかに向かってしまった。

”ざまあ見る”

俺はにやつと笑みを浮かべ部屋に戻っていった…。

5話 民族主義（後書き）

谷本さんの呼び方は諸説あるようですがここでは「ゆこ」とさせていただきます。

6話 決闘だなんてそんな豪勢なことを…

翌日学校に向かうと早速そのセシリアさんが俺に文句を話しかけてきた。まあ態度は明らかに俺を敬遠していた。

「おはようございまして、石井さん」

「ああ、おはようございます…何か？」

「何かじゃありませんわ！！、先生に聞きましたらあなた入試の成績次席だったそうね」

確かにセシリアさんの言うとおりである。前にも行ったが国立の高等鉄道学校に行きたかったから俺は寝る間も惜しんで…とまではいかないがそれなりに勉強はしてきた。だからここの入試も死ぬ気で勉強してきた女性陣には失礼だがチョロいもんだった。実を言うとISが俺に反応した後、俺は半強制的にここの入試を受けさせられたのだ。その時は拒否しようとしたのだが…国の命令と言うことだったので拒否したら鉄道学校にも入学出来ないと思ったから…俺は受けることにしたのだ。

” 何だよ、こんなの試験じゃねえ…。”

俺にとってはまあ良問揃いだった。数学と社会に英語は満点の感触だったし、苦手の国語も…まあそこまで出来なくはなかった。他の教科はまあ9割入っているだろうと思ったのだが、まさか自分が次席になるほどよかっただなんて。これは何の偶然だろうか？…おつと、話しかけられていたのを俺は思い出したから言い返すことにした。

「ほう…そんなに俺成績よかったんですね」

「あなた、入試首席の私によくもまあ昨日はあんな無礼な態度を」

「無礼なのはあなたの方でしょう。間違った考えや偏見が民族対立や差別の発端となるんだ。ユーゴスラビアのように…。まあ、アイルランドの名前を聞いて今のイギリスにはよく思っやつはいないでしょうけどね」

「ふん、ISで教官を倒したって言うのは私だけのようですけどね」

「ああ、実技試験とかってやつでしたよね？」

「そうですね」

「あれなら俺も織斑も勝ちましたよ」

「ななな何ですって!？」

この学校の試験の一つで俺が独特だなんて思ったのはISの操縦試験だった。まあ、速度計が出たり各種のメーターが出たりして面白かったし、エー…ンだとかいった戦闘機のゲームをたくさん俺はしていたから敵を倒すことは…倒すことに苦労はしたもののちゃんと倒すことが出来た。ああ、因みに言っておくと俺が大好きなゲームって言うのは今言ったエー…ンの他にも電 でGO!、TS(Train Simulator…決してISではない)だとか言った基本的には自分が運転士なり操縦士になって遊ぶものである。あつ、あと麻雀関係だ。

「あなたって言う人は…」

と同時に山田先生と織斑先生が入ってきた。

「席に着け！、ホームルームを始めるぞ！」

この織斑先生は織斑の姉だそうで初見からまだまだ日は浅いが、なにやらものすごい威圧感がある。まあ昨日も織斑のことを殴っていたから…というのもあるかもしれないが。

「それでは再来週行われるクラス対抗戦に出る代表を決める、クラス代表というのは…まあ級長と思って貰っていい。自薦他薦は問わない。誰かいなか！」

「はい、織斑君を推薦します！」

「えっ！？」

おっ、早速俺の予想通り織斑への推薦が行われた。まあそれは当然のことでもあるう。その後

「私がやるべきでありますわ」

と案の定セシリアさんが自分を推薦した。あまりに予想通り過ぎて…少しいやな予感がする。その予感には外れて貰いたかったのだが、どうもそうはさせてくれないようだ。セシリアさんはいきなり俺の前にやってきた。

「あなたは…いえ、石井さんは出ないのですか？。教官を倒したのでしょうか？」

「だって、面倒でしょう？。しかも、人に言われてやるのよりはあなたさんのような自分からやりたいと言っている人にやらせた方がいいのではないでしょうか？。スポーツの世界だってそれは同じですよ。野球だってサッカーだって、試合に出たくない人を試合に出すこと何てあり得ませんよね？。それと同じです。」

納得はしてくれたようだが、俺の出だしの一言の‘面倒’と言う言葉がどうも気に障ったらしい。

「面倒とはどういうことなのですか？。説明して下さいませんか？」

「はあ…そうですね。まあ日本では人間と着物には柄つてものがあるって言うんですよ」

「それとこれとがどう関係があるのですか？」

「俺がISをちゃんと着こなして、生徒会だとか言った学校のための奉仕活動をして授業を真面目に聞く‘いい生徒’になれると思いますか？。別に授業をサボるだとかそういうことではありませんが、とにかく俺にはそんなのは嫌なんで。」

どうも俺の言い方が尚更気に入らなくなっただけらしい。

「それでは私があなたの言う‘いい生徒’、と言うことになるのですか？」

「まさにそうですね」

俺は最後に侮蔑の意味を込めてにやつきながらそう答えた。すると

セシリアさんは俺の机をバンと叩いたと思ったら

「決闘ですわ！。織斑さんと石井さん、まとめて相手をしてあげましょう！！！」

と俺等をわざわざご丁寧なことに指で指しながらそう言ってきた。織斑は乗り気ではなかったが別に俺はしてもよかった。勝てればセシリアさんは何も言っていらないだろうし、負けたとしてもまあ女子は俺に関わろうとしなくなるだろうから俺にとっては好都合だった。中学の時も女子には嫌われていたからこれぐらいのことで屈することはない。長年の培ってきた経験は良かれ悪かれちゃんと発揮されるのだ。

「どうするんだ石井？」

「織斑はどう思う？」

「うーん…まあ正直自信はないけど」

「やってみたいと？」

「ああ…。お前は？」

「別に俺もやってもいいぞ。ただ調整したいから明日以降にはなると思うけど」

「ああ、俺も石井と同じでそうしてもらえると嬉しいかな？」

そう二人の会話を聞いてセシリアさんも納得してくれたようだ。

「それではそのつもりで」

自分が勝つという自信がとてつもなくあるのだろう。笑みを浮かべながら自分の席に戻っていった。

「それでは決まったようだな。石井と織斑、それにオルコット！、クラス代表者はこの3人で争ってもらおう！！。以上でホームルームはお終いだ！」

そう言うと先生は教卓から離れた早速織斑の席にはいろんな女子が集まってきた。織斑と約束をした以上俺も席を離れるわけにはいかない。何かあったときのバックアップだ。

「ねえねえおりむ。大丈夫なの？」

「ああ…どうなんだろうな。石井はどう思う？」

”話振られちゃったなあ。まあ昨日結局理由を話せなかったから仕方がないだろう”

「そうだな…まあ何とかなるんじゃないか？。どうせ俺が勝ったとしてもあいつに俺は譲るだろうし…」

「そうか…」

なんだか女子も俺の意見が期待はずれのように少し…白けてしまった。まあこれはこれで好都合だ。まもなく1時間目の授業が始まった。

”やれやれ、入学早々厄介なことが降りかかってきたなあ…”

俺は内心そう思いながら数学の教科書を開いた…。

7話 野球ありがとう

初めてのまともな授業と言うことで少し期待したが期待はずれだった。思った以上にむずかしくはなかった。どうもこの学校は復習重視のようでちゃんと部屋で軽くこなしておけばどうって事はなさそうである。織斑は今日の授業でどうも入学前に渡された分厚いISの教科書をこの間のゴミの日に間違えて捨てたとか言うことで織斑先生に殴られていた。何とも痛そうだった。ヘタすると野球の死デッド球ボール(勿論軟式だが)よりも痛いかもしれない。

俺の言う調整というのはボールを投げておくことである。入試の時の教官との試験ではそれで勝つことが出来たと言っても過言ではないのだ。元々俺は左利きで野球はみんな左でやっている。ただ、橋と鉛筆だけは右手だ。これはこうした方が楽だからである。どうして教官に勝てたのかと言うと、実はあの時ボールが自分のポケットの中に偶然入っていたのだ。それでISの左手の部分だけ一時的に解除してボールを投げたのだ。すると先生がそれを避けた。と同時に丁度僕がわざとぶつかって…まあいわゆる体当たりで教官を倒したのだ。この作戦は思いの外、高評価だったようだ。まあ高価なISで体当たりするのはどうかとは言われたが発想力はいいのことだった。

「こんなところにいたのか！」

「ああ織斑…」

「俺にもやらせてくれよ。楽しそうだからさ」

”野球が好きなのかな？”

「ああ…いいよ」

俺はグローブもあったから…まあ右投げ用も一応用意してあるというか貰うやつが大抵右投げ用だから予備ならたくさんあるのだ。

「はい」

俺はグローブを織斑に貸した。

「悪いな…あれ？。お前左投げなのか？」

「ああ、右じゃあ投げられないんだ」

「そうなのか…意外だな」

「まあ左投げなんてそう多くはないからね」

「確かにな」

それからしばらくキャッチボールをした訳なのだがさすがに剣道をしているとのことだけあって結構いい球を放ってくる。これなら野球でも無理ではないかもしれないとこの時俺は思った。

「いやゝ楽しかったよ。ありがとう石井」

「これぐらいのこと気にするなって…ところでお前今まで剣道か？」

俺は織斑の鞆の脇にあった竹刀を眺めて聞いた。

「ああ。箒に教えて貰っててさ」

「なるほどね」

「ところでお前、あんなこと言っただけで明日の決闘どうするつもりだ？」

「なあに、何とかなるさ。お前の手加減の話も結構楽しかったぞ」

「おいおい。真面目にあれば聞いたんだぞ！」

「ははは。まあまあ気にすんなって…そうだな、明日はこのボールに助けて貰えると嬉しいんだけどね」

「ボールに？」

「ああ、教官を倒したときと同じ手で行こうと思うんだ」

「じゃあ俺も楽しみにしているよ」

「おう！」

俺は織斑と一緒に寮に戻っていった。

翌日、早速決闘は予定通り行われることになった。俺は今のところ専用機なんて豪勢なものを持っていないから練習機で行うことになった。何だかこれでは専用機を持っている織斑とセシリアさんに多少見劣りしてしまう。中には俺の姿を笑っているものさえもいた。

「ねえねえ、あの子練習機よ。あれで専用機に勝てる筈なんて無いじゃない」

「ホントよねえ。でも、セシリアさんが決闘を申し込んだんですつてよ」

「どういうことなのかしらね？」

観客席には頑丈なガラスがついているから何をしゃべっているのかは分からなかった。

「まあ…侮辱と受け取っていいのかねえ？」

俺はそんなことを呟きながらセシリアさんとの決闘に向かった。

”ボールは…3つ持ってきたけど…大丈夫かな？”

俺は早速空に飛び上がった。

「ほう！！、高いなあゝまるで戦闘機そのものだ！！」

「少しは私語を慎んだらどうですか？」

「まあまあそう熱くならずにな…」

「むぐっ…まあいいでしょう。どっちが上かと言うことを見せつけて差し上げますわ！！」

「そうですか、それはどうも」

早速セシリアさんはまあミサイルとでも言えばいいのだろうかそんな当たりのものを俺にたくさんお見舞いしてきてくれた。しかもア

ンテナみたいなの…いや子機と云えばいいのだろうかそれも俺に攻撃をしてくるのだ。

” なんだか隙がありそうな予感がするな…ん？、これならいけるかも…”

どうやらセシリアさんはこの子機に命令するときは攻撃が出来ないようだ。だとしたらその状況を作り出して…と言っ前にやってくれそうぞ。

「そんなもので勝てると思っているのですか？」

” ひょく、これは凄い。たくさんの方から撃ってきてくれるぜ…よしっ、今だ！！”

俺はポケットに入れておいた軟球をセシリアさんに向かって投げた。

「きゃっ！！！」

一瞬だけセシリアさんは怯^{ひる}んだ。この機会^{チャンス}を俺は待っていたのだ。俺は自分の…いや練習機の武器を至近距離からセシリアさんに向かって構えた。幾ら代表候補生でもこの至近距離からの攻撃を喰らえば多大なダメージを与えられそうぞ。

「ここまでして、更に勝負を望みますか？」

「くっ…どうして？」

俺は武器を構えるのを止めた。これで俺にとっての決闘というのはお終いなのだ。

「さて…俺は戻りますね。これ以上しても…セシリアさん、この後もあるんですから」

「なつ、無礼なこと言わないで下さる？。私はまだ…」

「俺が出来ないんですよ。ほら」

俺のISの残りのエネルギーはもう枯渇寸前だった。あの格納庫の中に戻れるかどうかさえ怪しい。

「勝負はあったようだな。石井、お前の負けだ」

「ええ、そうみたいです。やっぱり代表候補生は強かったです」

「お前もいい経験が出来たみたいだな」

「まあそうみたいですな。織斑先生」

「石井君、帰還して下さい」

「わかりました。ということだそうです、織斑との戦いも健闘を祈りますよ」

「ちよつ、ちよつと！」

俺は急いで格納庫に戻った。その後の戦いでもセシリアさんは織斑に自分の弱点を見破られたようだった。まあ俺も観客席ではなくて別の場所から見ていたから分かったのだが…

「お疲れ石井」

「ああ。お前もだな織斑」

「あいつ強かったな」

「本当だぜ。さすが代表候補生だよ」

「全くだ。ところでお前さ」

「ああ、どうかしたのか？」

「前の話の続きをしてくれないか？」

「俺がどうして女嫌いかって？」

「そうそう、あの時は布仏さんとかが来ちゃったから出来なかったじゃないか」

「ここは男子更衣室だからまあ女子はいないし、俺も話そうと思って
いたことだから好都合だった。」

「わかった。実は…」

俺はその後全てのことをぶち開けた。友達に韓国人がいること。その
友達は女子に馬鹿にされたのにもかかわらずくじけなかったこと。
そして、偏見を持った女子が憎いと言うことも…。

「…とまあ言う訳なんだよ」

「なるほどな、確かにそんなのは俺もお断りだぜ。別に韓国人だからとか言う前に偏見を持つやつは嫌いだな」

「わかつてくれるか？」

「ああ！。勿論」

どうやら織斑も俺の意見に賛成してくれているようだ。別に俺は女が嫌いなだけであって女の上に立ちたいだとか言うわけではない。ただ単に女と関わりを持ちたくないだけなのだ。それを理解してくれた織斑にも俺は感心した。

「さてさて、そろそろ戻るか」

「ああ」

俺と織斑が男子更衣室を出ようとするとなにやら外から声が聞こえた。

「何だかまずそうだぞ織斑」

「ああ」

「さながら記者会見だな」

「おいおい、どうするんだよ」

一応ここには非常口があるからそこから逃げ出すことも可能なのだが警報が鳴ってしまう。まあそれをすれば織斑先生のお説教とげんこつが関の山であろう。痛いのは俺も嫌いだ。

「強行突破と行くか？」

「それしかないみたいだな」

俺と織斑はドアの真ん中に立った。そしてドアが開くと同時に別々の方向に散っていった。どうやら新聞部も俺の意見には関心があるようで少なからず追いかけてくる。

” 織斑のやつ、大丈夫かな？ ”

部屋に幸い戻りきることが俺は出来た。すると早速俺に電話がかかってきた。

「はい？」

「石井か、ちょっと助けてくれ」

後ろの方からたくさんの黄色い声が聞こえる。

” 織斑は性格が俺とは違って女子にはとってもいいから、モテモテなんだな ”

そんなことを思いながら俺は

「了解」

と言い、再び部屋を飛び出した…。

一方その頃決闘を申し込んだ張本人のセシリアさんはシャワーを

自室で浴びていたのだがどうも俺達のが気になるらした…。

”二人には勝ったのに…、なんなのでしょう。この気持ちは？”

8話 デタント

山田先生と織斑先生の話だと明日の夕方には転校生が到着することだそうだ。結局俺の個室利用は2日ほどとなってしまうた：まるで宿泊しているかの気分だ。まあ仕方がないから最後の個室での夜を満喫することにしよう。前にも言ったが、ここには俺の自前のパソコンがあるから麻雀をするなり、野球の動画を見るなり：なりといったような事が出来るのだ。えっ？、最後が聞こえなかった？。まあ気にすることではない。幾ら嫌いなものであっても俺も男であることには変わりはないのだから。とまあ冗談はさておき、真面目に明日の転校生に備えて荷物を自分の区画にまとめることにした。と言っても制服と野球の練習着、それからT・シャツ、ジーズと言った普通の服以外はここにはない。俺はあんまりいうか全く服にこだわらない人間だから尚更である。それよりもパソコンなり野球の道具なり趣味の鉄道のためにお金を費やした方が俺はいいと思っている。

「そうだな、バットはベッドの下に置いておくか…」

俺は基本的には木製のバットを使う。基本的にはバットが反らないように吊しておくことがベストなのだがそんな風にしていたら格好が悪い。だがそれ以外にもいい保管方法があつて、それは真横に寝かしておくことである。メジャーリーガーのイチローもこうしているんだそうだ。こうするとクリープ現象と言って、材料に荷重を加えたときに、時間とともに変形が増大していく現象、のことなのであるがこれが起きにくくなるから早い話がバットが反りにくくなるのだ。ながながと解説してしまつて申し訳なかった。まあそんなところでひとまず片付けを俺は終えた。

「ふう…終わった終わった。さてさて、パソコンで…」

と思った矢先にドアがノックされた。

「はい」

俺がドアを開けた…織斑先生のような。

「元気か？」

「ああ、こんばんは織斑先生」

「少し話があるんだが構わないか？」

「ええ！…え、ええ…わかりました」

俺は何のことでお話を受けるのかよく分からなかったがまあ織斑先生を部屋に入れた。

「ほう、転校生が来るからと綺麗に片付けた訳か」

「まあ…礼儀ですよね？」

「ああ。いい心がけだ」

「それはそれはどうも…」

「早速本題に入ろう。席に着いてくれ」

全ての寮の部屋には二人分の椅子とテーブルが置かれている。まあ

食事なり勉強会ぐらいなら出来るくらいの大きさだ。

「どうしたんですか？」

「一夏から聞いたぞ。お前、女が嫌いなんだそうだな」

「はい。それがなにか？」

「お前には申し訳ないのだが明日から来る転校生は女子だ。」

「はっ!？」

「まあ、しばらくしたら一夏と交代させてやるからそれまでは仲良くするんだな」

「織斑とって言うのは？」

「こちらも新人生の対応で忙しくてな。後1、2週間もしたら一夏と同室にしてやる。どうだ？。これなら構わないだろう?。」

何とも言えない気分である。拒否したところで俺の意見が通らないのを先生は知りながら聞いてきているのだから腹が立つ。

「わかりました…それでいいです」

俺は不満げにそう言い返した。本当はとっ…ても嫌なのだが。まあ仕方がない。

「そうか…それじゃあ頑張ってくれ」

俺でもさすがに織斑先生には逆らえない。げんこつが数えられないくらい飛んできそうだ。

先生が去ると俺はベッドにヘッドスライディングした。

「はあゝゝゝ、嫌になっちゃうよ。寄りにもよって女子と同室だなんで…」

そんなことを呟きながら脇の窓から顔を出している満月を俺は眺めた。とても明るいことに気がついた。

”仕方がない。今か素振りにでも行くか”

俺はそう思い立ち上がり。バッドを持って外に向かった。今はまだ夜の8時だ。まだまだ素振りぐらいなら俺も大丈夫な時間である。そういえば、転校生が夜更かしする人だったらどうすればいいのだろうか？…まあその時はその時か！。

”やれやれ…。まあこういうときは素振りに限るな。いろんなものを遠くに飛ばしてくれそうだ”

俺の尊敬する李承？選手も…いやどの野球選手もきつとこうして努力しているはずだ。ただ女性を俺が認められるようになるのにはまだまだ時間がかかりそうな気がする。本当は俺もどうすればいいのかよく分からないのだ。幾ら演じるのは慣れているとは言え、時としてこのままでいいのかと思うときがないわけでもない。まあ明日の転校生が来たらいろいろと俺にとっての環境も変わるかもしれないな。

”デタント…か。朴とか元気にやってるのかな？”

俺はそう思いながら素振りを続けた。

8話 デタント（後書き）

今回文章に登場いたしましたデタントと言いますのはフランス語の D ? t e n t e から来ているものでして、戦争勃発の危険があるほどに切迫した二カ国間の緊張の緩和を意味するものでございます。ここでは主人公と女子の対立を冷戦に例えた表現でこの単語を使わせていただいております。

9話 敬語

昨日の決闘に負けはしたもののやはりいくらか他者からの俺の見方は多かれ少なかれ変わったようだ。

「ねえねえ石井くん。どこであんなにIS飛ばせるようになったの？」

”朝からこの人本当にのほほんとしてるな”

「いや…まあ、特に何もしてないですけど…」

「またまた、どこで練習してたのさ？」

「本当に何もしてないですって…あつ、ちょっと用事があるんで」

「あつ、ちょっと…行っちゃった」

相変わらず俺は俺である。やっぱり昨日考えたのだが女子と仲良くすることはまだまだ俺にとっては無理な話のようだ。布仏さん達には申し訳ないが今の俺にはこうする意外に他はない。

「おりむ、石井君って私たちのこと嫌いなのかな？」

”まあ確かにその通りなんだけど…そういうわけにもいかないからな”

織斑の何とも言えない判断だったがこれはこれで俺にとっては好都合だからまあいいのだろう、きつと…。

「いや…特にそういうことではないと思うけど…」

「そうかなあ？…だったらいいんだけど」

確かに布仏さんの思うとおりでもある。俺は学校が始まって早くもそれなりに孤立し始めていた。周囲と閉鎖的な環境を整えているのだから当然だろう。それをよしとする人とそうでない人がいる。そのそうでない人というのが布仏さんだとか意外にもセシリアさんだったりする。

「一夏さん。石井さんに何とか言ってもらえませんかしら？」

「言っつて…何を？」

「あのままでは私たちのクラスの輪が乱されてしまいますわ」

勿論俺だってそれを狙ってやっているのだ。まあ中学の時のように派手にはやらないだろうが…。

「一夏。私からもお願い出来ないか？」

「第、お前までどうしたんだ？」

「何だか石井が寂しく見えるんだ。どうもそれを演じているのかも…
しれないが…」

「だとしたらどうして？。篠ノ之さん」

「それは私にも分からないが…石井のやつ何か大きな理由を隠して

るんじゃないか？」

”まずいな、みんながここまで勘が鋭いとは思わなかった。”

「とにかく、俺が聞いておいてやるから…それでいいだろ？。なっ
？」

何とかその場を織斑は落ち着かせた。俺も丁度用事という名のトイ
レから帰ってきた。丁度授業が始まるうとしていた。

放課後、俺は織斑に屋上に呼ばれた。

「ここなら誰もいないから大丈夫だ」

「そうか…それでどうかしたのか？」

「ああ、お前のことをみんなが不審に思っているんだ」

「と言つと？」

「ああ。お前の女子に対する警戒心がどうも強すぎるみたいだぞ」

「なるほどな…まあ予想していた通りかな」

「どうするんだ？お前」

「うん…まあクラス行事とかはそつなくこなそうとは思ってるんだ
けど、そうは受け取ってもらえなさそうだな」

「だろうな…この調子じゃあ」

「ひとまず寮に戻るか？」

「そうするか！」

俺と織斑は屋上を後にして寮に向かった。

そういえば今日は転校生が来るんだっただな…あつ、鍵は俺が持っていたんだっただ。すっかり忘れていた。やれやれ困ったものだ。まあ先についていなければいいのだが…。

部屋のドアの前についた。辺りを見渡したが誰もいないみたいだ。

「おつ、よかったよかった。待たせたわけではないんだな。」

「何してんのよアンター！！」

突然脇からまあ身長は俺より低い女子が突っ込んできた。まあバツトケースから一本、バツトを取り出してバントをやった。どうやらおでこに当たったらしく赤くなっていた。

「痛った〜い。人をバツトで叩くなんて、アンタどういう神経してるのよ！！」

「いやあなたがぶつかってきたんでしょ？。俺の部屋につてことはあなたが新入生の？」

「そうよ、リンー！！」

「P？」

「はっ?!」

「元素番号15…リン、記号はP」

「そっちのリンじゃないわよ!!」

「じゃあどのリンですか?」

「名前よ名前!!。私の名前は^{ファン}鳳鈴^{リン}音^{イン}って言うの!!。中国の代表候補生よ!!!」

なんだか最後の一文をやたらと強調したかったようだ。まあ代表候補生って言うのはプライドも高いのだろう…。

「まあ…アンタと一緒に部屋なのは分かったわ」

「そうですか…」

「そんなことより一夏は?」

「織斑のことですか?」

「そうよ!!。私と一夏は幼なじみなの」

「ほう…なるほど…」

「それで一夏の部屋は?」

「えっと…この先を左にまっすぐ行っただけですよ。多分ドアが蜂の巣になってますからすぐ分かると思いますけど…」

実を言うと一昨日、織斑は篠ノ之さんに危うく木刀で刺されそうになったそうだ。その所為で今も織斑の部屋のドアは蜂の巣状態になっている。

「わかったわ。明日にでも行ってみる」

「そうですか。それはよかった…」

どうも俺のしゃべり方が凰さんは気になるようだ。

「なんでアンタ、敬語なの？」

「何でって言われても…そう躰けられたんで」

「なんだか私はその言い方気に入らないわね」

「そうですか…それなら話をしなければ…」

「はあっ!？。アンタそれでも同じ部屋の人間なの？」

「ダメですかね？」

「私はねえ!、せっかくだからいろいろ話だっと思っていたの!。なのに肝心のアンタがそんな態度だったらダメじゃない!!」

「いや、でも…もうすぐ交代するんですよ？」

「どっという意味？」

「今織斑と篠ノ之さんという方が同室なんです、なにぶんにも異性なものですから近々凰さんと篠ノ之さんのペアに交代するんですよ」

「そうだったの?!」

「ええ…だから別に話なんかしなくても…」

「それとこれとは話が別よ!!」

「ほう…そう答えるんですか」

「当たり前でしょ!。とにかく、私に今後敬語使ったら殴るからね…」

「…」

「何黙ってるのよ?」

俺は腹が立ったからペンで紙に

”これならいいんですよね?”

と書いた。みるみる凰さんの怒りのボルテージは上がっていく。

「うああああ!!!。もう怒ったわ。アンタなんかこうしてやる!」

まあ代表候補生だからISを持っているのは当然のこと、俺はしばらく追いかけて回された。

「コラー！！！！、待ちなさい！！！！」

” やれやれ…困ったルームメイトだぜ。寡黙なやつがよかったのに… ”

俺はそう思いながらも一応何かに備えて肩につけたバットが3本入ったバットケースを背負いながら寮の中を駆け抜け回った…。

10話 朝練

今は俺にとっては朝の時間である4時だ。まあ目覚まし時計を使えなくなつたから今は時間になると震える時計を使っている。

「朝か」

昨日も何とか部屋についたものの……

•

「なにしてんのよ石井」

「何ってもう寝たいんですけど……」

「はあ！？、まだ10時半よ！」

「俺の生活リズムは他の人とどうもずれているようですから……それでは……」

俺は自慢ではないが布団に入るとほんの一瞬で眠りに就くことが出来るのだ。

「あつ！、ちよつと！」

$$\begin{array}{ccccccc} & \neg & & & & & \\ Z & & Z & & & & \\ Z & & & & & & \\ Z & & & & & & \\ & Z & & & & & \\ & Z & & & & & \\ & Z & & & & & \\ & & Z & & & & \\ & & Z & & & & \\ & & Z & & & & \\ \bot & & & & & & \end{array}$$

「ねえ！、ねえってば！！」

「zzzzzzzzzz」

「もう…せっかくもつと話がしたかったのに…でもなんでこの石井
って私と話がしたくないんだろう？。そこまで私のことを嫌ってる
のかな？…明日一夏に聞いてみるか」

.....

という一連の流れがあつたのだ。となりでは今は鳳さんが寢息を立
ててスヤスヤと眠っている。俺は起こさないように部屋の外に出た。
これから素振りに行くのだ。俺は夜が極端に弱い反面、朝には滅法
強い。起きようと思えば3時以降なら大丈夫なのだ。えっ？、3時
は夜だつて？。はて、なんのことかな？。とまあ俺はいつも例の芝
生のところに向かう。ここなら例え誰かに見られても何をしている
か一目で分かるから問題はない。勿論、寮長の織斑先生の許可も取
っているから安心だ。

”今日も気持ちいいな…新鮮な朝の空気だ”

まだまだ日は出ていないが東の空が徐々に明るくなっていく。もう
すぐ夜明けのようだ。

”さて…やりますか！”

俺は早速素振りを始めた。いつも朝の6時くらいまで大体1時間半
から2時間近くやっているのだ。まあここところは新学期になっ
てまだ間もないから調整目的で1時間に抑えている。それでも起き
る時間を変えないのはいつもの生活リズムを狂わせたくないからで、
鳳さんが起きていれば話でもしてやろうと思っている。一応転校生
だからわからないことも少なからずあるだろうし…。

そんなことを思っている頃、同室の住人である鳳さんも目覚めたようだ。

「うーん。あの後私もすぐに寝てみたけど…うまく眠れなかったなあ…あれ？、置き手紙？」

俺は一応何かに備えて机の上に置き手紙というかメモを残しておいたのだ。

「えっと…。おはようございます。外にいます。何かございましたら連絡して下さい。石井章？…ってなんなのよこれって!!」

鳳さんはどうも気性の激しい人のようだ。その所為で昨日も俺は痛い目に危うくなりそうだった。まあ今日は無難であろう。何てったって学校があるんだから…。

”日の出か…おっともう5時過ぎか…そろそろ戻ろうかな？”

俺はそんなことを思いながら寮に戻った。先にシャワーを更衣室で済ませてきたから朝から何とも言えない爽快感である。ドアを開けるともう制服に着替えた鳳さんが起きていた…まあ当然のことながら眠たそうだ。

「おはよう」

明らかに機嫌の悪そうな口調で鳳さんはそう俺に言ってきた。

「ああ…どうも」

「アンタさあ。この手紙何？」

「何ってその…何かあったときにこうしておかないと責任が取れないですから」

「ふざけないでよ！！。こんな朝早くに起こされる私の身にもなつてくれない？」

「別に鳳さんは鳳さんで遅くまで起きていればいいじゃないですか」

「この部屋で一人ぼっちで遅くまで起きてろって言うの？。私の気持ちも少しは考えてよ」

「すいませんでした…」

俺は一応謝罪しておいた。まあ今後もうこう振る舞わさせて貰うつもりだが…。

「本当に分かってるの？」

「信用出来ないならそれでも構いませんよ」

「だから敬語はやめてって言ってるでしょ？」

「はあ…まあ今後もうこう言われ続けたくないですから…これでいいのか？…鳳さんよ」

「そうよ。そうしてちょうだい」

「わかった…。お前がこれで気が済むんだったらこうしてやるよ」

「何言つてんの？気が済むわけ無いじゃん」

「はっ?!」

「昨日もいったでしょ？。アンタと私は一応は同じ部屋のルームメイトなのよ。だから会話だつてして当然でしょ？」

「はあ…。じゃあ俺はこれから外で寝てもいいんだけど」

「どうして…どうしてそんなに話したくないの？。私のことが嫌いなわけ？」

「まあ…お前に限ったことではないけど…俺は今のところ女が信用出来ないし信用したくもないからな。まあ理由は織斑にでも聞いてくれ」

「そう…わかったわ」

「これで気が済んだら？。先に俺は食堂に行ってる」

「もう朝ご飯を食べるの？」

「あんな女子に囲まれた中で食べ物か喉を通るわけ無いだろ？。そういうはお前のクラスは？」

「1組よ。本当は2組だったんだけどお願いしたら変えてもらえたわ」

「ああそうかいそうかい。それじゃあな」

俺はそう会話を交わすと廊下に出た。

”これは…本当にデタントを考えなくちゃいけないのかな？…いや
そんなことはない…でも…どうなんだろうな？”

俺はそんなことを思いながら一人食堂に向かった。

11話 冷戦の終焉

食事を済ませていつもの通り学校の教室に向かった。織斑も一緒だ。まあ鳳さんと篠ノ之さん、それからセシリアさんは積極的に織斑に話しかけていた。それを織斑は何を勘違いしたのか普通に返している。これぐらい幾ら俺でも気がつきはする。だが俺は敢えて何も言わない。こういうのは自分で気づくべきなのである。

「一夏さん、ちょっとお話があるのですが…」

「私もが一夏！、剣道のことですな」

「私もよ一夏。久しぶりだし、いろいろと話したいことがあるの」

「おいおいそんないっぺんに言われても…」

「織斑…先に行ってるぞ」

「ええっ！？。そんな…」

「大丈夫だって、死にはしないからさ…」

俺はそう言つと教室に先に向かつていった。ここでも俺の不信感は何れに積もり積もっていく。

「ねえねえ。私、あの石井ってやつと同じ部屋なんだけどさ」

「へえ〜そうなのか？。どうだあいつは？」

「最悪よ！！。何も話してくれないし。私がいろいろ聞いても何にも答えてくれないんだもの…嫌になっちゃうわ」

「そうなんですの。石井さんって私と決闘したときも初めてあったときもあんな感じでしたわ」

「それでだ一夏。石井から何か分かったことはあったのか？」

「うん。実はな…」

時期尚早かもしれないが俺はこのお三方になら話してもいいと今朝言っておいたのだ。多分理解してくれると思ったからだ。

「そういうことだったのですわね」

「親友を朝鮮人という理由で罵って」

「馬鹿にした女子が許せない…と言うことなのか」

「ああ。お前等の言ったとおりだ。あいつは相当なものを心の中に抱えているんだ。だからそつとしておいてあげてくれないか？」

「そうですわね…まあ…事情が事情なだけに」

「そうせざるを得ないな…」

セシリアさんと篠ノ之さんは納得してくれたようだ。だがもう一人は納得してくれなかったようだ。その時は黙っていたようであったが…。

授業を終えていつも通り夕方には自分の…まあこういう使い方はもう既に正しくはないのだが一応部屋に辿り着いた。鳳さんはまだ部活のようだ。帰宅部というのは非常に肩身が狭い。特にこの学校では…。俺だって野球をしたいが出来ない。まあ学校が学校なだけに仕方がない。いつも通り俺は着替えてから外に向かった。

この時間はネットを建ててればボールを打つことも可能である。朝はうるさいからダメなのだが…。

「これでよしと…」

俺は早速ネットを建てた。これならボールを打つても安全である。やっぱり幾らなんでも素振りだけだとあまり成長しない。ボールを打つと言うことも野球にとってはとても大事なのだ。

「さてさてと…今日はなかなかいい調子だな」

俺がそんなことを呟きながらいい気分で素振りをしていると例の人^{やつ}が現れた…鳳さんだ。朝あんな事をしてしまった以上何だか気まずい。

「ねえ！、石井！」

”カーン、カーン、カーン”

「ねえ、ねえってば！」

俺は黙ったまま打撃が続けている。それにもかかわらずまだ鳳さんは俺に話しかけてこようとする。

「ねえ！……！！！」

「耳元でそんなに騒ぐなよ。鼓膜を破る気か？」

「一夏から聞いたよ。アンタ自分の友達を馬鹿にされたのが腹に立って女子を軽蔑したんだって？」

「ああ。その通りだよ。だからお前とも関係を…」

「それはきつと運が悪かったんだよ」

「運だと?!」

「アンタは女性に縁が今までなかっただけ。これから私たちが協力してアンタをもとのアンタに戻してあげるわ」

「お節介もほどにしてくれ!!!!。大体、織斑にならともかくどうして鳳さんに俺がそんなことをされなくちゃあいけないんだ?。もうすぐ部屋だって交換するのに…」

「それは残念ながら無くなった」

後ろからジャージ姿の織斑先生も話しかけてきた。

「どういことですか?。俺を騙したと…」

「済まなかった。ああでも言わないとお前は納得してくれなかったからな」

「つまりはこのまま鳳さんと同じ部屋と?」

「そういうことだ。まあ…仲良くやってくれ」

そう言うのと織斑先生は行ってしまった。俺は大きく落胆した。教師に裏切られるだ何て生まれて初めてだ。危うくバットで殴ろうとするところだった。

「ねっ？。言ったとおりでしょ？」

「そうみたいだな…はあ…まあいいか。と言うわけでこれからもうこんな感じだけだね」

「だから、アンタを治してあげるって言うのにその態度はないんじゃない？」

「なんでお前にそこまでして貰わなくちゃいけないんだ？」

「決まってるじゃない。同じ部屋の住人なんだもの」

「…」

あまりに意外な事に俺は言い返す言葉を失った。

「とにかくそのつもりでいてね」

「…」

「返事は？」

「わかったよ…だからISを停止させる」

どさくさに紛れて鳳さんは自分の利き手の部分だけのISを起動させていた。困ったものだ。

「というわけだからよろしくね!。石井」

そう鳳さんが言つと俺は覚悟を決めた

”いよいよデタントだな…”

と…。

12話 外出 part 1

それから一夜明けて、今日は…土曜日な訳だ。始まった日が水曜日だからこういうことも学校生活ではよくあることである。ここの学生は門限さえ守れば外出可能とのこと、俺はいてもたってもいられず早速外出することにした。実を言うと今日は朴や中学の友達が集まって野球をしようと誘ってきたのだ。久しぶりにこの環境から抜け出せることがとても嬉しい。

「えっと…外野用と一塁用…両方持って行くか！」

一応言っておくと今はまだ朝の5時過ぎだ。ここから野球をやるどころまでは少なく見積もっても2時間はかかる。おあいそ大磯駅からの電車で行ってもまともに野球場がある東京都文京区の大塚にある中学校まではそれぐらいかかってしまうのだ。俺のいた中学は確かに女子は酷いものだったが俺が思うに先生と男子は決してそうではなかった。それこそ朴なんかって言う韓国人や外国人に対しても特に民族で差別をするようなやつではなかった。それこそ野球選手の話で韓国野球もよく出てきたからだろう。先生もみんなで仲良くするよに言っていたから心の中では、人種で差別することはいけない、おあいそと思ってくれていたのであろう。おっと…ながながと書いてしまった。とまあ言うわけで少なからず朝は早めに出ないと間に合わないと言うことである。

集合時間が9時だったから俺は大磯駅を6時46分に出る742Mの普通東京行きに乗ることにした。これなら東京駅に7時56分につくからまあまあ丁度いいだろう。集合時間より早めにつくのは日本人の習性であってマナーでもある。況してや野球をやらせてもらえるんだからそれぐらいのことは当然である。

「ふう…まあこんなもんかな？」

「ふわぁ…アンタまたこんなに早く起きたの…ってどうしたのその荷物？。もしかして…」

「退学すると？」

「うん」

「アホかお前？。それでも本当に代表候補生なのか？」

「じゃあなんだって言うのよ」

「これ見りゃわかるだろ？」

俺はそう言うバットケースと野球用のバックを見せた。ようやく分かってくれたらしい。全く、昨日もなんだか俺の性格と偏見を治すとか言って積極的にこの凰さんは話しかけてきた。まあ、全部無視するのはあんまりな気もしたから一応は受け応えぐらいはしてやった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「野球が好きなんだよね？」

「そうだけど…何か？」

「好きなチームは？」

「多分言ってもわかんない」

「言いなさいよ!。私だって日本に昔住んでたんだから」

「ふ〜ん。じゃあ言つてやるよ。MBC^{チョンニョン}青龍と三星^{サムソン}ライオンズ、それから…近鉄かな?」

「MBC?、三星?、近鉄?…」

「だから言つてもわかんないつて言つただろ?」

「じゃあ説明してよ」

「はっ!?」

「わかるように」

「お前…質問しといて何様だよ…」

「それ以上言つと…殺すよ」

” 織斑の言つてたとおりだな。気性がとてつもなく激しい ”

「早く!」

「ああもう…わかつたよ」

.....

とまあこんな事があつたのだが、まあ野球に興味を抱いてくれるの

なら…まあいつか。にしても凰さんはやたらと何かある度^{たんび}にISを起動して脅してくる。まあ相手も本当にしたらどうなるか分かっているはずだから俺もあんまりと目はしないが…まあ一番やばかったのは初日のあの追いかけっこだな。あれ、一応言っておくと1時間くらい追い回されたのだ。幾ら野球で鍛えたとは言ってもきつかった…。この学校の女子の連携力を考えると逃げ回れるところなんてそう多くはなかったからだ。

「野球行くんだ」

「そつだよ。さすがに分かるか…」

「はあっ!?!。アンタ私をナメてるわけ?」

「ほう、お察しがいいようで」

「ううう。朝一から怒りたくないけど…」

「うおっ!、やべえ!!!」

俺は一目散に部屋から逃げ出した。昨日のうちに今朝の朝食は準備というか部屋の冷蔵庫に置いておいたからもう食べ終わっていて、しかも外出届も書き終えているから後は駅に向かうだけだ。何とも悠々という状況の筈だった…。のに今はまた凰さんに追われている。

「朝一からきついなあ…おっと、来たぞ!」

「コ・ラー!!!」

「はいこれ。外出届ですんで」

俺は寮長の織斑先生に渡した。一応この時間には先生も起きている。鳳さんは追いかけるのをやめた。どうも織斑の話だと鳳さんは織斑先生が苦手のようなのだ。

「出かけるのか？」

「ええ、野球をしに」

「そうか。門限には必ず帰ってこい。もし無理そうだったら連絡は忘れずにな」

「わかりました。それでは…」

「まだだ」

「はい？」

「お前に嘘をついたのは本当に申し訳なかったな」

「そうですよ。おかげさまで朝一からアップさせられる羽目になりましたからね」

「まあ、私もお前には期待しているんだ。時間はかかるだろうがゆっくり治していつてくれ」

”まあ先生がそう言うなら考えざるを得ないよな…”

俺はもう先生のことを憎んでいなかった。別に俺から見た先生のイメージ像だと人種で差別するような人ではなさそうだからだ。

「まあ、先生にそう言われたら仕方ありませんよね。それでは…」

「ああ、気をつけてな」

そう挨拶を交わすと俺は学校の外に出た。いよいよ久しぶりの野球である…。

12話 外出 part 1（後書き）

IS学園の所在地がいまいち見当が付きませんでしたのでここでは神奈川県の大磯付近にあるものとさせていただきます。

また今回文章中に登場いたしました韓国の球団でありますMBC青龍は現在のLGツインズの前身となる球団です。ソウルに本拠地を置き、1982年の韓国プロ野球元年には当時韓国に戻り元東映等で活躍した白仁天氏ペク インチョンが打率4割1分2厘という韓国記録を打ち立てました。これは今のところ韓国では史上唯一の4割打者であります。また三星ライオンズは李承？選手の所在していた球団で作者自身も大好きな球団の一つです。また近鉄は野球の仕方が大好きでした。

13話 外出 part 2

時間通り俺は大磯駅6時46分発の普通東京行きの742Mに乗車することが出来た。どうやらこの学校は名前こそ学園という私立っぽい単語を使っているが歴^{れっき}とした国立の高等学校である。にもかかわらずこの学園の在校生には国鉄のグリーン車までの無料優待パスがついているのだ。さながら国会議員である。

「グリーン車じゃなくてよろしいですか？」

「車両は？」

「E231系です」

「ならいいです」

「かしこまりました」

駅員に聞かれたのだが俺は敢えて普通車で行くことにした。このE231系というのは首都圏で全精力を誇っている旧JR東日本の通勤型電車である。この車両、グリーン車の椅子の座り心地があまりよくないのだ。だから俺はこの東海道線を使うときで且つグリーン車を使うときは車両が一つ前の旧国鉄時代に作られた211系だと決めているのだ。えっ？、説明が分かりずらいつて？。そんなことはないだろう。とまあひとまず俺は東海道線の車両に乗り込み一路東京に向かった。

気がつくともう既に新橋を出たところであった。もうすぐ東京駅だ。

” うっかり寝ちまったな…。 まあもう着くから… いいか！”

俺がそんなことを思っている内に電車は東京駅に滑り込んだ。その後俺は地下鉄に乗り換えて一路中学のある文京区へ向かった。

中学のグラウンドに着くともうみんなが既に準備を終えていた。

「石井！！。久しぶりだな！」

「よお朴！。元気にしてたか？」

「当たり前だろ？。今日これから帰るんだけど…」

「また大邱^{テグ}に帰るのか？」

「ああ…」

「そういえば今年は三星の成績はあんまり芳しくないな…」

「まだ始まったばかりだからね。何とも言えないな」

「それはそうだな。よっしゃ！！。行くか！！。」

「おう！」

俺と朴は親友であると言っていいだろう。勿論野球部の他のやつとも俺も朴も仲がいい。俺と朴は中学の時はよくホームラン競争をしていた。意外な事に朴の尊敬する選手は松井秀喜なのだ。何だか好きな選手の国籍が入れ替わっているような気もするがそれはそれでいいことだ。俺も松井が好きである。あの目が覚めるようなボール

のスピードは李承？と同じものが俺には見える気がする。

「また日韓対決が観られるな！！。石井、朴。期待してんぞ！！」

「当たり前だよ。まあ見てろって！！」

俺等はその日の試合は大爆発であった。俺は2試合をやって6打数6安打、本塁打2、打点5というとてもない成績を残した。一方朴も負けてはおらず6打数4安打、本塁打1、打点3であった。

「今日は石井に完敗だな」

「次を楽しみにしてるよ！」

「ああ、勿論だよ」

「これから帰るんだろ？。どうやっていくんだ？」

「えつと…今日は京城ソウルに泊まるから7時30分に羽田を出るやつだな。アジアナ航空1035便だ」

「そうか…。それじゃあ東京経由で浜松町からモノレールでいいんじゃないか？」

「それじゃあ石井に案内して貰おうか」

「ああ。いいよ」

俺と朴はみんなと一緒に3時半過ぎに中学を出た。早めに朴も空港に入っておきたいとのことだそうだから俺と朴はそれなりに足を速

めてひとまず東京駅に向かった。

「相変わらずの人の多さだな」

「そうだな。大邱^{テグ}はどうなんだ？」

「ここまで酷くはないかな」

「へえ。でも韓国国内では人口が4番目に多い都市じゃないのか？」

「まあ東京とは訳が違っからね」

「それもそうだな。っておい」

「ん？どうした石井？」

「あれ…迷子じゃないか？」

見ると6歳くらいの子が泣きながら叫んでいた。

「うーん。弱っただけ」

その子の隣に立っている会社員の男性もこれまた困っているようであつた。

「どうかしたんですか？」

「ん？。ああ、この子迷子みたいなんだけどさ。どうも日本語がしゃべれないみたいなんだよ」

「そうですか。ちょっと僕等に…」

「君…お父さんとお母さんは？」

「あれ、お兄ちゃん僕のしゃべってることが分かるの？」

「一応はね…ところで君の名前は？」

「ウンヒョクって言うの」

「ウンヒョク君か…」

この子は紛れもない韓国人である。俺と朴は一応韓国語は分かるからどうって事はない。そこにいた会社員の人は安心したようで僕等にこの子を任せるとお礼を言って去っていった。そういえば俺も朴もこの子の名前を聞いたときに

”ウンヒョク？、どつかで聞いたことがある名前だな”

と思った。

「さてさて…ちょっと駅の窓口に行こうか朴」

「ああ。まだまだ時間はあるしな」

駅の管理室に着くと案内放送がかかった。

「ご案内いたします。イ・ウンヒョク君のお父様。地下一階の管理

室にてお待ちでございます。至急お越し下さいませ」

との案内放送がかかってからほんの5分ほどで両親はやってきたようだった。

「ウンヒヨク！！！」

「お母さん！！」

「よかったわ。探したのよ」

「ごめんなさい」

泣きながら母親に抱き寄るウンヒヨク君を見て俺も朴もとても安心した。

「よかったな朴」

「ああ」

すると俺達の方をお母さんは見てきた。

「あなた方が息子を…助けていただいて本当にありがとうございます」

「いえいえ、礼には及びませんよ」

「主人もとても安心しています。ねえあなた！！」

そう言う後ろの方からとある男性が入ってきた。紛れもなく…李

承？選手だった。

「あつ…あなたは！！」

「おつ、俺の名前を知ってくれていたのか」

「い、い、李承？さんじゃないですか！！」

「そうだよ。今日は東京に遠征出来ていたから妻と子を迎えに来ていたんだよ。二人ともありがとう」

「いえいえ…そんなことはありませんよ」

俺も朴も嬉しくてしやうがなかった。助けた子のお父さんがまさか…韓国の主砲の李承？選手だなんて…。俺と朴はとも気に入られたみたいで連絡先も交換しあった。特に俺にはたまに大阪で野球を教えてくれるとのことだ。プロにいける実力は俺には決してないがせつかく教えてくれるというのだから拒否する理由なんてどこにもなかった。

「それじゃあ二人とも。またね」

「はい。李承？さんの活躍を祈ってます」

「僕も韓国から応援しています」

「ありがとう。君たちと会えたことをとても嬉しく思うよ」

そう挨拶を交わすと俺と朴は東京駅を発った。そのあと浜松町で朴とも別れて俺は一度東京駅に戻った。もう時間は既になんと…夕方

の5時過ぎであつた。IS学園の門限は6時なのだ。どう頑張つても間に合つはすがない。俺は半ば怒られることを覚悟しながら帰路についた。

学園の入口は生徒証を見せたからパス出来たものの寮の前では案の定織斑先生がジャージ姿で俺の到着を待っていた。

「遅いじゃないか石井!!。早速門限破りか?」

「すみません…。ついついはいしゃぎ過ぎちゃって…」

「まあ今回は許してやろう」

「えっ!?!」

「さっきオリックスの李承?選手からこの学校に連絡があつたんだ。お前に迷子になった息子を助けて貰つたと。その所為で帰るのが遅れたから許してやってくれともな」

俺はとても嬉しかった。李承?さんのご好意にも先生の優しさにも俺は改めて織斑先生のことを信用出来る先生と思うことが出来た。

「わかりました。以後気をつけます」

「よし!。部屋に戻れ。もうすぐ夕食だからそのつもりでいろ」

「はい!!」

俺はまあ嬉しい気分部屋に戻つた。とは言つても部屋の前ではまたいつもの顔に戻つた。嬉しそうな顔を鳳さんに見せたら何か言わ

れそうだからだ。

「ああ、おかえり」

「…」

「ちょっと」

「ああ？」

「返事ぐらいしなさいよ」

「ただいま…」

「アンタ意外といいところあるんだね」

「えっ？」

「迷子を助けてあげるだなんてさ」

「当たり前だろ。そう言うの常識って言うんだよ」

「あつそ。私は見直しちゃったわ」

「そうか…それはよかったな」

俺もいつも通り無愛想な受け応えしかなかったがこの時初めて女子に誉められて心の中では素直に嬉しく思うことが出来た気がした…。

13話 外出 part 2 (後書き)

韓国の地名は原則として漢字の当て字で書かせていただいております。

例

ソウル	京城	または	漢城
プサン	釜山		
テグ	大邱		
クァンジュ	光州		
テジョン	大田		
ウルサン	蔚山		
インチョン	仁川		

14話 授業

何とも言えない気分である。このクラスはなぜか知らないけど、
「転校生」と言うものにモテモテの用である。

「皆さんに転校生を紹介します。なんと、世界で3人目の男性のI
S操縦者です。シャルル・デュノア君です」

「シャルル・デュノアです。皆さんよろしくお願いします」

俺もほっとした。一瞬女子かと思紛うくらいの美少年である。一応
言っておくが幾ら女が嫌いだからって俺は男子にはときめかないぞ
!!!!!!。まあ冗談はこのぐらいにしておいて転校生を俺は暖かく
向井入れることにした。

「俺は織斑一夏だ。シャルル、よろしくな」

「俺は石井章?。織斑とは同じ部屋なんだそうだな」

そう。俺はこの時笑顔でこう言ったのだが内心では酷く落ち込んで
いた。順番的には俺が織斑と同じ部屋になって鳳さんともお別れ出
来る…筈なのだが俺の治療とのためという何とも訳の分らない理
由で俺は鳳さんの部屋から離れることは出来なかったのだ。がつく
りだ…。

「ボクはシャルル・デュノア。よろしくね織斑くん、石井くん」

「こちらこそ」

「ああ。織斑に同じだ。ところで織斑、1限は実習じゃなかったか？」

「そうだった!!。急ぐぞシャルル、石井」

俺とデュノア、それから織斑は急いで男子更衣室に向かった。実習というのはISの操縦の訓練である。この授業午前中を全て使って行うのだが退屈なときもある、まあこれはこれで面白いが…あまりふざけていると織斑先生のげんこつが飛んでくるから要注意だ。まあ普通に授業を受けている分には安全である。

「急いで着替えないとな」

「ああ」

「…」

「あれ?、もう着替えたのか？」

「えっ!!?、そっ、そうだよ石井くん」

「随分着替えるのが早いんだな。そう思わないか石井？」

「全くだ。生まれつき持った才能とでも言ったところかな？」

「あはははは…」

一瞬、デュノアの顔が引きずっているように俺には見えたが…多分気のせいだろう。時間もあまりなかったので俺達は急いでグラウンドに向かった。

俺は基本的にはどんな授業もあんまり苦労していない。まあこれも生まれつき持った才能なのだろう。だから授業中も平気で

「ふわあゝ」

とあくびをしたりする。

「石井、やる気はあるのか？」

「はい……」

「ちょっとアンタ。少しは緊張感持ちなさいよ」

運が悪いことにここでも俺の隣は凰さんなのだ。どこまで行っても逃れることは今の俺には出来ないようである。

「今日はISの乗降の演習をして貰う。織斑、オルコット、リン、それからデュノアは専用機を持っているから指導に当たれ他の者は好きなところで教えて貰うんだ。石井も勿論混じってやれ」

「ええゝ」

「文句があるのか？」

織斑先生の手が気づかないうちに平手からグーに変わっていた。これに気がついた俺は慌てて

「わかりました！！。皆さんと混じってやります」

と答えた。すると先生もそれでいいとも言いたいような顔をしな

がら俺に頷いた。まあこれはこれで仕方がないだろう、ああ俺も早く専用機が欲しいなあ。」

「石井はどうするんだ？」

「そうだな、まあ余ったところでいいかな？」

「気にするなよ。布仏、谷本、鷹月、箒。石井も一緒にいいか？」

「全然いいよ。石井君、一緒に頑張ろうね。」

「私もいいわ。石井君がんばろっ!!」

「私もよ、石井君、よろしくね」

「私もだ。石井、気を抜くなよ」

「はあ…よろしく願いします…」

早速指導は始まった。

「乗るときは…こう、降りるときは…こう。じゃあ一人一人にやって貰うか！」

俺は順番的に最後の筈なのだが

「石井は乗った経験があるから一番最初でもいいか？」

とのことだ、まあ織斑の頼みなら仕方はないか。

「いいよ」

俺はヒョイツとISに乗り込んだ。さながら貨物列車の機関士のようだ。

「うわゝ、さすが石井くん。セシリアさんといい勝負をただけあるねゝ。様になってるよ」

「そうですか、どうも…」

「よしっ、それじゃあ降りてくれ」

「ああ」

その後、歩くことも訓練したのだが俺にとっては難しくも何ともなかった。

「よし！、それじゃあ今日の授業はここまでだ。解散」

午後の授業は数学である。まあ得意教科だから気にすることはない。ああそうそう俺の得意教科は数学、物理、言語、それから社会である。早い話が嫌いなのは国語と化学なのだ。案の定数学の授業は簡単だった。況してやまだ始まったばかりだから中学の復習ととても楽であった。

「退屈だなあ…」

「ん…お前もう終わったのか？」

「ああ…これぐらいすぐ終わるさ」

「一応今日の出された課題はひたすら因数分解をするもので全部で100くらいある。これぐらいなら5分くらいで終わることが出来る。まあ一番乗りは確実であつた。」

「うん！、全問正解ね」

「どうもありがとうございます。先生」

担任の山田先生はISの専科の他にも数学を教えている。まあこの人の教え方はわかりやすい方だとお俺は思う。ただもう少し堂々と授業をしてもいいような気がするのだが…。

「本当に石井、終わってるんだね」

「ああ。何か分からないのか？」

「60番目が…」

「それはまずここをこうして、そのあとにこうすればいいんだよ」

「なるほど！！。ありがとうございます。これからもよろしくね」

「ああ」

基本的に俺は男女に関係なくわからないところを訊かれたら答えるようにしている。人の性格云々の前に勉強したいと思うこと、それを実行に移すことは平等でなければならぬと俺は思っている。だから仮にどんなにくく思っている女子にもわからないところを訊かれたらちゃんと答えるように俺はしているのだ。まあとりわけ質

問はみんな俺を敬遠して織斑に聞くからそこまで忙しくもないのだが。

授業が終わり、部屋に一旦戻って外に俺は再び出た。まあ野球の練習をしていたわけだ。自前のネットの中は非常に安定してボールを打つことが出来るからとても楽である。

”李承？選手、そういえば昨日ホームラン打ったんだよね。俺も頑張らないとな…”

そんなことを思っただけボールを拾っていると突然辺りが暗くなった。見上げると鳳さんが俺のことを眺めていたのだ。

「どうかしたのか…まあお前も部活帰りか」

「今夜、手伝ってくれない？」

「何を？」

「それはあとで話すから。とにかく、部屋で出来ることなのよ」

俺は正直その気ではなかったのだが拒否させてもらえないだろうから

「まあいいよ…そのかわり遅くまでは出来ないぞ」

と答えておいた…。

俺は今鳳さんに勉強を教えている。

「ここは、…して、こうするの？」

「そう。」

「こっちは？」

「これはこのXの自乗を、適当な文字で置いて考えるんだ」

「あつ！、ってことはこういうこと？」

「そう。この後の問題からはみんな同じだから俺はもう必要ないよね？」

「ありがとう！！。助かったわ。石井の意外性またまた見つけたわね」

「大きなお世話だ！！」

意外な事に凰さんは数学が苦手のようだ。代表候補生は全てにおいて万能とは限らないようである。

「そつえばアンタ。私以外にはまだ敬語を使ってるわよね？」

「悪いか？。お前以外に敬語を使うなんて俺は聞いた覚えはないぞ」

「悪いに決まってるじゃない。そんなことしてたらいつまで経っても治らないわよ」

「だから…治すつもりなんて」

「もう一回今の言うっ？」

「わかったよ…他のやつにも敬語を使わなければいいんだろ？」

「そっ、わかってるんじゃない」

” そりゃあ目の前でIS起動したら誰だってそうなるだろうが ”

俺はまた変な約束を強制されて、何とも言えない気分になりながら
布団の中に体を潜り込ませた…。

15話 早朝

何度でも逃げだそうと何て考えた。だがそんなことが出来るはずはなかった。たいていの場合俺が起きると鳳さんに気づかれてしまう。トイレに行くのも一苦労だ。何でこんな目に高1から遭わなくてはならないのだろうか。まあこれはこれで仕方がないのかもしれない、今まで女子を散々な目に遭わせてきたから今度は自分がそうなる立場にあるのかもしれないな。あつ、そうだった。時間を言うのを忘れていたな。今は5時15分前だ。少し寝坊してしまった。

”昨日は疲れてたからなあ…”

そんなことを思いながらも俺は野球のバットを取り出した。この作業も一苦労なのだ。いかに鳳さんに気づかれずにバットを取り出して、且つそれを持って外に抜け出すかそれが今の俺の課題なのである。これ、しくじると最悪の場合鳳さんの命令で外に行けなくなってしまう場合もあるのだ。どうしてかって言うと…ひたすら話に付き合わされたりとか勉強を教えたりだとかさせられるのだ。別に嫌ではないのだが朝一ぐらい自分の好きにさせて欲しいものである。

”さて…そつとバットを…あつ!!”

「カコン!!」

手が滑って落ちてしまった。しかも絨毯なら音があまり伝わらないからいいが、今回は運が悪いことにバットの上に落ちてしまったから大きめの音が出てしまった。

「ううん…」

鳳さんの声が聞こえてきた。こういうときは慌てずにそつと作業を再開するのが安全策である。ヘタに変な行動をするとかえってばれてしまうのだ。

”よし！、着替えも済んだしバットも大丈夫だ。後は…”

俺は急いで外に出て行った。もう外に出さえすれば鳳さんもこれまでの経験から行くと追いかけてこない。

「ふう…朝の空気はいいね。あの部屋は…いろんな意味で俺には窮屈だからな…」

その後俺は1時間くらい素振りをしたと思う。気がつくともう6時を回っていた。そろそろ戻らないと今度は織斑先生に何か言われてしまいそうだ。一応許可は取ってあるが遅くまで練習していたら学校の授業に影響が出るから先生に怒られてしまうのだ。まあこれは仕方がないことだと自分でそう思っているからしょうがない。

「ふう…」

いつも通り俺はシャワーを浴びて部屋に戻った。

「またアンタ外にいたのね」

「ダメか？」

「当たり前でしょ！！」

「なんで？」

「何となくよ」

「…」

もうこう言われると何も言いかえせない。

「しかもアンタ。バット落としたでしょ？」

「気づいてたのか？」

「当然よ。アンタ起きる時間が早すぎるの!!」

「んなこと言われたって寝るのが早いんだから仕方がないだろ？」

俺はテレビをつけた。丁度スポーツの内容で昨日のプロ野球の情報が
出ていた。

「ねえっ!!」

「少しだけ…待ってくれ」

俺は凰さんにそう言った。

「オリックスは楽天を相手に10安打7得点の猛攻撃、中でも李承
?選手は3回と6回に二打席連続のツーランホームランを記録。一
方の楽天は打線がふるわず、ここにきて痛い1敗となりました」

「よしっ!!」

俺はテレビに向かってガッツポーズをした。

「今夜にでもなれば動画が配信されるだろうからじっくりと見てみよう…」

「アンタって本当に野球が好きなんだね。それから鉄道も…」

「当たり前だろ？。今更確認するほどのことでも無いじゃないか？」

「…のに」

「はっ？」

「何でもないわよ!!」

「そっか…」

俺は凰さんが何を言っているのかよく分からなかった。ひとまず着替えを済ませると俺は（まあ凰さんも後からついてきたのだが）食堂に向かった…。

16話 また転校生、そして…！

これは偶然なのだろうか。昨日デュノアが転校してきたと思ったら

「今日からまた皆さんの新しい仲間が増えます！！。ドイツから来たラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

二日連続で転校生だなんてよほどのことが裏で仕組まれているのだろうか？。しかもこの人…何とも言えないオーラというか空気を自分の周りで作り出している。うかつに近寄ると痛い目に遭いそうだ。これは要注意である。俺は武力行使は嫌いな方だ。だから中学にいたときも女子に殴られたりはしたが自分から手を上げることはしなかった。その分、まるで労働者のようにストライキなどを繰り返していたのだが…。

「自己紹介が終わってないぞ。ラウラ、頼む」

「はい、教官！」

「教官って…」

「どうかしたのか織斑？」

「ああ、前に千冬姉はドイツでISの操縦を教えていたんだ」

「じゃあその時の何かの…」

「ああ…きっとそうだろうな」

「そこ！！、私語を慎め！！」

「「あつ……」」

俺と織斑は同時にそう反応した。まあ当然だろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ！！」

その何とも言えない沈黙を打ち破るかのようにラウラさんはそう言った。

「あつあの……以上ですか？」

山田先生がその後にく。

「以上だ！」

そう返すだけのラウラさん……何とも言えない空気である。既に俺には相当な実力があるように思えるが間違っていないだろう。

と、その時であった。ラウラさんは織斑に一発平手打ちをした。誰もがあまりに突然すぎたので言葉を失った。

「私は認めない。貴様があの人の弟だなんて、絶対に認めない！！」

その宣言の通りであるかのような行動。これは明らかに挑発行為だ。織斑は当然のことだが突然のことでは何が何だかというような顔をしている。それは俺以外の誰もがそんな顔をしている。俺はと言えばこんな子は中学で当たり前だったから別にどうと言うことではない。まあ不意打ちだから中学にいたときなら「卑怯者！！」などとヤジ

を飛ばしたり罵ったりしていたが…。まあせつかく高校にも進学したんだからそう言うのは控えておこう。

「貴様が石井か…」

「それがどうか？」

またまた一気にクラスの全員が怯え始める。俺はこういう修羅場を数え切れないほど身をもって体験してきたから別に普通である。しかも嬉しいことに今ラウラさんが立っているのが自分の右側であることだ。少なくとも衝撃などがいろいろと使うための左手に損傷が伝わりにくいからそれだけでも幸いなことである。

「貴様が世界で2番目の男子のIS操縦者でイギリスの代表候補生を打ち破ったんだそうだな…。しかも練習機で」

セシリアさんは自分のことを言われていると感じき悔しがっているようである。

「随分とお詳しいことで…」

「くっ！！」

俺の態度がよほど気に入らなかったらしい。ラウラさんは俺に平手打ちを飛ばそうとしてきた…。この時クラスの誰もが

” またか！！ ”

と思ったことだろう。ただそれは間違っていた。

「なっ、何!!」

俺はラウラさんの平手打ちを素手で止めたのだ。

「ふう、時速…130?と言ったところですかね」

「ふざけるな!!、どうして貴様私の平手打ちを…」

「二度も引つかかるほど日本の男性はアホではないですよ」

「なんだと!!!!」

「大体、武力じゃ何も解決出来ないぞ。まあ俺もISを操縦してる身だから何とも言えないけど」

「くっ、貴様…後で必ず倒してみせる」

「えっ!?!」

「何だ?。怖いのか?」

ラウラさんは侮蔑の笑みで俺にそう話しかけてくる。

「いや、ただ単に面倒くさいので」

俺の一言はどうも女性の逆鱗に触れるようである。

「なんだと!!!!…貴様、私が誰か分かってそう言ってるのか?。
代表候補生でも何でもないお前が…」

「ああ待て！」

その時である、織斑先生が俺達に向かってそう言ってきた。

「先生？」

「きよ、教官」

”千冬姉、一体何なんだよ”

「今日付で石井は…これは世界初なのだが…」

そう言われて驚かないわけがなかった。

「一体どうかしたんですか！？」

「お前は二力国の代表候補生になるんだ」

「二力国?!」

「そうだ。お前は日韓の代表候補生になるんだ。今までは国籍のある国の代表候補生にしかねなかったのだが今年からその条件に特例制度が出来て、両国の承認があれば例えば日本人であつてもドイツや中国といった他国の代表候補生になることが出来るようになったんだ。その特例というのは本国の代表候補生になることを意味する。つまり他の国の候補生になりたかつたんだったら…」

「日本の代表候補生になれと？」

「話が分かるやつだ」

「いえ…どうもどうも…って俺ってそんなに？」

「お前…前に韓国代表の野球選手の子を助けたそうじゃないか？」

「助けたって言っても、単に迷子を送り届けただけですけど…」

「それだけでも両親は心から感謝したらしい。両親と韓国野球委員会、そして大韓民国文化体育観光部と外交通商部の意見を参考にして日本政府に日韓の代表候補生になることを打診した結果。後はお前の了承次第で決まるそうだ」

「日本政府は…勿論賛成と？」

「その通りだ。どうする？」

いきなりのもので何が何だかよく分からない。とりあえず今すぐには答えることは出来ない。

「二日三日考えてみますからそれまで保留と言つことでは？」

「わかった。じっくり考えろ！！」

「はい」

「嘘だ！。私は認めない！」

「まあまあ。俺が一番信じられないですよ」

「おい石井！」

「なんですか？。目の前にいるんだからわざわざ指名しなくても…」

「明日お前は私と戦え、勿論織斑も一緒だ！」

そう言われて他の人たちは驚きを隠せないようだ。

「どうする織斑？」

「お前はどうするんだ？」

「わざわざ勝負しようと言って貰ったんだから…そのご厚意に甘えたいかなって」

「それじゃあそうするか」

「というわけです。明日ですね？」

「ふん！、まあせいぜい可愛がってやるから楽しみにしておけ！」

そう言うと、とうとうラウラさんは自席に着いていった。こんな事があっても織斑先生は決して動じない人だ。

「それじゃあホームルームを終わる。各自授業の準備をしろ！」

そう言うと皆は席を立ち上がった。勿論俺達のところに向かってきた。まさに記者会見…。

「なあ石井」

「どうした織斑？」

「本当に大丈夫なのか？」

俺に織斑はセシリアさんと戦ってきたようなことを言う。だから俺も言い返した

「なあに、何とかなるだろうさ」

と…。

17話 複素数

そういえば読者の中には俺の通常授業の様子が分からなくて本当に出来がいいのか分からない人もいるかもしれない。俺は一応は真面目に授業は受けていると思う。と言うのも…隣には…鳳さんがいるし…

「と言うわけでここの指数は2、つまりXの自乗になるんです」

山田先生はISの専門教科の他にも数学の教師もしている。この先生の授業はまあまあ普通に面白い。だがまあ、はっきり言ってこんな俺にとってはチヨロいのだが…。

「ねえアンタ!!。どうしてここがこうなるの?」

「そこは…こうして…」

鳳さんがいるから迂闊に寝ることすらもさせてもらえない。だが俺の行為は先生側からしたら言いようにみられているようである。

”石井君、分からないところを鳳さんに教えてあげているのね!。それじゃあ次当ててみようかな?”

こんな風に思われてしまうのは俺が不運だからだろうか?。

「…って感じかな?」

「ありがと!!」

「はい！！。それじゃあこの問題を石井君と織斑君に解いてもらい
ましょう！！」

「あつ、はい！！」

「えっ？」

織斑は素直に引き受けたが俺は正直かつたるかった。まあ指名され
たのだから仕方がないか。因みに言っておくと今習っているのは：
根号^{ルート}に関わる問題なのだが：俺を先生は試しているのか、本気で先
生が書き間違えているのか分からない。口で説明するよりも見て貰
った方がいいだろう。織斑の問題はこのようであった。

「問、次を計算しなさい

$$\left(2 + 7 \right) \times 32$$

」

と言う問題である。これは単に展開して…その前に 32 を
 4×2 と直した方がやりやすいだろう。これをかければいいんだ
から

$$\begin{array}{rclclcl} 4 & 2 & \times & 2 & + & 4 & 2 & \times & 2 & + \\ 4 & 14 & = & 8 & + & 4 & 14 & \times & 7 & = & 4 & \times & 2 & + \end{array}$$

となり結果は $8 + 4 + 14$ は問題なく実数の値で出てきて
くれる。だが俺に出された問題は明らかに狙っていたようであった。

「石井君ならこれぐらい解けるんじゃないかしら？」

「はあ…まあ解けますけど…」

「問、次の複素数を計算しなさい

$$-36 + -25 + 7$$

」

と言う問題であるのだ。他の人は複素数と言われてもまだ詳しくは分からないらしい。

「石井君に解いて貰うようなことをこの後の時間から進めていきま
すね!」

山田先生もそんなことを言っているぐらいだ。まあ俺のことを信用
してくれるのはありがたいことなのだが…。

さて、上の俺に出された問は‘複素数’と言う考え方を知らない
と出来ない。そもそも自乗して負になる数というのは本来は存在し
ないのだ。普通に考えて正の数は自乗したら明らかに正の数になる。

$$2^2 = 2 \times 2 = 4$$

となる具合にだ。0は幾ら掛けてもひたすら0であって正でも負で
もない。仮に負の数であっても

$$(-2)^2 = (-2) \times (-2) = 4$$

となり正の数になってしまう。だから自乗して負になる数がないこ

とは分かる。であればどうすればいいかと言ったらそう言った数、つまり自乗して負になるような数を作ればいいだけのことである。それを一般的には i と書いて虚数という概念を使う。この i というのは

$$i^2 = -1$$

と定義したもので自乗すると負になるのだ。それを今回は使わないといけない。この考え方は基本的には根号と同じだから

$$\begin{array}{l} -36 = 6i \\ -25 = 5i \end{array}$$

とすることが出来るし、文字式の計算とも同じだから

$$6i + 5i = 11i$$

ともすることが出来る。つまり、さっきの問題の答えは

$$\begin{array}{l} -36 = 6i \\ 11i + 7 = 11i \end{array}$$

と言う訳なのだ。

「二人とも大正解です!!。特に石井君。この考え方はいつ知ったんですか?」

あんまりこういうことを聞かれたくはないのだが…

「小学3年で」

「えっ?!」

「俺：小学6年で簡単な微分積分が出来ましたから…」

「そっ、そうだったのね。でもさすがですね!!」

「それはどうも…」

山田先生が驚くはずもないだろう。複素数を小学3年で知っていたなんてどこの飛び級の天才君だよ。言っておくが俺は自分のことを天才だなんて思ったことは一度もない。ただこの式が成り立つんだったらこれも成り立つはずだと自分で勝手に解き勧めていっただけなのである。

「さすがだなっ!」

「ありがとう織斑」

「ところでこれはどうやって解くんだ？」

「ああ…これはさ…」

「おお。ありがとう」

俺は一応はこのクラスで一番数学と社会系は出来るようである。ISなどの専門教科はさすがに代表候補生などに負けてしまう。元々はただの勉強が出来るだけの人間だったんだから当然だろう。

まあ人に何かを教えるのは俺も好きな方だから質問を受けるのは大歓迎だ。とは言っても

「ねえこれは？」

「それは…こう」

「じゃあこつち？」

「それは…その文字を他のもので置き換えて解く…そういえばお前、殆ど俺に聞いてるじゃないか」

「うん！」

「お前…自分でやらないとためにならないぞ」

「大丈夫だよ石井。今夜も頼むね」

これはいいのか悪いのだろうか？。まあ逆らうとISを起動させられてしまっているという面倒だから…

「ああ」

と答えるのが俺なのである。まあしょうがない…のかな？。

こんな中でもラウラさんは一人で黙々と問題を解いていた。

”石井…お前には絶対に負けない…そして、織斑…貴様にもだ”

と心の中で静かに闘志を燃やしながら…。

18話 その夜（前書き）

今回は若干短めの文章になっています。

18話 その夜

とまあ言うわけで今日は鳳さんも部活を早めに切り上げて、俺も素振りをいつもより少なめにして今は部屋で勉強に励んでいるわけだ。因みに言っておくと鳳さんはラクロス部に入っているようである。なんだか難しそうなスポーツだ。野球よりも難しいかもしれない。まあ鳳さんからしたら野球の方が難しいのだろうか…。

「ねえねえ」

「ん？」

「これ教えてよ」

鳳さんは俺に指でどの問題かさして教えてくれる。ここまで俺の性格も変わったなんて… たった入学して1週間ちよつとで俺もここまです変わるとは… 環境というのは怖ろしいものだ。まあ今はそんなことを言ってられる場合ではないか…。

「それは… そう… それで合ってる」

「ふん。なんだ、意外と簡単なんだね」

「難しいって思い込むから難しいんだ」

「アンタは別よ」

「まあまあ落ち着け。ほら、次が最後なんだから」

「う、うん…」

最近、鳳さんの調子がおかしく見えるのは俺だけだろうか？。まあ気のせいだろうな。仮にそうだったとしても疲れているだけなんだろう。

「終わった」

「よかったじゃないか」

「ありがと石井」

「ああ…それじゃあ俺は寝るぞ」

「はいはい…もう…のに」

「何か言ったか？」

「何でもない何でもない」

手を振りながら俺に向かってなんでもないことをアピールしている。俺は変なやつだなと思いつつ眠りに就いた…。そういえば、明日はラウラさんとの決闘だったんだよね…。

19話 黒…

早速、決闘というか勝負の日がやってきてしまった。

「まあ…来ちゃったもんはしょうがないか」

「おいおい、そんなんでいいのかよ？。ラウラ相当危なそうだぞ？」

「うゝん、大丈夫なんじゃない？」

「そうか？」

「ああ…」

「くっ、いつまで話をしているつもりだ？。まあ旧式の専用機と学園の練習機でどこまで戦えるか楽しみだ」

”まあ練習機なのは仕方がないか…”

俺はまだ二カ国代表候補生になろうかならないか考えていた。と言うのも俺にはまだそんな実力が到底ない気がする。それこそ泡の^{バブル}ように肩書きだけが多きなってしまうのが怖ろしいのだ。とは言えども自分を信用してくれている日韓両国の方々にも申し訳なくも思っ
てしまう。とりあえず、今日の格闘で自分が納得出来るようだった
ら俺は引き受けることにしようと思う。

「それでは始めるぞ！」

ラウラさんの一言もあり、俺達も戦闘隊形に入った。と言ってもラ

ウラさんがどんな戦法で来るか分からないからどうすればいいのか当然分かるはずがない。デュノアから聞いた話だとラウラさんのISはドイツのシュヴァルツェア・レーゲンとか言うやつで業界的には新しいシステムがどうやらこうやらで強いらしい。ドイツの代表候補生なのだから強いのは当然か…。

「防戦一方だな」

「ああ、あいつ強いぞ」

「ふっ、まだまだ」

ラウラさんはどうも…織斑の必殺技の零落白夜れいらくびやくやと言う刀のようなもので（先端が刀の刃のようになる。エネルギーを変換させているのだ）…まあ突くと言えはいいのだろうかそう言う技をシールドのようなもので弾き返してしまいどうすることも出来ないのだ。勿論そんなものがはじかれるのだから俺の軟球がはじかれないわけがないとその時であつた。俺はあることを思ったのだまるでインスピレーションのように

”これ…もしかしたら使えるかも…”

俺の練習機には必殺技となるようなものが無い。まあ練習機だから当たり前なのだが…。とりあえず俺は織斑に聞いてみることにした。勿論一旦待避してからだ。

「なあ織斑……」

「はあ！？。そんなこと……」

「馬鹿！、声が聞こえちまうだろ？」

「ああ済まん。でもそんなことで大丈夫なのか？」

「やってみないとわかんねーな…」

「それじゃあやってみるか？」

「おう」

今日は観客席でいろんな人が俺達の戦いを見てくださっている。勿論セシリアさん、鳳さん、篠ノ之さん、デュノアと代表候補生も当然であるかのように俺達を見ている。

「何話してるんだろうね？。一夏と石井」

「わかりませんわ。でも私を寸前まで追い込めた石井さんですから何か考えでも…」

「石井って意外なことするのが好きだからね」

「だが、一夏も協力するような感じがするがそれは一体…」

今まで言い忘れていたかもしれないが俺は左利きだ。野球も李承？さんを尊敬しているのも彼が左投げ左打ちだからだ。まあ野球の話は追々また別の機会に話すとして、俺は箸と鉛筆以外のことは全て左手でこなしている。箸と鉛筆は…親に躰けられたのだからしょうがない。それをこんなところで今話すのは、観客席の方々が俺の事に驚いたようだったからだ。勿論ラウラさんも俺が左利きだなん

て知るはずもない。

「いつまでそうしている」

「何がですか？」

「早く右手に持ち替えろ！。それじゃあ戦えないだろ？」

「いいえ、そんなことは…」

「なんだと！？」

「俺は左利きですから…まあ箸と鉛筆以外ですけどね」

「くっ…」

この様子は観客席の中でも同じだった。

「石井…いつまで経っても一夏のやつ持ち替えないねって…！！」

「石井さん、左手に持ったまま戦ってますわ！！。そういえば、私に構えたときも左手に持っていましたわ」

「それじゃあ石井は左利きってことなんだね」

「だしたら何を考えているのだ？」

俺はラウラさんが焦っているのが分かった。

”くっ、左利きの剣士だなんて今まで戦ったことがないぞ！。それ

に石井は練習機とは思えないほどISの操縦に慣れている！！”

そんなことを思っているように俺には見えた。まあデータがないのなら仕方ないのだろう。俺は挑んでいくつもりで戦っているからちつとも怖くないのだが…。

「ぐはっ！」

その時である。織斑が俺が左でつけるように道を作るといっつか攻撃の助けをしてくれた。

「早くしてくれ！！、あんまり持ちそうもない」

「わかってるさ！。織斑、ありがとう…」

「くっ…」

「観客席まで飛ばしてやる！！」

「うわあああ」

俺の一撃は相当ラウさんにもダメージを与えたようではらく立ち上がれなかった…というか様子がおかしい。いきなり叫び声をラウさんは発したと思ったら…なんだか真っ黒な誰をも寄せ付けないほどの何かに変わってしまった…。

「なんなんだあれ…」

「あれは、千冬姉にそっくりだ」

「織斑先生にか？」

「ああ。言っただろ？。前に千冬姉は世界大会に出たことがあるって」

「えっと、確か優勝したんだっただよな？」

「そうだ。その時の千冬姉に姿方がそっくりなんだ」

「おい、お前の…いや織斑先生の必殺技って言うのは？」

「俺と同じだ」

「…」

「どうしたんだ黙って」

「だとしたらここは危ない！！」

「はっ！？」

「下がれ！！」

俺は織斑を後ろに投げ飛ばした。と同時に無言でその相手は織斑のいた場所に刀を振り下ろした。

「あんなのに当たったら…」

「大丈夫か織斑？」

「ああ。ありがとう石井」

「お前の言うとおりだ。これに当たったら…大怪我だぞ!!」

「ああ…本当にありがとう。命の恩人だな」

「そんなことはないよ…それよりも投げ飛ばしたけど…大丈夫か？」

「ああ…特に問題はないぞ」

「そうか、それは何よりだ…それよりも」

「この沈黙の兵器をどうするかだな」

「そのとおりだ」

俺達が話しているとそこにもう一人見方が現れた。デュノアだ。

「二人とも大丈夫？」

「ああ、ありがとうシャルル」

「こつちも大丈夫だデュノア」

俺と織斑は呼び方がそれぞれ違う。俺は基本的には名字を重視するから基本的には男女に関係なく名字を使うのだがラウラさんとかセシリアさんは名字だと呼びにくい、そういうときに名前を使う。逆に織斑はほぼ全員を名前または仇名で呼ぶ。

「一夏も石井もよく頑張ってたよ」

「そうか？」

「まだまだだよ。俺は練習機だし、そして…こいつを倒してからじゃないと…また来るみたいだぞ…うわっ!!」

俺は一発痛いのを喰らってしまった。

「イタタタ…。くう、デッドボールの何倍痛いんだよ…」

「大丈夫石井？、ケガはない？」

「大丈夫か石井？」

「何とかな…でも後で保健室行かないとダメそうだ」

「今すぐに行った方がいいんじゃないか？」

「ダメだよ。そうなったらラウさんはどうするんだ？。今は話が通じないけどきつと何か俺並みに大きなものを抱えているかもしれないだろ？」

俺はどうしてそんなことを言ったのか自分でもよく分らない。少なくとも自分の力で女を助けたイდანなんて言ったのはこの時が初めてだ。

「そうだね…石井の言うとおりだよ」

「シャルル？」

「二人とも、私のエネルギー貸してあげるから。頑張ってきてね」

デュノアはそう言うと言分のISからなにやらコンセントのようなものを俺達のISに挿した。すると俺も織斑のISもみるみるうちにエネルギーが回復していった。

「ありがとうシャルル」

「どうもなデュノア」

「そのかわり、必ず帰ってきてね」

「当たり前だよ」

「俺も織斑に同じだ…お前もケガすんなよ」

「勿論だよ」

そう言うと俺達は真っ黒のISに近づいた。

「おい織斑。これはお前の姉さんのそっくりさんなだけだろ？」

「ああ、あの居合いは千冬姉だけのものだ」

「どうしたい？」

「許せない…こいつを必ず倒す」

「その答え、俺も待ってたよ」

「だろ？」

俺と織斑は最後に頷き合うと…そのISに立ち向かった。戦いは過酷なものであったが幸いなことに俺も織斑もケガ一つすることなく倒すことが出来た。倒すと同時にラウラさんを取り巻いていたISはまるで溶けたアイスのように流れ落ちた。

「救助だ織斑！！」

「ああ！！。シャルルも手伝ってくれ」

「うん！」

相当ラウラさんは弱っていたようだった。何がここまでラウラさんを追い込めていたのだろうか？。それは俺には分からないがまあ…ひとまず無事で何よりだった。

「それにしても怖かったな」

「ああ。あの黒いのは何だったんだろうな？」

「それはボク達には分からないことなのかもしれないね」

「確かにな…」

俺と織斑、そしてデュノアは病棟のようなところでこれまた病院にありそうなベッドでラウラさんを眺めながらそんなことを話した…。それからすぐに誰かが来る気配がしたから俺達は退散した…。

その夜、俺達にも言いボーナスというかプレゼントが与えられた。

大浴場である。俺は織斑とデュノアの部屋に突然呼び出されたから
行ってみることにした。

「どうしたんだ？」

「ああ、まあそこに座ってくれないか？」

「うん…」

織斑もデュノアも深刻そうな顔で俺の方を眺めている。

「二人とも馬鹿に暗いな？」

「実はな石井、シャルルは…」

「ボク…こんな言い方してるから分からなかったかもしれないけど
…ボクがフランスの代表候補生なのは知ってるよね？」

「ああ…それがどうかしたの？」

「石井が世界で初めて男性の代表候補生だって織斑先生は言ってた
よね？」

「ん?!、お前もしかして…」

俺の思ったこと通りだった。デュノアは女だったのだ…。だから早
着替えが得意だった…いやいやそんなわけではなくて素振りがどこ
となく女性な感じはしていたが…まさか女だったなんて、ショック
だ…。でも今まで男だと思って接してきた以上、いきなり立場を変
えるだなんて俺は嫌だ。

「石井は女嫌いだから今まで黙っていたんだけど」

「風呂に入れば分かっちゃうから…」

「ふっ、気にするなよ。二人とも。俺もここに入ってから少なからず考えが変わってさ。況してやデュノアはデュノアなんだろう。俺は一度ここまで仲良くなったやつを急に裏切ったりはしないぜ？」

「それじゃあお前」

「当たり前だろう？。俺は気にしないさ…それよりも他の連中にこのことは？」

「まだ言っていないんだ」

「ボク…どうすればいいのかな？」

「風呂にでも入って考えたらいいんじゃないか？」

「それがいい考えだな」

俺と織斑は別に変な意味を込めてそう言った訳じゃないのだが…

「二人ともエッチ…」

と続けざまにデュノアに言われたことは言うまでもない。その後デュノアは自分はやはり女性として生きるべきと自分で決めたからまあ一件落着というわけだ…。これはこれで良いのかもしれない…。

”石井、一夏…ありがとう二人ともボクの最高の友達だよ”

「どうかしたのかシャルル…いやシャルロット？」

「そっだよデユノア」

「何でもないよ、さあ二人とも風呂に行ってきたよ？」

「そっだな…それじゃあ待っていてくれ、行こうぜ石井」

「よっしゃー!!」

俺と織斑はデユノアがそんなことを思っているだなんて分からないままに風呂に向かった…。

20話 本当の俺

今は翌日の夜な訳だ。今日は朝から大変だった。先生がデュノアが男子ではなくて女子だったと発表すると…真つ先に攻撃を受けたのは織斑だった…。特に怒っていたのは篠ノ之さん、セシリアさん、それから凰さん？だ。だが凰さんの様子が二人に比べると幾分落ち着いていたのは気のせいだろうか？。何てことを思っていたら今度はラウラさんが

「お前は今日から私の嫁だ！！。異論は認めん！！」

と何だか訳の分からないこと言いながら織斑のその…なんだ…ファーストキスを奪ってしまった。これにはさすがの俺も驚いた。驚いたというか背中の中まで至る所がかゆい…誰か搔いてくれないかな？。

それでもって今は夜な訳なのだが…。

「石井はいつから気づいていたの？」

「それは俺の秘密…と言いたいんだけど」

「ダメに決まってるでしょ？。言いなさいよ！！」

何でか知らないが凰さんに俺は尋問を受けている。かれこれ1時間近く…。もう風呂にも入って後は寝るだけなのに…。どうしてこんな目に…。

「昨日、俺が風呂に行く前に織斑達に呼び出されたら？」

「うん…」

「その時さ」

「本当に？」

「俺が信用出来ないんだったら。織斑に聞いてくれればいいさ。あの二人、俺が女嫌いだからって今ままで黙ってくれていたみたいなんだよ。後でお礼とかないな…」

「…なの？」

「はっ？。そういえばここのお前の態度がおかしい気が…」

「今も女嫌いなのか？」

質問にそぐわない答え…況してや疑問文だ。

「はっ？」

「だから！、今も女嫌いなのかって聞いているの！…」

「なんだよ、いきなり怒ったような聴き方して…」

「じっ、ごめん」

「まあいいけどさ…そうだな…まあ、この学校に来て女性に対する俺の偏見だとかは少なからずお前達の治療とか言つやつのおかげで無くなつたかな？」

「そうなの？」

「だからこうしてお前と面と向かって会話してるんだろ？」

「ああ、そっか…」

そう言うつと凰さんは黙り込んでしまった。俺は沈黙というのが嫌いだからすぐに別の話をした。

「それにしてもラウラさんには驚いたよ…。いきなり…その、ね」

「石井!!」

と、その時である。俺の名前をいきなり凰さんは呼んだ

「何だよ？。俺ならここにいるじゃないか？」

「…」

「黙ってたって…何も分からないぞ？」

「…」

「おい、どうしたん…!!」

その時であるいきなり凰さんは俺に飛びついたかと思うと…なんと
いうか言いにくいのだがいきなりだった…。結構長めな気もした…。

「はあ…」

「どうしたんだよ凰？」

「わかんないの？」

「えっ？」

「私の気持ちが分からないの？」

「はい？」

「もう…わかるまでこうしてやる！！」

俺は自分のベッドに倒された。凰さん意外と力があるんだと思っただらベッドを支点にしたから力が強まったのだろう。

「おっ…おい…」

「言っただよね…私の気持ちが分かるまで、こうし続けるって」

「お前…俺のことが…」

「気づくのが遅すぎよ。何で私が部屋を変えないで欲しかったか分かる？」

「お前は俺の性格を治すとかって…」

「それは建前よ。私はアンタと離れたくなかったし、私と一緒にいて欲しかったの！！！」

こんなことを言われたのは生まれて初めてである。去年までの俺だ

ったらどうしていたんだろうか。きつと拒否してお終いだっただろう。でも今はどうすればいいのだろうか、俺は…『本当の俺』はどこにいるのだろうか？。教えてくれ、どうすればいいのか。

「ねえ、聞いているの？」

「ああ。要するにお前は俺に離れて貰いたくなかったと」

「分かってないじゃん！」

「はっ？」

「もおおお！！。こうなったら！！！」

今度はその…舌まで入れてきた。これにも俺は驚きを隠せなかった。見てみると凰さんが泣いていることに気がついた。

”凰さん…俺のことをここまで…。どうやら俺が間違っていたのかもしれないな。中学にいた女子がみんなダメだっただけなのだろう”

と俺はとうとう自分の過ちに気づいたような気がした。

「ありがとう、凰。おかげで俺はこれからもっと楽しい人生を送れそうだよ」

「ダメ」

「えっ？。俺が楽しい人生を送っちゃダメなのか？」

「私も一緒」

「ああ、なるほどね…」

「それじゃあ寝るわね」

「ああ、おやすみ」

鳳さんは隣のベッドに戻っていった。一応ここが学校であることは理解してくれているようである。

翌日もまたまた朝から大変だった。布仏さんやら谷本さんやら鷹月さんやらに謝罪行脚。まあ見んあ許してくれたからよかったのだが…それよりも問題なことは

「石井は今日から私の嫁よ！！。手を出さないでね！！」

と教室で鳳さんが宣言したことであつた。俺の変貌ぶりに織斑もデユノアも驚きを隠せないようであつたがこれはこれで良いのかもしれない。俺は、ようやく本当の俺になれたような気がしたんだから…。

21話 大切にすべきもの

まあ俺が嫁というのは…幾分変な気もする。だが、凰さんにそれを言ったところでどうにでもなる訳じゃないし、しかも今朝から

.....

「今日から鈴^{リン}って呼んで！」

「何でだよ？」

「当然でしょ？」

「まあ…そりゃあそうなのかもしれないけど…!!」

俺の言葉をかき消すかのように凰さん…いや鈴は口づけを交わしてくる。

「いいわね？」

「わかったよ…ふあ、いや鈴」

「それでいいの!…返事は？」

「はい…」

.....

てな事があってそれに加えて、鈴の「嫁宣言」である。俺はどうす

ればいいのだろうか？。まあひとまず授業を俺は受けると早速、織斑と更衣室に避難した。次の授業が体育と言ったこともあるがそれ以上に男同士での会話がしたくなったのだ。

「なあ織斑」

「んああ？」

「俺…どうすればいいのかな？」

「石井が悩み事なんて珍しいな」

「そうか…っておいおい」

「悪い悪い」

「まあいいけどさ」

「多分だけどさ。石井は鈴のことが好きなのか？」

「うーん、最初はそういうわけでもなかったけど…鈴は俺を変えてくれた恩人だからな…自分でもよく分からないけどそうなのかもしれないな」

「じゃあいいんじゃないか？」

「そうか…そうだな！！。ありがとう織斑」

「気にするなって」

俺と織斑は話を終えると外に向かった。まあ授業なんてどうって事はない。それよりも大事なことは…鈴を大切に守っていくことであるのだから…。

22話 O S A K A part 1

それからまるまる一週間が経った次の日の朝、つまりは8日後の朝な訳だが、俺は始発列車に乗るために着替えをしていた。まあ隣では鈴がスヤスヤと寝息を立てている。前に李承？選手が野球を教えてくれると言ってくれていたのだがそれが思った以上に早まったのだ。今日はオリックスバファローズが試合のない日でたまたま練習も休みの日だったから、李承？さんは同じ韓国人の朴賛浩^{パク チャンホ}さんや他のオリックスの主力選手と野球の自主トレを行うんだそうでそれを見学がてらたまに一緒にやらせてくれるとのことである。それを聞いたときは俺も信じられなかったが時間が経つにつれてやっぱり行くと言っておいてよかったと思えるようになっていった。

とは言っても結構過酷なものでまずオリックスバファローズの本拠地でもある大阪に行かなくてはならない。更に付け加えればその自主トレは9時半から行うんだそうだ。これに間に合うためには大磯を5時35分に出る始発列車の721M、熱海^{あたま}行きに乗らなくてはならない。だから前の晩の内に外出届は提出しておいた。

.....

”先生もビールを飲むんだなあ”

「くうゝ...ところで、また外出か？」

「ええ、この間助けてあげた子のお父さんがお礼をしたいとのこと
で...」

「そうか...大阪!？」

「はい、朝一番に出て夕食までには戻ってこようと」

「お前も…面白いやつだな」

「そうですかね？」

「ああ、私はここで教師をまあそれなりに長くやっているが日帰りで大阪に行くだなんて聞いたことがないぞ」

「そうですか」

「まあいい。好きにすればいい。だが、あまり羽目を外しすぎないようにな」

「わかりました」

「ところでだが…」

「はい？」

「お前、鈴とはどうなんだ？」

「えっ!？」

「まあせいぜい頑張れよ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

と言った具合であった。まあまだ先生も眠っているようである。俺は急いで駅に向かった。学生の身分で贅沢ではあるのだが俺は駅ま

で距離があるからタクシーで行くことにした。

「大磯駅まで」

「はい」

タクシーに乗り、俺は駅へと向かった。その後を追う5人の姿を知らぬままに…。

この6人というのは織斑、セシリアさん、ラウラさん、デュノア、篠ノ之さん、それに鈴のことである。この6人は前の晩に俺がここに行くかを先生に聞いていたようであるのだ。

「大阪に何しに行くんだろうな？」

「一夏も気になるのか？」

「ああ、あいつは俺とも仲がいいからな…何でもないといいんだけど」

「んもう、鈴さんもう少しそっちに詰めてくださる？」

「狭いんだからしょうがないじゃん。私だつて章？と一緒に行ければ嬉しいけどあいつのことだからそんなことさせてもらえないだろうし」

「確かにその通りだね。石井は警戒心がまだ少し強いからね」

「ところでいかな理由でラウラさんも一緒に？」

「嫁が行くと言ってるのだから付いてくるのは当然だろう。それに私もこのことは気になるからな…」

「一夏はなんだと思うんだ？」

「そうだな… 簾は？」

「…野球の道具らしきものを持っていたから多分その方だと」

「なるほどな、俺も同じだ」

「そつ、そつか…」

まあ後ろから俺のタクシーを追いかけてきている訳なのだ。運転士さんも黙りながらこの状況下で運転するだなんて大変だろう。

「お客さん。今日はお連れ様は？」

「いえ… いませんけど」

「後ろから私たちを追いかけるように走ってきているんですね、あのタクシー」

サイドミラーから後ろの連中には見えないように見てみると確かにその6人の姿があることを俺は確認した。と同時に俺をつけていることも分かった。

「そうですね… まあいいでしょう。俺にも見当が付く人たちですから… まあ駅に向かってください」

「わかりました」

俺のこの行動に後ろの連中が気づけるはずもなかった。それどころかデュノアやセシリアさんはあまりに早朝すぎて眠りに就いているほどであった。

「やれやれ、困ったもんだな」

「なあ一夏」

「どうしたんだ篤？」

「もうすぐ、テストだな」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「一緒に勉強しないか？」

「ああいいぜ。篤の頼みなら断れないよ」

「そうか…そうか!!。うんうん。楽しみにしているぞ一夏!!」

「ああ!!」

「…ああ!!…か」

「お客さん、同化なさったんですかさっきから独り言が多いような気がします」

「すいません。恥ずかしいところをお見せしちゃって。後ろのタクシーの人たちの言葉を読んでいたんです」

「読唇術ですか？」

「ええ」

「なるほど…あと5分ほどで大磯駅ですよ」

「どうもありがとうございます」

運転士さんの言っていたとおり5分足らずで駅には到着した。もう営業を始めている。早速俺は後ろの6人を注意しながら切符売り場に向かった…。

23話 O S A K A part 2

前にも言ったが、IS学園の学生には国鉄の乗り放題パスが与えられているのだ。この乗り放題パスというのは新幹線も有効でしかもグリーン車も利用可能なのである。外国人は‘Japan Rail Pass’と言う鉄道パスが買えるからこれと同じようにグリーン車にも乗れるようになるわけだが日本人の俺なんかはそういうわけにはいかない。まあ長々と書いたが早い話がこの切符は俺みたいな鉄道好きにとつてはまさに‘神の産物’なのだ。

「新大阪までの‘ひかり493号’を自由席で」

「お客様、グリーン車に空きがございますが：普通車で構いませんか？」

「それでいいです」

「畏まりました」

朝一から学生の身分でグリーン車に、しかも野球を教わりに行くという理由だけで乗るのは不謹慎というか俺の身分では不相应な気がする。なので自由席で行くことにした。ここで重要になってくるのは料金でもそもグリーン車に乗ることを前提としているのだが差額はきっちり払い戻されるのだ。つまり

小田原↪新大阪間（グリーン車の場合）

特急料金 - 510円（グリーン車と自由席の場合の差し引く金額） + グリーン料金

4920円 - 510円 + 5150円 = 9560円

がかかるわけだがここからグリーン料金の差額が返ってくるわけで5150円が手元に返ってくる計算になる。これだけあれば朝ご飯も自由に不自由なく食べることが可能であろう。

「お待たせいたしました」

「どうもありがとうございます」

俺は切符を受け取ると早速ホームに向かった。まだまだ列車が来るまでは15分くらいはある。俺がホームに行ったのを確認すると後をつけている6人も同様に切符売り場に向かった。

「お客様はどちらへ」

皆は俺と同じように鉄道パスを差し出した。

「あの…?」

「さっきのと同じ区間の切符を欲しいんです」

「はい?」

「事情がございまして追いかけているのです」

「何とか売ってくれないか?」

駅員は困っていた。俺と同じように差額を支払うことになるから面

倒なのだろう。とはいえそこは売らなくてはいけないからまあ渋々売っていたようであった。

「…それでは小田原から新大阪間の自由席特急券です。乗車券は駅員にお見せいただければ結構ですので、まもなく小田原方面の始発列車が来ますからそれにご乗車ください」

「ありがとうございます」

織斑がそうお礼を言うとは皆は織斑の後に続いてホームに向かった。俺はわざと気づかないふりをしていたから少し離れたところに向かった。

” やれやれ、あいつ等…連れて行ってあげればよかったかな？”

俺はそんなことをぼんやりと思いながら朝の新鮮な空気を体中に吸い込むかのように深呼吸をした。そんなことをしていると早速電車は大磯駅に滑り込んだ。この普通列車熱海行721Mは東海道線の下りの始発列車でもあるのだ。この電車は品川駅を4時35分に出て終点の熱海には6時15分に着くのだ。そんな早朝を走る電車だから乗る人も疎^{まば}らである。俺は端の車両に乗ったから貸切状態だった。独占感もあるが同時に寂しさもある。

” あいつ等と一緒にだつたらなあ…”

俺は視線を少なからず感じている。と言うのも俺は昔からの癖で向かい合わせの席になったときは大抵進行方向と逆向きに座るのだ。このおかげで6人と目があつたりしないからまあいいのだがその分視線を感じるのだ。

「ふわぁ…それにしても眠いですわ」

「そうだな、あいつこんなに朝早いのにあくび一つしてないな」

「だって朝強いじゃん。章？は」

「そうなのか？」

「ラウラ知らなかったのか？。まあまだ来てから日も浅いから仕方がないかもしれないけどあいつは毎朝4時くらいに起きてるんだ。その分寝るのが早いんだけどな」

「4時！？」

「箒も知らなかったのか？」

「ああ。私たちの起床時間は6時だが何でそんなに早く石井は起きてるんだ？」

「野球の練習を外でしてるんだよ」

「野球の？」

「うん」

「あれ、シャルロットは知ってるのか？」

「ボク、前に一度だけ石井が外に出て行くのをチラッて見たことがあるんだ。部屋の窓から見たら外の方で何かやってるのは見えたよ。なんだか細長い棒を振り回してたけど…」

「それが素振りだよ。まあ今日もケースがあるみたいだから多分そ
っち方面だろう」

「そうだな」

「あれ、鈴とセシリアは…眠ってるのか」

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z」

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z」

「朝早いからしょうがないか…」

「そうだね」

俺も彼等は朝日に照らされながら小田原駅に向かった…。

24話 O S A K A part 3

俺は早速新幹線に小田原から乗り込んだ。その前に駅の売店で：

「読売」

「130円」

と言った具合に朝刊を購入した。今朝は思った以上に空いていて空席なんていくらでもあった。まあ俺は進行方向海側の窓際を選んだ。ここなら朝日も入ってきて明るいし況してや暖かいからだ。しかも俺の取った席は壁の部分の座席だから背もたれを幾ら倒しても怒られたり文句を言われたりすることもない。俺は早速新聞を読み始めた。中でも李承？選手が昨日無安打だったことが載っていた。不振に喘いでいた巨人時代からまだ引きずっているのかもしれない打率も1割台と何とも可哀想なものである。俺は少し不安に思った。こんな時に行っているのかと…。でもせっかく李承？選手本人がおいでと言ってるのだから行っているのだろう。とまあそんなことを思っているとな自分の手が汗ばんでしまった。俺は洗面所に行って手を洗うことにした。その頃…

「ふわあゝ。眠いから私、顔洗ってくるわ」

「ああ、石井には十分に気をつけるんだぞ」

「分かってるって一夏」

といいながら鈴も洗面所に向かおうとした。俺と6人が乗ったところは車両こそ違いが最寄りの洗面所は同じところなのだ。

「ふう…あつ!!」

「!!」

鈴が鏡に映ってしまったのだ。と言いか制服でいるんだから普通なら気がつくはずなのだが…。

「アンタ、私たちに気づいちゃったのね」

「ダメか？」

「ダメに決まってるでしょ？」

「そうだろうな…俺を尾行しているんだもんな」

「そうよ。でも…」

「まあ気にするなって、遅かれ早かれこうなることは分かっていたんだ。ちよつと待ってる…」

そう言つと俺は洗面所を出てデツキで電話をかけ始めた。

「もしもし？」

「ああ、石井君か」

「おはようございます。李承?さん」

「どうしたんだい?。こんな朝早くに」

「実は…」

「そういうことか。いいよ。大歓迎だよ。」

「そうですか、ありがとうございます。それではまた後で」

「大阪ドームでね」

俺は李承？選手に見学者が6人いるのだが構わないかと電話で聞いたのだ。勿論答えはOKだった。

「よかったな。お前等が来ても大丈夫だってさ」

「そう。でもどうして私にそんなことを？」

「決まってるじゃないか。俺はお前の嫁なんだろう？」

「もう！-！」

「ははは。冗談はさておいて、そろそろ戻った方がいいんじゃないか？」

「そうね、それじゃあまた後で…」

そついうと鈴は自分の車両に戻っていった。俺も急いで自分の席に戻った。

「遅かったな鈴」

「ごめんごめん。前に人がいてさ」

「そうか…ところであとどのくらいだ？」

「ラウラは苦手なのか？」

「そついうわけじゃないが少し眠くてな…だから」

そう言つとラウラさんは織斑の隣の席を横取りして織斑の片手を抱きしめたまま

「こうしていたいのだ…」

と言つた。それを見た他の人たちはもうなんとというか…顔を赤くして猛抗議、まあ最後はみんなが折れて結局ラウラさんの思い通りになつてしまった。新幹線はもうすぐ名古屋に着こうとしていた…。

25話 O S A K A part 4

新大阪駅しんおおさかに着くと俺は急いで地下鉄の御堂筋線みどうすじの乗り場に向かった。ここからは鉄道パスも使えなくなるからお金を払わないといけない。まず李承？選手の本拠地である大阪ドーム…あつ、今は‘京セラドーム大阪’って言うんだつたな、まあそこに向かわないといけない。とは言っても地下鉄の最寄り駅があるから幾分便利なわけだから御堂筋線に乗り心斎橋駅しんさいばしで長堀鶴見緑地線ながほりつるみりよくちに乗り換えてドーム前千代崎駅まで向かうわけだ。今は朝の8時半、ラッシュの真っ只中…えっ？、学校はって？。実を言うと今日は学校の代休日なのだ。だからこうして平日にもかかわらず大阪まで来ることが出来るわけだ。

”大阪も東京と変わらないな…”

ラッシュ時は俺の思ったとおりで全く東京も大阪も関係ない。どこを見渡しても人、人、人であるのだ。後ろからつけてくる6人も大変であるようであった。

「…一夏さん。凄い混み具合ですわ!!」

「本当だな！、石井のやつスイスイとこの中を抜けていくなんて」

俺はバットケースを持って中学時代にいつも電車通学をしていたからこれぐらいのことは朝飯前だ…：そういえばまだ朝ご飯を説明していなかったな。俺は車内販売の紅茶とパンという何とも言えないほど質素な朝食となった。まあこっちでそれなりに美味しいものでも食べていけばいいか…。況してや後をつけてきている6人も差額料金を貰っているはずだから食事を一緒に出来るだろう。俺はもうそ

ろそろ尾行がばれていることを教えてやろうと思っていた。

「1番線に天王寺行きが到着します。^{てんのうじ}危険ですから白線の内側でお待ちください」

「まもなく1番線に天王寺行きが到着します。危ないですから足下、白線の内側にお下がり下さい!!」

「1番線に到着の電車は天王寺行きです」

立て続けに案内スピーカーと駅員の声が聞こえてくる。そして地下鉄の電車が警笛を鳴らしながら駅に滑り込む。大阪の地下鉄は駅に入線するときと駅を出るとき、まあ出発するときには警笛を必ず鳴らす。俺はこの大阪市交通局の警笛が個人的には好きなのだ。まあそれはいいとして俺は早速地下鉄に乗り込んだ。さすがにラッシュの真っ只中だけ合って超満員である。織斑達の方は一応、織斑の考慮で女子を女性専用車両に避難させたようだ。

「それじゃあ心斎橋で降りるから。箒、しっかり頼むぞ」

「わかった」

「私たちを馬鹿にしているのか一夏は？」

「そういうわけではありませんでしょうラウラさん。一夏さんは私たちのために思ってそうしてくださったのですわ」

「そうだよラウラ。一夏もきつと私たちのこと思ってくれてるんだよ」

「そうか…まあいい嫁だな」

「もう、なんでも嫁じゃん」

「お前だつてそうだろう？」

「ちょ、ちよつと…！」

「そういえば、石井のことを嫁宣言したんだつたな」

「あれ？」

「どうしたのかしら、シャルロットさん？」

「石井の下の名前つて何なの？」

「名字ではなく名前つて事か？」

「^{アキノリ}章？つて言うんだよ。てかさつきからそう言つてんじゃない」

「章？つて…石井のことだったのか」

「初めてボクも知つたよ」

「石井さんらしい名前ですわね」

「そうだね」

こんな風に女性専用車両は混んでいるとは言え会話ができる。ただ…

”スゲー混んでるな…これじゃあ身動きすら…”

「いててて!!」

「大丈夫か兄ちゃん？」

「あつ、すいません」

「気にすんなや」

「はあ、どうも…」

と言った具合で織斑の乗っている普通車はとてつもない様であった。俺はこういう場でも朝刊を読めるような能力を既につけていたから、特にどうって事はなかった。混んではいたが…。

心斎橋駅は長堀鶴見緑地線の他にも四つ橋線よばしと言う御堂筋線のバイパス路線が通っているからかなりの乗降がある。俺も6人も幸いなことに乗換を無事に出ることが出来たようだ。この後は長堀鶴見緑地線に乗り換えるだけである。俺はここがチャンスだと思いいよいよみんなの尾行に気づいていることを証明しようとした。この駅は3路線が交わっているのだからかなりの連絡通路があるのだ。だから隠れる場所なんていくらでもあった。俺はまあ…連絡通路の途中にある大きな広場のようなところで待ち伏せすることにしたのだ。

「あれ…？」

「石井はどこに行ったんだ？」

「変だなあ、さっきまで前にいたのに」

” 章？、私たちにここではらすのかしら？ ”

案の定鈴の思った通りであった。

「俺を搜してるんだろ？」

「あつ！！」

「石井！！」

立て続けにデュノアと篝さんがそう言う。

「どうして私たちの尾行が…」

「まあまあラウラさん。地下鉄も来ましたから後は向こうでゆっくりと…」

俺はその後みんなを連れて大阪ドームまで向かった…。

25話 O S A K A p a r t 4 (後書き)

このO S A K Aシリーズは後2話ほど続けるつもりでございます。
よろしく願いいたします。

26話 O S A K A part 5

ドームの前には…本当に李承？選手がいた。

「やあ、このあいだはありがとう」

「い…いえ…そんなことは」

この姿を見て誰もが驚いたことだろう。

”こんなに石井が緊張している。これが私の平手打ちを手で止めた石井なのか？”

ラウラさんはそんなことを思っているようだが、こんな俺でも本当に尊敬する人に出会ったことになってしまふ。まあラウラさんも織斑先生に会うところなるから人のことは言えませんよね…。

「ほらアンタ！…。しゃきつとしなさいよ！」

「そう言われてもねえ…」

「ははは。電話で言ってたとおりだね」

「えっ？」

「あつ、承？さん…」

俺が制止したときは時既に遅しだった。

「お前が言っていたとおりで元気でうるさい、夫、さんだな。大変だろ？」

「ええ…まあ…」

後ろの方からなにやら不吉というか破壊というか…そんなオーラと視線が漂っている。

「ううううあああああ！！。章？！！。」

「やばっ！」

俺は一目散にグランドのロッカールームに向かった。承？さんも後からロッカールームに入ってきた。

「ははは。全くお前の夫は元気なんだなあ」

「やめてくださいよ…でもまあ、俺が変われたのはあいつのおかげですからね」

「お前は昔女が嫌いだったんだっけ？」

「ええ…」

その後俺は承？さんにもその理由を話した。俺は慎重に言葉を選んでかみしめるかのように言った。何てったって鈴や織斑とかに話すのとは訳が違う。承？さんは韓国人だからだ。

「…なるほどな。確かにそう言われたら俺も韓国人として許せないな」

「わかっていただけますか？」

「勿論さ。でも…」

「でも？」

「どうしてお前は変わることが出来たんだ？」

「実は、さっきの子に運が悪かったって言われたんです。今まであった女子がたまたまそう言う馬鹿にする人ばかりでこれからもっと素敵な女性に会えると…」

「それであの子が素敵な女性という訳か」

「えっ！？…まあ…その」

「お前はいじりがいがあるなあ」ははは

「お願いしますよ」

とその時ロッカールームのドアが開いた。

「おはようございます。朴先輩、それから岡田」

そう、俺の前に今まさにいるのは朴賛浩投手、それからT・岡田選手だ。

「おはよう承？。」

「おはようございます。李承？先輩」

「今日はこの子が例の子で来たんだよ」

「ほう、この子がお前の息子さんを助けてやったって言う」

「石井章？って言います。どうかよろしくお願いします」

「名前は知ってるよ」

「僕も知ってますよ」

「ええ！！。どうして朴さんも岡田さんも俺のことを？」

「新聞さ！」

「新聞？…あつ！」

俺はこの間、やはり日韓の代表候補生になることに決めたのだ。その時はすごいものだった。新聞やらテレビやらで俺の事が全国…いや全世界中に知れ渡ったのだ。何でも史上最速の候補生入りのスピード出世だそうだ。

「お前は私たちのヒーローでもあるんだ。だから今日はせっかくだから呼んだんだよ」

すると岡田選手が俺の肩を叩いて耳打ちをした。

「いいか石井。今日はフリーバッティングをするからお前も一緒にやって見ろ！」

「でも…俺なんかが…」

「大丈夫だよ、せつかく朴先輩も李先輩もあんなに楽しそうなんだからさ！」

「それじゃあ…そうさせていただきます。俺、頑張ります!!」

「その意気だ！」

俺と朴さん、李さん、そして岡田さんはグラウンドに向かった。

スタンドの照明はとっても明るい。こんな中で野球が出来るなんてとても嬉しいことである。早速俺達はキャッチボールから始めた。

「石井！」

「はい！」

「もう少し肘を疊んで、楽に投げた方がいいぞ」

「ありがとうございます！」

俺は李さんとキャッチボールをすることが出来た。後ろの観客席ではみんなが俺の事を見ている。

「石井さん、楽しそうですわね」

「ああ。本当に…野球が好きなんだな」

「私もあそこまで楽しく剣道なんてやったことは久しくないかもしれない」

「それにしても、あいつが私の平手打ちを止められたのはあの練習のおかげなのか？」

「そんなことはないと思うよ……」

「……」

一人だけ黙っている…鈴だ。

「鈴？」

「あっ！、一夏」

「どうしたんだよ？。黙った顔して…」

「私は、お父さんとお母さんが離婚したから中国に帰ったんだ」

「なんだって！」

織斑が代表するかのようにそう驚き声を発する。勿論他のみんなも驚いているわけだが、どうしてそんなことを今この場でぶち開けたのだろうか？、すると鈴は次のように続けた。

「私はお母さんに引き取られたんだ。でもね、時々お父さんに会ってみたいって思うことがあるの。優しくて…料理が得意で、いつも明るかったお父さんに…」

その場でそれを聞いていた一同は黙ってしまふ。なんと言い返せばいいのか分からないようだ。

「でもね」

さらに鈴は続けた。もうこうなったらそれを聞く以外の道は他の6人にはない。それは皆がお互いに熟知しているようだ。

「今はそうは思わないんだ。見てよ…」

そう言うと鈴は俺を指さす。俺はと言うとキャッチボールに集中しているから気づかない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「石井、だいぶよくなってきたぞ」

「はい、ありがとうございます！」

「元気なやつだな、これの前では頑張らないとダメだもんな」

そう言いながら李さんは小指をたてる。何を意味しているかは…承知であろう。

「もうーやめてくださいよー」

「ははは、承？。これは面白いやつだな。岡田はどうおもっ？」

「チームに必要ですよ。こういう人材は」

「どういづことですか？」

「いじられキャラさ」

「皆さん」

「ははははは！！」

俺も笑ってしまう。それ以外どうすることも出来ないからだ。まあ俺も年上には相当注意を払う人間だからこれはこれで構わない。大切なのは見捨てられるよりもこういう風にでも俺の事を慕って人がいてくれることを嬉しく思うことである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「私ね、章？に出会ったから。そう言う感情が少しだけど、変わってきたんだ。何だか自分でもよく分からないんだけどね……なんていうか……私を守ってくれるような気がするの、それこそ父さんみたいに……」

どうやら鈴が俺に好意を抱いてくれたのは俺が父親のような存在感だからだと言うことなのである。まあそれはそれで構わない。理由はどうであれ、俺を変えてくれた鈴はいつまでも‘恩人’なのである。

「よぉーし、肩も出来たから打つか！」

「それじゃあ石井から行ってみようか」

「でも…」

「見せてくれよ」

「でも、朴さんのボールを俺が打つ事なんて」

「大丈夫だよ。硬球打つのは初めてなんだろう？」

「ええ、こういう形式では…」

「フリーバッティングだと思って。楽しんでくれよ」

「本当ですか？。それじゃあお言葉に甘えて…」

俺は早速練習を始めた。ボールは…後でみんなでとりに行こうとのことだ。俺は李承？さんから借りたミニノ社のバットを使った。

”カーン！！”

「おおー！！！」

”バーン！！”

観客席にボールが直撃した。柵越えだ。人生初の公式球のフリーバッティングがホームランだなんて何とも運のいいことなんだろうか。

「やるじゃないか？」

「勿論ですよ。今日のためにたくさん練習してきたんですからね」

「それじゃあ、本気出すか！」

「ええ〜」

「冗談冗談」

俺は早速みんなのいじられキャラになったようであった。それを見ると

「ちょっと章?!?!」

と後ろから鈴の声が聞こえた。

「アンタ、私の嫁なんだからしゃきつと打ちなさいよ！」

「でも…速いんだぜ〜」

「ラウラのビンタも止められたんだし大丈夫よ。たくさん打たなかつたら寮でたつぷりお仕置きしてあげるわよ!?!」

「ふざけんなよ〜」

なんだか俺が変わったおかげでそれまでの自分の立場も変わってきたようだ。まあ学校ではようやく‘復帰’というか、みんなの輪に入ることが出来るようになった気がする。

「それじゃあ、次行くぞ！」

「はあ〜いい!?!」

俺は早速打席に戻った。

.....

「なあ、鈴」

「ん？」

「石井はどうなんだ？」

「そうだね…最高だよ!!。もう離れて欲しくないな」

「そうかそうか!、それはよかったじゃないか」

「うん、ありがと一夏!」

” 章?、私、アンタと絶対離れないからね。私のそばにいて…ずっと、ずっと…”

.....

大阪ドームの時計はようやく10時過ぎを指そうとしていた…。

27話 O S A K A p a r t 6 (前書き)

O S A K A シリーズ最終回です。

27話 O S A K A part 6

時が経つのはあつという間だ。今は‘ひかり524号’東京行きの新幹線の中にいる。練習の後、本当ならみんなで昼代を出し合つて食事でもしようと思つたのだが

「せつかくだからみんなで焼肉でも食べに行こうぜ」

「えっ!？。でも承?さんに迷惑が…」

「心配すんなつて、ほらっ!。みんなを呼んで来いよ!」

「そうですか…わかりました!」

と言つた具合でお昼をごちそうして貰つたのだ。だからまあ、みんなへのお土産と言うことで俺達はとりあえずお菓子(特に俺の場合は名古屋での停車時間の間に駅の売店で伊勢の赤福を買つた)を買つて帰ることにした。

「そんなに食べるの?」

「そうだな、買いすぎたかな?」

「石井は意外とそういうところがあるんだな」

「まあまあ…みんなで食べればいいじゃないか」

「そうですわね。はあ…それにしてもお昼は美味しかったですわ」

「あんなに美味しいものが日本にはあったのか！」

「セシリアさんもラウラさんも気に入ってくれたんですね」

「ええ、勿論ですわ」

「肉のステーキとは違ったおいしさだったな」

「そうですか…それはそれは…」

「でも…」

「でもなんだ？、デュノア？」

「一番喜んでたのは君の隣の…」

と言いながらデュノアは俺の隣で寝ている。リンを指さす。リンは新大阪を出たやいなやすぐに眠りに就いてしまった。きっと疲れてしまったのだろう。

「zzzzzzzzzzzz」

「どんな夢を見てるんだろうな…」

「さあね、石井なら分かるんじゃないか？」

「どうしてだよ、織斑？」

「嫁だろ？」

「お前だつてそれは同じだろ」

「そうだぞ！。私の嫁として…」

「それは断固として…」

「否定…」

「しますわ…」

篤さん、デュノア、セシリアさんのナイスな連係プレーでラウラさんの暴走を食い止めることが辛うじて出来たようだ。

「そういえば石井は知っていたのか？。鈴の親が離婚してたこと」

「いいや、初耳だな」

「そうか」

「でも、どうして今そんなことを俺に？」

すると篤さんが説明してくれた。

「お前のことを‘お父さんのよう’と言っていたんだ。多分、お前の事を好きという以外にも自分の父親のように思っているのかもしれないな」

「なるほど…」

”鈴…お前も俺と同じくらい重大なことを隠していたんだな…”

「わかりました。ありがとうございます籌さん。今日部屋に戻った
ら聞いてみますね」

「十分に気をつけるんだぞ」

「ええ、分かってますよ」

俺は少しの不安に駆られながらもそう言い切った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

いつの頃だろう。私は鳳鈴音。中国の代表候補生なんだけど、一夏とは昔から幼なじみだったの。でもね、中学二年生の時にそれまで住んでいた日本から中国に帰ったのよ。私の家はお父さんとお母さんが中華料理屋をしていたんだけど、お父さんが出て行っちゃったの。それから私はお母さんと一緒に中国で過ごしたわ。とっても寂しかった。勿論その時は一夏に合いたいって何度も思ったし、お父さんにも会いたいとも思ってたわ。

代表候補生になってしばらくしたら一夏がIS学園に受かったって話を聞いたからまたこっちに帰ってきたの。そうしたら出会ったのがこの章？って言うわけ。彼、最初は偏屈って言うか私のことを敬遠してるようだったわ。まあ初日から追いかけて回した私にも責任はあるかもしれないんだけどね…。でも、どうして私を敬遠してるのかが分かったとき何だか助けてあげたいって思うようになったの。しかも彼は勉強も出来るから私にはとっても優しく分らないところは何度も教えてくれたわ。

「どうしてアンタはさ」

「ん？」

「勉強で分らないところはちゃんと教えてくれるの？」

「勉強に感情を入れたらよくないんだよね…って俺は思うんだ。教えるって言うのも大変だし教わるっているのも大変だよ。でもそれはどっちもとっても大切なことなんだよ。だから単に女嫌いってだけでその機会を失わせたくも失いたくも俺はないんだ」

「…」

” どうしてだろう…何だか石井がとっても格好いい…”

「どうかした？。鳳さん？」

「ああ、何でもない何でもない。次教えてよ」

「ああ…」

この時だったわね、彼に私が恋心を抱いたのはそれからもう毎日
がアタツクの連続だったわ。最後には私だって頑張ったしね…。で
も今こうしていられるから幸せなのかもしれないわね。これから
こんな風な日々が続けばいいなあって思ってる。えっ？、私にとっ
ての彼？…難しい質問ね。きつと…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「お父さん…」

「はっ?!」

「うううん。ごめん。章？」

「気にするなよ」

「……は？」

「もうすぐ小田原、降りる準備を始めるぞ」

「分かったわ」

そう言うともみんなも準備をし出し始めた。その場が一瞬慌ただしくなった。

寮に戻ると俺は早速両親のことについて聞いた限りで鈴に聞いてみることにした。

「……って言うわけなの」

「なるほどね……だからお前俺の脇で寝てるときにお父さんって呟いたのか」

「私、そんなこと言ってたの?!」

「ああ」

「そう……変かな？」

「えっ？」

「そう言うのって変なのかなあ？」

鈴の声のトーンが明らかに落ちていく。だから俺は鈴をそっと抱きしめてやった。

「あつ…！！」

「そんなことないさ。父親を大切に思うことはとっても大事なことだ。俺は何も言いはしないさ。俺もお前とずっといられるように頑張るよ。」

「…」

「どうしたんだ鈴？」

「うつ…うつ…」

その瞬間、鈴は泣きながら俺に飛びついてきた。

”お前も随分いろいろと抱え込んできたんだな。俺とはまた違った意味でお前も大変な思いをしてきたんだ、それをこうして耐えて来れたことだけでも偉いさ”

「うぐっ…ひぐっ…」

「泣くのを堪えなくてもいいさ」

「でも…」

「いいか？。泣きたいときには堂々と泣くべきさ。だからこれから

も泣きたいときがあつたらいつでもこうしていいぞ。その代わりちやんと事情を話してくれると嬉しいかな？」

「ありが…とう」

泣きながらも鈴は自分の思ったことをはっきりと伝えられた。

「さてと…明日もあるからもう寝るか？」

今日は代休日でも明日は通常授業なのだ。さすがにもう11時だからそろそろ寝ないと朝に起きれなくなってしまう。

「そうだね…章？。本当にありがとう。お休みね」

「ああ、お休み」

俺は部屋の灯りを消した。

「ところで鈴」

「ん？」

「いつの間に俺の事を章？って呼ぶようになったんだ？」

「今日から」

「ほう…そうかそうか」

「ダメ？」

「いや、そんなことはないさ。俺も鈴って呼んでるんだからな」

「そうよね」

「まあいいや。お休み」

「お休み…」

その後のことは俺も覚えていない。どうやら疲れてすぐに眠りに就いてしまったようだ。

朝になると俺は驚いた。

「ん？。何だか足が絡まつてるような…はあっ！？！？！」

見ると寝息を静かに立てながら鈴が俺にしがみついて眠っていたのだ。

「うううん。お父さん…私、好きな人…見つけたんだ…章？さんって言うの…」

それが俺であること嬉しく思いながら、これからこの状況をどうすればいいか考えながら俺は素振りの練習をサボり朝日をゆつくりと眺めながら考えていた…。

28話 勉強会？

それから数日後、いよいよ学生にとって、また高校生活にとって最初の試験がやってこようとした。

「ここまでがテスト範囲です。皆さん頑張って勉強してきてくださいね。教科書の内容が分かっているれば解けるように作りますから、心配しないでくださいね」

山田先生はそう言って数学の授業を終えた。まあ俺達にとっての高校生活で初の「試験」と言うわけだ。まあ俺からしたら教科書のレベルと言っているからさほど難しくはないのだろうが…。

「章？〜今日教えて〜」

鈴は大変そうのようである。それだけではない。

「石井、今晚お前の部屋に行ってもいいか？」

「どうしたんだ織斑まで？」

「いや…わかんないところがあつてさ、頼む！！」

「一夏がどうしても石井に教わりたいと言っただ。何とかしてあげてくれないか？」

「篤さんは？」

「そうだな…私も出来れば一緒に教えて貰った方が…」

「わかりました。俺でいいんだったら別に…」

「済まないな。助かるぞ。それから私のことも呼び捨てにして貰って構わない。いつまでもさん付けで敬語というのは私は変な気がするんだ」

「そうか…わかった、これからは気をつけるよ」

「石井ありがとうな。箒も俺もまとめて面倒見てくれて」

「気にするなっ…」

「章？…私は？」

「勿論お前もいていいに決まってるだろ？」

「ありがとう!!」

「おいおい、学校の中では飛びつくなっ…」

「嫁なんだから黙ってなさいよ」

「全く仕方ねえなあ…」

とまあそんな具合に俺は夜に鈴、箒、織斑と4人で勉強会をするこ
とになった。何をしたいのか聞いたところとりあえず今夜は数学だ
けでいいとのこと。今回の試験は最初と言うこともあって試験科目
も国語、数学、化学、物理、英語、I Sの専門科目だけなのである。
俺からしたら自分の好きな社会系科目が一つもないからなんだか物

足りなくも思ったりする。まあ大丈夫だろう。この学校は復習重視だから、そんなにどの教科も重箱の隅をつつくような問題は出さないとのことだ。早い話がちゃんと復習さえしていれば試験の点数はさほど悪くはないと言っていることである。まあ俺も一応はちゃんと復習しておいた方が要点の確認にもなるから便利っちゃ便利だ。

「それじゃあ、7時からな」

「わかった」

「私も大丈夫だ」

「鈴は？」

「勿論大丈夫よ」

「そうか俺は今日は野球の練習はしないだろうから部屋にずっといることにするよ」

「どうして練習しないんだ？」

「だって…もうどの部活もテスト前で活動禁止になってるのに俺だけやってたら織斑先生に怒られるだろ？。あの人のげんこつ痛そうだから受けたくないんだよ」

「わかるよ、確かに千冬姉のげんこつはいた…」

その時である。いきなり織斑はげんこつを喰らった。予想通り織斑先生だ。

「千冬姉…いや織斑先生」

「お前達、人の噂をするときは気をつけるんだな。まあ勉強会をするというのはいいい心がけだ。頑張れな」

「はい」

「ありがとうございます先生」

「はい…先生…」

「織斑！、お前は？」

「頑張り…ます」

と痛がりながらもそう先生に答えた。やれやれ、どうなるんだかなあ…。

29話 ありがとう

いざ夜になって勉強会をしてみると人によって様々な弱点が露呈したような気がした。俺も少し化学が怪しいところがあったもののまあ修正出来ないほどのものではなかったのでさほど厄介ではなかった。織斑はどうも数学系が若干弱いようだった。それに対して簿は意外と文系：まあ英語が出来のようだった。とは言っても入学試験をパスしてきただけあって物わかりはいい。俺もあんまり国語は得意ではないが英語に関しては自信がある。まあ一番問題なのは鈴であつた。

「わかんない」

「お前はもう少し待ってろ。後で目一杯教えてやつからさ…」

「ありがとう!!」

「そのかわり、自分で出来るところぐらいあるだろ?」

「うーん、ほんの少しだけどね」

「じゃあそのほんの少してやつだけを実に出来るようにしとけ…そうだな問題を暗記出来るぐらいと蹴るようになればきっと問題は無いだろうな。そのタイプのやつだったら…」

「うん、わかった」

鈴はまあ日本に住んでいたこともあって国語はさほど問題ないし、数学以外なら特に問題はない。つまりは数学の出来がとっても悪い

と言うことだ。そういえば今日の勉強会は数学という括りではなくて分らないところを俺に聞くといいものに変更になったのだ。まあみんな俺の事を信用してくれているようだから俺もそれを維持出来るように頑張った。

その甲斐もあってか1時間もすれば織斑も箒も問題ないレベルに引き上げることが出来たようだ。

「今日はありがとうな石井」

「ああ、気にするなつて」

「私からも礼を言うぞ。ありがとう石井」

「まあまあ箒まで…」

「それじゃあ私たちは部屋に戻る」

「おやすみな石井、鈴」

「ああ、お休み。二人とも」

そついうと織斑も箒も満足した顔で部屋に戻っていった。

「さて…と、今度はお前の番だな…」

「待たせすぎだよ…」

「いめんいめん」

「でもいいよ、教えてちょうだい！」

「それじゃあどこから教えて欲しいんだ？」

どうやら鈴の解いた問題の形跡を見ると…2次関数がどうも苦手と
いうか解けていないみたいである。

「早速まあお前の解いた後だけで何がわかんないか分かった気がするな」

「そう？」

「2次関数苦手か？」

「うん… trotzdem」

「まあまあそう落ち込むなって。任せておけよ」

「本当に？」

「当たり前だろ？」

「ありがと章？」

「さてさて、それじゃあ始めるか？」

「うん!!」

「それじゃあまず教科書の…」

と言った具合でまあ2次関数が分からないんだからひとまず1次関

数からサラツとおさらいした後に2次関数に入ることにした。そのおかげで今まで苦手って思い込んでいたものが意外と簡単であること二輪自身も気づいたようだった。

「これって…こうするの？」

「そつ、そこはその式にそれを代入すればいいんだよ。まあ文字が多くて面倒かもしれないけどね」

「うん!!」

鈴の顔も徐々に安心というか自信が付いているような顔をしていた。多分問題が解けるようになったからだろう。まあそんな姿を見て、俺も教えてよかったと思えるんだから何とも幸せ者である。去年までだったら…

.....

「ねえ、教えなさいよ!!」

「うるさいなあ…勉強の邪魔だろ？」

「はっ?。こっちはこうしてお願いしてるのよ!」

「てめえ等何様だ?。黙って聞いてりゃ、態度でかくてよ!。どっちが教わるか自覚してんのかよ?」

「もういいわよ。もうあんたなんか聞かないわ!」

「そうしてくれ…悪いな朴」

「いいんだよ。気にするなってそれよりこの問題なんだけどさ…」

「うんうん、それはね…」

・・・・・・・・・・・・・・・・

と言った具合でまともに女子なんかの勉強を手助けすることだなんて無かった。まあそれが今となってはこうなったんだから俺も大変貌だな…。

「終わったー！！」

その時であつた。鈴が立ち上がってそう叫んだ。

「おお…とうとう俺の力なしでも出来るようになったじゃないか」

「うん！！。でもこうなれたのは章？のおかげだよ、だから…」

「だから…？」

「今度は章？に私が答えてあげる番だね…」

「…！」

そう言うとき鈴はまた前のように俺に口づけを交わす。嬉しいけどこんな事って許されるのかなあ？。まあ織斑先生も頑張れと入っていたけどベクトルの向きが違ふ気もするんだよなあ…。しかも…

「…！！！！」

「大好き…」

そう言いながら鈴は舌まで入れてくるんだもの。まあこつこつ日もあつていいかな？。

「それじゃあ私たちも寝よ!!」

「そつ、そつだな…」

”やれやれ…鈴にはいつも振り回させられてくれるよ。まあそれもいいかな？”

「それじゃあお休みな」

「うん、お休み章?!」

「ん…」

俺は部屋の明かりを落とした…。

30話 性格

この学校の試験は一週間を掛けてゆっくりと行つようである。初日は早速数学と物理であつた。

”くうく、この問題どう解くんだった？”

”これならチヨロいな…”

”章？に教えて貰ったやつに似てる。これでいいのかも…”

まあ三者三様のようであつたらしい。織斑は何とも言えない顔で再び俺に試験後助けを求めてきた。

「なあ石井…今夜もその…」

「いいよ。いつでも来な」

「助かるぜく、ホントお前がここに来てくれなかったら俺どうすればよかったか…」

「箒とかは？」

「ああ。あいつ等はみんな明日の試験は大丈夫みたいなんだ。明日は英語だろ？。俺てんで英語わかんねえんだよ」

「そうか…よしっ。任せときな」

「ありがとう」

「気にすんなって…」

「章?!」

「鈴!。どうしたんだよ」

「章?に教えて貰ったおかげでよくできた気がするんだ。本当にありがとう」

「どういたしまして…」

「今夜もよろしくね」

「おう。任せておきな」

試験の日というのは基本的には午前中で終わるのがステータスだ。昔なら飛行機を撮りに羽田空港とかにも足を伸ばしていたが今回はそういうわけにもいかない。まあ早めに部屋に戻ることにしよう。

「章?さん」

荷物を片付けて…といっても筆箱を持ってきただけなのだが…まあ帰ろうとすると不意に後ろから俺はセシリアさんに呼ばれた。

「セシリアさん…何か?」

「私も…英語は得意なのですが…」

「まあ母国語ですからね…」

「そうじゃなくて、私もその…化学を…」
ケミストリー

「ああ、教えて欲しいと？」

「そういうことですわ」

「うん…。まあ大丈夫でしょう。そのかわり織斑にも英語を教えてくださいませんか？」

「一夏さんに？」

「ええ。あいつ、英語ダメだって言っていましたから…」

「そうですね！。まあ、私の理路整然とした教え方なら一夏さんもきっと明日の英語のテストは満点でしょう」

「それは楽しみです。それでは今夜、俺と鈴の部屋に…」

「わかりましたわ」

なんだかんだ言っただけで代表候補生も結局は努力しないという点が取れないと言っただけだ。そういえば俺は嫌いなものでも必ずそれなりに学習はしているから教科書に書いてあることぐらいなら教えることぐらいは出来るのだ。だから嫌いな化学も人に教えることが出来るって言う訳なんだ。

「石井」

「デユノア、お前もか？」

「うん。ボクも化学が…」

チミーというのは化学をフランス語で発音したもののようである。なんだかみんな化学が苦手のようである。今回は化学反応式の量的関係だからまあ…係数あわせとかが苦手なんだろうきっと…。

「いいよ。今夜俺と鈴の部屋にね」

「うん。わかった」

とまあいうわけで、今夜は大所帯のチームとなった。セシリアさんが織斑に英語を教えて、俺がりんとデュノアに化学を教えている。

「このときはこれが分子量になるの？」

「そうそう。CO₂は分子量をC≡12・0、O≡16・0としたら12・0+16・0×2≡12・0+32・0≡44・0になるから、今回はこの44・0が分子量になるんだ」

「そうなんだ。それじゃあこの分子量で2・2グラムで割ったときの値が今回求めるmolの値になるってこと？」

「そうだよ。それでいいと思うな」

「わかった。章？って本当に教え方上手だね」

「そうかなあ？」

「うん。ボクもそう思うよ」

「そう？。それはどうも…さてさて、次の問題に行こうか？」

「うん」

二人もボクの期待通りの返答をしてくれた。

「そうですね…一夏さんの英語は独特なのですね」

「つてことはダメなのか？」

「いえ…そういうわけではなくて、意味は通じるんですが普通使わない言い方をしているんです」

「いいか悪いかで言うത്？」

「まあ悪くはないですね。ただ、問題に沿った答え方をした方が無難かと…」

「なるほどな。セシリアはイギリス出身だしな。今日は目一杯教えてくれないか？」

「エッ!？」

「どうかしたのか？」

「いやっ…何でもありませんわ。それでは始めましょうか…」

「ああ…」

俺とデュノア、鈴はこの一部始終を余すところ無くしつかりと聞いていた。すると突然デュノアが何かを俺のノートに書いた。

” 石井は一夏のことどう思う？ ”

” どういうことだい？ ”

” うーん、性格って言えばいいのかな？ ”

すると鈴もその中に混じってきた。

” 章？、たぶんシャルルが言いたいのは一夏が私たちのどう振る舞ってるかってことだと思う ”

” そうか、デュノア？ ”

” うん ”

” そうだな… まあもう少しみんなの気持ちに気づいてあげてもいいと思うんだけどね…”

どうやらデュノアもその意見を期待していたようだ。どうも織斑はわざと演じているのかそれとも本当に気づいていないのか… 何とも言えない。

” まあ、それが一夏のいいところだと思っただけだね…”

” うん。私も幼なじみだからよく分かるけど一夏は昔からこんな感じだったんだ ”

”へへ、まあいいやつなんだけど…まさに唐変木って感じかな”

二人は俺がそう書くと首を縦に同時に振った。

「3人ともどうかしたのか？」

「いや、何でもないぞ織斑」

「そうだよ。石井の言つとおりだよ!!」

「うん」

「そうか…セシリア、続きを頼むよ」

「わかりましたわ…」

俺達はほっと一息の気持ち、そして落胆の意味を込めてため息を漏らした…。

31話 人生相談

試験もいよいよ明日が最終日だ。今日は鈴はISの専門教科の勉強とか言うことで他の部屋に向かっている。つまりこの部屋にいるのは今のところ俺だけである。どうして俺だけ残った勝つていったら単に部屋が心配だったからだ、というか俺は専門教科は別に勉強しなくてもそれなりの点が取れるから行かなかったのだ。今はと言えば試験期間中にしては不謹慎だがパソコンで野球の情報を調べている。

「うーん、MBCと三星が同率で3位か…。まあ今年の韓国野球はいろいろと波瀾万丈だなあ。ロッテが最下位だなんて久しぶりだなあ」

俺は昔からの癖で韓国の野球チームは古い親会社の名前ですべてしまう。このMBCも今のLGの事だし、他にもまあたくさんあるわけだ。とりわけ俺の好きなチームは三星ライオンズで、これは李承?選手の出身チームでもあるからだ。まあこれに関しては何度も言っているから既に分かっていただけであるだろう。

「失礼するぞ」

その時である。俺が丁度パソコンでそんなことをしていると中に誰かが入ってきた。ラウラさんだった。

「こんばんは。どうしてこんな時間に?」

「私の嫁が絶賛していたからな。お前の勉強の教え方についてな」

「はあ…」

「そこでだ」

「はい？」

「私にもそれを教えてくれないか？」

「えっ！？」

「実は最近、私の嫁を取り巻く環境が大きく変わってきているんだ」

”それはそうだろうな…織斑はモテるからな…まあ俺には鈴がいるんだけどね…”

「そこで、どうやったら私は過ごせばいいのかと」

「要するに人生相談というわけですね」

「ああ。まさにその通りであろう」

「わかりました。まあ俺も暇ですから付き合いましょう。そこに掛けていてください。今お茶を用意しますから」

「ありがとう」

俺は早速ラウラさんと話を始めた。

「というわけなんだ」

「なるほど…最近セシリアさんやデュノア、それから篝さんに織斑が狙われていると…」

「それ以外にもだ！」

「ああ、すみません」

「というわけで、どうすればいいだろうか？」

「あれ？。そういえばラウラさんには部下がいたんじゃない？」

ラウラさんにはクラリツサ・ハルフォーフさんと言うドイツのIS特殊配備部隊で大尉をしているんだそう。聞いた限りだとラウラさんの嫁宣言やら何とも言えないラウラさんの行動はこの大尉の所為だと言つことである。まあ…ドイツでも日本の漫画文化は盛んだそうから…気にするほどでもないのだが…。

「それがな。私の部下でもさすがによく分からないと言っんだ」

「と言いますと？」

「私が何か気を向けさせるようなことをすればいいと彼女らは言うんだがその行動というのがなにをすればいいのかわからんだ」

「なるほど…」

「どうだ？」

「うーん。確かに難しいですね。でも…多分ですけど、織斑はラウラさんのことをそれなりにはおもっえくれていると思いますよ。後

はいつも通り接していれば問題ないのではと?」

「本当か?」

「ええ。まあセシリアさん、篝さん、デュノアの猛追はきついでしょうけど、ラウラさんはラウラさんでの独自路線で攻めるべきだと俺は思いますね」

そついうとラウラさんはお茶を飲み干して

「ありがとう。参考になった。またよろしくな」

といいながら部屋を去っていった。丁度外で鈴と出会ったようだ。

「あつ!」

「どうかしたのか?」

「どうかしたのかじゃないわよ!!。アンタ、私の章?に何を…」

「相談をしていたんだ」

「相談?」

「ああ、私の嫁のことについてちょっとな」

「一夏のこと?」

「そつだ」

「ふうん。それならまあいいや。それじゃあね…って」

「ん？」

「どうして章？に聞いたのよ？」

「いや、同じ男性だし行動を共にすることも多いからな」

「まあ確かにそれはそうね。でも、今度からは私に言って欲しいわ」

「理由は？」

「だって、章？は私の嫁なんだもん」

「そうだったな…済まなかった」

「いいわよ。気にしないでちょうだい」

「そうか、ありがとう」

「それじゃあね」

そう言うとき鈴は部屋の中に戻ってきた。部屋に付くやいなや俺をベッドに押し倒した。

「どうしたんだよ！」

「アンタ！、私がない間にラウラと人生相談してたんだってね」

「ダメか？」

「いいけど、あんまり私はして欲しくないな」

「どうして？」

「アンタには私だけを見ていて貰いたいの」

「そういうことか…まあ俺も気をつけるよ。でも織斑の事って聞いたから少し訊いてみようと思ったただけなんだ」

「まあ、ラウラも同じこと言ってたし。そういうことにしてあげるわ」

「そういうことって…お前さ…」

「一応言っておくと鈴は俺の丁度腹の上に座ってるのだ。だから身動きは少なからず制限されてしまう。」

「それ以上言ったら…殺すよ」

そう言いながら鈴はISの利き手部分だけをまた起動させる。

「おいおい…勘弁してくれよ…」

「アンタが私に謝るんだったら止めてもいいわよ……」

「その…ごめんなさい…」

「うん。それでいいわ」

俺もほつとした。こいつは体小さい分、足も速いし、すばしっこいから逃げ切ることは至難の業なのだ。まあ怒りそうになったときにはこうするのがベストなわけだ。時刻はもう既に10時を回っていた。今日は何だかとても疲れた気がしたので、鈴と共に布団に潜り込むことにした…。

32話 プレゼント

長かった試験も終わった。とうとう最後の終了の合図のチャイムが鳴った。

「そこまでだ！。答案用紙を後ろから回収しろ！」

最後の試験監督は織斑先生だった。多分この後にホームルームがあるからこうすれば便利だからだろう。まあ後は結果を待っただけだ。

「章？、どうだった？」

「まあまあかな」

「ウソばかり…きつといいんでしょ？」

「さあね」

俺の態度は時として人を怒らせるようで…

「後で殺す…」

今回もそのようである。これも女子に対する昔の態度の取り方の名残なんだろう。

それはさておき、今日は何でも長めのホームルームになるそうである。試験前に

.....

「石井！」

「はい？」

”やべえ、俺不正行為でもされたことになったか？”

「今日のホームルームでお前にいい物をプレゼントしてやる」

「いい物？」

「ああそうだ。だから期待している」

・・・・・・・・・・・・・・・・

と言うやりとりがあつて、それが何か気になるのだ。

「章？にいい物って何だろうね？」

「うゝん、野球のバットとかかな？」

「そんなもんだったらわざわざ先生がみんなの前で言うわけ無いじゃん」

「そうか…それだと…」

「みんな席について下さい！」

俺と鈴の話を遮るかのようにホームルームは始まった。山田先生が進行役で織斑先生は隣で黙って部屋の壁に寄っかかりながらみんな

を見渡している。

「これよりホームルームを始めますね…」

まあ幾ら俺にはいい物をくれるとは言っても、ホームルームはホームルームなので普通に授業連絡などをヘテいよいよ最後と言ったときに俺へのプレゼントが何かを発表されることになった。

「ところで皆さん。石井君がこの間日韓の代表候補生になったのは知っていますよね？」

そう山田先生がみんなに聞くとまあざわざわとその通りであるとの返答がいろんな人からくる。

「そこで石井君には専用機を持って貰うことになりました。しかも2機です！」

そう言われて俺はとっても驚いた。まあ日韓の代表候補生なんだから2カ国のISを持つのは当然と言えば当然であろう。

「凄いじゃん章?!?!」

「よかったじゃないか石井」

「ああ…そうだな…」

「どうしてあんまり喜ばないの章??」

「いや…何だか実感がわなくて…」

まあそんなもんであるのだ。この間の迷子の父親が李承？選手であったことぐらいの驚きである。それ以上かもしれない…。それは俺以外の人も同じであるようで騒がしくなった。

「お前達静かにしろ！！。まだホームルームは終わってないぞ！」

織斑先生の一喝で辺りは再び静まりかえった。

「今回石井に与えられたのは日本からは第4世代の…」

そう言っただけでもみんなはまたまた驚いたようだ。確かに第4世代というのはまだまだブラックボックスが多い。俺も詳しいことは教えて貰っていない。聞いた話だと全領域・全局面展開運用能力を有したISとか言う難しい理論を使うんだそうだ。早い話が最新作だから利点も欠点もあると言うことだ。

「静かにしろ！」

またまた織斑先生の喝。さすがに二度も同じような場面が繰り広げられたら先生の声が怒りを増していることぐらい誰にでも分かる。

「織斑が使ってるものと同じ白式だ。そして大韓民国からは李舜臣イスンシン型が贈られることになった。どちらをどう使うかは石井の自由だがなるべく偏らないようにしてくれ。李舜臣型も勿論第4世代のもので韓国の新作だそうだ。因みに言っておくと同時に2機の専用機を持っているのは今のところ世界中では石井だけだ」

続けざまに織斑先生は言った。知らないところで俺の評判はかなりよくなっているというか期待されているようである。こんなことを言われて俺もストレスというか不安が募らないわけがない。

「章？なら大丈夫でしょ？」

それを救ってくれたのはまたもや鈴であった。確かに今までの俺だつたらセシリアさんとの決闘やラウラさんとの格闘でも俺は、何とかなるだろう、を合い言葉にしてやってこられたのだ。

「そうだな…そうだったな…」

「どうかしたの章？？」

「いや…全然…」

「アンタがそんな顔してるところまで心配しなくなっちゃうよ」

「悪いな…」

鈴にまで心配を掛けさせるわけにはいかない。まあ俺も徐々に実感がわいてきた。

”まあ期待されて少し緊張してるけど…楽しそうだな…”

今まで練習機でしか飛んだことがない大空を自分専用のISで飛べるだなんて何て最高なことなのだろうか。まるで鳥にでもなったようである、とも言えいいのだろうか。

「石井、頑張るんだぞ！」

「はい！。ありがとうございます」

「織斑！」

「あつ、はい！」

「お前と同じ白式だから面倒を見てやるんだぞ！」

「わかりました…石井、一緒に頑張ろうな」

「ああ。せっかくだからね」

「今日、早速どうだ？」

「今日？…まあいいか。やってみるか！」

と言うことで俺と織斑は早速ホームルームが終わると更衣室に向かった。

このISに乗る時のスーツは寒い。例えるなら野球用のアンダーシャツ1枚か2枚分つてところだろう。俺はいつも乗るまではウィンドブレーカーを使っている。

「そのウィンドブレーカーも野球のか？」

「ああ、前に使ってたやつでね」

「へー、お前って本当に野球好きなんだな」

「まあね」

そんなことを話しながらISが置いてあるところに向かうと結構騒

がしいことが分かった。どうやら俺の噂を聞きつけた新聞部なり野次馬が来ているようなのである。

「織斑…面倒だな」

「ああ、だけどどうする？」

今回は逃げるのとは違って俺のISの前にみんながいるからどうすることも出来ない。まあそうになったら…

「堂々と乗るしかないだろ？」

と言う結論に辿り着くのは必至だ。

「わかった。ところでお前はどっちのに乗るんだ？」

「そうだな…白式は織斑が乗ってるから幾らかどんなものか知ってるから…ひとまず李舜臣型から乗ってみるかな？」

「わかった。それじゃあ早速乗ろうぜ」

「おう！」

俺も織斑も野次馬のところを素通りというか横切ってISに乗り込んだ。まあ黄色い声がうるさかったが…

「どうだお前の李舜臣型は？」

「問題ないかな？。まあまだ実践的なことをしてないからかもしれないけどね…」

「よし、それじゃあ旋回だと言った基本的なことから調べてみる
って事にするか？」

「そうだな、性能試験とでも……」

「ちょっと待ちなさい！！！！！」

下の方から俺と織斑の声を遮って誰かがやってきた……

「「鈴！」」

俺と織斑は同時にそう答えた。

「鈴、どうしてこんなところに？」

「アンタの初めての飛行に私がいらないなんておかしいでしょ？」

「まあ……それもそうだな」

鈴の専用機は中国の甲龍シェンロンで第3世代のものである。この第3世代と
いうのは試験機の意味合いが強く鈴の場合は低燃費に重点を置かれ
ているものなんだそうだ。

「さて、それじゃあ飛行の訓練でも……」

その時である。織斑がそう言った直後に上の方からミサイルという
か何かとんでもないものが飛んできたのが分かった。

「何なんだ！！！」

「見て!!」

鈴の指さした方向を見ると何かがいるのが分かった。

「あれISか？」

俺は鈴にそう呟いた。

「だと思っわ…でも」

「あんなの見たことないぞ…」

そのISはラウラさんが化けたときと同じで真っ黒だった。するといきなり俺達に向かって突っ込んできた。どうも標的は俺のようだ。俺は死球を避けるように何とかその場を切り抜けた。

214

「腰がダメになっちまうぜ…」

「のんきなこと言ってる場合じゃないわよ!」

「ごめんごめん…でも、あいつは俺達を敵と思ってるようだな」

「ああ…まさにその通りだな」

すると先生から通信が入った。

「織斑、石井、鈴。私たちは今日日本政府に確認を取ったところそのISはどうやら無人機のようにだ」

「『無人機？』」

「ああ、私たちも許可がおり次第すぐに向かうからそれまではお前達で食い止めていてくれ。石井、早速お前の腕の見せ所だぞ！」

俺にそう伝えると織斑先生は通信を切った。

「アンタ、いろいろと期待されてるのね。私もアンタには期待してるわ」

「よせよ…恥ずかしいだろ？」

俺と鈴は互いにそう言いながら顔を見合わせた。まあ、戦いの時によくありそうな場面である。

「さて、早速行くか！」

織斑のかけ声の下、俺達は無人機に向かって行った…。

33話 海の上

俺の使っている韓国製のISの名前でもある李舜臣イ・スンシンと言う人物は明暦1545年から1598年まで生存し、豊臣秀吉の朝鮮出兵に伴う日本の水軍を打ち破った、つまり祖国を救った英雄として今も韓国では知らない人はいない人物の一人である。水軍というくらいなのだから勿論海軍の人物で今も韓国の海軍には、忠武公李舜臣チュンムゴン・イ・スンシン型' と言う駆逐艦が存在するくらいだ。この忠武公チュンムゴンと言う辺りがいかに韓国では英雄として崇められあがているかが分かる。

これもまた偶然なのだろうかはたまた必然なのだろうか俺達がいるのも海の上...と言っても上空5〜600メートルぐらいのところなのだが、まあいる訳なのだ。例の真つ黒のISを追いかけていくとどうやら海の上で戦いたいらしくここまで付いてこさせられたというわけだ。

「ねえ章？、あのIS...」

「だろうね...」

俺と鈴は軽く言葉を交わした。俺も鈴も同じ事に気がついてるようだ。

「二人ともどうしたんだ？。あのISがどうかしたのか？」

「いやね、あのISが俺も鈴も無人機だと思ってさ、なあ鈴？」

「うん」

「無人機?!」

「俺はさっきからあいつを見ている限りだと何だか人が乗ってる気配がしないんだよ」

「鈴は?」

「私も章?と同じよ」

「そうか…まあ言われてみれば妙な感じはしたんだけどな」

「だろ?」

「でも…だったらどうするんだ?」

「織斑、俺は日韓の代表候補生なのは知ってるだろ?」

「ああ」

「だから、もしも日本と韓国…いや、朝鮮半島ハントウのどちらかにでも脅威となるようなものが現れた場合は…」

「排除するのみよね?」

「そう…」

鈴も俺の気持ちが分かっているようであった。さすがは俺の「夫」であるだけのことはある。

「なるほどな。つまり倒すと言うことだな?」

「ああそのつもりだよ。あんな真っ黒いもの日本にも韓国にも必要ないさ」

「そうだな。それじゃあ俺達も行くか？」

「ええ。章？、一夏。行きましょう！！」

すると後ろから更に…

「抜け駆けは許しませんわよ」

「ボク達を置いて戦うなんて酷いな」

「一夏達が戦ってるのに私たちが行かないというのはおかしいぞ！」

「嫁だけに戦わせるわけにはいかないからな…」

と口々に言いながらセシリアさんにデュノア、篤さん、それからラウラさんまで駆けつけてくれた。

「さながら代表だドリームチームな…」

「そんなこと言って場合じゃないわよ章？」

「そうだったな…よし！！。全員行くぞ！」

俺のかけ声の下みんなは真っ黒なISに向かっていった。

戦ってみると確かに強い。それもかなりの強さである。とは言っ

てもこちららも最新の李舜臣型、それそつなりの振る舞いをするこ
は出来た。だが…

「ぐわっ!!」

「ラウラさん、大丈夫ですか？」

「私に構うな！」

「いけません!。一旦全員下がりました」

「でも…」

「大丈夫です。まだまだ俺達も大丈夫ですしここは一旦遠くから敵
を眺めてみましょう」

そついうとようやくラウラさんも納得してくれたようであつた。ま
あ、作戦会議とでも言えはいいのだろうか。相手の真つ黒なISは
向かつてこようとはしないようであつた俺達が一旦退却すると余裕な顔
しながらその場で空中停止^{ホバリング}をした。

「石井、何か方法はないかな？」

「そつだな織斑…みんなはどういう風に見えたんだ？」

「私はそつですわね…何というか近接飛行は不得意なように見受け
られましたわ」

「なるほどね、セシリアさんはそつ見えた訳か…」

「ボクもそう見えただけなんだかそれを…」

「仮面を被ってるって事か？」

「うん、なんだかそう見えるんだ。理由は分からないけど…」

「もしかして！」

「どうしたんだ篤？」

「いやな一夏、その…あいつは私たちがこれに気がついたら戦法を変えてくるんじゃないかと思ったんだ」

「私の嫁を傷つけるためにそんな小癪こじゃくな真似を…許さん。完膚無きまでたたきのめしてやる！！」

「とにかく章？！、みんなで倒せばいいんじゃない？」

「そうだな鈴。でもどうやって相手に向かって行こうか？」

俺は少し考え込んでしまった。あんなことを言ってしまった以上俺が今回の戦いではリーダー的存在になる。だから必然的に考えることも多くなってしまうのだ。さながら戦場の隊長である。

”誰も傷つけずに、ましてや日韓両国のためにも…どうすれば…”

「章？」

とその時、鈴は俺の名前を呼んだ。

「どうしたんだ鈴？」

「章？考えすぎだよ」

「えっ？」

「いつもお前が言ってたじゃないか？」

「篤さんまで…一体？」

「ボク達は大丈夫だよ」

「私もですわ。石井さんのあの言葉さえ聞ければ」

「あの言葉？」

「そうだ。私も同感だな？」

「ラウラさんまで…」

「石井」

「織斑、一体俺は？」

「忘れたのか？」

「えっ？」

「アンタの口癖よ…テスト前もセシリアと決闘したときも言ってたんでしょ？」

ようやくそれを聞いて何か分かった気がした。

”なるほどな、考えすぎると逆にいけないってことだな”

「わかった章??」

「ああ…、何とかなるさ、ってか?」

そう俺が言つとみんなは静かに笑顔を見せてくれた。

「よし!、それじゃあ行くか?」

俺達は再びあの真っ黒なISに向かった。今度こそ必ず倒す、みんなのためにも…と思いながら。

それからの戦いは攻守交代のようであった。真っ黒なISは俺達のチームワークの前に徐々に消耗していったようだ。まずセシリアさんとデュノアが自前の銃器で攻撃した後に織斑と箒さんがそれぞれ…そういえば箒さんは、俺の白式に乗ってきたようである。織斑先生に後から聞いた話だと特別にこの場飲みでのしよつと言つことで登録をして貰ったようである。えつと、そうそう。それで織斑と箒さんが白式の雪片式型で攻撃した後に鈴の甲龍で龍咆リウホウという空間圧力兵器で…まあ例えるならとあるアニメの空気何とかというものをかなり巨力にしたようなものだ。この時にラウラさんが仮に誰かを真っ黒なISが襲おうとしたときもAIC（慣性停止結界）を用いて防御をするという完璧なチームワークであった。そのおかげで終いには真っ黒なISはいよいよ俺が倒すことになった…。

「最期だな…」

「章？！！」

「分かってるって…」

俺は鈴のかけ声に答えると俺は最期の攻撃を真っ黒なISに向かつてした。俺のISについている武器はこれがかつての朝鮮半島で使われていた直刀だった。

「喰らえ！！」

俺は刀を野球のバットのように横に構えながら真っ黒なISに振りかざした。見事にISは空中で爆発し海上へと落下していった。

「よくやった。7人とも」

織斑先生の声が無線から聞こえてきた。

「やったわね、章？！！」

鈴も上機嫌だった。勿論他の人たちも…。

俺達は意気揚々と学校に戻っていった。帰ると俺はすぐに李舜臣型のISに？？と朝鮮語で李舜臣と書いた。

「これでよしと…自分専用なんだからな。お前もお前も…」

まあ篤さんに先に乗られてしまったがあくまで白式も俺のISなのだ。

「石井、今日はありがとう」

「いいんですよ篤さん」

「そういえば私にはどうして敬語を使うんだ？」

「えっ？」

「なんだか変な気になってな…」

「そうでしたね。それでは…こんなんでもいいの？」

「そうだ」

「わかった、篤さん。これからもよろしく」

「ああ、こちらこそだ」

俺と篤さんは再び握手をした。まあこれからも楽しくやっていけそうだ。ひとまず俺は名前書き終わると寮に戻った。部屋では勿論鈴が待っていてくれた。

「おかえり、章？」

「ああ」

「よかったね」

「何が？」

「何がって…敵を落とせた事よ」

「そうだね、まあ楽しかったしね」

「もう…」

そっぴうと黙りながら鈴は俺の脇に座った。因みに言っておくと今はベッドの上だ。

「格好良かったよ」

「そっ？」

「うん、とっても…」

「ありがとうな、鈴」

俺は改めて鈴にお礼を言つとキスをしてあげた…。

34話 追いかけて

それからしばらくが経ち、夕食を取りに食堂に俺は向かった。なんだか鈴も一緒に付いてきているのだが…。

「ふんふん」

と偉く上機嫌である。

「お前熱でもあんのか？」

「はっ？」

「そんなに機嫌がいいなんて…お前らしくないな…」

「失礼ね!!。私だって女の子なんだからこれぐらい普通でしょ？」

「うん？」

「な、何よ…その顔は」

「いや、今の言葉に疑問符が…そうだな、160個くらい付いたかな？」

敢えて狙ってみた。すると

「ううううう…」

と予想通りの振る舞いを見せてくれる。最近気がついたのだがこの

追いかけてここではまあ危険ではあるがランニングの練習、つまり体力の増強が可能であるのだ。だから…

” おっ、怒ってくれるのかな？ ”

「うあああ！！！！。アンタはどうしてそういうことを言うの？」

「おっ、怒ってる姿も可愛いんだけどな…」

「なっ、アンター！！」

「でも怒るとシワがねえ……」

「ううううう…ああ！！！！。もう我慢出来ない、殺してやる！！！！」

そう言いながら逃げる俺を追いかけ始めた。まあこんなのはいつものことだ…。

「コラ！！！！。止まりなさい！！」

「止まったら殺すんでしょ？」

「当たり前でしょ？」

「だってまだ俺…心の準備が…何てね！」

「あああ！！。もううううう！！」

” ふう、最近これのおかげで走力も持久力もドンドンついてきたな

…。さてそろそろ軽く本気出すか…”

「はっ、速い…」

鈴は俺のスピードに圧倒されて落胆したようであった…訳がなかった。さすがに鈴も何度もこんな事をされていたから気がついていたようである。

「章？…覚悟してらっしゃい。というわけでみんな、よろしくね」

俺が見えなくなったのを確認すると、鈴は誰かに向かって無線でそう言った。

そんなこと祖を知らない俺は外まで出てきてしまった。さすがに跡がついてこないのので幾分怪しかったりもしたのだが特に気にせず再び俺は走りはじめた。すると脇から誰かが俺に飛びつくというか俺の行く手を遮った。

「石井く〜ん！！」

布仏さんのようだ。まあ俺は謝罪した後はいろんな人に話しかけられてもちゃんと答えるようにしたから（勿論鈴の命令だが…）布仏さんとも普通に話し友達ぐらいに仲は回復していた。

「ああどうも…」

「せっかくこんなところであつたんだからさ〜何かお話ししようよ」
「」

「えっ？！」

なんだかこんなところで会っなんて…本当に偶然なのだろうか？。
まあせっかく話そうと言ってるんだからそうすることにした。

「いいよ…」

「それじゃあおいで」

そう言うと布仏さんは俺を芝生のところに案内した。見ると布仏さん。またいつもの着ぐるみを羽織っているようだ。この羽織っている服についている耳は話に寄れば布仏さんの感情を示すバロメータのような役割を果たしているんだそうである。本当に萎えているときは耳が垂れ下がってしまうんだそうだ。勿論この服も丈が幾分長めに作られている。

「…それです」

「なるほど…」

「…って言う感じなんだよ」

「へー、意外だね。まさかセシリアさんが…」

何の話かといったらセシリアさんの…おっとこの先は言えないな、まあ皆様のご想像にお任せすることにさせていただきます。まあ織斑にセシリアさんも…大胆なもんだなあ…。

「ところでさ？」

「はい？」

「石井君が怖いなって思うのは誰？」

いきなり布仏さんにそんなことを聞かれたから少し最初は返答に困ってしまっただがまあ一通りの答えが見つかりと俺は早速話し始めた。

「そうですね、たぶんデュノアかな？」

「シャルルさんのこと？」

「そう。鈴は怒ってるところは何度も見てるからもう慣れたし。セシリアさんも…まあ怒らせてもどうってことは無しさ、箒さんは怒らせると織斑の話では木刀を振り回すんだそうだけど、ラウラさんは見るからに強そうだからね…結論としては俺はデュノアが一番怖いかな？」

「どうして？」

布仏さんはまだ俺の言いたいことがよく分からないようだ。

「デュノアが本当に怒ってるところ見たこと無いだろ？」

「うん。石井君は？」

「ないよ。だから怖いんだよ。もうデュノア以外の人が怒ってるところは何度か見てるからどんなもんか分かるけど、デュノアが怒ってるところは見たことがないからね…」

「そうだね…でも…」

「でも？」

「そんなこと言って大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫。ここには布仏さんと俺の二人しかいないんだろ…ん？」

俺は布仏さんが返答しないところに何だか妙に不安を覚えた。

”これが俺を引き留めておく口実だとしたら…まずい！！”

俺は立ち上がってすぐに逃げたそうとした…だが…。

「アキノリは私が一番怖いんだね…それじゃあお手並みを拝見して貰おうかな？」

「私も協力するぞ」

「私もですわ…うふふふ…」

「アンタね、陰口をたたくときはもう少し考えないとね…」

「私も剣道の稽古をしてやろう！。お前はいつも精神からたたき直さないといけなさそうだな…」

やばい、やばい、やばいぞ。みんな怒っているようだ。なんだかセシリアさんはどこかが壊れたようになってるしデュノアも俺の事アキノリだなんて…。急いで逃げないと…。俺はそう思う前に既に体勝手にその行動を示した。

「はあ…はあ…はあ…」

「ムダだよ！…！」

後ろからデュノア達はISで追いかけてくる…こんな勝負になるはずがない…。

「てめえらするいぞ…！」

「ほう、まだそんな減らず口がたたけるのか…私の嫁以上だな」

「もう少し、痛い目に遭わせないと懲りてもらえないようですね…」

「そうだね。アンタ…！。覚悟しなさい…！」

「一夏よりも度胸だけはあるんだな。石井は」

こんな状況じゃ織斑に助けも求められない。まさに四面楚歌の状態…いや五面楚歌かな？。

「ぐはっ…！」

その時である。鈴が俺を脇道に突き飛ばした。俺が勝つだなんて、無理に決まっていた。

”もう…逃げられない”

「さてと…後は私とデュノアに任せといて」

「はっ!？」

「みんな、どうもありがとう。さてと、アキノリ…」

「はっ、はい…」

「私と鈴がたっぷりお仕置きしてあげるね…」

「いや…そんな必要は…うぐっ!！」

「あるわよね？」

鈴のパンチはこういふときは本当に効く。

「いや…だから…うげっ!！」

「あるの？」

「あります…」

俺はとうとう負けた。久しぶりの‘敗北’だ。

「それじゃあ部屋に連行しましょう!！」

「そうだね。ボク達が部屋で絞ればアキノリも懲りてくれるさ」

俺はその後部屋に連れて行かれてそれはそれはもう…痛い目に遭ったことは言つまでもない。救急箱の包帯が何個無くなったことか…。

35話 実習という名の…

今日は6月6日だ。俺の誕生日でもある。まあそれはさておき、今年はずいぶんと言ったこともあって学校があるのだ。

「今日は晴れだね章？」

「そうだな…」

「ここんところ、ずっと雨だったよね」

「ああ…。雨のせいであんまり野球が出来なかったなあ…」

一応そのおかげもあってパソコンで鉄道の情報が収集出来たからまあ悪いだけではなかったのだが、やはり野球が出来ないのも辛い。日課の素振りが出来ないことが一番残念だった。

「おはよう章?!」

「ああ…デュノア…」

「ボクの顔に何かついてる？」

「い、いや…そんなことはないけど…」

デュノアは例の‘お仕置き’以来、俺の事を章?と呼ぶようになった。そして俺はデュノアがおっかなく見えるようになったからそれ以来はずっとデュノアには逆らわないようにしている…。思い出したくもない…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

”ボコッ!!、ゴキッ!!”

「うぎゃっ!、ぐえっ!!」

” なんだか、必要以上に殴られてる気もするんですけど…なんて言えないし、況してや逃げる事なんて…もっと、イタッ!!!”

「そろそろ反省してくれたかな?」

「まだなんじゃない?」

「二人とも…申し訳ありませんでした…。どうかこの辺でご勘弁を…」

「そうだな、どうしよっかな?」

” こいつ等…悪魔だな…”

どうして俺が勝てないかって言うと、俺が抵抗しようすると二人はISで俺を押さえ込んでしまうのだ。そうすると反逆と受け取られて更に痛い目に遭う。つまり、俺にはただ罰を受ける以外に他はないのだ。

「また章? 変なこと思ったのかな?」

「えっ!?!。いや…そんなことは」

「まだそんなことを思えるだなんてね、さすがは私の嫁ね」

「いや、だからちよつと…」

「もう少しだけ付き合つて貰うことにしよう！..」

「ぎゃああああ！..」

.....

何てことがあつてそれ以来、俺の心の中にはデュノアの恐ろしさが深く刻み込まれた。まさに口は禍のもとつてところだ。だからといってデュノアに冷たい態度を取るとまた変な風に思われるかもしれないからいつも通り俺は振る舞わなくてはいけない。これって結構大変なもんなですよ。誰か分かっていただけませんか？。

「おはようシャルロット！！」

「おはよう鈴さん」

「このあいだはありがとうね！」

「いやいいんだよ。章？も十分反省してくれたんだしさ」

「もうその話は勘弁してくれ…」

正直デュノアがこんな風な‘女性’だったとは思ひもしなかった。まあ、最初は男性としてこの学校に入ってきたんだから尚更その感覚があるんだろうな。

そんなことはさておき俺達は3人で学校に向かった。ここでの自分の専用機はいろいろと変更された点があつて、李舜臣型を指導・戦闘用にする事になった。そして一方の白式は競技用にする事にしたのだ。李舜臣型は確かに性能は白式よりは上回っている感じがするのだがどうも細かいというか競技などのしよようには適さないようなのだ。つまりは作りが白式よりも若干、ほんの若干ではあるが、大雑把、ということだ。その反面戦闘時にはその辺りが功を奏して見事に格闘をすることが出来るのだ。その点白式は繊細さが素晴らしいもののやはり本当の意味での格闘ではどうしても李舜臣型に劣ってしまう。まあ今のところはみんなでの実習などでは李舜臣型を、クラス競技なんかでは白式を使うという感じである。

何でこんな事を説明したかという、今日も実習があるのだ。専用機持ちになつた俺は指導をしなくてはいけない。そこにいきなり白式を投入するというのは確かにいい考えかもしれないがいきなり性能がいい物よりも（まあこんな言い方は失礼だが）、性能が悪いものに慣れておけば、より性能のいいものを使ったときに余裕が持てる気がするのだ。そうそう、野球でもいきなり飛距離の出る金属バットを使うよりもそれより飛びにくい木製バットで練習する人と同じようなものである。俺もようやく織斑だとか鈴だとかに肩を並べることが出来たような気がする。

「今日は飛行訓練だ！。専用機を持っている石井、織斑、鈴、オルコット、ラウラ、シャルロットは各自3人前後を率いて上昇、降下、左右旋回、その他の競技に必要なと思われるものを練習させよ」

まあこういうのは悪くない。大体俺と一緒にやってくれるのは…

「私たちをよろしくね石井君！」

「おりむゝとは違って石井君のは面白いんだよね」

「今日は何をやってくれるの？」

と鷹月さん、布仏さん、そして谷本さんである。まあこの3人を大
体はいつも一緒に俺は指導しているわけだが…何でか知らないが一
番俺が教えているこの3人が今のところ専用機を持っていない人の
仲では優秀とのことだ。篤さんは勿論別格で、専用機を持てる身分
なのに持っていない’と言う立場にいる人だから3人とは比べもの
にならないほどの出来な訳だが…。

「そうだなゝとりあえず離陸して空^{うへ}に行ってから考えるか？」

「『賛成！』『』」

この3人さすがにいつも行動を共にしているだけあって、こういう
タイミングはまるで三つ子のようにそっくりだ。

”今日は…そうだなゝインメルマントーンでもやるか！’、’

このインメルマントーンというのは本来は戦闘機の曲芸飛行に用い
られるものの一つで、水平飛行から急上昇をして180度体の向き
をひっくり返す、つまり地表に背を向けた状態に持って行った後に
体を元の状態に戻すというものである。これ、うまくやらないと失
速してしまうのだが…。

「石井くゝん、早く」

と布仏さんにも急かされてしまったので…というわけではないが早

速練習を始めることにした…。

36話 曲芸飛行

さすがは長く教えているだけあってスムーズに上昇なり旋回なりを確実にこなす。

”これならインメルマンターンとスプリットSの両方が出来そうだぞ？”

俺はふとそんなことを思った。時間はまだまだたつぷりあるし先生も一つだけとは言ってなかったから…まあ大丈夫だろう。

「さてと…今日はインメルマンターンでもやってみるかな？」

「なあにそれ？」

「私たちにも出来るの？」

「見せてよ！！」

「落ち着け三人とも…今からやってみるからそこにいてくれ…」

そう言う俺は地上の方に降りていった。このインメルマンターンという技は第一次世界大戦の時にドイツのエースパイロットであったマックス・インメルマンが考案した方法で主に戦闘機の追尾などに使う技の一つである。出来て損は一切無い技だ。

俺は早速下の方に降りた。

「それじゃあ始めるから見えてな〜」

「「「はあゝい」「」」

”ふう…まさかここまで仲良くなれるようになったなんてな…鈴とこの李舜臣型のおかげだな…さてと、行くか！！”

俺はそう決心し、一気に速度を上げた。

「石井は何をしてるんだ？」

「千冬姉…痛てっ！！」

「織斑先生と呼べと言ってるだろ！」

「すみません…織斑先生」

「うん、それで？」

「ああ、石井のことだからまた曲芸飛行でも…」

「全く、あの馬鹿、ISをなんだと思ってるんだ？。でもまあ楽しそうに飛んでるじゃないか」

「俺も一時はどうなることかと思ってましたよ。あんなに女嫌いだったのに、今じゃそんなの跡形もないみたいですからね」

「ああ。ISにと鈴には、縁があつたみたいだな」

織斑と織斑先生はそんな会話をしていた。この姿は他の人たちにも当然のことながら見えている。相当曲芸飛行というのは美しく見えるらしい。きっとこの李舜臣型ISのおかげであろう。

” 出会うべくしてであつた…まさに‘運命’、ってやつですね。忠武公李舜臣氏（チュウナムゴン イ・スンシン シ）…”

そんなことを心の中で呟きながらみんなの前で曲芸飛行のインメルマントーンを見せてみた。

結果は大成功であつた。上に戻ると早速三人から祝福の声が上がつた。

「石井君すごい。自分の専用機をここまで乗りこなしてるなんて」

「さすがだよ。やっぱり代表候補生に惚れられただけはあるね」

「違うよ癒子！、石井君は‘嫁’、なんだからプロポーズされたんだよ」

「ああ、そっか」

「ちよいちよい…そんなこと言つてないで…今のは出来そっか？」

「うん。石井君やおりむゝほどは無いけど」

「私たちでもきつと…」

「出来るはずだわ」

” この三人。タイミング抜群…オリンピック金メダル級だな…”

そんなことを俺は思つた。読者の皆様もきつとそう思ってくれるだ

ろっ…。まあそれはさておき早速その技を俺は三人に教えることにした。

「布仏さん！。もう少し体を伸ばして」

「うん！」

「そうそう…谷本さんと鷹月さんはそのままの姿勢を維持したまま後5秒それ続けて！！」

「はい！！」

「よし！、全員体を180度水平状態のまま左右どっちでもいいから回転させて…」

「はい…」

三人とも見事に成功させたようであった。だが…

「みんな凄いな～！。タイミングばっちりだよ…って、そんな顔してどうしたの？」

「石井君これ何回練習したの」

「そうだね、まあ5、6回ってところかな？」

「それだけで…どうして酔わないの？」

「…！！、もしかして…！」

「私たち三人とも酔っちゃったよ」

どうやら曲芸飛行のせいで酔ってしまったそうだ。まあ今まで練習したのだ宙返りのループと水平飛行中に体を360度横に回転させるロールだけしかやっていないから仕方がないのかもしれない…。

「大丈夫三人とも？。深呼吸して！」

そう言いみんなは俺の言うとおりに従ってしばらく行動した。乗り物酔いというのは一般的には三半規管の誤作動が原因なんだそうである。だから三半規管を落ち着かせるような行動を取りさえすればいいのだ。まあ5分ほどその場で落ち着いていたら収まったようである。

「もう大丈夫そうだね…」

「うん、石井君はさすがだね」

「えっ？」

「こうやって私たちをここまで飛行出来るようにしてくれたんだもの」

「本音の言うとおりでだよ。ありがとう石井君！」

「感謝してるんだから…」

俺は女性に誉められて純粹に嬉しかった。人を教えると言うことは同時に自分も何かを教わるわけだが…その答えが今回はお互いの喜びだったのだろう。そんな幸福には長くは浸らせてはくれないよう

だ。

「石井！、お前はその3人にアクロバット飛行を教えているのか？」

「あつ、織斑先生！！。そんなことは…」

「まあ丁度いい。新聞部がお前の姿を撮りたいんだそうだ」

「えっ…？」

すると脇から鈴がやってきた。

「アンタのアクロバット飛行を新聞に載せたいんだってさ」

「学内のか？」

「そっ！。協力してあげなさいよ」

「うーん、まあいいか。せっかくだし…」

「決まったようだな…あゝ石井聞いてるか？」

「ええ、まだ何か？」

「装備を出した状態で飛んで欲しいとのことだ」

「はあ…」

俺は急いで装備の直刀を出した。

「それでいい…そうじゃあお前のやりたいようにやってくれ」

織斑先生にはそう言われたがどうすればいいんだろう…？。

「ほらアンタ！。さっさと飛びなさい！！」

「ん？。今考えてるんだよ」

「つべこべ言わない！！」

俺はまるで鈴に追い出されるかのようにその場から動き出した。

”写真を撮るのか、まあいつも通り飛ぶか！”

俺はその後曲芸技を7個くらいした。シャッターチャンスも幸いなことにたくさんあったようで地上に下りると拍手喝采で俺は迎えられて新聞部からはお礼が言われた。

「よかったね章？」

「まあね…」

「そつえば章？、あとで部屋に来てくれない？」

「部屋って寮のことか？」

「うん！」

「俺とお前は同じ部屋だろ？。何を改まって…」

「いいから!!」

「わかったよ…」

まあ何をするんだかなあ？。新聞部の話だと今夜には完成することであつた…。新聞部の話だと今夜には完成するとの

37話 Surprise

格好良く撮ってくれよとは言っておいたのだが…

”おお、頼んでおいたとおりだな…”

見事に絶妙な写真が撮れていた。さすがは新聞部のだけのことはある。俺も一眼レフは持っているが鉄道と野球の写真が専門で基本的に人を撮ったのは中学卒業の時と家族旅行の時以外はない。意外かもしれないがまだ鈴すらカメラの被写体に入れたことはないのである。鉄道の写真は今までにたくさん撮ってきた。まあ自分のパソコンのデスクトップ画面も基本的には自分の撮った写真を使っているから、いかに鉄道が好き…いや鉄道を純粹に愛しているかが分かるであろう。最近、鉄道好きの俺達はドンドン肩身が狭くなって言っているような気がする。勿論、前々から鉄道の写真を駅で撮ったりしているときはそれなり敬遠されている雰囲気があったような気がするからまだいいにしても、同胞…つまり特定の行きすぎた鉄道愛好家達のせいで俺みたいなルールを守って撮影している人たちまで嫌がられてしまう。まさに、自分で自分の首を絞めている、わけだ。みんなには本当にルールを守って楽しく鉄道に乗るなり、鉄道を撮るなりして欲しいものだ。野球だって同じだ。ルールがあるからこそ楽しいのである。

おっと、ながながと話して、しかも話が脱線してしまった。とまあそんなことを思いながら新聞を見ていると…何だか妙なことに気がついた。

”これ…3ページくらいあるけど、どれも俺の記事ばかりだなあ…。ん?!、出身県や生年月日、更には好きな食べ物だとかまで書

いてあるぞ!!。これは…。”

明らかな個人情報漏洩である。とは言っても生年月日ぐらいなら別に俺だつて気にしないし、東京都出身というのも決して恥ずかしいものではない。まあ好きな食べ物に‘寿司’と書いてあったのが気になった。

”確かに合ってるけど…誰がこんなことを?”

少なくとも俺の好きな食べ物を知る人はこの学校には既にたくさんいるはずだ。だが一番最初は確か…そうそう!、確か鈴とまだ仲がよくなかったときだ…

……………

「アキノリって言うんだ」

「いちいち名前を言わなくても差し出したやつを見れば分かるだろ?」

「うるさい!!。こういうのはちゃんと口で伝えないと伝わらない問題なの!!」

「はいはい、そうですか…」

「それじゃあ次ね!」

「まだなにかあるのかよ…」

「好きな食べ物?」

「それを聞いてどうするんだ？」

「つくってあげようかなって……」

「それじゃあ聞くけど、お前魚は下ろせるのか？」

「下ろす？」

「まあ、ちゃんと肝を外してスーパーで売ってるような刺身の状態に持って行けるかってことかな」

「ああ！！、それならできるよ！」

「ならいいや。俺の好きな食べ物……」

「うんうん」

”こいつ、俺がこんなに嫌がつてる顔してるのになんだか興味津々な顔してるなあ。”

「寿司だな」

「お寿司のこと？」

「ああ……」

「ふん」

「何かおかしいのか？」

「いや…そんなことはないけど…」

” 章？のためにつくつてあげたいけどハードル高いな…”

「そうか、そろそろ俺は寝るぞ」

「うん、おやすみ！」

.....

多分この時が最初だろう。別に好きな食べ物をばらされたところで俺は…そんなには気にしないのだが…。それよりも鈴がこの情報をばらしたことになるのだろうか？。まあ今となつては俺と鈴は…まあ仲良くなつたわけだし…いいか！。

そんなこんなで俺は部屋に戻った。そういえばこの新聞、配布番号2となつていて俺の前に誰かが第1号を持って行ってしまったようだ。しかもこの新聞よく読んでみると完結してないというかももう少し他の記事がありそうな感じがするのだ。一体どうしてなのだろうか？。

”この新聞わけわかんねえなあ…”って、おっとっと！。部屋の前を逸走するところだった危ない危ない…”

俺は部屋の戸を開けた。

「ただいま…って、真っ暗なのか…あれ？。確か鈴のやつ先に帰つてるとか言つてたのにな…」

俺は部屋の灯りのスイッチをつけた。すると…

「章?!、誕生日おめでとう!!」

と言いながら鈴が飛びついてきた。

「うわっ!!。お、おいっ!!」

俺の声なんか聞こえないと言ったような素振りであ俺に飛びついてくる。見ると部屋の真ん中には中くらいの大きさの…そうだな、5、6人が介して食事が出来るくらいのテーブルとその上にケーキと誰が握ったかは分からないが綺麗に作られた寿司が置いてあった。

「これは…?」

「ケーキとお寿司だよ」

「そんなの見れば分かるさ。まあ誕生日だからって言うのはあるだろうけど、俺の好きな寿司まで…誰が?」

「それは鈴が自分で作ったんだよ!」

「えっ…デユノア今なんて?」

「だから私が作ったの!」

「お前が!?」

「そうよ。まあ、ちょっとだけ、ちょっとだけ一夏にも手伝って貰ったんだけどね」

確かに織斑は料理が得意だから…とは言えども、まさかこんなにたくさんさんの寿司とケーキを鈴が？。実感が全くわからない。更に付け加えるととても美味しそうなのだ。

「最初は大変そうだったんだけどな。魚をおろすのにヒイヒイしてたから」

「一夏…それは」

「やっぱりな」

「えっ？」

「お前が魚を下ろせないのは何となく分かっていたさ。でも…」

「でも？」

「ありがとくな！、鈴。俺、こういうふうになにに自分の誕生日祝って貰ったの家族以外なら初めてなんだ！」

俺がそう言つと鈴もようやく笑顔を取り戻してくれた。早速食べてみた

「うん！、ネタ、シャリ、ワサビの量…完璧じゃないか！」

「よかった！。章？にそう言ってもらえると嬉しいわ！！」

もちろんいつものメンバーも一緒に祝ってくれている。するといきなり

「こんばんわー!!。新聞部ですー!!。」

と言いながら新聞部の人たちが入ってきた。見ると驚いているのは俺だけで他の人たちはなんだか想定範囲内に収まっているようである。

「あれ?」

「私の嫁がお前のためにサプライズをしてやったんだ」

「新聞部を呼んでこの姿を撮って貰えば…きっと他の人たちも石井のことを祝ってくれると言ってな」

「篠ノ之さんの言うとおりですね。一夏さんも石井さんの誕生日がとっても喜ばしいんですの」

「だからボク達、一夏とボクと鈴で協力して料理をつくって、ラウラと篝、それからセシリアでこの秘密の作業をしてくれてんだ」

俺は改めてこの6人のチームプレーに感動した。‘見事’の一言に尽きる。

「ありがとう…みんな。俺…なんだかとっても嬉しいよ」

「章?に喜んで貰えると私も作った甲斐があるわ!!」

「そこでなんです!。せっかくですから、鈴さん!。愛する‘嫁’に…」

「うん!!」

「えっ!？」

そう言う俺が驚くまもなく鈴は俺の頬にキスをした。その姿は新聞部のカメラに完全に抑えられて氏まった。

「お前…こんなことまで…」

「章?、私はアンタの‘夫’なのよ」

「鈴…」

「これからもよろしくね」

そう鈴が言つと俺も

「こっちこそ…だよ」

と言いながら鈴を力一杯抱きしめた。その晩は一緒に仲良く寝た。と言つか鈴と一緒に寝たいと言ったから寝たんだけど鈴のやつ何を思ったのかは知らないけど俺の事を抱き枕みたいにしてスヤスヤと眠っていた。

翌日の新聞には俺の記事が一面で載っていた。

” 日韓の英雄も ‘突然’ と ‘夫’ には滅法弱い!! ”

と言う見出しで…。俺はその新聞を貰ったとき、恥ずかしくて何も言え出せなくなってしまうた。だが俺は思っている。

”鈴…ありがとう…”

俺はこの時初めて完全に女嫌いを克服することが出来たような気がした…。

そういえば今日ようやく試験の順位が発表されるそうだ。かれこれ1週間近くが経過してからようやく順位を出すだなんて…織斑先生の話だとISの実習なんかの評定も順位に含まれるから時間がかかるんだそうだ。

「ねえねえ章?…」

「zzz zzz zzz」

俺は珍しく授業中に寝た。と言うのも昨日は夜遅くまでどんちゃん騒ぎをして新聞を貰ったときに恥ずかしくなったのを境に一気に疲れがどつと湧いてきたのだ。まあ明日はまた臨時の休校日だから精神的に楽なことは楽なのだが…。

「ねえ章?!」

「はっ、はい!!」

俺は席を立ち上がった。

「ん?...なんだ鈴が起きたのか…」

「起こしたのか、じゃないわよ!!。アンタ授業中に寝るってどういうことなの?。『夫』の私の顔に泥を塗るつもり?」

「まあ眠いのは眠いつてことだ...ぐえっ!!」

さっそく鈴のパンチが俺の腹に直撃した。

「イタタタタ…」

「どう、目が覚めた？」

満面の笑みで聞いてくる鈴の姿、まるで

「悪魔だ…ぎゃっ!!」

「次それ言ったら…クロス…」

もう目が笑っていない…と言うか壊れているようだ。これ以上言う
と何をされるか分からない。おとなしく従うことにしよう。

「わかったから…目も覚めたから…もう勘弁を」

「もう、分かればいいのよ分かれば」

「あのー、石井君、凰さん？」

「「はい？」」

「今が授業中なのは分かってるわよね？」

山田先生のISの座学の授業の時間だったから良かったものの織斑
先生の授業だったりしたら…俺は鈴にも先生にも殺されていたこ
ろであろう。

「すみませんでした！」

「じめんなさい!！」

「いいのよ…今度から気をつけてくださいね」

” 山田先生、本当にありがとう!! ”

俺は心の中でそう叫びながらノートを取り出して問題を書き写しては解いていった。まあ鈴も俺のスピードには驚愕していたようであった。

” これなら…こうだな…”

” 凄い!!。章? って天才なのかな? ”

まあ俺もこう見えて隠れたところでちゃんとやることはやっている、勉強も野球も趣味の鉄道もそのほかの事も…。鈴にこんなこと言ったら怒られちゃうかもしれない?。

とまあさておき、午前中の授業も終わり俺は織斑、鈴、セシリアさん、ラウラさん、デュノア、箒さんのいつものメンバーと一緒に食堂に向かいがてら順位を観に行くことにした。

「章?は何位だろうね?」

「さあね、まあ鈴よりは上なんじゃない?」

「ううう…」

「まあまあ二人とも順位を観に行くんだからそんなに怒らないで…」

「シャルルの言うとおりだぞ。石井、鈴」

「おっと、そうだったな」

「ごめんね一夏、みんな」

「かなり出来た嫁だな。我ながらあっぱれだ！」

「ラウラさんはどこでそんな言葉を覚えてくるのかしらね？。まあ首位は私が貰いましてよ」

「それはどうかなく。ボクは章？かもしれないな」

「んまあ！！。どうしてですか？」

「だって石井、余裕そうじゃない？」

「多分最下位なんじゃないかな？俺は…」

「大丈夫だよ一夏。気にしないでいこう」

「そうだよ…。お前だってあんなに勉強していたんだから大丈夫だと私も思うぞ」

「篝、シャルル、ありがとうな…」

ともあれ早速順位を観に行った。

すると見事にシャルルの予想は当たっていた。

「なっ!？」

「ええ!？」

「ボクの予想が当たったとは言ってもまさか…」

今回の試験は各教科100点満点の計600点満点のだが俺はなんと596点で2位のセシリアさんの587点に圧倒的な差をつけて大勝したのであった。

「おお…まさか1位だなんてねえ…」

「章?さん。また私と今度の試験で勝負していただけないかしら?。イギリスの代表候補生の名にかけて負けたくありませんの」

「いいよ、かかって来なよ」

「それにしても二人とも凄いなあ…俺なんか170人中…えっ!?!、26位?!」

「凄いじゃんか織斑!」

「よくやったな一夏!」

「私の英語の指導のおかげですわ」

「みんなありがとう!。セシリア、石井!」

「俺もか?」

「お前だって数学だとかいろいろ教えてくれたじゃないか！」

「そうだったな…次は15位圏内を目指してみるか？」

「ああ…！」

「よし…ところで鈴は？」

鈴は目が潤んでいた。

「鈴、お前もしかして…」

「章？」

「ん？」

「私…私…9位だよ…！。章？のおかげで…9位だよ…！。」

「うわわっ…！」

そう言いながら鈴は泣きながら俺に飛びついてきた。まああんなに苦手意識のあつた数学がよかったのだらうな…。

「ボクは15位」

「私は6位だ」

「私は4位…まあ嫁よりは上だ。面目は保てたな。それにしても石井の点数は凄いな…。少なくとも満点の教科が…」

「2個以上あるはずですわ!!」

そんなことを話していると織斑先生が俺達のところにやってきた。

「石井はISの試験が96点だったんだ」

「えっ!?!...と言うことは章?って、他の教科は」

「ああ。国語、数学、化学、物理、英語と全教科満点だ!!」

俺は織斑先生言われて更に驚いた。

「本当ですか?」

「嘘についてどうするんだ?」

「まあそれもそうですね...」

すると俺に飛びかかっていた鈴が

「章?、次は全教科満点をやっつてよ」

と小声で囁いた。

「ああ...そのつもりで頑張ってみるよ!」

「うん!。楽しみにしてるよ」

俺と鈴がそんな会話をしていると新聞部がやってきた。さてさて、

これからまた忙しくなりそうだし…。

39話 Declare

まあテストの順位が学年でトップだったこともあり、瞬く間に俺の評判は1年を超えて全学年の間を駆け抜けた。今は新聞部のインタビューを受けているのであるが…。

「今回の学年成績がトップと言うことですが…」

「そうですね、試験の問題と自分が試験前に解いてきた問題がうまくかみ合ったって言うかなんていうか」

「章?!、それじゃあわかりにくいわ!」

「お前は茶々を入れるなよ…」

「いいじゃないの!、私も重要な発表があるんだから」

「何?!」

「まあとにかく先にインタビューを終わらせちゃってよ」

「そ、そうだったな。ごめんなさい新聞部さん」

「い、いえいえ!!。つまり今回の勝因は要約すると、試験対策が功を奏したと」

「まあそういうことになりますね…」

「なるほど、それでは次の…」

とまあこんな調子で15分くらいその場でインタビューを受けた。
この学校の新聞部はかなり気合いが入っているようだ。これはこれで凄いことかもしれないぞ。昨日貰った新聞もちゃんとした新聞紙をどこから仕入れてきたのか分からないが使っているし、見ると週間のようだが俺の特集やら織斑の特集やらを組んだりしていて今週はずっと号外が毎日のように出る有様である。因みに俺の昨日の臨時の新聞は週間号外2号目、そして今朝のが3号目なわけだ。これで今回もう一度出されたら一週間で俺の号外が3つも出来ることになる…まあいいのかな？。

するとそれを打ち破ってくれたのは…あろうことが鈴であった。

「次の試験は全教科満点を？」

「ええせっかくここまで出来たんですから目指してみようかと思えます。まあ俺も‘夫’にせがまれたら従うしかありませんからね…なんせ鈴の‘嫁’ですから」

「もう、こいつ呼ばわりしないで!!」

「まあまあ…この場合は仕方ないだろ？」

「うう…まあそうだけど…」

何だかさっきから鈴の様子がおかしい。どことなくそわそわしているというか俺とこう話しているときなのにもかかわらず相当緊張しているようである。何をそんなにドキドキしているのだろうか…別に部屋でキスしてるわけでもないのに…。

「そつえば鳳さんも何か発表したいと言うことがありましたか」

「う、うん…」

「ここで発表なされますか？。記事を載せることが可能ですよ」

すると鈴は黙り込んでしまった。緊張しているようだ。すると後ろから

「鈴、大丈夫。昨日のボク達との練習を思い出して」

とデュノアが静かに囁いた。

「練習？」

「あつ…まあ、気にしないでいてよ章？。今に分かるから」

「そ、そうか…」

「それじゃあ…ここで発表させて貰います…」

ようやく鈴がそう言ったかと思うと…これまた珍しく、鈴が嫌いなはずの敬語を使っている。さすがに鈴でもここがどういう場くらいかは分かっているようだ。ただ、おどおどしているというか顔を赤くして恥ずかしがっている鈴の姿もどこことなく可愛い。せっかくならカラーでの記事をお願いしたいものだ。

「あの…えつと、その…」

俺は静かに見守りながら鈴が言い終わるのを待つ。こういうときは何も口出しをしないのが流儀であるのだ。

「私は…今日から…その、‘嫁’になります」

「えっ!？」

新聞部の人も俺も何を鈴が言いたいのか分からない。

「どういうことだ？」

「だから!!、私は章?の嫁になるの!!」

俺はその言葉を聞いた瞬間、何かが心の中で走った気がした。俺にとっては今までのやってきた人生の中で一番の…最大級の事件である。

「ということとは？」

「その、私を章?には…‘夫’としてではなくて、一人の‘妻’として見て欲しいんです…」

「お前!!。それは一体どういう意味なんだよ!!」

「章?、私、章?のためだったらも何でもする覚悟だってとうの昔からあつたんだよ」

「鈴…」

「私、アンタの事が大好きなの!!!。お嫁さんにだってなりたいのよ!!、勿論今はそんなことは今すぐには出来ないけど、いつかきつとアンタの…」

そういうと鈴は黙ってしまった。もういつ泣いてもおかしくない、目の下も真っ赤になっている。

「お嫁さんになりたいのか？」

すると鈴は静かに頷いた。

「ははは！！」

「なっ、何がおかしいのよ！」

「鈴からそんなこと言われるだ何て思ってもなかったよ…でも嬉しいな、俺もずっと同じ事を思ってたんだ」

「えっ！？」

「俺もずっと鈴に助けて貰ってからは自分が守っていかないとなってるってたんだよ。今までも、そしてこれからずっとね…そのためには鈴には俺の、お嫁さん、になって欲しかった」

「章？…」

「俺からもお願いするよ…僕と…いつか、結婚してくれませんか？」

「も、勿論よ…」

「よかった。ありがとうな、鈴」

俺も重大な決断を下した。とは言っても事実であることには変わり

はない。俺も鈴も結局のところ、‘相思相愛’であつたと言つことだ。なんだかとても…いや、口では表現出来ないほど嬉しい。これは遊びなんかではない、お互いに真剣なのだ。確かに鈴の言っていたとおり、今はお互いに結婚をするのは無理だ。だけど、いつの日かそれを叶えればいい。何も焦る必要はない。ゆっくりゆっくりとお互いにその時がくるのを待っていればいいのだ。

「うつ…うつ…うつ」

鈴はもう我慢の限界のようだった。俺の胸にみんなの前で大胆にも飛びついてきて泣き始めた。きつと、嬉しいんだろう…俺も泣きそうだったけど…泣けなかった。みんなの前というのもあるし、将来夫になるであろう自分がそんな振る舞いをみんなに見せるわけにはいかない。新聞部の人たちもその周りにいた人たちも笑顔で俺達のことを見守っている。みんな知っているようだ

” ころいうときに言葉はいらない…”

と言つことを…。

「うつ、うつ…ふう」

「もう、泣き止んだか？」

「うん…私ね章？がさっき言ってくれたこと…とっても嬉しかったよ」

「そうか…俺もお前の期待に応えられるように頑張るよ」

「うん、これからもよろしくね」

「ああ、末永くな…」

「でも章？、私なんだか恥ずかしいよ」

俺は辺りを見渡した。確かに俺達を新聞部を取り囲むように見物人がわんさかいた。

「お前達、学校内でそんなことを宣言してもいいと思っているのか？」

「あつ…」

「織斑先生…」

「全く、自分たちは代表候補生であるという自覚があるのか？」

「うう…」

「すみません、織斑先生」

「でもまあいい！！。石井、鈴」

「「はい」」

「これからお互いに頑張るんだぞ！！」

先生も笑みを浮かべながら俺達のことを歓迎してくれていた。

「「はい！！！！」」

そう同時に俺達は答えると再び鈴は俺の胸元に飛び込んできた。

”ずっと、ずっと、これからも一緒だよ…章？”

”ああ、分かっているさ…”

俺と鈴はアイコンタクトでそれを確かめ合った。

そんなこともあつてかその日の夜に配布された新聞はまたまた俺の号外であつた。だが少し変わっていたようだ。俺の5教科満点の記事は3面を飾っていた。それでは1面と2面はどうだったかつて？

”英雄よ！！、アジアの架け橋になれ！！”

”世界初の操縦者同士のプロポーズ”

1面と2面の見出しを見ただけで俺は恥ずかしくなってしまった。

「章？も…やっぱり恥ずかしいの？」

「こんな風に書かれたら誰だってそうだろう？」

「私は別にいいわ」

「どうして…」

「だって、章？のことが…大好きなんだもん！」

そう言うと鈴は俺の口を塞いだ。勿論自分の唇で…。それは今まで

で最長のものであった気がした。

「だからこれからもよろしくね」

「こっちこそだよ」

俺と鈴はお互いの意思を確認し合つと、俺は鈴をそつと抱きしめた…。

40話 深夜

その夜、俺は目が覚めた。どうやら上手く寝付けないようだ。なななんと！、鈴が俺のベッドで寝ていたのだ。久しぶりのことだったし何だか俺にしがみつくように眠っていたから余計に驚いた。

「zzz ううん… zzz zzz」

”おつと…まあひとまずトイレに行ってきたいけど…鈴がこの様子やなあ”

さすがにこの状態では俺もどう起きればいいのか困ってしまう。とは言ってもトイレに行きたいのはどうすることも出来ない。

”仕方がない、そつと起きるか…”

俺は鈴に気づかれないように抜け出そうとした。すると…

「ううん…あれ？」

鈴も起きてしまったらしい。俺は音を立てずに起きたつもりだったのに、一体どうしてだろうか？。

「鈴…」

「章？、どこ行くの…ふわあ…まだ、えっと1時だよ？」

「トイレだよ、トイレ」

そういえば大丈夫だったようだ。俺は急いでトイレに向かった。この寮は何でか知らないが自分たちの部屋にトイレがないのだ。何とも言えない構造をしている。

”やれやれ、一苦労だぜ全く…”

俺はトイレから戻ると再び歯を磨いて、ベッドに戻った。暗くてよく分からないが…

「…！！！！。鈴！！」

「うん？。なあに？」

「なあに、じゃねーよ！。お前、その服はどうしたんだよ？」

見ると鈴は下着が透けるくらいの薄着姿になっていたのだ。これでは俺も目のやり場に困るし…まあ、そのなんだ…いろいろあるわけだ。少なくとも男友達達となら別に俺もズボンをはかないでいたりすることは出来なくもないが、これではいろんな意味で誰かに見られたら誤解を生んでしまう。

「寒い…」

「質問に沿ってないぞ」

なんだか鈴の顔をが赤くなっていく。

「どうしたんだ？。鈴？」

そういえば俺がトイレに行ってる間に鈴も歯を磨いたようである。

何だか齒磨き粉の匂いがするのだ。まあ齒を磨くと言うこと自体はいいことだから俺も気にしない。

「もう…分かってくれないの？」

「おつ、おい！…！」

何とも鈴は大胆なことだが、鈴は俺に密着してきた。

「本当は章？から言って欲しかったんだよ」

「何を？」

「寒いんだつたら俺が暖めてあげるって…」

どうやら鈴は俺に抱きしめて欲しかったようなのだ。

「仕方がないなあ…今夜だけだぞ？。風邪引いても知らないからな？」

「大丈夫。ちゃんとそう言ってるだけで章？は私の面倒をちゃんと見てくれるって信じてるもん」

「あのなあ…」

「まあいいじゃない？。ふわあ…私も眠くなつて来ちゃった、ねえ章？。寝ましよう？」

「そつだな…それじゃあ俺が今日はお前を暖めていてやるよ」

「ありがとう、お礼に…」

鈴はいつも通りと言わんばかりに、熱い熱いキスを俺にしてきた。勿論、舌を入れてだ。

「ありがとう…章？」

「ぷはぁ…お前なぁ」

「zzzzzzzzzzzz」

「おっ、おい!!」

もう手遅れだった。鈴は再び夢の中のような。

” やれやれ…まあいいか。今日の朝練は中止だな…”

気がつく和外から雨の音が聞こえていた。どうやら強く降っているらしい。

” 寒い思いをさせないようにしないと…”

俺は自分にそう言い聞かせると鈴を抱きしめたまま再び眠りに落ちた…。

41話
Rain

朝になつても鈴は結局のところ体勢を変えずに俺に抱きつきながらスヤスヤと眠っている。俺はまだ起こさせてもらえないわけだ。ただ今は朝の５時：４５分過ぎと言ったところだろうか？。平日の起床時間は６時だからもうすぐ起こしてもらえるし：まあいいかと思つたわけだ。

$$\begin{array}{ccccccc} & & \lceil & & & & \\ & Z & & Z & & Z & \\ & Z & & Z & & Z & \\ & Z & & Z & & Z & \\ & & & & & & \\ & Z & & Z & & Z & \\ & Z & & Z & & Z & \\ & Z & & Z & & Z & \\ & & & & & & \rfloor \end{array}$$

こうやって鈴の寝顔を見てるといつも変わらないなと言う印象を覚える。人の寝顔って言うのはいつもの起きてる顔をどことなく違っているような気がするのだ。鈴の場合は…まあ赤ん坊の用というか何も不安がなさそう、つまりは平和そうである。花畑の中でも走っているようだ。俺の寝顔は…寝てるときの顔なんて分らないか。

$$\begin{array}{ccccccc} & \neg & & & & & \\ Z & & Z & & & & \\ Z & & & & & & \\ Z & & & & & & \\ & Z & & & & & \\ & Z & & & & & \\ & Z & & & & & \\ & & Z & & & & \\ & & Z & & & & \\ & & Z & & & & \end{array}$$

それにしても可愛い寝顔だ…抱きしめたくなってしまう。が、それをやっていると、ころを他の人に見られたら、そもそもこの状態自体あまりよろしくないのに、きつと部屋を強制的に分離させられてしまっただろう。そんなのは絶対に嫌だ。昨日約束したんだから、俺は鈴の‘夫’で鈴は俺の‘嫁’になるんだって…。

Z
Z
Z

Z
Z
:

う
う
う
:

どうやら鈴木目が覚めるような気がする。さすがに毎朝俺とは幾分ずれた時間に起きてるから生活習慣的に起きる時間も体にインプットされているのだろう。俺だって寝坊する事なんてあんまり無い。

えっ、今日はって？…今日は、今日は特別だから、こうしていたいって俺が思ったんだから気にしない。

「ううん…章？、おはよう」

「よお、随分楽しそうな寝顔だったぞ」

「！！、章？いつ頃から起きてたの？」

「15分くらい前かな？。お前を起こすのもあれだったし、ずっとこの体勢のままのんびりしてたんだよ。それに…」

「それに？」

「鈴を暖めなくちゃいけないし、俺も鈴が暖かったから…」

そついうと一気に鈴の顔が赤くなった。朝一からこんな風にされれば、多分寒さもどこかへ吹き飛ぶだろう。だが、これでまだ終わらせない。

「そついえばさ…」

「ん…」

「鈴…」

そついうと俺は鈴の胸に耳を当てた。

「ちょっと！！、何してんのよ」

「いや、ドキドキしてんのかなって…?」

「もう、当たり前でしょ!!!」

「そうだったか、ごめんごめん」

「まあ、章?じゃなかったら殺してるわね」

「まあまあ、朝からそんな物騒な単語は使つなよ」

「それもそうね」

俺と鈴はふと外を見た。昨夜から降っている雨はまだやんでいない、寧ろ酷くなっている。6月で梅雨の季節だから仕方がないと言ったら仕方がない。まあ少なくとも今日中にやみそうな気配はない。後で気象庁のホームページで雨雲の状況でも見てみることにしよう。

「雨だね、章?」

「そうだな…」

「…!!、くしゅん!!」

その時であった。突然鈴はくしゃみをした。

「花粉症か?」

「雨降ってるのに花粉がくしゃみが出るほど飛ぶわけ無いでしょ?」

「はははは…」

「もう…それにしても、寒くなっちゃったみたい」

「そうか…それなら」

「えっ?!」

俺は鈴を強く抱きしめた。背中の方が確かに冷たくなっていることが分かった。これは俺のミスだ。

「どうだ?。少しは暖かくなったか?」

「うん、暖かいつて言うかドキドキして…火照ってるって感じ」

「それじゃあとっておきのを…」

「…?!」

俺は鈴に今日の夜してくれたように今度は俺の方から率先してやり返した。それをもって長い時間…。

「ん…」

鈴は途中で声を上げる。多分息が続かないんだろう…。

「ぶはぁ…」

「いつも鈴にはされてばかりだからたまにはこうしてやり返さないとね…」

「ううううう」

「鈴？」

「うあああ。章？にされたんだったら私も！！」

「おっ、おい！！。これでお相子……」

「うるさーい！！！！」

「うわわっ！！！！」

今度は鈴がお返しにしてくれて。それも俺よりも長い時間のよ
うな気がする。俺が息が続かなくて離そうとしても思いつき頭を
抑えられているから口を外すことが出来ない。なにも考えることが
出来ない。多分、酸欠気味のようだ。なんだかこのままずっとこう
していたい気分である。

「はあ……」

「はあはあ……もうまた鈴がしちゃったからまた今度俺がしなくちゃ
いけないじゃないか！」

「嫌なの？」

鈴は笑顔でそう俺に聞き返してくる。

「そんなわけ無いだろ？」

「よかった……」

俺と鈴は改めて互いに互いの顔を見つめ合った。

「いけない!!。章?、もう6時半だよ!」

「何!？」

「こんなことしてて遅刻したなんて言ったら千冬姉なんて言うかわかんないよ」

言い忘れていたが鈴も織斑との幼なじみで織斑先生のことを千冬姉と呼ぶ人なのだ。

「そうだな急いで着替えて食堂に行かないと」

「うん!!」

俺と鈴は急いで顔を洗い歯を磨くと制服に着替えて食堂に向かった。これからまた忙しい一日が始まるような気がした…。

42話 実習？

気象庁のホームページによれば日本列島には雨雲の団体一行がじやんじやんこれから通りかかるそうだ。毎年、水不足になって困っているようなところの方々にとってはありがたいかもしれないがこっちはいい迷惑なのである。外はザアザア降りだ。

「雨か」

「どうしたんだ石井？」

「いやな…俺の誕生日があんなに晴れてたのになって…」

「そういやお前の誕生日は、快晴だったな。お前晴れ男なんじゃないか？」

「ああ…そうかもしれないな」

思えば16歳に今年でなつたわけだが、いままで一度も自分の誕生日に雨が降った覚えはない。確かに俺が出かけるときは必ず雨はなかった。だが…この間中学のやつと卒業記念に北海道を縦断したときは吹雪の日があったと思う。まあ俺のこの‘晴れ男’と言う能力もさすがにいつもは発動しないようだ。

「今日は何の実習やるんだろうね？」

「そうだな…この雨じゃあ何もすることなんて無いんじゃないか？」

「ボク、トレーニングルームがあるの知ってるよ。」

「そうなのでしたらそこで何かしらのことをするんじゃないかもしれませんか？」

「だろうな、一夏達とも一緒に行うのか？」

「嫁とか…これはいい練習相手が出来そうだ」

「ラウラ、第！！。目が怖いぞ、目が！！」

「ボクと…」

「私を忘れて貰っては困りますわ一夏さん」

「うわっ！！。お前等どうしたんだよ！！」

どうやら織斑は本当に気がついていないらしい。どんなに鈍感な人でも普通なら気がつくはずだと思うのだが…。

「鈴、本当に織斑は昔からあんな感じなのか？」

「そうだよ…私たちの気持ちに全然気づいてくれなかったよ」

「そうか…」

「席に着け、これから実習の授業を行う！」

俺達の会話を打ち破るかのように織斑先生は山田先生と一緒に教室に入ってきた。ジャージ姿の織斑先生の姿からして本当に実習は行いたい。とは言っても外は雨…ISの競技でも基本的には天候

に左右されることが多く雨の日は原則行わない。勿論、この間のよ
うな国の安全に関わるようなことに関しての出動なら例外だが…。

「皆さんも分かっているように外は雨ですから、グラウンドでの実習
は行いません」

「というわけで、全員トレーニングルームに移動だ！」

俺達は一応返答をすると早速トレーニングルームに向かった。中学
には無かったがどんな者があってどんなことをするかくらいは分か
る。そういえば、この学校にはたくさんの体育施設があることを俺
は知っていた。柔道場、剣道場…まあこの辺は普通なのだが球技系
室内練習場というのがあったのだ。山田先生によれば、名の通り球
技系…特に野球やソフトボールの練習に適した施設らしい。まあこ
の学校には今のところ体育の授業で使っている気配はない。今のと
ころ、この施設が使われるのは冬場や雨の日にソフトボール部が練
習を行うときだけのことである。言い忘れていたがこの実習は2時
間を掛けて行うものだ。だから一旦寮に戻ってバットを持ってきて
野球の練習をすることぐらいなら出来るはずである。俺はこの間、
李承？さんにあつたときに実は韓国の有名な野球メーカーのBMC
と言う俺も知っている会社で作られた‘アジア記録更新記念バット
’と言う公式戦での使用が可能な木製バットとこれまたBMCの練
習バットを貰っていたのだ。本数は記念バットが3本、練習のバッ
トが2本の計5本でバットケースとセットで俺にプレゼントしてく
れた。今度またやるときまでに練習バットを全部折るくらいがんば
って練習しろと言って渡してくれたのだ。まあ…そう言われたらが
んばるしかないだろう。俺は早速織斑先生に打診してみることにし
た。

「あの先生…」

「室内練習場か？」

「やっぱり、わかりましたか？」

「当たり前だ。私はお前の担任だぞ？」

「そうですよね……」

俺と織斑先生は笑みを浮かべながらそう会話をする。お互いにお互いを熟知出来ているからなしえる技だ。

「まあ、私が止めてもお前は聞かんだろうな」

「ええ……そのつもりですよ」

「この馬鹿者が……」

先生は笑いながら俺にそうお小言のように言ってくる。

「まあいい……寮からバットを取ってきたらここに帰ってこい」

「わかりました。後……」

「なんだ？」

「この服じゃなくて野球用の服でも？」

「ああ……構わんぞ」

「ありがとうございます!!」

このISに乗るための専用着は前にも言ったがアンダーシャツを重ね着したようなもので俺はこれで野球をする気になれない。幾ら6月とはいえ室内練習場はひんやりしているから寒くなってしまう。まあこういうときは俺は、本当のアンダーシャツに着替えて下は野球用のユニホーム、そして上に今言ったアンダーシャツとT・シャツを羽織って練習に臨む。

「先生、今戻りました」

「そうか、これが室内練習場とマシンの鍵だよ」

「えっ!?!、ここってマシンも?」

「ああ、ボタン一つで速度を設定出来る優れたものだ」

マシンというのはバッティングセンターにあるようなボールを投げってくれる機械のことである。どうやら織斑先生の話だと1台あるようで、しかもこの間学校が間違えて買ってしまった練習用の硬球も200球ほどあった。なんだか話が出来すぎている気もするが…まあいいだろう。

「それじゃあ、また後で」

「ああ」

俺は急いで室内練習場の方へ向かった。すると…

「よしっ!!。一旦全員集合だ」

織斑先生は突然みんなを呼び集めた。俺はと言つともう室内練習場に向かうことで頭がいっぱいだから聞こえるはずがなかった。

「お前等、石井は今さっき野球の練習に向かったんだ」

そう言うみんなは何だかそわそわし始めた。どうやら俺の練習風景を見学したいようだ。

「そこでだ…お前達も…」

俺はこんな事はつゆ知らず、マシンの準備に奔走していた…。

43話 回収作業

室内練習場の中は予想通りひんやりしていた。

「寒いな…とりあえず打つか…さっきトレーニングルームで一通り温めたし」

自分の体を触ると手袋をつけているのにもかかわらず手に熱が伝わってきた。体が早く練習しようと囁いているような錯覚に陥ってしまふ。

” さっ…やるぞやるぞ…!! ”

俺は早速、マシンなどの設備の設定を行った。

” そうだな…だいたい115?から120?の間に設定しておこう… ”

言い忘れていたが俺は速いボールには怖くて体が竦んでしまふ。本当は100?ぐらいでも速いと感じるほどだから…とは言ってもいつまでもそんなことでは成長出来ない。俺は最近になってようやく120?ぐらいのボールまでは打てるようになってきたのだ。

” ボーン…!! ”

ボールは勢いよく後ろのネットに当たった。俺は第1球を見逃したのだ。まあ…格好良く‘様子見’とでも言っておこうか…。

「さて…始めるか」

俺はようやく練習を始める準備が整った。最初のボールは勢いよく…空振りしてしまった。

”あちゃ…まあいいか、次々…”

俺は再び構えた。今度は…まあライナー性の辺りをライト方向に打ち返すことが出来た。俺は一応両打ちなのだ。中学まではずっと右打ちだったのだが俺が左投げと言うこともあって中学で指導を受けた結果、見事に‘両打ち’となることが出来たのだ。左打ちにするメリットとしてはまず1塁まで1歩距離が短くなるからセーフになる確率が高まること、次に自分の好きな李承？選手と同じになれるからだ。俺は中学の時は外野か一塁しか守れなかった。だからこそ余計に李承？選手に近づけたらいいと思った。俺がここまで李承？選手を尊敬しているのはきっと朴のおかげもあるのだろう。彼も李承？が大好きだったから…。

”カーン！！、カーン！！、カーン！！、ボテッ…”

「あらら、またゴロ打っちゃった…」

俺はどうも4球に1回くらいは必ずと言っていいほど凡打を打つようだ。まあこれはこれで仕方がないのだが…。気がつくと200球を俺はあっという間に打ち終えたようだ。

「さてと…ボールを片付けるか」

勿論片付けるというのは回収してもう一度打てるようにするというものである。勿論今日はまだまだこんなのでは終わらない。1000球は打ちたいなと思っているところである。

「えっと、あつそこにあるのか…」

「はい、章?!」

「ああありがとう鈴…ん?」

「どうしたの?。もっと打つんでしょ?」

「お前、なんでここにいるんだ?」

「みんないるよ、ほら」

振り返るとクラスの人全員が俺を眺めているように見えた。

「先生、これは?」

「みなで石井の練習姿を見てみようと言つことになった。だから石井、よろしく頼むぞ」

「はい?」

「いいか?」

「章?... 私からもお願い出来ない?」

まあ鈴と先生の頼みに逆らうほど俺も空気が読めないやつではこのところはない。

「わかりました。それではボールを回収したら始めますね」

「頼む！」

俺は急いでボールを片付けることにした…。

44話 コーチ

俺はその後も練習を続けた。まあゴロというか凡打になることも多々あったが。案外そのことについては先生をはじめとした傍観者ギャラリは特に気にしていないようだった。俺は練習を‘する’ことを楽しんでいたし、みんなは練習を‘見る’ことを楽しんでいたようである。

気がつくともまた200球をすぐに打ち終えたようだった。さすがにボールの回収の時は少しだけ恥ずかしかった。と言うのも…

「はい、章?!」

「あ、ありがとう」

鈴が手伝ってくれるのだがなんとなくでも嬉しそうで俺はどうすればいいのかよく分からなかったのだ。すると織斑先生が言ったの俺と鈴をボールを回収が済んだら呼び出した。

「よし、それじゃあお前にも言うておくぞ」

「はい?」

「来週の体育からしばらくソフトボールを行う」

「そうですか!!、嬉しいです」

俺は喜んだ。ソフトボールを体育で出来るだなんて、中学でもあったからとても楽しみである。なんだかんだ言って中学は女子さえ

除けば楽しかったから中学時代のように体育も出来ればいいだろう
なと思っていた。ここの体育はつまんなくはないが女子が多いとい
うか男子があまりにも少ないから授業で扱う種目が極端に女子向け
のものになっている。そんな中この織斑先生の一言は俺にとっては
まさに‘天からの助け’のように聞こえた。

「そこでなんだが、お前織斑はどう思う？」

「えっと…普通にこなせていると思いますよ。キャッチボールしか
やったことありませんけど、多分仏に練習さえすれば問題ないと思
います」

「そうか、実はな今度のクラス対抗戦でソフトボールを行うことにな
ったんだ」

「何ですって?!」

「そこでだ。お前と織斑にコーチをして貰いたい。今回の大会には
勿論お前達を出すことも出来るのだが…女子にも楽しんで貰いたい
んだ。今回はクラス対抗戦と入ってはいるが実質、レクリエーショ
ンに近い」

「なるほど。わかりました、俺はいいですよ」

「織斑はどうなんだ？」

「ああ俺か?。俺は…石井が俺も教えてくれるんだったらやっても
いいぞ」

「よしっ…俺も協力してやるかな?」

「ありがとつ、章?!！」

鈴も大喜びのようである。後で鈴から聞いた話だとみんなは前もつてこの話をトレーニングルームで聞かされていたようだ。みんなも体育は少なからず好きだからまあ楽しんで貰えるようにと俺も心の中で誓った。

「さて、それじゃあそろそろ石井も終わりにしろ」

織斑先生に言われて時計を見ると、もうすぐ授業の終わりを告げる鐘が鳴る時間であった。

「わかりました」

「よしっ、それでは各自着替えて午後の授業まで休憩だ。全員解散」

織斑先生はそう言うつと授業の終了を告げた。俺はマシーンを片付けてから更衣室に向かった。

「石井」

「織斑、どうかしたのか？」

「何て言うか…よろしくな。俺ソフトボール久しぶりだからわかんないところもたくさんあると思うんだ」

「大丈夫大丈夫。がんばってやればきつと上手いくさ。ISをみんなの上手に飛ばせるんだから身体能力は俺が見る限り、織斑は高いと思うし」

「そうか？。ありがとう。それじゃあよろしくな」

「おう！！」

俺と織斑はお互いに誓いを新たにすると更衣室に戻った…。

45話 Delete

この学校の体育は火曜日と金曜日に2時間連続で行われる。まあクラス対抗戦が来月の臨海学校の直前だからそれを考えれば十分にみんなの実力も伸びると思う。それまではいろんな事を俺も勉強しなくてはいけない。まずルールが違うからその辺りもしっかりと把握しておかなくてはならない。幾らレクリエーションのコーチをとはいえども任命されからには全力でその期待に応えるべきである。

学校が終わると俺は部屋にある自分のパソコンに向かった。勿論、クラスの人の分析である。そういえばこういうのを‘ID野球’というのだろうか？。まあそんなことはいいか…。

”うーん、やっぱりこの1組はあんまり身長が高くない選手が多いなあ、それに引き替え他のクラスは大体クラスの平均身長が1組よりも若干高いか…。これはヒット狙いで少ない点をこつこつと稼いでいくのが無難だな…ん？”

俺はソフトボールを調べていると同時に自分の趣味でもある鉄道についても調べていた。そして野球もだ。

「ふーん、李承？がタイムリーヒットか…」

「章？ってホントにこの選手が好きなんだね」

「鈴！！」

後ろを振り向くと鈴がそこに立っていた。

「ただいま！、章？」

「お前部活は？」

「この雨じゃあ出来ないでしょ？」

「でも部活があるからって言ってなかったっけ？」

「正確にはミーティングだけだったから早く終わったんだ」

「そっいうことが…」

俺は納得した。まあ確かにミーティングだけだったから早く終わるのも分からなくもない。すると鈴は勝手に俺のパソコンのマウスを横取りしていろいろと見始めた。

「おっ、おい！！」

「何よ！」

「お前これ俺のパソコンだぞ」

「それがどうかしたの？」

「どうかしたのじゃないだろ？…大体お前にかすって…」

「それ以上私に文句言ったら殺すよ」

鈴は再びISを起動しようと俺に脅しを掛けてくる。

「わかったよ…そのかわり壊すなよ」

「当たり前でしょ？…ふん、私たちのためにここまで調べていてくれてんだ」

「まあね、せつかくやるんだったら勝ちたいしさ」

「あれ？。このファイル何？」

「あつ…それは…その」

”まずいな、そこには口では言えないようなものがたくさん入ってるんだよなあ、少なくとも鈴が怒るのは目に見えてる。まあパスワードを掛けておいてよかった”

「あれ？、これ進めないじゃん！」

「当たり前だよ。パスワード掛けてるんだもん」

「…」

「だからお前にはみれな…！！」

鈴がものすごい顔で俺を圧倒したかと思うと

「見せてくれない？」

と笑いながら俺に囁いてくる。目は勿論の事がながら笑っていない。

「いやその…ぐえっ！！」

突然鈴は俺の腹を殴ってきた。そして俺の大体胸の辺りにまたがって座ってきたのだ。俺は殴られたときに蹠^{よう}跟^{よう}けてベッドに倒されてしまったのだ。それを鈴が逃すはずがなかった。

「もう一度訊くわね…あのファイルの中見せてもらえないかしら？」

「だから…ぐふっ!!」

笑顔でまた殴ったかと思うと今度はISを起動させて急に態度を豹変、睨みつけながら

「見せなさいよ!!」

と追い打ちを掛けてきた。女子には負けたことがないはずの俺も完全に乗っ取られてしまった。

「わかったよ…」

渋々俺はそのファイルの中身を見せた。

「ふーん、やっぱりいいかわしいものだったわね。これはどこでいつ手に入れたの？」

「中学の時だよ…」

それを聞くと鈴は間髪を入れずに

「消して」

と俺に言った。

「いや…でも…ぐっ、うぎゃっ…！」

鈴は往復パンチで俺に更に更に追い打ちを掛けてくる。

「鈴…」

「消して、そうしたら止めてあげる」

「わかったよ…」

俺は仕方なくそのファイルごと抹消した。ようやく鈴も許してくれたようだった。中学の時に拾ったというのが幸いしたのだろう。

「もう、章？ったら気づかないうちにこんな事をしていたとはね」

「だから中学の時だって」

「見るんだったら私のを…」

「ん?!、お前何言ってるんだ？」

「えっ？」

「もしかして今のやつに妬いてるのか？」

「うううううう」

「鈴ちゃん？」

「うああああああ!!」

とうとう鈴の中の何かが切れたようだ。俺は慌てて逃げようとしたが時既に遅し、再びベッドに押し倒された。

「鈴?!、おっ、おい!!」

なんと鈴は自分の手と俺の手を手錠でつないでしまったのだ。

「これでよし」

「これでよしじゃないだろ!!。何考えてるんだお前は？」

「私が妬いてることをいちいち聞いた罰よ。夕食まで私がいいって言っただけで貰うわよ…私のキスに…」

「おい…!!」

それから後のことは言わなくても分かっただけで貰えるだろう。ただ、俺は鈴にキスだけでメロメロにされてしまった…。

46話 Technology

鈴のやつ、どこで調べたのか分からないのだが…なんだか最近になつてキスのテクニクがどんどん上達しているような気がした。まあさつきも言ったのだが、俺がメロメロになつてしまふほどだ…。

「もう…勘弁を…」

「まだよ。もつともつと、私の気持ちを受け取って貰わないと」

「でも…ぐう…」

鈴は自分の唇を俺に押し当てる。まあ…これはこれで嬉しいから別にいいんだけど、なんだか自分の変わりぶりに一番自分が驚いているような気がする。この間まで、女という存在を毛嫌いしていた俺がここまで変わるだなんて。

「ふはあ…はあ…」

俺はもう肩で息をするほどできあがつてしまっている。鈴は手錠で俺の片手を押さえているから逃げ出すことも出来ないし…どうすればいいのだろうか？。

「そろそろ、分かつてもらえたかな？」

どうやら鈴も満足してくれたようだ。

「勿論です…。鈴の気持ち…とっても受け取ったよ」

「ありがとっ」

鈴はそう言つとようやく手錠を解いてくれた。一応言っておくこの手錠はどうやら近くのおもちゃ屋さんで買つてきた物で簡単に壊せるようなものだったのだがそんなことを知るはずも俺はなかったので壊すことが出来なかった。まあ人間の思い込みなんてのはそんなもんだな。

「鈴」

「ん？」

「あんまり聞きたくないんだけどさ……」

「何？」

鈴に俺は聞いてみることにした。どこでこんな事を覚えたのか。

「お前、どこでこんな技術^{テク}を？」

「章？のそれだよ！」

鈴の指さした方向には俺のパソコンがあった。確かに俺はファイル以外には基本的にパスワードを掛けてないから誰でも使おうと思えば使うことは出来る。最近、妙にパソコンがスタンバイモードになっていたりしていたことが多かったがまさかその真犯人は鈴であった。

「お前…勝手に俺のパソコンを……」

「いいじゃん。章？のものは私のものでもあるのよ」

「でも…一言言って欲しいな」

「…」

「鈴？」

「私は使っちゃダメなの？」

「いや、そういうわけじゃないよ。使う前に俺に言ってくれさえすればいいってこと」

「そうね、確かに章？の言うとおりだね。これからは使いたいときに章？に言う、それでいい？」

「勿論」

俺は鈴にグーサインをしながら言い返した。すると鈴の顔にもようやく笑顔が戻ってきた。

時計は午後7時前を指していた。俺はまあ何とか野球の戦力分析を速く再開したかったから食事に向かうことにした。

「鈴、俺食べに行くけど？」

「私も一緒！！！」

「わかったよ」

俺と鈴は食堂に向かった…。

47話 箸（前書き）

皆さん今晚は。私の応援しているオリックスは同率5位、肝心の李承?選手も打率・168とかなり低迷していますね。まあ、まだ野球の季節は始まったばかりですよね?。と言っわけで、本文も是非お楽しみ下さい。

47話 箸

食堂に向かうと織斑がデノアに箸の持ち方を教えていた。見たところ、相当苦手のようだ。確かによっぽどアジアに興味がない限り、ヨーロッパの人は箸を持つことは不得意だろう。俺の知っている限りだと欧米の人は麺類を啜^{すす}ることが出来ないんだそうだ。確かにパスタを食べているヨーロッパの人というところはフォークに丸めているようなイメージが浮かんでくる。俺も前に友達とあるファミレスに行ったときにボンゴレを食べたとき箸を使って変だ変だと言われた思い出がある。まあ、若干狙ってやったことだったのだから思った以上に衝撃的だったようだ。

まあそんな俺の過去の話は置いてくとして、デノアはとても辛そうに箸を持っている。何とか覚束無い^{おぼつかない}というか、初めて箸を持ったというような顔をしている。幾分間違っ^{まちが}てはないか。俺は一応、箸と鉛筆は右手で持つようにと躡^{おそ}けられたが正直なところ左手でも箸、鉛筆、鋏といった具合に何でもこなすことが出来る。頑張れば両手に箸を持って食べることも不可能じゃないかもしれない。

「あれ？。章？ってどっちでも食べられるの？」

「ああ、一応はね。でも左手じゃ、不浄の手」だからあんまり使わないけどね」

「ふん…それにしてもさ」

「ああ？」

「シャルロット、大変そうだね」

「そうみたいだな…」

「もう少しだぞシャルル！」

「うん」

”ポロッ”

「あぁっ！！」

「あぁ、ボクダメなのかな？」

「諦めるな。さぁもう一回だ」

「うん」

正直なところ俺が見る限りだと、これは相当以上に深刻である。バットが持てないのに野球をするようなものである。とは言っても、こんなのは‘慣れ’だから、一週間もトレーニングを積みれば問題なく箸を持てるようにはなるだろう。しかしまあ、デュノアもかなり大変な運命を歩んできたようだ。会社の広告塔として男性操縦者と虚偽の申告をして入学、一時は退学も考えた苦勞人である。聞いた話だと織斑に

”在学中、生徒は理由の如何に寄らずどの企業、国家、地域に干渉されない”

と言う校則を教えて貰い。自分の無事が確定したためここに残ることになった。勿論、この間のラウラさんの嫁宣言の日に女性として

デュノアは「転校」した訳だが…。まあこれはこれでいいのだろう。

「多分ね」

「ん？」

「俺は、デュノアなら箸なんかチョロいと思うよ」

「なんで？」

「言いたかないけど、お前とデュノアがこの前俺をボコボコにした
だろ？」

「お仕置きのことでしょ？。何だか言い方が悪いわ」

「俺からしたらボコされたただけだ、まあそれでさ」

「うん」

「俺を何発もデュノアは殴ったわけだろ？」

「そうだね。確か10？いや11発だったかな？」

「そんなことは言わないでくれよ。思い出しただけでぞつとするだ
ろ？」

「ごめんね。それでそれで？、殴ったことと箸を持つことに何が関
係あんの？」

「殴るのにはそれなりの握力が必要だから、箸ぐらいならすぐに持

てるってこと」

「ああ」

「だろ？。まあ…殴るのとは違うけどね、本気になったらデュノアなんか箸の5膳や6膳くらいすぐにへし折れる…」

”バキッ！！！”

後ろの方から突然その時、何かが折れたような気がした。いやな予感がMax^{マックス}だ。

「章？、さつきからどうもアドバイスありがとうね。ボク…頑張ってみるよ」

「そつ、そうか…それはいいんじゃないかな？」

俺はとつさに織斑にもアイコンタクトで救助を贈った。

”助けてくれ…織斑”

”無理だよ。俺でもシャルルが怒ったらどうしようも出来ない”

”そんな…っておい”

デュノアはいきなり俺の胸ぐらを掴んだ。言っておくがまだ食べている途中である。まあ殆どは鈴に取られてしまったから後は緑茶を飲むだけなのだ…。

「どうしたんですか…デュノアさん？」

「ボクの握力がどれくらいあるか試してみたいよね？」

「いやゝそれはちょっと…ぐえっ！…、うぎゃっ！…！」

早速胸と顔にストレートをお見舞いされた。本当に女性かと言っくらしいの強力なパンチだ。

「くっ、くううう」

「一夏！」

「はっ、はい！…！」

「続きやろう」

「わかった（石井、ご愁傷様だな…）」

「章？も一言余計なんだよ。私が部屋に戻ったら消毒してあげるね」

見ると顔からは何かの拍子で切れてしまった切り傷からわずかに出血していた。やれやれ、またまた救急箱のお世話になるのか…。

48話 練習

食事を終わると早速部屋で鈴が手当をしてくれた。

「イタッ!」

「これぐらい我慢なさい!」

「んなこと言われても…痛いもんは痛いんだよ」

「だらしないわね、アンタ本当に私の夫なの?」

「お前なあ…おっと」

「何よ」

「また余計なこと言いそうになった…ぐえっ!」

「そついうところが余計なの、分かった?」

「すみません」

「よし、絆創膏貼ってあげるね」

「ああ…」

絆創膏を貼って貰うこの仕草が何だか恥ずかしかったりもする。まあそれはいいだろうまだまだ傷口がしみる夜になった。

それからしばらくして、正式にクラス対抗のソフトボール大会の日程が発表になった。なんでもこの学校での初めての試みだそうである。俺が確認してみたところ大会までの体育の時間は2時間が2コマの計4時間である。4時間しかないといった方がいいかもしれないが、練習するに越したことはない。早速練習を最初の体育でしてみたのだが…酷いなんてもんじゃなかった。とりあえずルールは理解してくれているようだったからまだ幸いである。俺と織斑がいなかったら太刀打ち出来ないほどだ。とは言っても悲観するだけではない、今日の練習でみんなは結構ハングリー精神というかボールに食らいついていこうとする努力を感じ取ることが出来た。この精神力は重要だ。

「織斑」

「どうしたんだ？」

「みんなのボールへの執着心が凄いと思うんだけどさ」

「そうだな…確かにそう言われてみればそうかもしれない」

「だろ？」

「ああ…」

実はこの時はまだ俺と織斑だけは知らなかったのだが、どうやら女子達は学年で優勝してMVPを取るような活躍をすれば織斑とつきあえるという勝手なことを誰かが言い始めたことにより、気合いを入れたとのことだ。鈴ですらこの情報は知っていたのにもかかわらず教えてくれなかった。だからとは言えないが、練習をすればするほどとてつもない勢いでいろんな事を吸収しながら成長する様かと

てもよく分かった。

「ふっ!!」

その時である。偶然かはたまた努力の結果なのか定かではないがデユノアがダイビングキャッチを成功した。これには俺も織斑も驚いた。

「おお!!!!」

「凄いじゃないかシャルル!」

「そんなことないよ、次々!!」

”一夏達にもいいところ見せることが出来たかな?”

「よしっ!!」

何はともあれ楽しそうな大会が行えそうだ。その頃…

「おい、承?」

「どうしたんですか?、朴先輩」

「これを見ても」

新聞紙を朴賛浩選手は李承?選手に渡した。

「へへ、章?達がこんなことをですか」

「そうみたいなんだ、そこで何だけどな」

「ええ……」

とオリックスの練習場で談笑をする二人の選手の姿があった。

49話 アジアの大砲（前書き）

今回は李承？選手の視点で制作させていただきます。

49話 アジアの大砲

みんなは僕の名前を知っているかな？。僕は李承^{イスチョ}？って言うんだ。もともとは韓国の選手なんだけどね、今は日本のオリックス・バファローズの一員として頑張っているんだよ。

僕は最初ね、韓国の三星^{サムソン}ライオンズに入団したんだ。でも、最初は僕、投手として入団したんだよ。だけど離断性骨軟骨炎：簡単に言うと肘の関節の一部分、確か軟骨だったかな。その一部分が剥離して肘の関節の中に入って勝手に動き回るんだ。だから人によつては‘ネズミ’って言ったりもするんだ。そのことを監督が知らないはずがなかったんだよね。当時の監督は日本でも活躍した白仁^{ベクインチョン}天監督だったんだよ。

「承？！！」

「どうしたんですか監督？」

ある日突然僕は監督にこう言われたんだ。

「お前、肘のほうはまだ治らないんだろう？」

「ええ……」

「うーん、お前は左投げだしなあ……そうだ、暫定で一年間一塁手をやってみないか？」

「一塁手をですか？」

「ああ、どうだ？」

僕も結構悩んだんだけど結局そうすることにしたんだ。もちろんその時は暫定って言うこともあったからなおさらそう思ったんだけどね…その時は。

そのシーズンを僕は121試合…まあほとんどの試合に出て365打数104安打で早い話が打率・285、しかも本塁打が13本も打てたんだよ。暫定で一塁手をやったんだけどこの活躍もあって白監督に勧められてね…野手で、一塁手で生きていこうと決意したんだ。

それからしばらくして、再び僕は白監督にこう聞かれたんだ。

「おい!!」

「はい、なんでしょうか？、監督」

「一本足打法にチャレンジしてみないか？」

「一本足!？」

その打法は僕も知っていたんだ。何てったって、僕の尊敬していた王貞治選手が一本足打法だったんだからね、僕は迷うことなくそうすることにきめたんだ。その年は確か、キャンプ中に腕立て伏せ200回をノルマとして課されたんだ。でも最初は全然できなかったね。

「どうしたんだ？。お前の実力はそんなもんか？」

「これ以上は、もう…」

「まあ確かに、まだキャンプが初日だからな徐々にできていけばいいか？」

「はい!!」

キャンプのお終いにはそのノルマも問題なくできるようになったね。それからも一生懸命頑張ったかいがあつて一気にホームランを量産できるようになったよ。況してや2003年のシーズン、まあ僕にとっては今までで最後の韓国のシーズンだったんだけど、ホームランを56本打つてさ、憧れだった王選手の記録を抜くこともできたんだ。それから本当ならメジャーに行きかたかつただけだね。まあ韓国の野球の実力をまだまだ認めてもらえなかったんだよね。ひとまず日本のロッテに入団することにしたんだ。ロッテは韓国にも「ロッテ・ジャイアンツ」っていう野球チームがあつてね。だからっていうわけじゃないけど入団することにしたんだ。

日本の野球はとっても強かった。正直言つてそれ以降は僕もあんまり活躍できなくてね。今年から移籍したのも簡単にいえば巨人から「戦力外通告」を受けたわけなんだ。正直、僕も落胆していたんだけど。妻と息子が日本に遊びに来た時に、息子のウンヒヨクが迷子になつちやつてね。しかも東京駅で。その時、彼が「章？君が僕の息子を助けてくれたんだ。その時にね、僕のことをとっても尊敬しているってことを知つてね。正直うれしかったんだ。今年はまあいろんな事情があつてシーズンの開幕が遅れちゃつてね、そのせいというわけではないけど僕はあんまり打てなくてね。だから章？君のおかげで僕は立ち直れたと思うんだ。だから僕は今も彼に感謝の気持ちでいっぱいなんだ。でも本当の恩返しは僕がホームランを打つことだと思うんだ。

”アジアの大砲”

としてね…。

50話 プレインオムレッツ

李承？選手がそんなことを思っている頃、時刻はもう既に夕方であつた。俺は、珍しく台所の上に立っている。実は…

.....

「そつといえば章？つて料理出来るの？」

「えっ?!」

「言われてみればそうですね。鈴さんはこの間作っているのを見ましたし、私はサンドウィッチぐらいなら作れますし…」

「ボクも料理部だからね…」

「いや…そのね、作れないことはない…けど」

俺は家庭科は中学にいたときは全く勉強しなかった。これは俺の持論なのだが、正直言つて家庭科で習う‘裁縫’だとか‘調理’だとか言つのは学校で習うもんではなくて家で勝手に身につくものである。だから俺はわざわざこの教科を学校で勉強する理由がよく分かっていなかった。まあそれは置いておいて、なんだかとてもいやな予感がする。

「それなら石井に作ってもらえばいいんじゃないか？」

「おっ、おい!!、織斑」

「それはいい考えだな、さすがは私の嫁だけのことはある」

「篤さんは？」

「私か？、そうだな… まあ私も石井の料理は食べてみたいな」

俺は最後の砦を失った。こうなると…

「というわけで章？、明日の夜… よろしくね！！」

と鈴に言われるのが宿命である、俺は

「はあ… わかった」

とため息をしながらそう答えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

と言うことがあって、今は… 調理中というわけだ。まあ今夜は簡単にできるプレートオムレツにすることにした。まあ… 卵料理って意外と他の食べ物の影響を受けやすいようで、このプレートオムレツなんかは特にそうらしい。料理人によってはフライパンを使い分ける人もいるんだそうだ。まあ俺もその部類に入るのかもしれない。俺は結構調理器具には興味がある方だから… それなりに勿論料理も出来るはずである…。

「いい匂い」

「そうですわね、章？さんって意外と…」

「料理が出来るみたいだね」

「そうみたいだな。石井は勉強だけじゃないみたいだな」

「聞こえてるぞ、織斑」

「ごめんごめん」

「気にするなよ…まあ料理は経験が物を言うからね」

「たしかに石井の言うとおりだな…」

”私も一夏に気に入られるような料理が出来ると嬉しいのだが…こ
うも剣道ばかりしているとな”

”私の料理もきつと気にいってもらえますわ。まあ…章？さんほど
美味くはないでしょうけど”

”僕も料理部だから負けてられないなあ”

”私の嫁だ。好みは私が一番分かっている！！”

4人は目を合わせながらまるで火花を散らしているようであった。
まさに‘椅子取りゲーム’と言うか‘パイの取り合い’である。

「出来たぞ」

俺は自分を合わせて8人分のプレーンオムレツを作り上げた。まあ
…何というか手を結構使う料理だから手首がとても痛い。でも。

「おいしい！！！！！」

「本当ですね。外はしっかりなのに」

「中はフワツとしてて」

「そのくせに中までちゃんと火が通っているから」

「中身がどろつとしない……」

「まさに芸術だな……私の嫁にもこれぐらいは出来て欲しいものだ」

「なんだかみんなの会話がかなりフインプレーな気もするんだけど……まあ気のせいかな？」

「どうもありがとう。気に入ってくれたみたいだね」

「……」

「鈴、どうだった？」

「……」

「鈴？」

「どうして？」

「えっ？」

「どうして黙ってたのよ。あなたの料理、とっても美味しいじゃない

い
」

「だって…ここでは学食があるから別に必要ない…」

「必要大ありよ、愛する妻のためにつくつてよ」

「そういうことが…わかった。今度からたまにはつくつてあげるよ」

「本当？」

「勿論だよ」

「ありがとう!!」

そう言つと鈴もようやく機嫌を直してくれた。まあというわけで俺の料理は認められたようだ。だが…

” 曲芸、勉強、恋愛、料理…どれも満点!!!! ”

と言つ翌日に掲載された新聞の記事を俺は見ると顔が赤くなつてしまった…。

51話 Meeting

最近は、俺の‘変化’もあって随分と女子のファンも増えたようだった。このことは当然のことながら鈴も知っていた。

「おお、またファンレターか…」

俺のIS…李舜臣型にも白式にも毎日大抵3、4枚はこう言った手紙がある。中身は…

”これからも頑張ってください。影ながら応援しています!!”

だとか

”ソフトボール大会、石井さんの活躍を期待しています”

だとかが書かれている。まあラブレターではなくてファンレターと完全に分かるし、しかも見るときは鈴の検閲を強制的に受ける羽目になるから、鈴も必然的に見ることになる。だからこそ鈴は別にはしていなかったようだ。

「章？のファンって最近増えたよね」

「ああ…俺もここところ、いいこと続きだからなあ…」

「なんで？」

「だってまず…性格治せたし、李承？選手と知り合いになったし、試験も1位だったし…それにさ」

「それになに？」

「わかんねえのか？。お前とも出会えたしさ…」

「なっ！！」

鈴の顔はみるみる赤くなっていく。こういうところが、鈴らしさ、でもあるんだけどね。

「おっ！！、やっぱりそう言つと赤くなるのか？」

「当たり前じゃない…私、私…」

「ん？」

「章？のことが大好きなんだもん！！」

「うわっ！！」

鈴は俺に飛びついてきた。もともと鈴は俺に比べたらかなり小柄だからすばしっこいしこういうの鈴の方が得意かもしれない。

「俺と同じだな」

「何が？」

「鈴のこと…俺も好きだよ。だから、これからずっと…」

「勿論、一緒だよ…」

俺と鈴はそう確認し合うと、手をつないで教室に戻った。

教室に戻ると、なんだかみんなが真剣に議論しているのが分かった。昼休み中なのに何をそんなに…。

「二人とも、どちらへ行っていたのですか？」

「今日は作戦会議って言ったじゃん!!」

「「あつ!!」」

俺と鈴はそのことを思い出した。実は今日の昼休みにソフトボール大会の試合の作戦会議を立てる予定だったのだ。

「まあ…まだ始まったばかりなんだけどね」

「そうか…コーチとして申し訳なく思うよ」

「それは今日までなんだ!」

「どういうこと？」

俺がみんなに聞き返すと後ろから先生が口出しをした。

「私と山田先生が明日以降、監督とコーチを務める。織斑、石井、今までよく頑張ってくれた。お前達も明日からは選手だ。勿論試合で使っていくかはまだ分からない。だからしっかりと練習するように…いいな!!」

俺と織斑は目を合わせてお互いに頷きながら

「「はい！」」

と答えた。それを聞くと織斑先生も納得というか喜んでくれているように見えた。

「それでは作戦会議を始めろぞ」

まあ、1日ぐらい前から監督になっても立場上おかしくはない。俺と鈴が席に着くと早速作戦会議は始まった。

ここでネックになってくるのは意外に俺だったりもする。このクラスの人俺以外は全員「右投げ」…簡単に言う俺だけが「左投げ」なのだ。左投げはいろんなところで制約が生じるのが野球の宿命なのである。まあ使えんなら俺は一塁で使って欲しいんだけどね、何はともあれ作戦会議はスタートした…。

52話 練習

とまあ何はともあれ俺と織斑も晴れて選手になれた訳なのだが…

「なんだなんだ？。お前、妻の前でそんなはしたない真似をする
ことが出来るのか？」

「すいませ〜ん！！」

「おい石井。大丈夫か？」

「まあな…でもいきなりこのノックは酷だぜ」

「本当だなあ…千冬姉一番張り切ってるみたいだぞ？」

「まあ…監督としては…」

「お前達！、いつまでしゃべってるつもりだ！！」

「すいません！！」

どうしてこうなった？。俺と織斑は今みんなの前でノックをさせられて
いる。一応、俺が内野で織斑が外野なわけだが…。

「章？、一夏？、速いけど頑張っ〜！！！！」

という鈴の声援もあるように、ボールのスピードがかなり速いのだ。
織斑先生がどこで鍛えたのかは知らないが、とんでもなく野球が上
手い。

おっと、こういう結果に至ったのか説明しなければいけなかったんだ。俺と織斑は…いや、1組の生徒全員は授業が終わっても教室で待機するように昼休みの作戦会議で言われた。そして、待っていたところ案の定織斑先生が入ってきた。見ると、寮の時の服装と同じでジャージ姿…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「これから、石井と織斑に守備の練習を行って貰う。他の者達は、それを十分に観察し盗めるとことはじゃんじゃん盗め」

「えっ」

「俺達が…練習台？」

「なにか不満か？」

「いやちふゆね…」

”ボカツ”

その時である。織斑先生は織斑に早速げんこつを飛ばした。なんだからいつもの光景である。

「イタタタタ」

「何度言ったら分かるんだ。学校では織斑先生と呼べと」

「すみません…織斑先生」

「よしっ!!。石井」

「はいっ!!」

「お前も当然やってくれるな? (ギロツ)」

全てを圧倒し飲み込むかのような目つきでそう訊かれて、さすがの俺も逆らうことなんて出来やしなかった。

「わかりました…」

「それじゃあ、全員室内練習場に行け!!」

行き際に鈴が

「章?、頑張つてね!」

と誰も見ていないところで俺のほっぺたにそつとキスをしてくれた。こつなつたら俺も中途半端なプレーは出来ない。

.....

と言うわけでかれこれ1時間近くみんなの前で俺はノックを受けているのだが…いやあ、痛いね。ソフトボールの玉は軟球とは全然違ってとっても痛い。勿論不慣れというものもあるかもしれないけど、それを差し置いても痛い。

「ぐはっ!!」

その時、俺の腹にボールが直撃した。鳩尾じゃなかったことが幸いだった。その光景を見て周りの人たちが俺に迫ってこようとした。鈴も同じだ。

「章？…だいじょ…」

「来るなー!!」

「えっ？」

「お前の…鈴の気持ちは痛いほど分かる。だけど、今はお前に助けて貰う事なんて必要ない」

「強がらないでくださる？。章？さんや一夏さんのその体を見れば、誰だってこうしてはいられませんわ」

「それじゃあダメなんだよ」

「どういつことなんだ？。お前と私の嫁を黙ってみていろうと言つか？」

「これ以上…私はお前も一夏も放っておくことは出来ない」

「ボクもだよ、どうしてなの？」

「みんなに俺が盗んで貰いたいのはこんなところじゃない。俺は、みんなのボールへの執着心をもっともっと盗んで欲しい。最後まで諦めなければきっとクラス対抗戦でも、優勝出来るはずだよ」

「章？…」

その時である。今まで黙って俺の話を聞いていた鈴が静かにみんなに

「下がるっ…」

と言った。

「章？、みんなで見てるから！！、絶対に戻ってきてね」

とも付け加えた。

「ありがとう…さすがは『良妻』だよ」

俺は再び起き上がると構えた。

「さあ来い！！！」

すると後ろにいた織斑も内野に戻ってきた。

「織斑？」

「俺も…影響されたって言えばいいのかな？。お前と同じ条件でやってみたいんだ」

「そっか…」

俺は軽く笑うと再び守備体制に入った。

それからのボールは一段と強くなった気がした。勿論エラーだつて、トンネルだって何度もした。だけどみんなにはきつと伝わった

と思う。

「てやつー!!」

「おお、石井、そういうのださういうのだ。ほら、すぐに起き上がれー!」

「はい!」

俺は気がついたら、ダイビングキャッチを出来るようになっていた。これは俺の特技になるかもしれない。声援もドンドン強くなっていたし、新聞部も…実はやってきていたりした。本当は情報の流出になるからあんまり見せたくないんだけどね、でも…せっかくだからって織斑と織斑先生が言うから俺は止めなかった。新聞部の人たちは

「最近、号外が多くて本当に困りますよ。でも…私たちも楽しませて貰っています」

と笑顔で僕等にそう言ってくれた。

「よしっ!!、二人ともこれで最後だ。^{ラスト}まず一夏からだ」

「はい!!。それじゃあな石井、お先に」

「ああ。エラーすんなよ?」

「当たり前だろ…」

笑いながら織斑はそう言って構えた。そして見事にボールを取るこ

とが出来た。

「よし…お前にはとっておきのボールを打ってやる」

そう言つて構えてみると確かにボールのスピードは…

「速い…」

と俺が呟いた通りだった。なんだあれは、速すぎる…と言いたいところだ。だがそんなことは言っていられない。みんなのためにも、俺の帰りを待っている鈴のためにも…。

「怖じ気づいたか？」

「いいえ全然」

「そうか…それじゃあいくぞ…!!」

「さあ来い!!」

俺はそれから暫くの間ボールを取ることが出来なかった。球数で言えば大体10球ぐらいだろうか？。

” はあはあ…次で必ず捕ってやる”

俺はそう心の中で叫んだ。

「来い!!」

「よしっ!!」

有言実行…いや心の中で叫んだだけだから無言実行か。まあそんなことはどうでもいい、俺は遂にボールを捕ることが出来た。

「石井、よく頑張った。みんなも石井に負けないように頑張っ欲しい。それでは今日の練習はお終いとする。解散!」

そう先生が言っていると鈴は俺の元に駆け寄ってきた。

「鈴…イタタタタ」

気がついていなかった痛みがドツと押し寄せたようだ。

「ダメだよ!。部屋でゆっくりアイシングしてあげるね」

「お前、どうしてそんな言葉を…」

「私は、良妻、だよ」

そう笑顔で鈴は顔を赤くしながらそう言ってきた。俺も嬉しかった。

「ありがとうな鈴…」

そう言っていると織斑に肩を借りながら部屋に戻った…。

53話 マッサージ

ふう…早速部屋につくとひとまず俺はシャワーを浴びた。やっぱり練習の後のシャワーは最高である。まあこの後風呂にも当然行くんだけど…とりあえずシャワーを浴びないとアイシングをすることが出来ないから浴びることにした。

「ふあああ…気持ちいい」

俺は温かいお湯がとっても嬉しかった。中学まではシャワーはおろか水すらなかったから疲れたままとぼとぼと満員電車で帰る羽目になっていたのだが、さすがに寮だけのことはある。

俺がシャワーを終えると早速鈴が俺にベッドに寝るように指示をした。

「アンタこれからどうせ風呂にも入るんでしょ？」

「ああ…そのつもりだけど」

「じゃあ湿布を貼つてもしょうがないわね」

「まっ、まあそういうことになるな」

「それじゃあこうしてあげるわ」

「何を…つぎやっ…!」

俺は悲鳴を上げた。なんと鈴は俺の背中に乗ったのだ。

「鈴…うぐっ、一体何を？」

「これぐらいマッサージしてあげれば体もほぐれるわ」

「だからって…ひっ！、これは…ぐはっ！」

「も…、だらしないわね」

だらしないと言われても、これはマッサージと言うよりは鈴が楽しんでるだけの気もするがそんなことを言ったら…どんな目に遭うかは俺が一番よく分かっている。ボコボコにされて本当に救急箱がまた必要になってしまっただろう。

「それじゃあこうしてあげるわ」

そう言うのと鈴は降りてベッドに正座のような体勢になって座った。今俺はベッドにうつぶせになっているからよく見えなかったが多分そんな感じなんだろう。

「う…ん…」

「どっ？」

「Very good…」

俺は思わず英語で返してしまった。鈴のマッサージはヘタなマッサージ師より上手い気がする。よくもまあここまでパソコンだけで出来るようになったものである。

「私流の‘ツボマッサージ’よ」

「うん、とっても気持ちいいよ…」

「よかった」

鈴も上機嫌のようだった。だがまだこの時俺は知らなかった。

”この状況なら、シチュエーション章？とまた仲良くできる”

と言う。鈴の思惑が…。

30分くらいした頃だろうか、鈴は足回りも言いながら足のツボもマッサージしてくれた。これはこれでとっても気持ちいい。本当にツボってあるんだなと思うくらいだ。背中と言いつつ、足と言いつつ、なんとまあマッサージの上手い‘妻’を手にすることが出来てとても嬉しく思う。

「ふう〜。気持ちよかったよ、どうもありがとう」

「さあて、今度は私をお願いね」

「えっ？」

「何よ、やらせるだけやらせておいて私には出来ないって言うの？」

「むぐぐ…」

「どうなのよ？」

鈴が何だかとってもマツサージをして欲しいようである。

「まあいいけど…どこをすればいいの？」

「そうね…考えてなかったわ」

「おいおい…それじゃあ肩もみしてやるよ」

俺は中学まで毎日母親に肩もみを日課として半強制的にやらされていたから幾らか自信はある。鈴には敵わないかもしれないけどね…。

「よろしくー！」

「おう」

とは言ってもやっぱり母親の肩をもむのと鈴の肩をもむのでは何だか違うような気がする。何というか甲緊張するというかドキドキしてしまう。

”モミモミ…”

「どうだ？」

「うん、気持ちいいわ」

「お前って意外と肩凝ってるんだな」

「当たり前でしょ？。部活もソフトボールの練習もあるんだから」

「それもそうだな…」

”モミモミ…”

”それにしても鈴、本当に気持ちよさそうだな…”

俺は200回くらいしたところで手がもう動かなくなってしまった。
最近全然していなかったから当然かもしれない。

「ふう… もう手が動かない」

「そう、気持ちよかったわ。でも…」

「でも？」

そういうと鈴は俺をまたベッドに押し倒した。ISを起動したから…
まあそれ以上は言わなくても分かるだろう。

「何考えてんだ、鈴？」

「まだこのマッサージをしてないわ」

そう言いながら鈴は俺の唇を指でなぞる。

”鈴の指って、とっても細いんだな… ってそんなことに興味を抱いてる場合じゃないぞ！。鈴は一体何を？。まさかこれが全て鈴の仕組んだ罠トラップなのか？”

「察しがいいわね。章？の思ってるとおりだよ。肩もみをさせて手が使えなくなれば私の方が有利なのは必然なものね」

「お前、それって…」

「そう、この間の朝みたいに楽しみましょ。あ・な・た」

鈴がとっても魅力的な女性に一瞬見えた気がした。次の瞬間俺は鈴に唇を奪われた…。

54話 新聞

やっぱり鈴に俺のパソコンを使わせるのを認めた（厳密には認めさせられたんだけどね、いつもの通り脅されて…）ことは間違っていたのかもしれない。俺だけがこんな風に変わっているのかと思ったら鈴も変わってしまったていたようである。変わったじゃ済まされないだろうな。豹変である。あんまり言うものあれだからこの辺はお察し頂ければ幸いである。

「章？、私にキスされてそんなに汗かいちゃったんだ」

「当たり前だろー！」

「いいじゃないの、後で風呂に行くんでしょ？」

「まあ…そうだけどさ」

「さっ、ご飯行こう！」

これが鈴のいいところと言えいいところだ。サバサバしてるやつだと織斑は鈴が転学してきたときに言ってたけど、全然そんなことない。これが鈴の…本当の性格なのかもしれない。そんなことを思っている内に鈴に手を引っ張られて俺は食堂に向かった。

「おいしい」

「食べるときは幸せそうだな」

「当たり前じゃん」

「それもそうだな…」

そんなことを話していると織斑が篝さん、デユノア、セシリアさん、ラウラさんに連れられて食事に来てきた。本当に気がついていないだなんてね、織斑も…鈍感もいいところだな。まあそれはいいとして、織斑は俺達に話しかけてきた。

「よお！、お前等仲良く食事か」

「そうよ一夏、羨ましいでしょ」

「おいおい…なんでそんなこと…」

「石井、顔が赤くなってるぞ！！」

「大きなお世話だ！」

「はははは」

「ところでお前さんもたくさん連れてくるじゃないか」

「ああ、最初はシャルルと一緒に食べたいって言ってたんだけど、そこに偶然篝とセシリア、それから

ラウラが来て一緒に食べようって事になったんだよ」

「へ」

俺は普通に相槌を返したが心の中では

” 織斑：それは偶然じゃなくて必然”

なんてことを思っていた。

「それでは私たちは石井さん達のお邪魔にならないようにあちらで頂きませんか？」

「そうだな、それじゃあ石井、鈴。ごゆっくりな」

「ああ…」

そう言うとき織斑は全員に話しかけられながら向こうの方へ行ってしまった。さすがにこれぐらいの配慮というか良心というかはあるようだ。

「よかったね、みんな私たちの空気を…」

「読んでくれたみたいだからな」

とその時、布仏さん、鷹月さん、谷本さんのいつも三人組が何かを持って俺と鈴の座つているところに駆けつけた。

「はあはあ…ここにいたのか」

「探し…はあはあ…たんだよ」

「ホントだよ、ここに来るまでになんか走っちゃったんだから」

「どうしたんだい3人とも」

「これ見て」

そう言いながら布仏さんは俺に新聞を手渡した。

「これ：読売新聞に朝鮮日報だね」
チヨソニイルボ

朝鮮日報というのはまあ…日本で言うところの読売新聞のようなもので、それこそ韓国では有名な新聞である。というか知らない人なんて殆どいないだろう。

「あれ？。石井君ってこの文字読めるの？」

「うん。友達に韓国人がいる話はしたよね、前？」

「そうだったね。それでねその新聞と読売新聞のスポーツ欄を見て」

「スポーツ欄？」

そう言われてスポーツ欄を見てみることにした。

「へ、またMBC（LG）がヘテ（ KIA ）に負けたんだ」

「章？！、そこじゃなくてその下よ」

「その下？…ん？！」

俺はビックリした。野球の試合結果に負けず劣らずの大きさで

”李承？内野手と朴賛浩投手がIS学園に計6億5千万ウォンの寄付”

と書かれていた。読売新聞にも朝鮮日報ほどの大きさではないが”オリックスの李承？と朴賛浩がIS学園に5000万円の寄付”と書かれていた。

「一体、どうして？」

俺はみんなに聞いてみた。勿論の事だがまともな返事が返ってくるはずがなかった。

「でも…今度の来賓で分かるんじゃないかしら？」

「来賓？」

実を言うと今度のソフトボール大会には来賓が来ることは確定しているのだがまだそれが誰なのかは分からなかったのだ。でも今日のこの新聞を見て何となく分かった気がした。

「章？、アンタっていろんな人の力になってるみたいね」

「ああ…そうだな」

俺に新聞を届けると安心した顔で例の三人組は帰ってしまった。さすがは空気を読んでくれるだけのことはある。

「料理が冷めちゃうわね」

「そうだな」

俺達はそんなことを話すと再び食事を取り始めた。

54話 新聞（後書き）

今回初めて登場しました。‘ヘテ’と言う球団は現在韓国のプロ野球チームの一つであります。‘起亜・タイガース’の前身の球団です。10回韓国シリーズを制している名門球団です。有名な選手としては日本の中日ドラゴンズでも活躍しましたイ・ジョンボム選手などが在籍しています。

また今回の為替レートは 1円＝13ウォン とさせて頂きました。

55話 アンパイヤ

それから数日が経過して、いよいよソフトボール大会の日となった。天気は快晴。試合には絶好の日だ。ただ：

「暑い」

「我慢しろ鈴。はいこれ」

「ああ、ありがと」

「無理すんなよ？」

「う、うん…」

臨海学校は再来週だから予定は目白押しだ。7月に入ったらばかりなのにとってもなく暑い。今日の気温は気象庁の発表によれば最低気温が25度、最高気温が30度を超すそうである。しかも今年初めての猛暑日になるかもしれないとのことだ。その所為もあって鈴は昨日俺と一緒に9時間近くゆっくり一緒に寝たのにダウン寸前である。俺は別にこれぐらいの暑さでへばることはない。それにしても鈴が…

「ううん…ううん…」

とっても辛そうに見える。多分ベンチの中でもきついのかもしれない。俺はひとまず嫌がる鈴を保健室に連れて行った。

「どうですか、先生？」

「そうね…試合はいつからなの？」

「第2試合なので後1時間半くらいは時間があります」

「そう。ここはクーラーもあるからそれまでここにいれば大丈夫でしょう」

「そうですか。わかりました。それでは、よろしくお願いします」

「はいはい。何せ、あなたの‘お嫁さん’ですものね」

「先生?!」

「この学校の新聞って興味深い記事が多くて、私大好きなの」

「ああ、なるほど」

俺は鈴を安心して先生の元で看病して貰うことが出来るような気がした。鈴はと言うと…

「章?、行っちゃうの?」

と寂しそうに俺に話しかけてくる。まるで子供のように。

「また後で戻ってくるから、まだ休んでろ」

「うん…必ず迎えに来てね」

「当たり前だろ?」

俺は実を言つとこの後審判のお仕事があるのだ。勿論、専門の資格を取っているわけではないが、‘ストライク’と‘ボール’の判定や基本的なルールは知っているから問題ないだろう。これは試合の公平性を尊重した結果各クラスから審判を立てることになったからであり、俺は全会一致で審判に任命された。

「うん…それじゃあ私、ゆっくりしてるね」

「ああ」

俺は早速試合会場に向かった。今回の試合ルールは総当たり戦なのだが、面白みをつけるために予選リーグ、つまり各学年ごとの試合には敗者復活戦が設定された。この学校、伊達に広くないだけのこととはあつてグラウンドが2つ、3つ固まつてあるから一気に各学年で試合を行うことが可能なのだ。一つのグラウンドでは本当なら2試合同時に開催出来る余裕があつたのだが第1試合だけは各学年で1試合ごとになったのだ。勿論この試合にはフェンスがついていてホームランなども当然存在する。最初の試合は2組対3組だ。これで負けたチームが俺達がこの後やる4組とのどちらかともう一度試合をして勝てば1位のチームを蹴落とす事が出来る。まあ早い話が下克上だ。最下位だからと言つて希望を捨てることもなく、1位だからと言つて安心していても迂闊には出来ないのである。

「プレイ!!!」

俺はこの試合は主審を行うことになった。早速俺は試合開始のコールをした…。

.....

「おお、先輩、始めましたね」

「ああ。石井が審判をやるみたいだな」

「ええ」

「ほお…噂では聞いていたがあの少年が石井君というのか」

「ぺつ、白監督^{ペク}！！」

「おお、立派になったなあ。まあ最近はちと冴えてないみたいだけ
どな」

「ええ…その節はお世話になりました」

「いいんだ。どれ、実は私もKBO経由で招待されてね。見に来て
みたのだが…なんとも立派な青年じゃないか」

「はい。あれでもう将来の婚約者^{フイアンセ}もいるぐらいですから」

「なんだと！。それは本当なのか？」

「ええ…それ以来石井もますます勉強に野球にと精が出ているそう
ですよ。この間の試験も学年で1位だったとか」

「お前は随分その青年に詳しいんだな、承？」

「はい。彼は私たち家族にとって恩人ですからね。しかも日本にず
っと私もいますから情報ならいくらでも入ってきますよ」

「はっはっは。そうかそうか、どれどれ…石井君が出るのは…」

「この後の試合からですよ。この場所で行うみたいです」

「なるほどな。楽しみだよ、君の期待の新人なんだろ？」

「ええ…彼なら、もしかしたら私の記録を塗り替えられるかもしれないですから…」

「と言うことはまた近いうちに対戦することになるってことですかね？」

「ほお…賛浩、自信はあるのか？」

「いいえ、彼には打たれるかもしれませんね…」

「はっはっは。非常に楽しみだよ。韓国の投打のエースをここまで言わせた石井章？という男がね…」

・・・・・・・・・・・・・・・・

来賓の席を俺は見えていなかったというか角度的に誰がいるのか見えないからよく分からなかったのだがなんと今日の来賓というのはスポーツの世界からは李承？さん、朴賛浩さんの他に白仁天監督の姿もあったのだ。それとは知らずに俺はと言うと

” 鈴大丈夫かなあ？。 あっ！！ ”

「ストライク！、バッターアウト！！」

とコールをしているのであった…。

56話 A b a t m a d e o f w o o d .

いよいよ試合まで後15分、俺は保健室で休んでいる鈴を迎えに行った。

「失礼します」

「あら、石井君」

「鈴の調子は…うぐっ」

「章?!、もう大丈夫だよ」

後ろから狙っていたかのように鈴は俺の背中に抱きついた。

「鈴!!」

「えへへ…章?が来るの、ずっと待ってたんだよ」

鈴がとっても嬉しそうだ。やっぱり自分が迎えに来て正解だったようだ。

「もう大丈夫よ。試合も問題なくできると思うわ」

「そうですか…ありがとうございます。先生」

「さあ行こっ!」

「おいおい…それじゃあまた後で何かあったら来ます」

「頑張つてね。応援してるから」

保健の先生も鈴の元気そうな姿を見てほっとしたようだ。まあ、それは俺も同じだからね。

早速、俺達のチームの試合も始まった。俺が一塁手^{ファースト}で織斑は右翼^{ライ}手だ。

”カキン！！”

「織斑！」

「おう、任せとけ！」

そう言いながら織斑は走りながらボールを捕ることが出来た。さながらイチローである。それが偶然にも二死^{ツーアウト}でやってのけたもんだから俺達はベンチに戻ると織斑のプレーを祝福した。

「やりましたね一夏さん」

「一夏、よく捕れたな」

「いやあ、嬉しいよ。これも、みんな石井に教えて貰ったおかげだ」

「お前が捕ったんだからお前のもんだよ。俺はただアドバイスしただけさ。次は俺が行くよ」

「そうだったな。この回は石井には確実に打順が回ってくるんだっ

たな」

「んなこと言ってる織斑だつて、俺の後だぞ？」

そう、今回の試合は俺が3番で織斑が4番なのだ。昔から俺は4番が嫌いだった…というか3番か6番が俺の定位置だった。本当はこの試合も6番辺りがよかったんだけど…

「章？は3番ね！」

「えっ？。俺が3番…俺は6番で、うぐっ！」

「情けないわね…アンタ、ホントに私の‘夫’なの？」

「そうだけど、あイタタタ」

「いい？。アンタは3番で決定よ」

と言う感じで試合前に鈴が勝手に打順を決めちゃったから俺は3番になったわけだ。と言ってもまだまだ1回の裏だから俺に回ってくるまではまだ若干ながら時間がある。それだけでもまだ救いだろう。

なんて思ってたけど、早速俺にも回ってきた。

「おお、白監督。あれが石井ですよ」

「そうかそうか。ほうお前と同じで左打ちだな。左投げで一塁手。お前にそっくりだなあ」

「ええ…後はホームランを打つだけなんですけどね…」

そんなことをその頃来賓席で白仁天監督と李承？さんは話していた。まだ俺は彼等の存在に気づいていなかった。

「バッター、3番。ファースト、石井」

そうウグイス嬢（といっても放送部の部員なだけだね）がコールすると、場内から割れんばかりの黄色い声援が飛んできた。俺の評判は全学年を通してかなりあるようだ。

「きゃあゝ、石井君、ここに打ってゝ」

とても聞こえてきそうなくらいだ。実際に誰かがもしかしたらそう言っているのかもしれないな。

”よし、鈴のためにも、クラスのためにも、観客のみんなのためにも…打つぞ！”

そう決意をすると俺は一旦ベンチに引き下がった。

「どうしたのよ章??」

「トイレか？」

「ごめんごめん、バット間違えちゃった」

そう言つと俺は木製のバットを取りだした。

「章？さん、それって…」

「そうですよ。木製バットです」

「お前、金属の方が飛ぶのは私たちも知っているぞ」

「そうだぞ。一夏だって金属を使うのにどうしてお前は敢えて木のバットにこだわるんだ？」

セシリアさん、ラウラさん、篝さんは口々に俺にそう言うてくる。
すると

「大丈夫だよ。章？ならちゃんと打ってくれる。だから信じよう」

と鈴が優しくみんなに言った。デュノアも

「そうだよ。ボクも石井のことなら大丈夫だと思うな」

と後押ししてくれた。すると俺を批判していた3人組も引き下がってくれたし、更に応援までしてくれた。俺がベンチを再び出ようとしたとき、俺は鈴に尻を叩かれた。

「イタッ！」

「章?!」

「鈴、お前何をいきなり」

「ちゃんと打ってきてね」

鈴は笑顔で俺にそう語りかけてくる。

「わかったよ」

俺も笑顔で再びバッターボックスに入った。長々としやべってしまつたがここまでに至る時間はわずかに2分半だ。

”ん？”

相手の投手も不審そうに俺を眺めてくる。きっと木製のバットだからだろう。それは来賓の席にいる人たちも同じであった。

「承？、石井のやつ木のバットで入ったな」

「ええ。まさかとは思いましたが、やっぱり本当のようですね」

「俺、初めてだよ。ソフトボール用の木製バットを生で見たの」

「僕も同じですよ」

「これはこれで面白くなりそうだぞ？。なあ二人とも？」

「ええ」

「その通りですね、白監督」

「さながら現役時代のことを思い出すよ。俺がMBCに入団したときもこんな感じのグラウンドだったな。全面砂のね…」

朴賛浩選手、李承？選手、白仁天監督も楽しみのようであった。俺の打席が…。

”カーン！”

俺は打った瞬間に入ったと思った。結果はここに打ってと声が聞こえたような辺りの場所に見事に飛んでいった。俺は学園史に載るであろうソフトボール大会第一号のホームランを放った…。

57話 休憩時間

俺のホームランで先制したこの試合。結果から言うと3 - 2で勝つことが出来た。俺のホームランが相当効いたとのことである。歴史的な初勝利に、俺達は試合終了後ベンチで喜びを分かち合った。

「やったね章？」

「うん、みんな頑張ってくれたからね」

「何言ってるんですか。章？さんのホームランがなかったら私たちは勝てなかったかもしれないのですわよ？」

「そんなことは、あるのかな？」

「どっちにしろ石井のホームランが効いたってことだよ」

「でも織斑だつて」

「いきなり俺に話し振るのかよ？」

「ああごめんごめん。でも織斑だつてタイムリー打ったじゃないか？」

「その後に私も続いた。嫁の後に夫が打てないのは情けないからな」

「一夏、見事なヒットだったぞ」

「ああ。筈と剣道で鍛えていたからな…ありがとうな」

「うつ、いや、そんなことは…」

” 篤さんにとってもこの大会は特別なものになりそうだな…”

その後の試合も俺達は順調に勝ち進めていった…。

敗者復活戦で再び這い上がってきた2組との試合も無事に勝つことが出来た俺達はいよいよ学年対向の決勝リーグにコマを進めた。ここからは各学年が代表として戦うことになるから更に更に勝つことが厳しくなっていく。況してや下級生の俺達が勝つというのは‘下克上’なわけだから、尚更に気合いを入れないと勝てない。事実2年生の審判も俺はしたが…はつきり言ってレベルは高かった。勿論ソフトボール部の部員のおかげではあるだろうが、少なくとも1年生よりは強く思えた。だからといって勝てないわけではなさそうだ。

「鈴」

「ん？」

「体調は？」

「もう大丈夫かな？」

「気をつけておけよ、俺もこの暑さにはさすがに堪えるからな」

「私は今は本当に大丈夫よ。心配してくれてありがとっ」

「ああ…」

鈴にも言ったとおりでこの暑さは俺にも効いている。それも熱中症と言ったような体の内部に関わることでなくて外部、つまり「日焼け」だ。もう肌がヒリヒリしている。今は昼の12時過ぎ。これから休憩を1時間取り各代表チームは試合に臨むわけだ。試合はまず1年生と2年生が試合をして勝者が3年生と戦えるというどこにでもありそうなルールだ。プロ野球のプレーオフを想像してもらえればいいと思う。ここまでの俺の成績は9打数6安打1本塁打5打点と今のところ行くと打率も6割6分7厘（.667）で2位の織斑が9打数4安打2打点だから、学年別では首位打者、打点王を捕ることが出来るし今年は特別ルールでホームランは1本でも打てば表彰を受けるとのこと。今のところホームランを打っているのはソフトボール部部員を含めても俺だけのような。つまりはこのまま後1、2本打つ事が出来れば本塁打王もとれるというわけだ。こりゃ、気合い入れないとダメだよ、鈴のため！ いやいや「妻」の喜ぶ顔も見たいし…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「承?…」

「はい」

「石井君…なかなか上手じゃないか。君たちが指導しただけのことはあるな」

「いえいえそんなことはありませんよ。殆ど承?がやって上げたんですよ」

「何?!」

「いやあ、その…あいつもとっても熱心に練習してましたからね。この間も練習用のバットが折れたから新しいのが欲しいって電話が来ましたし」

「それはすばらしい。それに承？の指導力もかなりありそうだな。ところで…」

「はあ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・

この時まだ俺は気がついていなかった。俺って意外と鈍感なのかもしれないって思われちゃうかもな。でも、それは違う

「どうしたんだよ鈴、こんなところに」

「だってここなら誰もいないんだもん」

「鈴？…」

” チュッ ”

「ホームラン、とっても格好良かった」

「ああありがとう」

「さあ、これからもしゃんじゃん打ってね」

「当たり前だろ？。任せておけ」

今は自分の前にいる‘妻’のために必死だから分からなかったのだ。
遂に試合も面白くなってきた…。

58話 決勝

学年対抗の決勝リーグ、初戦の2年生チームは非常に強かったと言いたいところなのだが対戦してみると意外な事に思ってたほどではなかった。この試合では俺は3打数1安打とふるわなかったものの1安打というのがこれまたホームランでしかもこの試合では鈴が…

「章？はこの試合は6番ね」

「なんで降格なんだよ？」

「7番は私なの」

「はあゝなるほどね…」

と言う何とも言えない采配を織斑先生も引き受けてしまつて、結局俺は6番になったんだけど、俺のホームランに続いて鈴にもなんとホームランが飛び出したのだ。終わってみれば9-2と圧倒的な差をつけて試合を制することが出来たのだ。鈴とのアベックホームラン…これは嬉しかったなあ…。

”ゴツッ！”

「イタッ！」

「もう、何考えてんのよ。チェンジよ」

「おお、ごめんごめん」

時刻はもうすぐ午後3時を指そうとしていた。いよいよ最後の試合、決勝戦だ。その時である。俺は初めて来賓の席に目をやった。

” ツ！！！、李承？さん、朴賛浩さんそれに白仁天さんまで ”

俺は驚いて言葉が出なかった。すると李承？選手が俺と目があつた。

” 李承？さん… ”

” 期待してるよ ”

” はい！ ”

「ねえ！」

「うわっ！、鈴」

後ろから俺は鈴に腰を今度は摩^{さす}られた。何だかとても変な気分だ。

「試合、始まるわよ」

「わかった。行こう」

「この試合は私が2塁なのは知ってるわよね？」

「ああ。俺の近くでやりたいって言ってなかったっけ？」

「そつ。だからよろしくね。私、頑張るから」

「ああ！！。楽しみにしてるよ」

「うん！」

この試合のオーダーは以下の通りだった。

打順	名前	ポジション	守備位置
1番	布仏	サード	二塁手
2番	谷本	キャッチャー	捕手
3番	ラウラ	レフト	左翼手
4番	織斑	ライト	右翼手
5番	篠ノ之	センター	中堅手
6番	石井	ファースト	一塁手
7番	凰	セカンド	二塁手
8番	鷹月	ショート	遊撃手
9番	セシリア	ピッチャー	指名打者
投手	デユノア		

さてさて、いろいろ悩んだのだが外野3人組は、みんな肩が強そう
な人たちで集めたから問題ないだろうし、内野は…特に気をつけな
ければいけないさそうなどころはない。しっかり者の鷹月さんならき
っとボールをさばいてくれるだろう。唯一心配なのはのほほんそう
な布仏さんなのだが今までの試合からして問題は特になかったから
これも大丈夫そうだ。一二塁間は俺と鈴だから…絶対大丈夫だし、
デユノアは男勝り（これ口では言っていないから大丈夫だと思うけど
…）などところがあるからきつと3年生でもオクすることなくボール
を放ってくれるだろう。

.....

「石井、僕達に気がついたようですね」

「はっはっは。まあいいんじゃないか？。承？と同じで守備も問題ないだろうから」

「だいいんですけどね。緊張してポロリなんて情けないですから」

「賛浩はどう思うんだ？」

「そうですね…彼は凄い上手いと思いますよ。素人にしては」

「そうだな…これは楽しみな試合を見せてくれそうだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなことを話していることは俺には一切聞こえなかった。俺達1年1組は今や1、2年生の観客席から黄色い声援しか聞こえていなかったんだから…。

59話 サヨナラ

俺が野球を始めたのは実を言うと中学に入ってからなのだ。それまでは、野球を‘観た’ことしか無くて‘プレーした’ことはなかった。俺を変えたのはやっぱり李承？選手だったのだろう。この選手は韓国にいた時代からたまたま俺は知っていた。オリンピックなどの国際試合などでは必ずと言っていいほど出てきてはホームランなりヒットを打っていたからすぐに覚えることが出来たし、インターネットという便利なものが存在するこのご時世、いろいろ検索したりして彼のたくさんのお事実を知った。そして俺は、この人に興味というか何かを持ち始めた。そう一番強く思ったときは小学6年生の時、つまり2005年だった。この年は李承？選手が当時在籍していたロッテが日本一になり、李承？選手も日本一への原動力となっていた。もしかしたら、これも鈴の言う‘縁’^{つんめい}なのかもしれない……。

そんなことはさておいて、試合の方はというと0-0で今や9回の裏、時間にして午後4時50分を指していた。もう日もとつくに西日になっていてもうすっかり夕焼け空になっている。この回で決着がつかなかったら優勝は預かりとなってしまうだろう。

「次は章？の番だね」

「頑張つてね章？！！」

「期待してますわ」

「嫁が塁で待っているんだから返さないと承知しないぞ」

ラウラさんの言うとおりで今はワンアウト2塁3塁、丁度織斑と篤さんがヒットで出塁したからこうなっているのだ。

「鈴達に言われたとおりだ。ここはなんとしても帰さないと!!」

「バッター6番、ファースト、石井」

俺が打席に入った瞬間相手の投手の顔が変わった。なんと敬遠をしようとしたのだ。このソフトボール大会にはいろんな特例があつて、その中には敬遠に関しては野球と同じように扱う、と言う条項があつた。少なくとも4球ボールを投げることになるのだ。

”まあ…1塁が空いてるから順当と言えば順当だな。でも…ここで俺があんな子としたらみんな驚くだろうな…”

そう思った次の瞬間、俺は

「タイム!!」

と言い、打席を変えた。俺は今まで黙っていたけど、両打ちなんだ。これは中学の時に左投げ右打ちで試合をしていたところを左でも打つたらいんじゃないかと後輩と先生に言われてそうすることにしたわけで、まあ個人的には李承?さんとも同じだからいいと思ってる。

”それでも敬遠か…でも、甘い!”

俺は3球目のボールを打った。それは見事にセンターに抜けた。俺は敬遠球をサヨナラヒットとしたのだ。それから後のことはよく覚えていない。鈴が駆けつけて俺のほっぺたにキスをすると俺は鈴達

に持ち上げられて中を3回舞った…。

.....

「いい試合だったな、承？」

「ええ。本当ですよ。ところで監督」

「感動は、後でゆっくり聞こう」

「はい！」

「それにしてもよかったな承？」

「はい朴先輩、白監督。今日はありがとうございました」

.....

鈴が言っていたことは間違っていないようだ。

”俺の活躍は人を幸せにする…”

と…。

60話 日焼け

閉会式では俺は再び新聞部のお世話になった。結局この大会、俺の成績は打率15打数10安打、打点は9、2本塁打と俺は暴れるに暴れた。俺は首位打者、最多安打、打点王、事実上の本塁打王それが出来た。別にMVPがたくさんいても俺は構わない。と言うかこれはどうも学校側の配慮なんだそうだ。織斑には敢闘賞が贈られた。事実、安打数、打点が全体で2位だから当然なのかもしれない。

「今の感想を一言」

「嬉しいですよ。こうやっていろいろな賞を頂くことが出来ましたので…」

「鈴さんは？」

「私も同じよ。でも、章？と一緒にMVPを取れたことが一番嬉しいわね」

「よせよ、はずかしいだろ？」

「いいじゃないの！、そんなこと言うんだっら、もっと恥ずかしくしてあげるね」

そう言つと鈴は俺の腕にしがみついてきた。

「おいおい！！」

「お二人とも、お熱いですね。今日の暑さを呼んだのはあなた方なのでは？」

「さ、さあ…まあお天気もこうしてよかったですし…」

「ありがとうございます。それでは今後とも更に‘あつく’なると思います。頑張ってください」

「ありがとうございます」

最後は新聞部にもいじられる始末。俺はこの時ほど辛く思ったときはないだろう。

部屋に戻ると早速俺は風呂に向かった。鈴も…同じのようだ。

「イタタタタ！…！！！」

「どうしたんだ石井？」

俺は風呂の中で悲鳴を上げた。見ると手がとても赤くなっていた。日焼けしたようだ。

「かなり焼けてるな」

「ああ…だからしみちゃってさ…。ごめんな驚かせて」

「気にするなって」

そう言うと織斑は再び湯船に戻った。俺も後を追うかのように湯船に向かった。

「ふう」

「大丈夫か？、無理すること無いんだぞ」

「まあなんとかなるさ」

俺と織斑はその後風呂の中で馬鹿笑いをした。今日の試合を振り返って、ここでは新聞部も来ないから楽しく談話をすることも出来た。

「鈴と一緒にホームラン打ててよかったじゃないか」

「ああ！、あいつもかなりうれしがってたよ」

「そうか…お前達には、あつく、させて貰ってるからなあ」

「それ、新聞部にも言われたよ」

「ごめん！。悪いこと言ったか？」

「いいよ、気にすんな」

「そうか」

俺と織斑はその後もうんな話を話した、来年も同じクラスになったら一緒に優勝を目指そうとここで約束した。

さっぱりした気持ちで俺は部屋に戻った。鈴も同じようだった。先に部屋に戻っているのんびりと本を読んでいた。鈴も意外と本をたくさん読む方だからこれは俺にとっては普通の光景だ。

「ただいま」

「ああ、おかえり」

鈴はそう言いながら本にしおりを挟んで俺のところに駆けつける。

「遅かったね」

「織斑と話し込んでちゃってさ…」

「ふ〜ん」

そういえば鈴の髪型っていつもツインテールだけどうやって風呂上がりの時みたいにストレートにしている姿もかわいらしい。俺は結構そう言うのが顔をに出してしまうタイプなので…。

「何考えてんのよ〜」

と鈴に言われてしまうこともしばしばある。

「いや、なんでも…ぐふっ！」

「言いなさい」

「鈴の髪型ってツインテールでも今みたいにストレートにしても可愛いなって」

「なっ!?!」

「そう思ってたただだよ…」

「そう、ありがとっ」

鈴はそう言いながら俺を引っ張ってベッドに座らせた。

「それじゃあ、今日の優勝を二人で祝いましょ」

そう言いながら鈴はカメラを取り出した。俺はてっきり鈴のものだ
と思って普通に笑顔で捕って貰ったのだが後々になってそれが新聞
部の貸し出したものであることを知った。その時は時既に遅し、再
び俺は構内新聞で恥ずかしい思いをすることになった。ヒリヒリと
肌がしたのだが、それが恥ずかしかったからなのか、それとも日焼
けをしたからなのか、それは俺にも分からない…。

61話 立場

一緒に祝おうと言いながら鈴は、俺の隣に寄り添いながらのんびりと休んでいた。だけど…

”スリッ”

「イタッ！」

”スリスリッ”

「イタタ！」

鈴は俺の日焼けした腕を触ってくる。しかもそれがとてつもなくしみるのだ。

「痛いよ鈴」

「ダメだよ。我慢しなきゃ」

「我慢つて…」

”スリスリスリッ”

「ひぐうつ!!」

何だか変な声を上げて申し訳なく思うが、その文句は鈴に言って頂きたい。俺も逃げように逃げられない。なぜなら鈴が俺の服を掴んでいるのだ。幾らT・シャツをは言えども、ものは大切に使わない

といけないからね。

「章？って、変な声出すんだ」

「感心してる場合じゃないだろ」

”スリスリッ”

「ひゃっ！、うぐっ！」

今度は両手を一気に摩ってくる。これは今の俺にとっては相当きつい。鈴はどのようなかというところ…俺がそういうことをするのもあまりよろしくないから、それを狙ってきつと鈴もしているんだろう。

「鈴は…」

「ん？」

「最近気がついたんだけど…」

「何よ、もったいぶらないでさっさと言いなさいよ」

「俺の事、尻に敷いてるだろ？」

「当たり前じゃん」

「何？！」

俺が不思議そうな顔をしていることが変に思ったのだろう。

「なんか変なこと言った?」

と鈴は当たり前のように言い返してきた。これにはさすがの俺も少し文句を言いたくなった。

「百歩譲って、もう少し否定しろよ」

「うううう」

「鈴さん?」

「ああああもう!!!」

鈴はこういふときは全てを抑えるかのように俺にキスをしてくる。何でもかんでもこうすればいい! ってわけでもある。

「いい?。私がこれからもこうしたいって思ったら、付き合って貰うわよ」

「それはいいけどさ…せめてさする…ひゃっ!!」

俺はしばらくこれに付き合い合わせそうだ。同時に俺が敏感であることにも気づかされた気がした。食事の時間までの後の30分間、俺はずっと鈴の‘餌食’になっていた…。

62話 スーパーゲーム

食事から帰ってくると部屋の前に織斑先生がいた。

「先生、どうかしたんですか？」

「千冬姉…」

「凰、織斑先生だろ？」

「ひゃうつ！」

そう言いながら鈴は俺の後ろに隠れる。そういえば前に織斑が行っていたが鈴も織斑先生のことは知っているようで、しかも苦手なんだと言っていたんだっけ。まあ、俺でも疎^{すく}むときがあるくらいだからおかしくはないだろう。ただ、俺は少し不安に思った。別に先生を待たせてまで何かを伝えて貰うようなことはしていない、そうなるとお説教という可能性もあるのだが、お生憎様そんなことを俺はしていない。早い話が、なんで先生が俺を待っているのが不安なのだ。

「石井。ちょっといいか？」

「どこに？」

「私の部屋だ。心配なら凰を連れてきてもいい、だが凰には幾分つまらんかもしれんがな」

どうやら俺に用事があるようだ。鈴はつまらないと言われても、当

然のことながらついてくる。俺は鈴にメロメロだが、鈴も同じようだ。とりあえず俺と鈴は織斑先生の後について、先生の部屋に向かった。

先生の部屋と言うよりは正確に言うと、その隣にある応接室だった。

「さあ入れ」

「こんな服装でいいんですか？」

「ああ、相手方は構わんと言っている」

「相手方？」

「お前に用があるのは私ではないんだ」

「ああ、なるほど…」

俺と鈴は部屋に早速入った。だが、鈴にはつまらないというのはどういうことなのだろうか…。応接室にはドアを開けてもすぐに中が見られないように、仕切りがあつてそれを抜けると初めて誰がお客様なのか分かるようになっていたのだ。

「失礼します…！！、李承？さん！、それから白仁天さんまで！」

なんとそこにいたのは李承？選手だった。それから韓国野球界で知らない人はいない韓国プロ野球氏でただ一人その名を「4割打者」として残す、白仁天さんの姿もあった。

「こんばんは、石井君と言ったつけ？。なあ承？？」

「はい。石井、今日はお前に白監督が用があるんだ。だからひとまず座ってくれないか？」

「はい。わかりました、鈴！、どうかしたのか？」

そういうと鈴も恥ずかしがりながら仕切りを抜けて応接室のソファの隣の隣に座った。

「はっはっは。これがお前さんの婚約者^{フィアンセ}か？」

「はっ、はい…」

「結構な美人さんだな。どこの出身なんだ？」

「中国の…代表候補生なんです」

「ほう、つまりは国際結婚と言うことになるのか？」

「ええ…そうなりますね。でも、俺はいずれは帰化させるつもりですけど」

「帰化か？」

「まあ、本人の意見に従うことしか俺も出来ないんですけどね…なんせここでは『女尊男卑』ですから…」

「はははは。お前は面白いやつだ、気に入った」

「どうも…ところでお話というのは？」

そう訊くと、白監督もそれを思い出してくれたようだ。

「そうだったな、お前、日韓スーパーゲームって知ってるか？」

「ええ、確か数年前まで行われていた日韓での野球の親善試合ですよね？」

「そうだ。それにお前を招待したくてな」

「招待?!」

「勿論試合に出すわけではないが、ホームラン競争ぐらいならお前を出すことが出来るんだ」

「俺をですか？」

「ああ、日本のプロ野球連盟も構わないと言っている」

俺は知らなかった。これはどうも極秘に動いていたようだ。白監督の話では、どうも俺が日韓の代表候補生になったことに加えて日韓国交正常化45周年を記念しての記念行事も兼ねているそうだ。それで、俺を招待すると言ったことになったようだ。

「引き受けてもらえないか？。俺もオリックスから代表選手として出るから是非とも出て欲しいんだ」

「勿論です。喜んでお引き受けいたします!」

俺は即答だった。こんな素晴らしい行事に自分呼んでもらえる事なんて最初で最後のこともかもしれないからだ。

「ちょっと章？。さっきから何の話してるの？。プロヤグ（韓国語でプロ野球のこと）がどうだとか、スーパーゲームだとか」

一応言っておくと、俺は今韓国語で話している。わざわざ来て頂いてそれに加えて無理に日本語でしゃべって貰うのはあまりにも迎える側として失礼だと思ったのだ。

「ああ、野球の試合に招待してくれるんだってさ」

「ふゝん…私も観に行きたいな」

「聞いてみるよ」

俺は鈴とそう会話をすると思いきや急に白さん達も日本語で話しかけてきた。

「こっちの方がいいか？」

「いえいえ、俺が韓国語で話せばいいことですから…」

「君のフィアンセにも聞いて貰った方がいいだろう？」

「それはそうですね…」

「お嬢さん。彼を野球のホームラン競争に招待しようと思っているんだ」

「そうですか、私も連れて行って…」

「勿論だよ」

すると鈴の顔も一気に明るくなった。そして、俺の肩にしがみつきのながら

「やった、やった」

と大喜びしている。

「り、鈴！」

「はははは。なかなか熱いものを見せてくれるね」

「そんなことは…」

それから俺はたびたび恥ずかしい思いをしながらも話を続けた。最終的にユニホームは後で報告することだが個人的には…

「三星^{サムソン}の古いやつか、MBCのやつがいいです」

「MBCってお前そんなチームも知ってるのか？」

「ええ、白監督も在籍していたチームですし、何よりユニホームが格好良かったんで」

「はっはっは。あの青地に白でSEOULって書かれているやつか？」

「それもそうなんですけど、白地に青でMBCって書かれているや

つが一番…」

「なるほどな。わかった。掛け合ってみるよ」

「すみません。ありがとうございます」

「それじゃあ今日はこの辺でおさらばといこうかな？」

「それじゃあな石井。明後日からまた試合なんだ、昨日が雨で試合中止、それで今日は移動日、明日はロッテとの試合だから来ることが出来たんだ」

「それじゃあ承？選手も頑張ってください」

「お前もな」

「はい！！」

俺は玄關際で承？選手と最後の会話を交わした。

部屋に先に鈴は戻っていた。俺が部屋に入ると飛びつきながら凄い凄いと誉めてくれたことがとっても嬉しかった…。まさか、こんな事になるだなんて…。

63話 休め

その後パソコンで調べたところによると、日韓スーパーゲームは今年一時的に復活する模様でオールスターゲームと並行して行われるんだそうだ。それで、開会式の直後にホームラン競争を日韓から6名ずつ選抜して行うんだそうだ。韓国側からは分かっているだけでロッテ・ジャイアンツの李大浩選手と斗山ベアーズの金賢洙選手が出場するようである。今回は李承？選手は日本選抜として選ばれるんだそうだ。そんな中で俺がホームラン競争に出場出来るというのはとっても嬉しかった。因みに言っておくと、日本側からは今言った李承？選手の他に南海の松中選手、西鉄の中村選手がパ・リーグ選抜で阪神の城島選手、巨人の小笠原選手、国鉄の畠山選手が出るようである。このスーパーゲームは今回は日本国内6カ所を回りながら各地で試合を行うんだそうだ。

「よっしゃー!!、鈴、室内練習場に行ってくるよー!」

「今日はソフトボール部が使うつて言ってたよ」

「何だつて?!」

「急な変更なんだつてさ、なんでも私たちに負けたのが相当悔しかったみたい」

俺は何とも残念であった。学校から帰ってきて早速寮に戻って準備を終えた俺は意気揚々と室内練習場に行こうとしていたから…。

”鉄は熱いうちに打て”

と昔からよく言ったものだがまさにその通りである。もう練習を
たくてしたくてしょうがない。今までは確かに硬球でも練習はして
きたが今までのような生半可な練習じゃあとてもじゃないけどボー
ルを観客席まで運ぶことなんて出来ないやしない。

”観客席にボールを運ぶためには…ひたすらボールを打ち込むしか
ない”

俺はそんなことを思っていた。何よりもまずボールに慣れないとい
けない。と言ってもまだまだし合いまでは1ヶ月と少しばかりある
し、試験対策もまだ問題なさそうだから野球に打ち込めるとい
うわけである。臨海学校の直前と言うことも幸いなことである。直後だ
と疲れが残っているかもしれないからだ。まあこの学校は夏休みが
ずれているから幾分楽なのだが…

「ねえ、さっきから何を考えてんの？」

「あつ、いやいや何でもないよ」

「隠し事はよくないわよ…さっさと言いなさい」

「でも…」

「ほらっ！」

いきなり俺の腹に手を押し込んでくる鈴に俺は対応のしようがな
かった。

「うぐうつ…！、わかったよ。実はさ…」

「ふん。確かにあんたの思ってることも一理あるわね」

「だろ？」

「でも使われてるんだったらしょうがないじゃん」

「まあそれもそうだな…」

「だからさ。こういうときはゆっくり休めてことなんじゃないかな？」

「休む？」

「うん。昨日も疲れてたんだし、今夜はゆっくり休みなよ。無理してケガでもしたら私も悲しい…」

「鈴…それじゃあそうするか？」

「うん！。ところで章？」

「何？」

「物理でわかんないところがあるんだけど…」

”なるほどね、俺に教えて貰いたかったからこんな風な誘導アプローチをしたのか…まあこれはこれでいいか！”

「よし、それじゃあ教えてあげるよ」

「うん！」

俺と鈴はいつものテーブルに向かい合わせて座り教科書を開いた…。

64話 International

鈴は結構やる気になれば出来るタイプの人間だと思う。と言うか吸収率がとつてもよくて、一を聞いて十を知る、のようなタイプなのだ。

「これって、こういうことなの？」

「そうそう。積分すれば公式がちゃんと導き出せるんだけどね…」

「積分？」

「まあそのうち習うよ」

「そっか、わかった」

「うん、それじゃあ次は何？」

「もう物理は終わったよ。次は国際関係論かな？」

国際関係というのはいわゆる現代社会論に近いものだ。近年の世界情勢について学ぶ教科でこの学校では数少ない文系教科の一つを形成している。他にあるのは、国語と英語、地理、歴史、それとこの国際関係論だ。

「この…ヨーロッパにおける領土問題だっけ？。それって具体的にどんなのがあるの？」

「そうだね…一番有名なのはやっぱり、コソボ、かな？。日本は独

立認めてるけど。後はアイルランドとかかな？」

「ふん。章？って何でも知ってるよね」

「俺地理が得意だからさ…、こつ言つの得意なんだ」

「凄いな。私はてんでダメだよ」

「まあまあ、試験だけが全てじゃないよ。お前にはまだISじゃ勝てそうもないし、それに…いやなんでもない」

「何？」

「まあ後で話すさ」

「そう…。それでコソボって言うのはさっきの話に戻るけど、確かユーゴスラビアの一員だったんじゃないかっただけ？」

「そうそう、よく知ってるじゃん。ユーゴスラビアが解体してから、コソボはセルビアに支配されていたんだけど2008年2月17日に初めて独立宣言をしたんだ」

「そうなんだ。でも、セルビアはどうなの？」

「当然嫌がつてるよ。コソボは鉱物資源が豊富だから。まあほかにもたくさんあるけど」

「そうなんだ。凄い、凄いよ章？！」

「そうか？」

ここまでべた褒めされると俺も照れてしまう。

「私も頑張つて章？みたいなになりたい。どうすればいいかな？」

「本でも読めばいいんじゃないかな？。ユーゴスラビアだとかの領土問題だったり、歴史小説なんかを読んではきつとよくなると思うよ。」

「わかった。頑張つてみる！！」

「それじゃあ、一段落したし…晩ご飯にでも行こうか？」

「うん！」

鈴は飛び上がったと思ったら、俺に右腕に抱きつきながら食堂に向かった。そういえばデュノアも最近ようやく箸が満足行くように持てるようになってきた。さすがは俺の見込んだとおりだ。今回は何も言わないでおこう。

”雄弁は銀、沈黙は金”

だしね…。

その夜俺の隣では鈴が寝させてくれない。実は…さっき俺はお前に勝てないのはESだけじゃなくて何だかいかかわしさも言ったらこの有様なのだ。雄弁つて銀で済むはずもない…俺は雄弁は鉄くらしいと思う。沈黙が金なんだったら、それぐらい格差があってもいいと思う。

「ひゃう！。鈴、もう勘弁して…」

「やあだ」

「ひゃっ…っげっ！」

「もう、章？があんなこと言っちゃうからいけないんだよ」

「止めてくれ。俺には抵抗が出来ない…」

「まあいつか。それじゃあ今日の罰として私を抱きしめながら寝てね」

「はい?!」

「じゃなきゃあどうなるか分かってるよね？」

「わかったよ…」

そう言つと鈴は安心したように目を閉じて俺に抱きつきながら寝息を立て始めた。俺も眠かったから急いで眠りに就くことにした…。

65話 790M

本当は今日こそ野球の練習をしたかったのだが：俺は今大磯を9時10分に出る普通電車東京行き790Mに乗っている、鈴、織斑、デユノアと一緒に…。

「助かったよ、章？達も一緒に行ってくれるからさ」

「悪いな石井、せつかくのところをお邪魔しちゃって」

「いいのよ、二人とも。ねっ、章？！」

「まあ…そうだな」

順番に話を説明すると今日は土曜日で学校が休みな訳だ。ソフトボール部も基本的には土日に活動をしないから室内練習場はがら空きというわけで織斑先生の許可さえ取れば、いくらでも練習が出来るのだ。だから朝食を済ませたらすぐに練習をしようと思っていたのだが…

・・・・・・・・・・・・・・・・

「うん」

「ああ、おはよう鈴」

「うん…今、何時？」

「おっと！、もう6時だね」

「まだ早いよ、一緒に寝てよ」

「何言ってるんだ、いつもなら寝坊してるぞ」

”グイッ”

俺は服を引っ張られて再び強制的にベッドに倒された。

「寝てよ…」

「おい！」

「ねえ！」

「わかったよ…ところで、今日はお前予定あるのか？」

「一緒に買い物に行きたい」

「買い物って…どこに？」

「実はね、一夏とシャルロットと一緒に買い物に行くんだ」

「へ、どこに？」

「東京」

「遠いな…それじゃあ気をつけてな」

別に鈴が買い物に行こうと俺は気にしないし、況してや織斑とデユ

ノアも一緒だから尚更安全である。俺は：寂しいけど一人で練習出来ないこともないから鈴のことを思いつつ練習しようと思っていた。だけど鈴はその気ではなかった。

「私に何かがあってもいいの？」

「はっ！？」

「章？も一緒に決まってるでしょ」

「一緒に行くなんて言っていない…うん！！」

「わかんないなら、分かせてあげる」

結局その後はメロメロにされて野球の練習なんか出来なくなってしまったから、一緒に買い物に付き合うことにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

というわけなのだ。買い物の内容は今度の臨海学校に備えての水着が欲しいとのことで別に俺は遊び用の水着をもう持っているから別にいいんだけど、鈴のこともあるから付き合わないと何かと文句を言われそうだ。まあ明日は練習をさせてくれるって言ってるから俺もあんまり深刻には思っていない。たまにはこういう日もあっていいはずだ…多分。俺はあの後7時まで寝させられて、朝食を済ませてシャワーを浴びてさっぱりした気分で行けることにしたんだけど、まさか朝一であんな目に遭うとは思っていなかったなあ…。

列車は藤沢、大船、横浜、川崎と順調に東京に向かって進んでいく。と同時に東京に近づくにつれて混雑も酷くなっていく。休日と

は言っても東海道線は観光客で混み合うのだ。まあ俺達が乗っているのがグリーン車だったのだが幸いした。運悪くE231系だったがまあ他の人もいるから贅沢は言えない。

「この電車はグリーン車って言うんだよね？。僕の国で言うところの1等車に近いかな？」

「私の国だったら軟座ルアンツォね」

「ああ…確かフランスは2等級制で、中国はかなり差があるんだよね？。確か…硬座、軟座、硬臥、軟臥の4種類の他にもその上に高級軟臥とか言う特別車両があるんだっけ？」

「なんでそんなことまで知ってるの？」

「俺、鉄道も好きだから…。本当は鉄道学校に行きたかったんだ」

「あそこか？！」

「ん？。一夏は知ってるの？」

「ああ、確か鉄道員の養成学校で競争率が毎年20倍くらいあるところだよ？」

「そんなところに？。まあでも章？の頭なら行けなくもないか」

「まあね。でもこうなってよかったのかな？。あのまま鉄道学校に行ってたらこうしてみんなにも会うことが出来なかったし…結果オライってところさ！」

「そうだな、章？もこうして変わったんだしね」

「そうそう、それに私だって…」

鈴は顔を赤くしている。そのまま俺の腕にしがみつく。

「おいおい、ここは一応列車の中なんだからさ…」

「ダメ。東京までこうさせて貰うわ」

「そんな〜」

俺と鈴のそんな風景を見てデュノアと織斑は笑っていた。電車は、もう多摩川を越えて品川しながわに向かっていた…。

66話 Shibuya

790Mは東京駅とうきょうに定時定着した。日本の鉄道の正確さは世界中の人から見たら凄いようだ。まあヨーロッパは時刻表に書いてある時間の±10分が‘定刻扱い’になるからね。

「それじゃあ俺達は別のところに行くよ」

早速織斑はホームに降りたつと、俺と鈴に向かってそう言った。

「ちょっと待て、それはどういうことだ？」

俺は慌てて聞き返す。俺はてっきりみんなで買い物に行くものだと思っていたのだが…。

「だってボク達がいたら、二人の邪魔になっちゃうでしょ？」

「そんなことは…」

俺が慌てて否定しようとするのと鈴は俺と手をつないで

「行こ、章？」

と俺を急かした。鈴もそう言ってるし、拒否したらどうなるかは大体見当がついているから俺は折れて織斑達と別れた。

俺は手をつないで山手線のホームに向かったのだが、何だかとても恥ずかしい。鈴は…嬉しそうなんだけど

「なあ鈴」

「ん？」

「恥ずかしいよ…」

「私は全然気にしないよ。章？と手繋げるんだったらいいよ」

「そんな…」

「ほらほら電車来たよ」

話をしていたら山手線の電車がやってきた。俺の手をぴっばる用に
して鈴は山手線の電車に乗り込んだ。

「行く当てはあるのか？」

「ない」

「ないって…」

「大丈夫だよきっと」

「そうか？」

俺は半信半疑のまま鈴に手を引っ張られながら連れて行かれた。

降り立ったのは渋谷駅^{じゆうや}だった。たしかにここなら水着なんていくらでも手に入と思う。

「行こう章?!」

「う、うん…」

俺は鈴に手を引っ張られてどんどん渋谷の町を進んでいく。俺は初めて渋谷に来たので勝手が分からないが鈴はとある水着のショップを見つけた。

「あつ、あそこならいいかも」

「そうか？」

「いこいこ!」

「おいおい」

俺は鈴にまたまた引っ張られてその店の中に入っていった…。

67話 再会（前書き）

皆様、作者でございます。最近、更新が不規則になってしまつて申し訳ございません。これからも頑張つていきますのでよろしくお願いいたします。ところで、昨日明治神宮のバッティングセンターに行つた際、ストラックアウトを2度ほどやってみたのですが、最低速度が65?でした。これから18になろうとしているのにこの球速つて…。

さてさて、前置きが長くなりました。それでは本編をどうぞお楽しみ下さい。

67話 再会

これが女のカンって言うのかよく分からないけど、中に入ってみるとステキな今風の店であることは俺にも一応は分かった。だが問題なのはそこには基本的に女物しか売っていないことであつた。勿論カップルで来ている人たちが大半だったから、俺もその中の一員だと思えばそれだけで済んだことなのかもしれないが、俺の性格はお生憎様偏屈だからそんな風に思うことなんて出来ない。

”よく、みんなこの環境に耐えられるな…”

「ねえ章？。こんなのどう？」

「…」

俺は何だかボーツとしてしまつて鈴の声が聞こえなかった。だからであろう、鈴はいきなり俺の脇腹をつねってきた。

「イタタタタ！」

「もう！。真面目に聞いてよ、章？だって私の可愛い姿みたいでしょ？」

「まあ、それはそうだけど…」

「じゃあこれは？」

そういうと鈴はもう一つ水着を取り出した。どちらも、まあ…詳しくは分からないが、いわゆる‘今流行しているやつ’である。どっ

ちを着る姿を想像しても…可愛い。

「章？、鼻血」

「何?!」

俺は慌ててティッシュで鼻を拭く。確かに鼻血が出ていたみたいだ。

「ごめんごめん」

「もう…何考えてんのよ」

「だって、お前の水着姿想像したら…こうなることぐらい想像出来ないか？」

読者の皆様がそう思ってくれることを期待したい。

「嬉しいけど…ここはお店の中なんだよ？」

「ごめんごめん。もう収まったから…それでそのどっちかがいいのか？」

「うん。私はこのどっちかで決めたいんだ」

形は殆ど変わらず、色がオレンジか赤色かのどちらかである。

「俺はオレンジがいいかな」

「そう?。章?がそう言うんだったらそうする」

「いいのか？」

「何が？」

「いや…俺が決めちゃって」

「もう鼻血を出さないんだったらね…」

俺は何とも言えない気分に陥った。

店を出て俺と鈴は再び山手線に乗り込んだ。俺は渋谷という町はあんまり好きではない。と言つのもゴミゴミおかしなすぎているのだ。これから行く御徒町も確かにそうではあるが、こことはまた次元が違う。

「章？、どこへ行くの？」

「お前の成績がよくなるようにさ…」

「？」

「とにかくついておいで」

「う、うん」

俺と鈴は御徒町駅から…文京区の方へ続く、本郷通りだっけまあその道を進んだ。そう、俺は鈴を湯島天神に連れて行きたかったのだ。

「じじって？」

「まあまあ、お参りしておけばいいことあるかもしれないぞ?」

「どんないいこと?」

「天神様は昔から日本では‘学問の神’なんだよ」

そう言うと鈴は、急にやる気を出して賽銭箱の方へ向かった。俺も実を言うと幾らチョロかったと言ってもここには受験前に何度もやってきたのだ。日本人の習性かな?。すると、偶然なのか必然なのか、それとも狙っていたのかは分からないが織斑とデュノアにあった。

「おい二人とも!」

「あつ!」

「石井に鈴!。どうしたんだよ?」

「いやあ…まさか会うなんてね」

「ボク達も今来たんだ」

「へへ、この後はみんなで回るか?」

「いいところでもあるのか?」

「まあね…」

「わかった。石井にそれじゃあ任せよう」

「おう！」

俺達は再び4人に戻ると鈴のいる賽銭箱に向かった…。

67話 再会（後書き）

ところで、皆様はいかがでしょうか？、シャルロットさんなりセシリアさんなりラウラさんなり箒さんなりに水着を持ちどれがいいかと聞かれましたら…。

68話 Asakusa

湯島天神は思った以上に鈴にもデュノアにも刺激的だったようで、鈴はお守りも買ってた。勿論ながら‘学業成就’のやつだ。まあこの後はお昼時だからどこかへ行かないといけないわけだが、鈴もデュノアも少しくたびれているようだ。

「章？～お腹減ったよ～」

「ボクも～」

「悪いな、それじゃあ昼でも食べに行くか？」

そう俺が聞き返すと二人は

「「うん」」

と同時に答えた。どうやら織斑も俺についてきてくれるみたいだ。

早速俺達はバス停に向かった。ひとまず俺は浅草あさくさにみんなを連れて出ることにした。鈴も見る限りだところちの方に来るのは初めてのようで、何もかもが新鮮に見えているようだ。織斑は何となく予想がついていたようだ。

「なあ、お前浅草に行くつもりか？」

「そうだけど、ダメかなあ？」

「いや、そんなことはないさ。鈴とも来たことがないからな。シャ

ルルはもつとそうだろ？」

「ああ。丁度いい機会だしね」

「二人で何話してるのよ」

「まあまあ気にしないで……」

二人は俺達の会話を不思議そうに眺めていた。

バスは早速浅草の雷門の近くにある停留所に到着した。早速デュノアは雷門の提灯を見ただけで感動というか目を輝かせていた。この後俺達は天麩羅を食べただけ、鈴もデュノアもとっても気に入ってくれたようだ。

「ああーおいしかったよ。ありがとう章？」

「いってことよ。俺はここじゃないけど下町出身だから」

「下町って？」

「東京では昔、こっちの方を下町って呼んでたんだ。ほら、さっき山手線に乗ったでしょ？。山手線の山の手って言うのは昔の東京……つまり江戸のことだけど高台にあった武家地域をそう呼んでいたんだ。逆にこっちの低地にあった庶民の居住区を下町って呼んでいたわけ」

「へー、凄いなー。パリとは全然違うよ」

「まあ、国が変われば文化も変わっちゃうからね」

「そういえば石井。次はどこに行くんだ？」

「うーん、あんまり時間がないから浅草寺せんそうじくらいしか行けないかな？」

「よし、それじゃあ行くか」

俺達はみんなで仲良くそんな話をしながら仲見世を通りつつ本堂の方へ向かった。

本堂の近くで俺はいつもの通り手を洗い、そして煙を被った。この一連の流れは織斑はまだ理解してくれたようだが、他の二人はどうもじっくり来ないらしい。確かにフランスとも中国とも考え方が違っているから当然だろうな。

「この煙でどうすればいいの？」

「自分の頭に被らせて、頭がよくなるって言われてるんだ」

そういうと二人も一心不乱に頭に煙を浴びせた。ただこれ、あんまりやり過ぎると酸欠になったり、咳き込んだりする。

「あんまり浴びると…」

「ゲホッ、ゲホッ」

「ううん、章？」

「お、おい！！。シャルル、鈴、大丈夫か？」

「だから言わんこつちやない…」

まあ二人が落ち着きを取り戻すのにもそう時間はかからなかったことが幸いだった。

浅草寺でのお参りの後、俺達はお神籤をした。浅草寺でお神籤をすると俺は決まってよくない結果になる。

「今回は…ふう、末吉か」

「俺は大吉だ！…！」

「何ッ?!」

「すごい一夏。私は…私も中吉だよ」

「ボクは小吉」

「てことは俺が一番悪いのか…」

俺が落ち込んでいると、鈴が

「大丈夫だよ。私のを分けてあげるから」

と言って慰めてくれた。まあさすがは‘良妻’ですよ…。

そんなこともありつつ、俺達は再び東京駅に向かった。この後の東海道線の電車は大磯には止まらない快速アクティーだからそのまたあとの普通列車に乗ることになる。平塚駅で接続することはする

のだがわざわざ乗り換えるのも面倒だから、東京駅で待つことにしたのだ。すると

「お客様にご案内いたします。今度7番線に到着いたします、折り返し15時42分発の普通熱海行きですが。車両古書の影響によりまして、本日に限り2ドア車での運転とさせて頂きます。また、入線の時刻を過ぎております。大変深くお詫び申し上げます。まもなく電車が到着です、危ないですから黄色い線の内側までお下がり下さい」

とのアナウンスが…これはもしかして…！。

「おお…215系か」

そう、入線してきたのは215系、オール二階建ての近郊型電車で最近はライナー列車とホリデー快速でしか運転されていないから乗るのが大変難しくなってしまったのだ。今回は215系のグリーン車に乗ることが出来る。俺の気分は最高だった。

「章？、どうしたの？。そんなにうきうきして」

「まあね、早速お神籤の効果が出たみたいだよ」

「はあ？」

「まあまあ。乗ろうぜ」

「そうだな。よし、それじゃあシャルル。行くか？」

「うん」

「さあ鈴も…」

そう言う前に鈴は俺と手をつなぎながら

「わかってる」

と言い、笑顔のまま俺を車内に引っ張った…。

69話 3時は朝？

織斑と俺以外、つまり鈴とデュノアは眠ってしまっている。よっぽど嬉しくはしゃいでいたのだろう。電車は定刻通りに東京駅を出発し、今は川崎を出た辺りだ。

「次は横浜、横浜でございます。根岸線、横須賀線、湘南新宿ライン、京急線、東急線、みなとみらい線、相鉄線、横浜市営地下鉄線はお乗り換えです」

そんなことを思っていると車掌がそうアナウンスをしてきた。グリーン車は意外にも空いていてまだ俺達以外には数名しか客がいない。でもきつと横浜駅からたくさんの人が乗ってくるだろう。

それにしても鈴の寝顔もデュノアの寝顔も…

「可愛いな…」

「はは。お前がそんなこと言うなんてな、意外だよ」

「自分でもよくわかんないんだけどね…意外か？」

「ああ、とつても」

「そうか。まあ、二人とも今日はしゃいでいたからね」

「確かにな」

「喜んでくれたんだったらそれでいいか？」

「勿論」

俺達は流れゆく車窓を眺めながらそんな会話をしていた。そういえば、ここに来るときは俺は普通車だった…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ご乗車ありがとうございます。この電車は普通静岡行きでございます。終点の静岡まで各駅に停車いたします。次は横浜、横浜です。根岸線、横須賀線、京急線、東急線、みなとみらい線、相鉄線、地下鉄線はお乗り換えです。ここで主な駅の到着時刻をご案内いたします。次の横浜には5時47分、大船6時4分、平塚6時22分、国府津6時35分、小田原6時45分、熱海7時10分、沼津7時38分、富士7時59分、興津8時28分、清水8時33分、終点の静岡には8時45分、8時45分の到着です。次は横浜、横浜です」

俺はこの日は最寄り駅を4時47分に出る始発電車に乗り込み学校へ向かった。途中の駅で乗換をした後、この東京駅5時20分発の普通電車静岡行き321Mに乗り込んだわけだ。この321Mというのは、かつての夜行快速ムーンプライトながらの折り返し電車で、ダイヤ改正でムーンプライトながらの定期運行が終了した今もJR東海の特急車両である373系で運転されている。早い話が普通乗車券で乗ることが出来るいわゆる「乗り得列車」というわけだ。この電車は大磯駅に6時26分に着くから好都合だった。俺は入学式の日はこの学校に到着したのだ。本当はもう少し前から入寮出来たみたいなんだけど、面倒だったし、まだその頃は女嫌いだったから行きたくもなかった。だから、入学式の日に行くようにしたのだ。

この普通電車は東京駅から乗り継いでいけばその日のうちに山口
県の徳山とくやままで行くことが出来る（まあ徳山に着くのは夜の11時5
9分だが…）から休みのシーズンになると驚異的な混雑になる。こ
の日も春休み明けと言うこともあってそこそこ混んでいた。

” やれやれ… あんな学校に入学か… 1時間しかないから寝ように寝
れないしなあ… まあ本でも読んでればすぐに着くかな？”

俺はそんなことを思い、手元にあった鉄道の本を読むことにした。
朝日が差し込んできて車内はオレンジ色に照らされていた…。

．．．．．

格好つけて言えばこんな感じだ。確かこの時は釣りの客が多かった
気がする。

「どうしたんだ？。考え込んで」

「いやな… 入学した日のことを思い出してね」

「そつえばお前は始発電車で来たんだっただよな？」

「ああ。駅前の喫茶店で時間をつぶしてたんだ。朝ご飯も食べてな
かったしね」

「なるほど、よければその時の話を聞かせてくれないか？」

「いいよ…」

俺は織斑に上に書いてあるようなことを全て言った。

「…というわけなんだよ」

「お前、最寄り駅を4時47分に出る電車に乗ったって言ったけど」

「そうだよ。あの日は確か…3時半くらいに起きたかな？」

「3時半!!!」

織斑達は確におかしく思うかもしれないが、俺にとっては一応朝の範囲内だ。俺が言う朝というのは3時から10時までだ。えっ？、3時は深夜じゃないかって…はて、なんのことかな？。まあ冗談はさておき織斑は驚いていた。

「まあ、鈴も同じ部屋になった頃は辛そうだったからな。俺の生活サイクルに無理矢理付き合わせちゃったから…」

「そうだったのか、確かに転校してきてしばらくは眠たそうだったもんな」

「ああ…でも今はそんな生活にも慣れてくれてるさ」

「いい夫婦だな」

「おっ、おいおい！」

「ははは。冗談冗談」

俺達は小さな声で笑いながら、話を続けた。

「まもなく横浜、横浜でございます。根岸線、横須賀線、湘南新宿ライン、京急線、東急線、みなとみらい線、相鉄線、横浜市営地下鉄線はお乗り換えです。降り口は左側です。ただいま横浜駅では工事を行っております。足下に十分ご注意ください。ご降車下さい。まもなく、横浜、横浜です」

車掌のそんな声が聞こえてきた。鈴とデュノア？。勿論、まだスヤスヤと眠っていた…。

70話 極秘中の極秘事項

電車はその後も快調に走り続けた。

「次は平塚、平塚でございます。平塚を出ますと、次は大磯に停まります」

車掌のアナウンスが聞こえてきた。本当は俺も終点までこの215系電車を楽しんでいたんだけど、そんなことは出来ない。門限には余裕があるとは言え、みんな疲れているから俺だけ寄り道をしていることなんて出来ない。明日も休みであることに変わりはないけど、俺も明日は野球の練習をしたいからね。

「もうすぐ大磯だな」

「ああ。織斑、デユノアを起こしてあげなよ。俺も鈴を起こさないといけないから」

「オッケー」

そう確認を取ると俺達は2人を起こした。

「おい鈴。もうすぐ着くぞ」

「ううん…」

「おい！。置いてくぞ」

そついうと鈴は眠そうに目を開けて起きた。

「ふわあ…そんな言い方ないんじゃない？」

「まあまあ、気にするな。それより、荷物は大丈夫か？」

「うん。買った物もあるし、問題ないよ」

「そうか、それじゃあ次の次だからのんびりしてるか…」

そういえば、日韓スーパーゲームの韓国側の出場選手が徐々に明らかになってきた。まず投手はSKとLGから韓国代表のエースである金廣鉉投手と奉重根投手が来ることは分かった。日本からも広島カープの前田健太とか楽天の田中将大とかが出場することが分かっているから、スーパーゲームの相応しい試合を楽しむことが出来そうだ。その中にホームラン競争ではあるものの、俺を呼んでもらえると言うことはとても光栄に思える。

「明日はどうするの？」

デュノアは俺がそんなことを思っていると不意にそう質問してきた。

「一日中野球の練習かな？。明日日曜日だし、それに…」

「それに？」

「月曜日の授業は疲れて寝ても、取り返しがつくしね」

月曜日の授業は簡単だから別に一度や二度授業をサボったところでどうってことはない。ただ、唯一の問題点と言えば月曜日には山田先生の授業があることと隣の席が鈴で起こされないかどうかと言う

くらいだ。山田先生自身は問題がないんだけど、副担任から担任への報告されるだなんて誰だって分かる。織斑先生が授業をサボっているのを許してはくれないだろう。況してや、寮長だからお説教、ヘタすればんこつの数発と言うことも考えられる。そんなことはイヤだ。とそんなことを思っていたその時。

”ボカツ！”

つと、鈴が俺の頭を軽く平手打ちした。

「何するんだよ！」

「寝ようだなんて…そんなこと、妻の私が許さないからね」

予想通りの返しが来た。でも、俺にも考えがないわけではない。実を言うと山田先生の授業は1時限目でホームルームの直後、丁度席替えをしてもいい時期だから頼み込めばさせてもらえるかもしれない。まあ‘親睦を深めるため’とかって言うておけば、織斑先生も悪くは思わないだろう。別に織斑と離ればなれになったところで、今の俺は孤立するような心配もない。この間のソフトボール大会で一気にみんなとの仲もよくなったからね。

「冗談だよ。そんなことよりほら」

俺はそんなことを思いつつも上を指さした。

「まもなく、大磯、大磯です。降り口は右側でございます」

気がつかないうちに電車は平塚駅を発車して、もうすぐ大磯という

ところまで来ていたようだ。勿論、今のことは俺の頭の中で思ったこと。誰にも言うつわけがないじゃないか。これは、極秘中の極秘事項、なんだからね。

「大磯、大磯でございます」

「はあ、着いたあ」

「さて、急いで帰るか。早くしないと門限もあるしね」

「うん。タクシーで帰るの？」

「ああ。よし、急いで帰るか」

「うん」

みんなでそう話をホームですると俺達は急いで改札口へ向かった…。

71話 どうして…

どうしてこうなった…おっと、今は月曜日の2時限目な訳だけど、
ってそういえばここまでの経緯を説明していなかった。だから、今
までの事を説明することにしよう。あの後、つまり一昨日の土曜日
俺達は大磯駅から同じタクシーで学校に帰り、食事等を済ませた。
どこの寄宿舎学校にもある当たり前の光景だ。翌日、つまり昨日の
日曜日。俺は7時前に朝食を済ませると、室内練習場に籠もった。
勿論だけど、関係者以外立入禁止、って紙を練習場のドアの入口に
貼ってね…。それはそれはとってもいい練習だったよ。と言うのも
ここの機械は^{マシン}とっても性能がいい。ホームラン競争のための遅い球
速も投げる事が出来るのだ。

”おお、これは有意義な練習になりそうだ…”

そんなことを思いながら練習をしていると気がいたら、昼をとっ
くに過ぎていた。それどころか…

「あれれ？。ボールが霞んで見えるし、おまけに暗いな…って、も
う夕方の方の5時かよっ！！」

なんて様だった。いやあ、人の集中力って言うのは凄いもんだ。気
がつかないうちに俺は8時間近く、バットを振り続けていたみたい
なんだから…。

「ただいま」

「…」

「鈴？。どうかしたか？」

「ぐすっ、ぐすっ」

いきなり泣かれて俺は驚いた。

「どうしたんだ？！」

「私を置いて野球の練習なんて…うう…うう」

どうやら寂しかったようだ。確かに朝ご飯を食べてすぐに練習場に籠もっていたんだから、鈴にも寂しい思いをさせてしまっただろう。本当は今すぐにでも抱きしめてあげたいんだけど汗びしょびしょだから俺は急いで風呂に行かないと行けない。すると鈴は俺にバスタオルを着替えを投げつけてきた。

「！？」

「戻ってきたら…話しよう」

泣きながらも鈴は笑っていた。

「鈴？」

「私を泣かせたんだから、ホームラン打たなかったら承知しないよ」

「…わかった」

「早く風呂行って来な」

「ああ」

俺は笑いながら風呂に向かった。その後、結局鈴とはいつもの通り過ぎて今日に至る…とここで終わらないのだ。

「どうかしたの章？？」

「いや、なんでもないよ鈴」

「私が隣にいるんだから寝たら許さないよ」

「分かってるよ…」

そう。実は席替えを公正にくじ引きで行ったのだ。すると、予想通り俺の隣は布仏さんだった。

”鈴と離れられるぞ！。これで俺はゆっくり授業も寝られ…”

「章？の前か」

「はっ？、今なんて言った？」

「私は章？の前の席なの」

「はあああ？」

「何よ。イヤなの？」

「そついうわけじゃないけど…」

「寝させないからね」

なんと幸か不幸か、鈴が前の席になってしまったのだ。おまけに俺は角の一番後ろの席だから後ろに助けを求めることすら出来ない。それに加えて隣が…

「よろしくね〜石井君。私もわかんないところがあったら質問してもいいかなあ？」

「ああ、気にしないでドンドンしてくれ」

「わ〜い!。ありがとう〜」

とマイペースな布仏さんだからね。

” どうしてこうなった?…まあ、考えてもしょうがないか。こうなったら、いかにして鈴にばれないように寝るかを考えることが重要だな…そういえば、ここ窓際だから、おっ!、^{ボーイング}B-777だ”

窓際だったのがせめてもの救いだろう。俺は空を飛ぶ、旅客機をうつとりと眺めながら授業を受けていた…。

72話 偶、奇

この席は本当に地獄だ。

「石井くゝん、この問題教えて」

「ああ…そこは…こうするんだよ」

「ありがとう」

とこの流れを一つの授業の間に10回ほど行うのだ。布仏さんと、それを見て鈴も負けじと質問してくるからヘタすると先生よりも忙しい気がしなくもない。

” いっそのこと俺が授業をやっちゃおうかな？”

何て思ったりもしてしまう。とは言えども、二人とも元々成績は悪くないからまだいい方だ。これで本当に訳が分かっていなかったら…俺は死んでいるかもしれない。

「ちょっと章?!」

「なあに?」

「これ、教えて!」

前に座っている鈴も当たり前のように俺にそう訊いてくる。

「それは…うゝん、新しいタイプの問題だからわかんないかもね。」

それは、こうすればいいんだ」

「そうなんだ。ありがとう」

「どういたしまして」

授業は余裕だけど……これじゃあ寝る事なんてとてもじゃないけど無理だ。

「ところでこれはどうなるでしょうか。当ててみましょうかね……石井君！」

「あつ、はあい！」

「これを前に出て解いてみて下さい」

「わかりました」

俺は山田先生の指示に従って問題を解いてみることにした。

「問、次の関数が偶関数か奇関数か調べなさい

$$(1) \quad y = 3x$$

$$(2) \quad y = x^2 + 1$$

$$(3) \quad y = (x - 1)^3$$

{

この3つを解けばどうやらいようだ。この偶関数・奇関数という考え方は本当のことを言うともみんなの場合は来年に習う定積分というやつでとっても便利だったりするんだけどね、当然俺はこんな事は知っている。まあこういう問題が出たときは俺は決まって

$$y \parallel f(x) \text{ とする。}$$

と定義する。こうしないと解けないからだ。さてさて、まず奇関数
が何かと言うことから説明しよう。奇関数というのは

$$f(-x) = -f(x)$$

となるものだ。まあ口で言ってもわかりにくいだろうから解いてみることにしよう。(1) なんかは奇関数のいい例であって前もって上で決めているから

$$f(x) = 3x$$

と書くが、これの (x) の部分かっこを $(-x)$ にすればいいのだ。この括弧かっこの中を (x) から $(-x)$ にすると右辺の $3x$ も符号を切り替えなくてはいけないわけで

$$f(-x) = 3x(-x) = -3x$$

となる。 $-3x$ って言うのは $-(3x)$ のことだから上で言うところの $-f(x)$ になるわけだ。だから(1)の場合は

$$f(-x) = -f(x)$$

というわけで奇関数というのが正解になる。

それじゃあ次は偶関数の説明だ。偶関数はさっきの書き方で行くと

$$f(-x) = f(x)$$

と括弧の中を負にしても最終的には元に戻る関数のことを言う。その例が(2)だ。これは

$$f(-x) = (-x)^2 + 1$$

となつて、自乗は別に括弧でくくられていれば負のものも正になるからかわらない、つまり

$$(-x)^2 + 1 = x^2 + 1$$

となつて元の関数に戻る。つまり

$$f(-x) = f(x)$$

となる。だから(2)の答えは偶関数というわけである。

こうなると(3)はどうなるのか？。奇関数か、それとも偶関数か？実はこの場合はどちらでもないのだ。

$$f(-x) = (-x - 1)^3$$

となつて

$$f(-x)$$

$$\pm f(x)$$

となる。偶関数にならないのは大体予想がつくだろう。3乗の場合は正負が変わってしまうからだ。仮にマイナスを外にくくりだしても

$$(-x-1)^3 = -(x+1)^3$$

となつて微妙に変わってしまう。だからこの場合の答えからは「偶関数でも奇関数でもない」とこたえればいいわけだ。だからもう一度整理すれば

(1) ∴ 奇関数

(2) ∴ 偶関数

(3) ∴ 偶関数でも奇関数でもない

と言うのが答えになるわけだ。

「こんな風でいいんですか？」

「ハイ!。とってもよくできています」

俺は…全問正解してみたんだ。ラウラさんもセシリアさんも意外と苦戦しているみたいだ。

「凄いね、石井君パーフェクトじゃん」

「どうもありがとう…」

「でも」

「鈴、どうかしたか？」

「どうしてそんなにすぐにわかるの？」

「えっ？」

「そうだよ。石井君は前小学校で微分積分が分かっていたとか言
つてたけどさあ、どこでそんなことを知ったの？」

「この式があつてゐるんだつたら、この式もあつてゐるよねって感じで
解いていったからね。別に難しくもなかったし。だからわかんない
ところがあつたらこれからもしゃんじゃん聞いてちょうだい」

布仏さんも鈴もぼかーんとしていた。俺の能力はとてつもなく凄
いようだ。とりあえず、問題はあつてたし一件落着と言うことでい
いかな？。

「それじゃあ章？、早速教えて」

「私も私も」

「はいはい。えっとね…」

俺はまた2人に問題の解き方を説明し始めた。

”この席も意外と悪くないかも…”

俺はさっきまで思っていたこと全否定するかのようなことを思った

⋮
○

73話 Toaru Game

何はともあれ、席替えの後の授業も無事に済み今は、寮の前の芝生で素振りをしている。今日はソフトボール部が室内練習場を使うみたいなのだ。

” こんないい天気なのに…外を使わないんだ ”

しみじみとそんなことを思いながらバットを振り続けた。そういえば最近変わったこととして織斑と篤さんも一緒に素振りをやるようになったのだ。何でも剣道に共通するところがあるとかないんだとか…。

「もう少し、肘を畳んで…そうしないと体が前に出ちゃうよ」

「ありがとう石井。一夏と一緒に教えて貰って」

「いいんだよ。気にしない気にしない」

そういえば重要なことを言い忘れていた。もうすぐ韓国からMBCの古いユニホームが届くんだそうだ。白監督から昨日メールがあつて、思った以上に早くできるとのことだ。早ければ5〜6日後には届くんだそうだ。だから俺もついつい練習に力が入ってしまう。嬉しいときは誰だって張り切るものだ。そういうときは決まって…

「イタッ！」

とケガをするものでもある。俺も例外ではない、とは言ってもマメが潰れたぐらいだ。

「大丈夫か？」

「ああ。マメが潰れただけさ……でも今日はこの辺にしておこうか？」

「そうだな、一夏も賛成か？」

「筈がそう言うならそれでもいいな」

「ヨシッ！。それじゃあ寮に戻るか、鈴に手当てして貰わないと……」

俺達は寮に戻っていった。

部屋に戻ると早速鈴は消毒と絆創膏で手当をしてくれた。

「イッテ」

「ガマンガマン」

マメって言うのはかなりしみるのだ。これはとっても痛い。

「ハイ、もう大丈夫よ」

「悪いないつも」

「ホームラン打ったら許してあげるね」

「はあ？」

俺と鈴は笑いながらそんな会話をしていた。

話題はもうすぐに迫った臨海学校だ。その前に俺は一仕事あるんだけど、それは又別の時に話すとしてよう。さすがに鈴と俺は同じ部屋にはならないらしい。どうも織斑と織斑先生の3人で過ごすことになるそうなのだ。

「残念よね、いっしょにいられないなんて」

俺はその時名案を思いついた。4人で楽しめるとあるゲームを…

「お前、麻雀出来るか？」

「当たり前でしょ？」

「一緒にやらないか？。たぶんゲームで呼ぶことぐらいなら出来るよ」

「本当に?!」

「多分だけどね、織斑先生が麻雀をやればの話だけど」

「なあんだ。でも楽しみしてるね」

「そうだな」

まあ、織斑先生も多分出来るだろう。織斑はある程度のこととは知っているみたいだ。五反田とか言う織斑の友だちから教えて貰ったんだとか。俺も楽しみだ。

「晩ご飯行こうか？」

「うん」

俺と鈴は野球と臨海学校の話をしながら食事に向かった。

74話 開会式

大歓声に包まれる東京ドーム。

「さて、本日のホームラン競争には大会特別顧問の白仁天氏が特別推薦をした、国立IS学園の石井章？さんが出場いたします。それでは登場して頂きましょう！」

そうコールがあつた途端に一気に歓声のボリュームは大きくなる。

「おい、あれMBCのユニホームじゃないか？」

「あれ俺が8歳の時にLGになつたチームだぞ！。なんであいつあんなの知ってるんだ？」

「こりゃあ面白いものを見させてもらえそうだぞ」

「本当だな……」

韓国代表側のベンチからそんな会話が聞こえた気がした。俺は日本代表側のベンチで待っていたからたくさんさんの野球選手と会話をすることが出来た。勿論李承？選手とも。

「おい石井。今日は楽しんで行けよ！」

「はい！。承？さんのホームラン楽しみにしてますね」

「頑張ってみるよ」

「ええ！」

「おおい体つきしてるね！」

「あつ、あなたは阿部慎之助さん！」

「楽しみにしてるよ、スンちゃんの子供を助けたんだったよね？」

「それに加えて日韓の代表候補生、本当に面白いやつだよ」

「あなたは青木宣親選手！」

俺は目の前にいる人たちが誰でも知っている野球選手であることに感動した。何だか…不思議な感覚だ。これがもしかしたら…夢なんじゃないかと思うようなそんな感覚である。

「このMBCって言うのは韓国の野球チームなの？」

そう話しかけてきたのは中日の森野選手だ。

「はい。前に李炳圭選手が中日にはいましたよね？」
イヒョング

「ああ。それと何か関係あるの？」

「李炳圭選手のいる球団はLGツインズって言うんですけど、そのLGの前身に当たる球団なんです。今日は…ああ、李選手も韓国側に来ていますね」

「本当だ、後で話をしてみるよ。ありがとだね、それからがんばって石井君。出るからには狙ってよホームラン王」

「はい！」

俺は森野選手にそう言われてとっても嬉しかった。

あれから2週間近く経って、俺は今東京ドームにいる。待ちに待った‘日韓スーパーゲーム’の日だ。ライトの照明がとっても眩しく感じる。観客席にはたくさんのファンが日本各地から、はたまた韓国からいらしてくれている。勿論IS学園の人たちも総出で見に来てくれている、後にも先にもこういうことを学校がするのは今日だけかもしれない。もともと男性の操縦者が世界で今のところ俺と織斑の2人しかいないのだから…。

「章？　打つてよ！」

そんな声がIS学園の団体席から聞こえた気がした。まあまだ俺の出番はしばらく後なんだけどね。

「それではここで日韓両国の国歌を斉唱いたします。まずは韓国国歌の斉唱です。観客の皆様どうぞ起立下さい」

球場が静まりかえる唯一の場面かもしれない。国歌斉唱だ。韓国の国歌も素晴らしいと思う。俺が思うに世界中のどこの国歌もみんな素晴らしいと思う。だけどやっぱり抜きん出てるのは‘君が代’だと思う。それはきっと俺が日本人だからだろう。少し君が代を聴くとじーんと来た。あとちょっとで泣きそうだった。今の日本の若者は愛国心が足りないというか欠如しているような人間が一部いる。そう言う人間を見ると俺は日本人として恥ずかしく、憎く思う。まあそんなことはいいや、今日は何てったってお祭りなんだから…。

「それではこれからホームラン競争を行います。まず韓国の代表選手から2名、そのあとに日本の代表選手から2名、その後推薦の石井君という順番で行って参ります。一番ホームランの多かった選手には賞金の50万円が贈呈されます」

歓声は再び大きくなった。いよいよ自分の出番のようだ。

”よしっ、50万円：狙ってみるか！”

俺はそんなことを思いながらグラウンドで素振りをし始めた…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつ石井さんですわ」

「ホントだ。ここからだとよく見えるね」

「ああ。鈴はどうだ？」

「最高よ一夏。章？のあんな姿を見ることが出来て私とっても嬉しい」

「一夏、私たちもなんだか面白くないか？」

「そうだなやっぱ自分たちの知り合いがこう言うのに出てるって思うととっても親近感がわくよ」

「いい結果になるといいな」

「そうですわね、ラウラさん」

観客席ではそんな会話が繰り広げられていた…。

[illegible]

75話 412

MBC青龍：1982年から1989年までのわずかな間をプロ球団として過ごした、漢城ソウルの野球チームである。優勝こそなかったもののAクラス入りを実に3回も成し遂げた球団でもある。その中には、実を言うと白監督も在籍していたことがあるのだ。白監督：ベクインチョンつまり白仁天さんは、日本の日本ハム、西武ライオンズの前身となったクラウン、そしてマリーンズの前身でもあるロッテ・オリオンズ、それから近鉄でプレーをした選手でもある。1982年に韓国でプロ野球が発足した際に、せっかくだからとMBCに入団してプロ生活を送った。MBCでは選手兼監督を務めた。1982年の韓国のプロ野球は前期40試合、後期40試合の年間80試合という変則的なものではあったが、その中でも白監督はシーズン打率・412といういわゆる‘四割打者’の偉業を達成した。その時に着ていたユニホームと今俺が着ているユニホームは同じなわけだが…

「おめでとつございます」

「いえいえ…たまたまですよ…」

俺はホームラン競争で優勝こそ出来なかったものの堂々の10本中4本の3位タイにつくことが出来た。この競争、韓国代表の李大浩選手と日本代表の李承？選手の一騎打ちになったのだが結局のところ10本中5本で同率と言うことになり、引き分けに終わった。まあこれはこれで面白かったからいいんだけどね、3位タイで同じ記録に並んだのは西武の中村選手だった。

「石井君」

「あつ、中村選手!!」

「君もいいがたいしてるね」

「ありがとうございます!」

「ISとかってやつのおかげかな?」

「いやあ、そんなことではないと…」

「頑張つてね。みんなも君のことは知ってるんだよ。何てったって
‘日韓の架け橋’だからね」

日韓の代表候補生ともなればこの言い方をされるのは当然と言ったら当然だろう。それでもそう呼んでもらえるだけでとっても嬉しかった。

「ありがとうございます。これからも頑張っていくので…」

そういうとベンチからは惜しげもない拍手が送られた。その後韓国側のベンチにも俺は向かった。

「おお、お前が石井か」

「はい」

「あれ?。お前韓国語ができるのか?」

「友人に韓国人がいたので今その友人は^{テグ}大邱に引っ越しちゃったんですけどね」

「ふん。あつ、俺の名前は知ってるよね？」

「勿論ですよ。李大浩選手」

「そうか。知っててくれて嬉しいよ。日韓でこういうことをこれからもやって行けたらいいよね」

「はい。お互いに隣同士ですからね…俺は両国の代表候補生でもありますし」

「そうだったな。これからも頑張ってね」

「はい!!」

俺は嬉しかった。幾ら日韓は仲が悪いとよく言われるとは言えどもこうしている限りでは不仲ではないようであることに。その後俺は白監督とも挨拶をした。すると…

「お前の誕生日はとくに過ぎちゃったんだけど…」

「これは？」

「今回の試合に出る全選手のサインが入った色紙だ。大切にしてくれ」

「はい!!」

「それじゃあな、これから頑張ってな。あつ、試合も楽しんでみていってくれ」

「ええ」

みんなのいる席に戻ると英雄のように出迎えてくれた。鈴も俺にいきなり抱きついてきて喜びをあらわにした。

「章？、格好良かった」

「ありがとな鈴」

「二人とも試合が始まりますわよ」

「そうだったな」

「楽しいといいね」

「そうだな、承？さんが打てればいいんだけどね……」

みんなも楽しそうにグラウンドを見た。

「プレイボール……!!」

プレートアンパイアの指差確認をした。日韓野球、いざ開幕……

76話 記録の男

試合は見えていて全く飽きなかった。両チームの選手を全員知っているからではあるかもしれないが、毎回ハラハラドキドキの繰り返し…白熱した試合^{ゲーム}だった。中でも4回裏に李承？選手が先制点の2ランホームランを放ったかと思えば、5回表に今度は李大浩選手が看板直撃のソロホームランと1点差にすぐさま追いつく猛攻撃、さすがに韓国の野球が‘攻撃的’と言われる理由がよく分かる。試合はその後も小笠原選手と中村選手にホームランが飛び出し、韓国側もホームラン攻勢で追いつくという一進一退の攻防を繰り広げていた。いい試合だった。中でも…

「韓国代表、代打の交代をお知らせいたします。9番、ライトの李炳圭に変わりました^{ヤンジュンヒョク}梁？赫」

アナウンスのコールの後に韓国側からは大歓声が飛んできた。この梁？赫選手というのは三星に所属していた、つまりは引退した選手である。1993年に三星に入団して以来、引退した昨年の2010年までに2135試合出場、2318安打、458二塁打、351本塁打、1299得点、1389打点、1380四死球と実に7つの韓国記録を保持している。故に韓国で梁選手はファンから‘記録の男’と呼ばれている。打撃フォームも独特で大きくスタンスを取る独特なフォームから‘万歳打法’とも…その‘万歳打法’を今日は炸裂することが出来るのだろうか…。

「章？…手に汗握ってみてる」

「あっ！。ごめんごめん、すっかり熱中しちゃったよ」

「いいんじゃないか？。石井だってそういうときぐらいあるだろ鈴？。」

「ふえっ？。」

「そうですね。私だって面白いと思えるような試合ですのに章？さんがつまらないと思うわけがないではありませんか？。」

「そういうことを言ってるんじゃないくて…なんだか章？がいつもと違って見えたって感じ」

「あら、そうなんですか？。」

「うん。何だかやつぱり章？には野球が似合うなって…」

「ははは。そりゃあそうだろ。何てったってお前に‘バント’したんだろ？。」

「えっ！。どうしてそれを？。」

「俺が教えたんだよ。次の日の朝に織斑にね…」

「ううううう」

「おいおい、今は試合中なんだからおこるな…」

そういうと怒っているいるわけではないようで鈴は俺の右手を抱きしめてきた。こんな姿を東京ドームで他の人に見られてもしたら、況してや中学の奴らに見られてもしたら…

「おい！。鈴、ここは公共の場なんだからはなせ…」

「うるさい！。試合が終わるまで章？にずっとこうしてる」

「おっ、お前！」

「いいじゃないか？。私だって嫁といつもじゃれているんだから」

「ラウラ！！。何を訳のわかんね～事をいきなり？」

「へ～、いつもじゃれてるんだ一夏って…」

「シャルルまでうわあ！！！」

「一夏、私も負けてはいられない」

「箒まで一体何を！」

今日は織斑を囲むようにして前の席に俺と鈴が、織斑の両側にはデユノアと箒さん、そのさらに隣にラウラさんが座っているのだが…今の余計な一言のせいで織斑もいろいろと大変な目に遭っているようだ。まあいいか？。

「鈴、もう一度きく…」

「放さない！！！」

「はあ…まあいいか。おっ！」

「ん？」

「梁選手かあ…」

” 威風堂々（タンダン）！！、梁？赫！！！”
ウィブン ヤンジュニョク

韓国側からは大歓声と彼の応援歌が流れてくる。まだまだし合いは誰にもこの先どうなるか何て読むことは出来なさそうだ…。

77話 持つべきものは友人である（前書き）

更新が遅れてしまつて申し訳ございません。今後ともよろしく願
いいたします。それではどうぞ本文の方も楽しみ下さい。

77話 持つべきものは友人である

結果的に言う試合は日本代表の勝ちであった。多分当たり前のことなのかもしれない。とは言っても…

「本日の試合は13 - 12で日本代表が勝ちました。本日はご来場下さいまして、誠にありがとうございました。引き続きまして勝利投手と本日の韓国の選手を相手に4打数4安打と大爆発した李承？選手、2つホームランでチームの勝利に貢献した小笠原選手へのヒーローインタビューを行います」

そう、今日は奇跡的なことに李承？選手がヒーローになることが出来たのだ。シーズンの序盤こそ好調だったのだが、最近では再び不振が続いていた李承？選手。一部のファンからは

” 巨人がダメにしたんだ ”

とか

” ロッテにずっといればよかったんだ ”

とか言われたりしていて、酷い人だと

” もう韓国に帰った方がいい ”

と言う人までいる。まあ打率も1割台後半で本塁打もわずかに5本。これじゃあそう言われても仕方がないと言ったら仕方がないのかもしれない。でも…そんなときでも信じて待ち続けることがファンには必要なのではないだろうか？。おっと、そんなことを俺が思っ

いたらいいよヒーローインタビューが始まったようだ。

「本日のヒーローの李承？選手と小笠原選手です…」

早速インタビューは始まった。李承？選手に限ったことではないのだが基本的に日本でプレーをしている韓国出身の選手はインタビューでは韓国語を使う。本当は李承？選手も日本語がペラペラなのだが契約上、そうせざるを得ないんだそうだ。

「今日の試合はいかがでしたか？」

「そうですね。とっても気持ちよくスイングが出来たと思います」

「いつもとは違って韓国の選手との対決というのにも何か特別な思いはあったのでしょうか？」

「勿論祖国の選手と対決出来るのはとても嬉しかったですね。でも今日はそれ以上に特別な思いがありましたから」

「と言いますと？」

「今日は僕の大切な友人が見に来てくれたので…」

” えっ！？ ”

「なんとしても言う思いで毎回打席に入りましたから…多分彼のおかげもあるんじゃないんですかね」

「そうですね、ありがとうございました。それではこれから頑張ってください…」

「ありがとうございます」

”今、俺の事大切な友人って…”

俺は改めて李承？選手を尊敬すべき人間であることを認識させられた。

「どうかしたの？章？」

「いや、なんでもないよ」

「そう。今日は格好良かった」

「ありがとな。お前のおかげかな？」

「もっ、もう…」

「ははは」

俺達はヒーローインタビューに再び聞き入ることにした…。

77話 持つべきものは友人である（後書き）

そういえば、李承？選手2軍落ちしちゃいましたね…。

78話 だっこ

日韓スーパーゲームはその後日韓両国でいわゆる地方遠征を行い、日本では東京の他に北海道は札幌まるやまの円山球場、そして過去のスーパーゲームで使った岐阜県の長良川球場ながらがわで熱戦が繰り広げられた。次の大会は4年後に計画されているものでは、今度は韓国の京城ソウルの蚕室球場チャムシル、釜山プサンの社稷野球場サジク、大邱テグの大邱市民球場で行うんだそうだ。それに加えてこのスーパーゲームに興味を持った台湾ももしかしたら参加するかもしれないとのことだそうである。数年前まで行われていた‘アジアシリーズ’の復活かもしれないと思うと俺もとても嬉しい。だが…

「章？〜これってこうでいいの？」

「そうそう。それを括って…まあ因数分解ってことだね」

「わかった」

いつまでもその楽しさに浸らせてはもらえないのが現実というものであるんだなこれが。と言うのも早速、明明しめいて後日から試験に突入するのだ。まあ今のところ俺も要点の再確認とかをしているし、上の学年がわざわざ俺にプレゼントしてくれた試験のいわゆる‘過去問’もあるから問題はなさそうだ。俺よりも問題なのは鈴の方だろう。と言っても、鈴も最近勉強を頑張ってるみたいだから全く分らないというわけではないようで所々わからないところを俺に聞いて後は自分で解き進めている。俺も本当はパソコンで遊んだり、素振りに出かけたりしたいんだけど鈴のこともあるから俺もこういうときは隣で本を読むか勉強をしている。と言っても俺が勉強しているのは鈴達の遙か先に行くものだ。

「なあにそれ…?」

「ああ。これは微分方程式って言うんだよ。多分大学に行けば習うんじゃないかな?」

「ふん。ねね、これは?」

「えっとね、それはさっきと同じかな。そこを因数分解してさ…」

「あつ、そうか!」

「ねっ?」

「ありがと。やっぱこういつときは章?が頼りになるよ」

「そうか…」

「うん!」

鈴が喜んでくれれば何よりである。俺も俄然やる気が出てくるような気がした。

再び時計の針を見ると、どうやら1時間くらい経過していたようだった。

「章?、ようやく気がついたのね?」

「ああ…ごめんね、ついつい集中しちゃって…」

俺は集中するとちつとやそつとすることに反応しなくなるようである。昔からの癖というか習性のようである。集中出来るから自分が不利益を被ることはないんだけど他の人はそうは言えない。鈴はお腹がペコペコのようである。

「歩けな〜い」

「おいおい……」

「だって章？が悪いんだよ！」

「そりゃあそうかもしれないけど……」

「連れてつてよ」

「おぶればいいのか？」

「お姫様だっこ」

「はいっ！？」

さすがは鈴だけあって、俺の予想の遙か上に行くような発言をする。

「冗談だろ？」

「……」

「おい、なんとか言えよ……」

「……」

鈴は聞く耳を持つとしてくれない。意地でも俺にお姫様だっこをして貰いたいようである。俺だってそうしてあげたいのはやまやまなんだけど…また新聞に載るのもイヤだし、俗に言う‘ご近所’の目というものあるからね、やろくにやれないというのが現状なのだ。鈴は俺に何も言わずに両手を広げた。さあ早くとも言いたいような気がする。

「ふう…わかったよ。今日だけだから…」

俺は鈴をそつと持ち上げて食堂に向かうべくドアを開けた。

ここから問題なのは織斑ならともかく、他の人たちに出会わないことなんだけど…。

79話 抓りだ

ここから食堂までは最短で5分足らずでつくことが出来るが、その経路だと他の人に出くわす可能性が極めて高い。誰かに見つかったらだつて？。そんなのは俺が何度も言うことではないだろう。

「なあ鈴」

「…んもう、ノリが悪いわよ」

「何だよノリって？」

「私はお姫様なのよ？」

なるほど、鈴は俺が鈴のことを「お姫様」と思っていないことに腹を立てているようだ。

「はあ…お前も世話が焼けるぜ」

「ふん！」

どうやらお姫様はご機嫌斜めのようなのだ。

「姫、一体どうかなさいました？」

そう俺が問いかけると、鈴も急に笑顔になって俺を見ながら

「お腹が空いたわ」

と言ってきた。確かに鈴を待たせてしまったのは事実。急いで晩ご飯を食べさせたあげたいとは俺も思う。

「畏まりました。まもなく食堂に到着する見込みです」

「うん。ありがとう」

「いえ、姫に喜んで頂ければ私は…」

「…!!」

鈴も俺の熱演に驚いているようだ。顔が真っ赤である。こういふときは積極的に行くのが俺のモットーだ。

「どうかなさいましたか？」

「何でもないわよ。早く行ってちょうだい」

「申し訳ありません。畏まりました…」

俺は急ぎ足で食堂に向かった。幸いなことに最短経路で行ったのに誰にも出くわすことがなかったのだ。

食堂の前につくとさすがに鈴も降りた。食べ物を受け取れないからだろう。

「日替わりね」

「はいよー」

「私は醤油ラーメン」

「はいはい…そういやアンタ達。仲いいのね」

「「えっ！」」

食堂のおばちゃんにそう言われて俺も鈴も驚いた。

「ま、まあ同じクラスなので…」

「そ、そうなの。だからよく一緒に食べるの。ほら、一夏とも一緒にね」

「ああ、あの男の子かい？」

「そうですそうぞう。彼ともクラスメートなんですよ」

「ふん。仲がいいって本当にいいわね。はい、日替わりと醤油ラーメン」

「どうもね」

「ありがとつ、おばちゃん」

俺と鈴はそれぞれ受け取ると空いている席に向かった。丁度夕食時だったので席は結構埋まっていた。

「あつ、石井達だ！」

「こっちですわよ」

見るとデュノアと箒さんに挟まれて織斑が食事を取っていた。

「どうしたんだ、織斑？」

「ああ… なんだか二人の様子が… 痛え！！」

俺はこの時気がついていなかったのだが箒さんとデュノアに両脇腹を抓つかられていたようである。

「一夏と一緒に晩ご飯を食べようと思ったんだよ」

「私も同じだ。さっき食べたんだが急に物足りなく感じてな」

相変わらず織斑は織斑のようだ。せつかく二人がきつかけをそれぞれ、他の人たちとも競いながら作ろうとしているのに肝心の織斑がこの調子じゃあ百年経っても実らないだろう。

「私たちも一緒に食べていい？」

いきなり隣に立っていた鈴がそう言った。箒さんとデュノアも…

” 一夏の気を和ませるためには…”

” この方がいいかもしれないな ”

と言うアイコンタクトをお互いに取った。というわけで俺達もその場で食事を共にすることにした…。

80話 俺と言ったら

酒があればもつと楽しめるのに……なんて思うのは俺だけだったかもしれないな。食事はとつても和気藹々とする事が出来た。どうやら織斑が俺が来たことによつて精神的に楽になったことが原因らしい。それならそれでも俺はいいんだけどね。鈴にデュノア、それから篝さんも和んでくれたみたいだし。思えばこの鈴を除いた人たちの‘争奪戦’には何か怖ろしいものを感じるときがある。いやあ、女性つて言つのは怖ろしいものだなつてよく思つてしまふのだがそれを理解して頂けるだろうか。

”ふうみんな楽しんでくれているみたいだ。ほっ……”

「どうしたの章??」

「ええっ!??」

「石井、お前何か悪い者でも食つたのか?。ボーツとして」

「いやあ、何でもない何でもない……ちよつと野球のことを考えてたらね」

「お前らしいな」

「そんなこともないんじゃないか?」

「いやあ、まさにお前を表すものつて言つたら野球・鉄道・鈴だろ?」

「ちよつと一夏！…！」

「まあ、織斑の言ってることに間違いはないか…」

「ちよつと章？も何言ってるのよ」

「だって間違ってるんだからいいだろ？」

鈴も顔を赤くしながらゆっくりと頷いた。とても美味しく頂くことが出来たようだった…。

81話 インテグラル

問1、次の不定積分、または二重積分を求めなさい。

(1)

$$\log x dx$$

(2)

$$D(x+y) dx dy \quad (0 \leq x \leq 2, \quad 0 \leq y \leq 1)$$

問2、次の関数をマクローリン展開しなさい。

(1)

$$\sin x$$

(2)

$$\cos x$$

(3)

$$e^x$$

はあ…、今はご多分に漏れず数学のテストの真つ最中なのであるが俺のやつだけ何だかめちゃくちゃ他の人たちとおかしい。と言うかこの試験用紙の上には…

へ1組1番の石井君は問1から、それ以外の生徒は問3以降から問題を解きなさい。但し、問1、問2を解いた場合は正解していれば加点します。

と書かれているのだ。他の人からはちらちらとカンニング目的ではないチラ見がする気配を感じる。先生も意外と面白い人のような。まさかこんなもので俺が苦戦すると思っっているだなんてね…。走行していると早速山田先生が見回りでやってきた。

「何か質問はありませんか？。時間はまだたっぷりありますから、しっかり考えれば解けるはずですよ」

とみんなに向かって言う。これは中学校の時と同様である。早速先生は巡回しながら俺の目の前にやってきた。

「どうですか…って!!」

「良問揃いですね、先生…」

「あなた、これも!!」

「まあまあ先生。試験中ですから…」

俺は先生の鼻っ面をへし折ったような気分浸れて嬉しかった。意外とこういうところに関してして俺は天の邪鬼な性格の持ち主のようだ。まあ先生も俺が解けることを5割くらい思っていたようなのであんまり驚いてはいないみたいだった。

積分というのは微分の逆をするものである。例えば

$\sin x$

を微分すると

$$\cos x$$

になるのだ。積分というのはこれの逆をすることで

$$\cos x dx$$

と書く。これを単に元に戻せばいいのだが…

$$\cos x dx = \sin x$$

では正解ではない。実はこれには

$$\cos x dx = \sin x + c$$

という積分定数 c をつけないと行けないのだ。微分をする際に定数項、つまり数字だけで表せるようなもの

$$2x + 6$$

の6のようなものは微分をすると消えてしまう。だからこの積分定数がないと

$$2x + 6$$

も

$$2x + 0$$

も

$$2x + 8$$

もみんな同じになってしまつて矛盾してしまう。だから積分定数というのは必要なのだ。まあマクロリーヌ展開というのは近似値に近いと行つていいだろう。このマクロリーヌ展開を $(x \parallel \quad)$ という際に展開するとテイラー展開と言うのだが…まあ難しいことだから、あんまり気にしないで欲しい。俺はさっきも先生に言つたとおりで順調に、そして快調に問題を解き進めた。

試験終了のチャイムが鳴る。この数学の試験で今日の試験はお終い。後は明日以降だ。

「どうだつた章??」

「うゝん、チョロいかな?」

「さっすがだね。私の夫だもんね」

「関係あんのか?」

「今夜も教えてね」

「勿論だよ。みんなも一緒にいいんじゃないか?」

「そうだね…、それじゃあ帰ろうか?」

「ああ」

俺と鈴はそう会話を交わすと寮に向かおうとした…。

82話 National Flag

結論から言うと鈴はご立腹のようだった。ご立腹と言っても本当に怒っている訳じゃなくて妬いてるといつか悔しがつてるといつか
…まあそんなところだ。

「そうそう、そこがそうなるよね？」

「おお。さすがだな」

「伊達に今日の試験であなたを山田先生がご指名しただけのことは
ありませんわね」

「いやいやそんなこともないんじゃないか？」

「照れてるのか？」

「ラウラさん…」

「お前は面白いやつだな」

「ホントホント、石井は面白いよね？」

「篤さんにデユノアまで…」

「…」

鈴は黙々と問題を解いている。何とも珍しい…。俺はいつも通りみんなを自分たちの部屋に招待して問題を解き合っていた。明日の試

験は地理と物理だから俺も問題なさそうだし、そう言う言い方を失礼になるのかもしれないけど今日の数学の試験問題のこともあるからみんなもおかた予想はついているだろう。況してや俺は地理が一番得意だ。何てったって、鉄道が好きなんだから…。日本は鉄道大国と言われるくらいたくさん路線が津々浦々に日本中を駆け抜けている。母親の話だと俺は3歳ぐらいの時に写真を見ただけで特急列車が当てられてどの辺を走っているかを答えることが出来たらしい。まあそれは今も変わらないのだが。だから、自然と地理は出来るようになっていったのだ。今回の試験は‘国旗’が試験の半分以上を占めるらしい。随分ふざけているというか面白いような気がしてやまないのだが、まあ期待は出来そうな試験であることに変わりはないなさそうだ。

「これは覚えるだけだからね…簡単でしょ？」

「でもマイナーな国とか困らないか？」

「例えば？」

「そうですね…スロバキアですとかスロベニアですとか…」

「まあその辺はね、俺もアフリカは苦手だからさ、はははは…」

鈴は未だに黙って勉強していた。しかもみんなあっているのだ。

”どうしたんだろうな、鈴のやつ…”

俺は不審に思いながらも、みんなとその後勉強をした。

みんなが去った後に鈴は本性を見せつけた。どうやら、他の人た

ちに俺が捕られたのに嫉妬していたようだ。

「…ってわけなの」

「ふん、要するに妬いてたと？」

「！！！」

顔が赤くなる鈴の姿も…可愛い。けど、俺は敢えて普通の素振りを
見せる。と同時に軽く口づけを交わす。こうするのが手っ取り早い。
鈴も素直に応じてくれるから。

「まあ、こうすれば分かってくれるだろ？」

「…うん。ありがとう」

「晩ご飯、行くか？」

「うん！！」

鈴もようやくいつも通りの笑顔を取り戻してくれたような気がした
…。

83話 かぜ

外から吹いてくる風が心地いい。今は朝の10時過ぎだ、きっとみんなはテストと格闘していることであろう。じゃあ俺はって？

「ゲホッ、ゲホッ…ううう、38度1分か…。ううう…」

昨日、夕食の後やけに寒気が酷かったので風呂に長めに入っていたのだが、あろう事がドンドン寒気が酷くなっていった。吐き気こそなかったのだが…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ううう…」

俺は風呂から戻り部屋に入った途端にそこにいた鈴によたれかかった。

「ちょっと章?!。いきなり…って、何よ、凄い熱じゃない!」

「ううん?。風呂はいつたからかな?」

「ダメよ、すぐに寝て。氷枕用意してあげるね」

「ありがとう」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

と言った具合だったから、以下に昨夜が壮絶であったかが分かって

もらえるだろう。俺はこの時、熱で朦朧として何が何なのかさっぱり分からなかったのだ。その後俺はどうも熱にうなされていたよ
うなのだがゆっくり部屋で翌朝まで眠った。

昼過ぎになってようやく熱も下がってきた。先生の診断に寄れば風邪だそうだ。だから二日三日寝ていれば何ともないとのこと、俺は今病室に移って一人で静かに休んでいる…と言いたいところだがまあパソコンでいろんな事を調べているのだ。

「ふう…やれやれようやく咳も収まってきたか、なにになに？、今年はLGが強いなあ2位じゃないか。それにSKとのゲーム差もドン
ドン縮まってる」

LG、まあ俺がいつもMBCと呼んでいる韓国の野球チームなのだが今年は破竹の勢いで勝ち続けている。ここ8年間プレーオフにすら進出することが出来なかったチームが大躍進しているという事実
に俺は感心した。

そんなこんなしている内に、織斑先生が部屋に入ってきた。

「体調は…その様子だと大丈夫そうだな」

「はい、ゴホッ！。まだ咳が若干残りますけど…」

「そうかここところのお前の多忙さに自分が参ったんだな」

「そつみたいですよ。ところで試験の方は？」

「後で追試という形で受けて貰うがいいか？」

「分かりました。それで結構です」

「よし、それじゃあ私も長居は無用だな。失礼するぞ」

「いえいえ…」

どうやら先生も連絡事項を伝えにやってきただけのようだ。まあ病人である俺に気を遣ってくれているんだと思うと嬉しく思えた。さすがにパソコンばっかやっているのもどうかと思ったから再び俺はパソコンをスリープモードにすると眠りに就いた。

「え…ねえ」

「ううん？」

再び目が覚めると、当然のことながら鈴の姿がそこにはあった。どうやら心配で観に来てくれたようだ。

「ああ、ごめんごめん。すっかり気がつかなかったよ」

「いいわ。気にしないでちょうだい」

「そうか？。悪いな…」

そう俺が言い返した途端鈴は俺に抱きついてきた、そして…まあいつも通りだった。

「お前、風邪がうつつちまうぞ」

「大丈夫、早く治るおまじないだよ」

「何言つてんだよ」

「大丈夫だって」

「そうか？」

「うん」

「ならいいか？」

「うん!!」

そう鈴は笑顔で答えてくれた。翌日、鈴は案の定体調不良、俺のとなりのベットで熱にうなされていた。

.....

「全く、あの二人と来たら夫婦揃って欠席とはな」

「そうですね...でも、あの二人とっても仲がいいですからすぐ治ると思いますよ」

「夫婦愛か？」

「多分ですけど...」

織斑先生と山田先生はそんな会話をその頃交わしていた...

.....

84話 流行性感冒

俺は二日後には風邪は完治した。元々、風呂に入っていたり鈴の迅速な対応のおかげもあったりしたから重傷にならずに済んだようだ。ただ問題なのは鈴の方であった。

「はあはあ……」

”苦しそうだな……”

鈴は普通の風邪だとばかり思っていたがどうも、こここのところ勉強を頑張っていたようで体の抵抗力が落ちてしまい、インフルエンザを併発していたようだ。幸いなことにこの医療体制は万全だったからすぐに抗生物質やら何やらを投与して貰ったおかげで、後は熱さえ引けばいいとのことなのだが、見るからに鈴は苦しそうである。さつきも頭痛が酷かったようで鎮痛剤を飲んだのだが、熱が増してしまったようだ。と言うのも俺も昔この鎮痛剤を飲んだことがあった。それも鈴と同じでインフルエンザにかかったときだった。この鎮痛剤、確かに効き目は抜群なのだが少し熱っぽく感じてしまうのだ、況してや鈴は今インフルエンザの影響で少なからず感覚が麻痺しているから余計に熱く感じてしまうのかもしれない。

「はあ……はあ……章？、苦しいよう……」

「大丈夫だ、俺ならここにいるんだから」

「うん……ありがとう……」

俺は鈴の声が必死であることに泣きそうになった。熱でうなされな

がらも必死に声を上げているその姿に。俺も病人である以上長居をするわけにはいかないが、鈴のそんな姿を見ていたら帰ろうなんて思えるはずがなかった。一応俺はマスクなんかはつけていたから少しぐらいなら遅れても大丈夫だった。

「私…大丈夫なのかな？」

鈴は泣きそうに苦しそうに俺にそう訊いてきた。俺は本当なら今すぐにも鈴を抱きしめてあげたかったけど、そんなことは出来なかった。こういうときこそ、しっかりと休まないといけないものだ。

「大丈夫だよ。ただのインフルエンザだろ？」

「でも…はあ、ハツクション！！！！」

「おいおい、ほらチーンして」

「ふう…」

「とにかく、今はゆっくり休んでろ？。後で又、一杯話なら聞いてやるからな」

鈴は苦しそうながらも一瞬だけ笑顔を見せて小さくうんと答えてくれた。俺は急いで部屋を出た。時間的な問題ではない、もう俺の目は耐えられなかった。鈴になく姿を俺は見せたくなかった…。

86話 追試

鈴のいない中でも俺は風邪が治っちゃったから試験を受けないといけない。2日ほど休んでいたからどうしようかと織斑先生・山田先生と相談したのだが臨海学校の日程が詰まっているため先延ばしが出来ないと言われてしまった。それはつまり…

「石井、頑張つてな。物理は計算が多かったぞ」

「ありがとう、急いで追いかけるよ」

「大丈夫だよ。ボク達待つてるから、終わったら…」

「図書室に来てください。鈴さんのお見舞いにも一緒に参りましよう?」

「石井、鈴のためにも頑張るんだぞ」

「嫁を喜ばせることが出来るのかな?」

「みんな。悪いな…まあ、休んでいる鈴に元気になつてもらえるような点数はたたき出したいけどな…」

「出したいんじゃないって、出せばいいだろ?」

「ほお、言いこと言うねラウラさん」

「でも、私も負けてはいませんわよ。石井さん、今度こそはあなたに勝ってみせますわ」

「楽しみにしてるよ」

「あつ、石井君。みんなが帰ってから試験を行いますから今のうちにお手洗いなどは済ませておいて下さいね」

「わかりました」

と言った具合にみんなが帰った後に一人で試験を受けさせられると言うことだ。山田先生が試験監督でよかったと俺は強く思っている。もしこれが織斑先生だったら、いわゆる威圧感に圧倒されて試験そっちのけになってしまいそうだっただろう。

「それではこれより、物理の試験を行います。試験時間は60分、では始め！」

山田先生は笑顔でそう言った。どうやらこういったことは先生も初めての経験らしくてワクワクしているようだ。まあこっちからすれば傍迷惑なだけなのだが、まあこの際そんなことはどうでもいいことだ。俺は試験に集中すればいいだけのことなんだから。

織斑がアドバイスをしてくれたように確かに物理の試験は計算で解く問題が殆どだった。さすがに試験勉強は俺も多かれ少なかれしておいたから解けない問題はなかった。多分というか絶対9割以上は取れたような気がした。と言うか俺はこの間の構内の新聞で全教科満点を目指すと言ってしまったんだから頑張るしかないのだ、そうなるが一番怖ろしいのが‘ケアレスミス’である。中学でも痛いほどこれを俺は経験した。例えば…

と言った具合にかけ算と足し算を間違えたりだとかして……。これは本当に答案が返却されると悔しさが振りかぶってくる。試験の最大の敵と言っても過言ではないだろう。これのせいで満点を逃したらと思うと何とも言えない気分になる。

「はい！。石井君、そこまでです」

「はい」

答案用紙を先生に渡す。後は結果を待つのみだ。とは言ってもまだまだ俺は帰ることが出来ない、更にこの後に地理の試験が待っているのだ。今回の試験はこの間の国語、数学、化学、物理、英語、専科に加えて地理がおまけでついてくると言つどこぞの百貨店のセールのような試験だ。地理は元々得意科目だから問題はないから余裕面で試験を受けることが出来た。今回の試験はどうやら全教科60分みたいなのだが……

「先生、もう大丈夫そうですね……」

「ええっ！？。まだ始まって20分しか経っていませんよ。ちょっと見せてちょうだい」

そう言うから先生に俺は試験の答案用紙を渡した。今回の試験、俺の本当に得意な分野の国旗だったから10分で終わることが出来た。試験の問題も……次のうち適切な国旗と地域、その国の首都を下の欄から選んで記入しなさい。何て問題が試験前から言われていた半分前後と確かに多かったのもあって、余裕で解き進めることが出来た。

「うーん……わからないといわけではないようですね……ちょっと待つ

てください、織斑先生に確認を取ってきますね」

そう言うと山田先生は教室を出て行った。一人で教室にいと、なんだか変な感じがする。ただでさえこの学校にはおれと織斑以外の男子生徒がいないんだから…。5分足らずで先生は戻ってきたのだが、織斑先生も一緒だった。

「石井、本当にこれで大丈夫なのか？。場合によってはお前は不利になるかもしれないぞ？」

「大丈夫ですよ。満点取れたような気がしますから」

そう俺が言うと織斑先生も納得してくれた。

「よしわかった。お前がそこまで言うならそれを信じよう。今日の試験はここまで、退出してよろしい」

「わかりました。さいなら、先生」

俺は急いでみんなのいる図書室に教室から向かった…。

87話 見舞い（前書き）

今回はつなぎです。

87話 見舞い

図書室のドアを開けるといっていました。みんなは何というか自習スペースのようなところで各々の勉強をしていて呼びかけるのが惜しいような気さえさせられた。でもそのままでは当然、埒^{うち}があかないのでみんなのところを回っていった。

何というかみんなの意見は共通してどうしてこんな中途半端な時間に来たのか。と言うことだった。理由を話したらみんなは一応驚いてはいたようだが、今はそんなことを言っている場合ではない。これから鈴のお見舞いに行くのだ。

「それにしましても、鈴さんがインフルエンザだなんて…お気の毒ですわ」

「ああ。鈴のやつ、石井の看病で疲れたのかもな？」

「だとしたら申し訳がないよ。張本人だからね俺は…」

「気にする事じゃないと思うよ。ボクは石井のせいじゃないと思う」

「本当か？」

「私も同じだな。一夏の言うとおり鈴も疲れていたのかもしれないが、石井の看病との因果関係は薄いと思うし」

「況してや風邪の併発なんだからお前のせいではないだろ？」

みんなのフォローに俺は嬉しかった。

早速鈴のいる部屋についたのだが…鈴はスヤスヤと眠っていた。先生の診断に寄ればもう峠は越えて、後は回復するだけだという。今は疲れて眠っているとのこと。俺はとっても嬉しかった。

「よかったな」

「ええ 篤さん。鈴が…鈴が…」

俺は危うく泣きそうになった。だけど泣かなかった。もしここで鈴が目覚ましたら又鈴を悲しませてしまうと思ったから。

「よかったな。早く又笑顔を俺に見せてくれよ」

俺は眠っている鈴の手を握りそう言った…。

88話 BUSAN - 1 (前書き)

今回は前編後編の2作に分割させていただきます。

88話 BUSAN - 1

よりもよってこんな時間に出動だなんて…。

「石井、視界は良好？」

「デュノアはどうなんだ？」

「うゝん…まあまあかな？」

「俺もそんなところだ。さっさと片付けないとな」

「うん、そうだね」

俺は本当は夜はとてつもなく弱いのだが、今回はどうしても俺が動しなくてはならない理由があった。今は日本海の上空を大韓民国領の??（釜山^{プサン}）に向かつて飛行中な訳だ。今からほんの1時間ほど前のこと、鈴を除く俺達専用機持ちの織斑先生の部屋に召集された。重苦し雰囲気なのはその場にいる誰もが理解することが出来た。

.....

「というわけだ。所属不明のISが先ほど上海から1000キロほど南東に離れた海上を高速で飛行中という情報を我々は手にした。このまま行くと、大韓民国の釜山に上陸するとのことだ」

「釜山…」

俺はいてもたってもいられなかった。

”釜山にはロッテの本拠地もある、況してや韓国第二の都市。380万人近くが済む大都市だ、一人の犠牲者も出させることは出来ない、日韓代表候補生の名にかけて俺は戦ってみせる！！！！！”

俺はそう思うと次の瞬間には

「先生、俺に行かせてください！！！」

と行動に表れた。先生もどうやらその気のようにだったが

「わかった。それじゃあ今回はシャルロット」

「はい」

「お前も一緒に向かってくれ。お前とはどうも相性がいいようだからな」

「わかりました」

「はい？」

「なんだ石井、不服か？」

「いいえ…そんなことは…」

「本当は私も鈴と一緒に行かせてやりたいのだが、それ以上は言わなくてもお前なら分かるな？」

「はい。俺も心配を鈴には掛けたくないので、眠っている間に帰っ

てきますよ」

俺は織斑先生にそんな感じで言い返した。すると先生も笑みを浮かべながら俺とデュノアを送った。他の人たちも待機という名目で日本列島の付近まで警戒飛行をしてくれるとのことだった…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

というわけなのだ。今は時間にして、夜の25時…いわゆる午前1時だ。

「大丈夫、石井？」

「試験期間中にこれは堪えるよ。早く倒さないといけないね。ほら

…」

「うん」

俺もデュノアも反対側から高速で来る何かを確認することが出来た。程なくして、先ほどの先生が言っていた所属不明のISであることを俺達は確認することが出来た。俺はいつもの通り、日本語と韓国語で話しかけた。

「こちらは石井章？…応答せよ。応答しない場合は発砲するぞ！！」

デュノアもしきりにフランス語と英語で聞いてみてくれたのだが結果は同じで反応は全くなかった。

「無人機みたいだね」

「ああ…お前の言うとおりみたいだな」

俺とデュノアがそんな会話を交わすとさっそく無人機は俺達に発砲してきた。いわゆる不意打ちというやつだ。

「やるねえ、ボクも負けてられないよ」

「こつちもだ…この李舜臣型を嘗めて貰っては困る！！」

俺もデュノアも無人機に向かって行つた。下の方では警報が鳴っていた。どうやら釜山の市民は幸いなことに防空壕の方に避難しているようだ。1950年に勃発した朝鮮戦争は未だ終結してはいないあくまで休戦条約を結んでいるだけなのだ。つまり、再会しようと思えばいつでも再会することが出来る。だから韓国では防空壕に転用出来るように地下街や地下鉄が著しく発達しているのだ。市民はどうも底に逃げているようで釜山の町はライトやらネオンだけが灯っている。実に気味が悪い。

「ちくしょう…韓国の第二の町が…」

俺がそう呟いたその時、無人機は俺に向かって発砲してきたから慌てて俺は避けた。幸いなことに俺はケガ一つなかったのだが…。

「さ、社稷^{サジク}球場が…」

俺の避けた後ろにある、ロッテ・ジャイアンツの本拠地でもある釜山・社稷野球場に流れ弾が直撃してしまい、外野のバックスクリーンの手前辺りに大きな穴が空いてしまった。

「だっ、大丈夫石井？」

「…」

この時俺はとてつもない怒りを無人機に覚えていた。だからデュノアの言っていることなんて耳に入るわけがなかった。

「石井？」

「…許さない…」

「ちよつと!!、石井!!」

俺はデュノアの手を払いのけて無人機にゆっくりと向かって行った。兵装の直刀を自分の利き手である左でに持ちながら…。

「石井!!、それ以上は危険だよ」

慌ててデュノアが俺に無線でそう話しかけてきた。

「デュノア、悪いけどお前には地上付近だけが人がいないか確認してきてくれないか？。俺はこいつを倒す！」

「えっ!？」

「悪いな。俺はこいつを倒さなくちゃいけない。候補生の名にかけても、神聖な野球場を汚したことにしても…」

「でも…」

「大丈夫さ。鈴だつて怒るだろうけど、寝ている間に済ませればどうってことないよ」

「でも…」

「それじゃあな。きっと戻ってくるから」

「あつ、待つてよ!!」

俺はそう言つと無人機に向かつて行つた…。

88話 BUSAN - 1（後書き）

作者の直通特急でございます。ここのところ更新が不規則になってしまったこと、誠に申し訳なく思います。ただいま作者がテスト期間というのも大きく影響しています。読者の皆様には大変ご迷惑をおかけしていますこと深く反省しております。これからも頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。

89話 BUSAN - 2

真っ先に無人機に向かって俺は突っ込んだ。いわゆるラグビーのタックルのようにだ。

「ありゃ？」

あっけなく俺は無人機にかわされてしまった。

「こいつ、かなり出来るな…」

「そうみたいだね。遠くから見ているととってもよく分かるよ。石井、気をつけてね」

「ああ、そうしたいところ…ぐえっ！」

俺はいきなりの先制攻撃に少し痛みを覚えた。どうやら無人機の弾が左脇腹を強めに擦ったようだ。

「大丈夫？」

慌ててデュノアも上に上がってくる。

「何とかな…眠気も一気に覚めたよ」

「やっぱり2人じゃ無理なのかな？」

「何言ってるんだと言いたところだけど、確かにデュノアの言ってることにも一理あるな」

あの無人機に対して、1対1で戦うのは厳しいと言うことが徐々に明るみになってきた。とは言っても今から九州上空を警戒飛行している織斑、篝さん、ラウラさん、セシリアさんと呼んだとしてもそれなりに時間がかかる。

「救援を呼ぶ？」

「それしかないな。俺達でここは切り抜けないといけないけどなおっと!!」

またまた無人機は俺達に向かって撃ってきた。今度は幸いなことに流れ弾も海に消えた。

「これ以上釜山の人たちに心配を掛けさせるわけにはいかないな」

「うん。行こうか？」

俺とデュノアは目を見合わせてそう言い合った。次の瞬間から俺とデュノアは行動を開始した。まず、俺が無人機のおとりになりその間にデュノアが遠隔攻撃をするものだ。野球で言うところのデュノアがランナーで俺が犠牲バントをするようなものかな?…。俺は追いかけられるのは、幾らか自信があった。何てったって学校でしばしば鈴に追いかけられているんだから。とは言っても…

”速いなあ。大丈夫かな?”

無人機の割には俺にぴたりとくつついてくる。俺が速度を落としているというのもあるのだろうがその割には高性能のようだ。侮ってはいけない存在のようである。とは言えその間にもデュノアが無人

機に攻撃をしているから若干無人機にも疲労の色が見え始めてきていた。俺は気がついていなかったのだが遠距離攻撃をしていたデュノアから突然

「石井、見て!!」

「おお…」

俺に無人機を注視するように言った。見ると、無人機からは白煙が出ていることが分かった。しかも、何かが焦げるような匂いもおまけのようについてきた。俺は確信した。

「デュノア、これならいけるぞ」

「うん、それにほら!!」

デュノアに指さされた方向からは織斑と篝さんが猛スピードでこちらにやってきていた。

「シャルル、石井、大丈夫か？」

「遅くなつて済まない。敵は？」

「二人とも…どうもありがとう。俺とデュノアは見ての通り無事だよ。敵は…」

俺はそう答えると敵の方に顔を向けた。

「煙が…」

「もうそんなところまでできているのか？」

「ええ、最後の戦いですね…それにほら、あそこの野球場に穴が出来るだろ？」

「ああ、あれつてもしかして…」

「そうなんだよ織斑。あいつがやったんだ。だから俺は許せない、あいつを必ず倒す」

「ああ!!。俺もそうするよ」

「まつ、待ちなさい…はあはあ」

後ろからもう一人の声が聞こえた…

「り、鈴!!!!。なにやってんだ、お前病み上がりだろ？」

「そんなの…わかってるわよ」

呼吸の感じから言つて、熱もまだ残っているはずである。まるで、高熱の状況ながらも登板する野球選手のようにだ。多分今の鈴にとつてはここまで来るので限界はとうに越しているだろう。俺達4人も驚きを隠せない。

「どうして…」

「何よ!」

「お前…自分の体調が悪いことぐらい知ってるだろ？」

「イヤなのよ」

「はっ?!」

「章? だけにいいところもってかれるのも、章? やみんなだけが苦しんでるところのに自分だけが何も出来ないだなんて…」

「鈴…」

「だからお願い!!、私も戦わせて」

俺達は悩んでいる暇なんてなかった。

「みんなはどう思う?」

俺は改めて鈴を除く3人に聞いた、結果は言わなくても分かってもらえるだろう。それから数分後

「行くぞ!!」

俺のかけ声をスタートの合図として、俺達5人は無人機に向かって行った。

その後の結果は火力の差で俺達の圧勝だった。最後は無人機も釜山の上空で豪快に爆発した。

「ふう… やつたのか?」

「ああ、俺達倒したんだな、石井、シャルル、箒、鈴」

「やったよみんな、倒せたんだよ!!」

「みんな、下を!!」

見ると下の釜山の市民は俺達に歓声を送っていた。警報も解除されたようだ。

「ありがとう!!」

「IS万歳!!」

社稷球場の電光掲示板にもありがとうとローマ字で表示された、釜山の人達は心から俺達に感謝しているようだ。

「鈴!、よかったな」

「…」

「鈴?」

次の瞬間、鈴のISは解放された。

「おっ、おい!!」

危つく鈴は釜山の町に落ちていくところだった、慌てて俺は鈴を両手に抱えた、さながらこの間したお姫様だっこだ。

「鈴…すごい熱じゃないか」

「…ごめんね、章？を心配させちゃって…」

俺は嬉しかった、ここまで自分の身をすり減らしてまでも俺を助けたかった鈴の思いに…

「気にするな、よしっ！、帰ろう！！。鈴、待ってる…今すぐ休ませてやるから」

俺は鈴を抱えたまま、みんなを引き連れて興奮冷めやらぬ釜山の町を後にした…。

90話 早朝の一時

敵を倒した嬉しさ、鈴を心配しながら看病する何とも言えない気分が入り交じった、夜明けを迎えた。今は時間は朝の4時半。いつもなら起きる時間である。でも今日は徹夜だ。

「はい…」

「37度6分か…だいぶ下がってきたな」

「ごめんね。私のせいで、章？に心配掛けちゃって」

「そんなことないって、さあさあまだ寝てな」

「うん」

あれから大急ぎで帰ったのだが、学校の寮に着いたときには既に深夜3時を回っていた。鈴をひとまず俺は寝かしつけて急いで事後報告を行った。案の定韓国政府、釜山広域市、はたまたロッテ・ジャイアンツからもお礼の電報が届いていた。勿論、みんなにだ。その後、からずつと俺は鈴の看病をしているというわけだ。病室はどうやら朝にならないと開かないみたいだ。

「はあ…」

「辛そうだな、いくら何でも無理しすぎだぞ？。病み上がりなんだから」

「それは章？も同じでしょ？」

「そ、そりゃあそうだけど…お前はインフルエンザだったわけだし」

「うう…ゴホッゴホッ…!!」

「大丈夫か？」

慌てて俺は鈴に近寄る。熱が自分の肌までしっかりと伝わってくるほど熱い。俺はひとまず部屋の窓を開けた。こういうときは締め切っているとは病原菌が万円してしまうから極力換気をした方がいい。外はもう夏の陽気で熱くて熱くて…鈴はとっても苦しそうだった。

「暑い…暑いよお」

「我慢しろ…俺だって暑いんだから」

「でも、はあ…はあ」

発汗量から見れば確かに鈴も危険な状態だった。このまま放っておけば脱水症状を起こしてしまいそうだ。急いでスポーツドリンクを鈴にたくさん飲ませた。するとようやく鈴も落ち着きを取り戻したというか収束してくれた。徹夜で行こうと思ったが何だか急に眠気が俺を襲ってきた。

「うっ…」

俺は足がもたついて偶然にも鈴のすぐ脇に（勿論ベッドだが）倒れ込んだ。一番ビックリしていたのは

「きゃっ…!!」

と熱を出していた。鈴であった。俺はどうしようもなかった。睡魔に襲われて動けなくなっていたのだ。

「鈴…」

「ん？」

「このままとなりで朝まで寝かせてくれないか？」

「ええっ!？」

「ダメか？」

「…いいよ。章?がいいんだったら私も…」

そう言いながら鈴は俺の服を掴んだ。風邪で頑張っているんだ。これぐらい俺も協力してあげないと…。

「ありがとう…」

俺は鈴にそう言い返すと短い短い眠りに就いた…。

91話 生涯無料（前書き）

作者がテスト期間のため、連載が不定期になってしまっており、誠に申し訳ございません。

91話 生涯無料

人間の睡眠の周期はとも90分のようなのだ。だから起きる時間を1時間半、3時間、4時間半といった具合に90分周期で眠ると起きるときに寝覚めがいいのだそうだ。だからといって…

「ふわあゝ」

俺は起きるとすぐさま大あくびをした。今は時間にして大体6時10分ぐらい。幾ら90分周期がいいとは言っても本当に90分だけ‘睡眠’でなくてもはや‘仮眠’もいいところだ。隣では鈴が汗をかきながらもスヤスヤと眠っている。顔は相変わらず真っ赤だ。

”俺も迷惑を掛けるわけにはいかないし…換気しておかないとな…”

部屋の窓を開けると俺は各部屋に備え付けてあるベランダに出た。

ここは一応海が近いから潮の匂いも波の音も聞こえてくる。俺が素振りをしているところも少し奥の方まで行けば海だ。日の出の太陽がとても目にしみる。ほんの数時間前まで俺は韓国の釜山上空で無人機と戦っていた訳なのだが…この太陽はまるでそんな事なんてなかったかのようにいつも通りゆっくりと登ってくる。遠くからは東海道線の警笛が聞こえてくる。何だか詩によくありそうな光景だ。

”いいものみれたな…さてと、朝ご飯に行くか”

俺はそう思うと寝ている鈴の枕元にメモを残し、食堂に向かった。

ここの食堂には俺の要望で新聞を置いてもらえるようになった。しかもいろいろな国のやつだ、日本の読売、毎日、朝日は勿論の事、

イギリスのロンドン・タイムズ、アメリカのニューヨーク・タイムズ、フランスのル・モンド、中国の人民日報、はてまた韓国の朝鮮日報まで取りそろえているからビックリである。まあイギリスだとかフランスの新聞はどうしても2日3日遅れてきてしまうのだがそれは仕方がないだろう。決まって俺はいつも朝鮮日報を読む。

「おおお！！」

俺は嬉しかった。早速今朝の朝刊には俺達の夜の出来事が大々的に報道されていた。俺の事以外にもちゃんと織斑やデユノア、それから鈴のことまでしっかりと書かれていたし、況してや鈴なんかは最悪のコンデিশョンの中見事に俺と戦ったと言うことで韓国では限りなく英雄のような扱いを受けているようだ。これは鈴にもちゃんと報告してあげないと可哀想だな。どうやら俺達全員には勲章が韓国政府から与えられるようだ。

「ん？」

俺はふと新聞の隅に目をやった。KBO即ち、韓国野球委員会。韓国のプロ野球を組織する、日本で言うところのNPBのようなものだ。そこが俺に今後韓国で野球の試合を観戦する場合は生涯無料にしてくれるとのことだ。

「おおおお！！」

俺はこれが正直言って一番嬉しかった。

「鈴と一緒に見に行けるなあ。さてと……」

俺は嬉しさを心に秘めると朝食を摂ることにした。まだ時間は6時

前、ようやく太陽が輝こうとし始めている頃であった…。

92話 試験終了

最後の試験もとうとう終わりを告げた。試験終了の鐘が鳴ったのだ。どうやら追試の遅れを取り戻していたようだ。まああれだけ急いで問題を解けば追いつかなくもないか…。

「ふう、終わったなあ。これでようやく試験から解放されるよお」

「本当だな。またキャッチボールでもするか？」

「いいねえ。早速行くか？」

俺と織斑は急いで教室をづらかうとしたのだが運悪く織斑先生が教室に入ってきた。

「席に着け、ホームルームを始めるぞ!!」

「千冬姉が来ちゃったからまた後でだな？」

「そうだな。あの人には俺も逆らえないや…」

俺等もおとなしく席に着いた。

ホームルームで話し合われるお題は既に決まっていて、今度の臨海学校についてのことであった。

「…というわけだ。石井、このことはしっかりと嵐にも連絡しておけよ」

「了解です」

「よし、それじゃあ…」

俺と織斑は急いで立ち上がろうとした。だが：

「まだだ！！」

織斑先生は俺達を叱責する。くすくすと笑い声が聞こえてくるが、別にいい。最近、織斑達とも一層仲良くなってきた気がする。試験勉強を一緒にずっとしていたからだろうか。定かではないが入学当時からしたらこれまた随分と変貌を俺は遂げたようだ。

「昨日は石井達が頑張ってくれたことはみんなも知っているだろう。これからも頑張るように！。以上」

なんだか意外な幕切れでホームルームは終わった。みんなからはその後質問攻めに遭いそうになった。

「ねえねえおりむ、石井君。昨日はどうだったの？」

「少しだけでいいから教えてよ。ねっ？」

布仏さんと鷹月さんにそれから

「私たちも今後参考にしたいから…」

と谷本さんまでもが聞いてくる。だが残念なことに今回のことは口外するなと先生からきつく言われているから答えることが出来ないのだ。

「ごめんな、今回はダメなんだ」

「ええ、どうしてどうして？」

「先生から口止めされててね…」

「ふうん。なら仕方ないか…」

俺と織斑は顔を見合わせた。布仏さんがそう言った瞬間に俺達はいきなり立ち上がって教室から猛スピードで行った。

「あつ、待つて待つて」

「聞きたいことはまだたくさんあるんだから」

後ろからそんな声が聞こえてくる。

「大丈夫かな織斑？」

「なにがだ？」

「あいつ等のこと放っておいてさ」

「いつものことだろ？」

「それもそうだったな…よし、次の分岐点二手に分かれよう。いつもの場所でまた」

「おう」

俺達はそう言いながら校舎をたくさんの子に追いかけられながら駆け抜けた。実はこのランニングはアップを兼ねていたことは誰も知らない俺達だけの秘密なのである…。

93話 金属（前書き）

最近、度々更新が不規則であって申し訳ありません。名前を変えて心機一転、これからも頑張っていこうと思えますのでよろしく願います。

93話 金属

さすがにだいぶ回復していたこともあって、一旦荷物を部屋に置いて着替えた後に病室に向かうと鈴も熱が引いていて、普通に会話も出来るまでになっていた。織斑も一緒にいてとても喜んでいる。

「二人ともありがとう」

「いやいや、俺と織斑以外のみんなも心配してたんだぞ?」

「ああ。セシリアもシャルルもラウラも、篝もな…」

「みんなには迷惑掛けちゃったんだね」

「大丈夫だ。こういうのはお互い様だから」

俺がそう答えると鈴も笑みを浮かべた。その後俺達は、長居は無用と思ったので鈴に別れを告げると一路室内練習場に向かった。さすがに試験終了日から部活をやるはずが…なかった。室内練習場はがらんとしていてむしむしともしていた。このところ暑い日が続いていたのにもかかわらず、換気を十分にしていなかったからだろう。

「おい織斑。そのボタンを押してくれ」

「わかった!」

早速俺達は室内練習場の窓を開けることから作業を始めた。ここの窓、全自動なのだ。瞬く間に天井につけられた自動窓が開いていく。この室内練習場は独特な作りをしていて、天井に窓があってその少

し下にネットが取り付けられている。割れないようにだろう。

「うわぁ、いい光だなあ」

「本当だよ。照明なんかいらなくらいだぜ。おい織斑、この調子で壁の窓も全部開けるか？」

「おう！」

天井だけに止まらず、壁の高いところにある窓も全開する。するといい光がさんさんと舞い降りてくる。幾ら窓とは言ってもあまり掃除が行き届かないところだから窓を開けると開けないのではその差がかなり大きい。まさに福岡ドームが開閉したときぐらいに眩しく感じる。こんな中で野球が出来るなんて俺はとっても幸せ者だ。若干眠さが残っているが野球をしていれば目も覚めていくだろう。

「キャッチボールすつか？」

「よし！」

俺達は早速アップから始めた。まあアップと言ってもいつもキャッチボールの前にさつきみたいに学校を走り回るからキャッチボールだけで終わってしまうのだが…。とりあえず、それを済ませるとさっそくこれまたいつもの通りにマシーンを置いてひたすらバッティングの練習をする。野球の練習とは言ってもそこは男子が2人しかいない学校なだけあってまともな練習と言ったらマシーン打撃ぐらしいかない。

「よし、さっそ…」

「あのー!!」

「ん？」

俺がマシンを取りに行こうとすると不意に後ろから声を掛けられた。見たところセシリアさんのようだ。

「どうかしたのかセシリア？」

と織斑が聞いてくれた。若干俺はほっとした。

「その…よろしければ私も一緒に…」

「練習か？」

「はい、その…ソフトボールをやった時みたいに…」

俺も織斑も少し驚いたが

「どうするよ、石井？」

「いいんじゃないか？、2人でも寂しいしな、よし。せっかくだからもつと誘うか？。セシリアさん付き合ってくれないか？」

俺がそう言うのとセシリアさんも喜んだ顔をして

「わかりましたわ！」

と答えた。それからいつもの通り鈴を除いた6人で野球の練習をした。

「ほうくデユノア飛ばすねえ」

「そんなことないよ。石井とか一夏に比べたらボクなんて足下にも及ばないよ」

「それじゃあ、これ使うか？」

「ん？…これって」

俺はデユノアに金属バットを差し出した。今までは木製のバットを使わせていたのだがもとも男女で体力に差があるしなによりボールを飛ばす気持ちよさを俺は体感して貰いたかったから、一応は買っておいたのだ。俺はまだ使っていない。ソフトボール大会の時はソフトボール用のバットがあつて、これは硬式野球用のバットな訳で使おうにも今まで李承？さんからいつもバットを提供して貰っていたから使う必要がなかったのだ。

「いいの？。まだ袋に入ってるけど…」

「いいよいいよ。さあ、みんなも使ってちょうだい」

「いいのか？。私たちも勝手に使って」

「なんだか悪いですわ」

「いいっていいって。使わない方がバットに失礼だからさ。それにボールが遠くに飛んだ方がみんなも嬉しいでしょ？」

「私は木製でも十分に飛ぶぞ？」

「そりやまあラウラさんなら筋力も十分だしね。他の人はそういうわけにもいかないだろ？」

事実、ラウラさんの筋力には目を見張るものがある。さすが、ドイツで超本格的な軍事教育を受けていただけのことはある。この間も織斑で寝技の練習をしていたみたいだ。まあ織斑は地獄だったようだが…。

「せっかくだし、使ってみるよ。ありがとう石井」

「それじゃあ私たちも心置きなく使わせていただきますわ」

「ありがとうな石井」

3人はそれぞれの言い方で俺にお礼をした。

練習が終わると、金属バットを使っていた人達は大満足のようにだった。確かにボールが飛んでいたからね…。気がつくとき空はもう橙色オレンジになっていた。みんなが帰った後、俺は一人室内練習場に残り

「ふう、みんな喜んでくれてたか。お前もこれから頑張れよ…」

とバットに弦き、後片付けをしているのであった…。

94話 手紙

ところ変わって再び自分の部屋に俺は戻った。最近、鈴が病室送りになることが多いからなんだか前の個室の時みたいに部屋はしーんとしている。いつもなら鈴が迎えてくれていたはずなのだが電気の消えたくらい部屋はどうも久しぶりすぎて今の俺には少々厳しい。

”誰もいない、か…”

俺はしみじみと思った。こここの俺の生活において鈴の必要性はどんどん増しているようだ。愛があるからだなんて格好のいいことは言えないが、俺には鈴が必要なのだ。いつも一緒にいて欲しいぐらいに…。

「おっと、電気つけ忘れてたな」

薄暗い部屋が一気に明るくなった。この学校の寮（まあ他の施設も共通しているのだが）はかなり手の込んだ作りになっていてこの寮も寮とは思えないほどだ。どちらかというと照明などもホテルに近い。ベッドの作りもそれに近くて真ん中に小さなテーブルとランプがある辺りなんてまさにその通りだ。

「ん？」

俺は手紙が置いてあることに気がついた。おそらくとは思っていたが、俺の考えは正解であつたようだ。

”格好良かったよ、心配掛けちゃってゴメンね。早く戻るように私も頑張るから…。大好きだよ。from 鈴”

と短文であつたが。鈴の気持ちが分かつて何だか嬉しかった。

「石井さん、晩ご飯皆様と一緒しませんか？」

「ああ、今行くよ」

俺は鈴の手紙を自分の棚にそつとしまつと、セシリアさんを始め廊下にしたみんなと一緒に食堂へ向かった…。

95話 相談

今日はそう言えばナイターのある日だった。そんな事を思い出しながら食事を済ませて部屋に戻ると早速俺はパソコンを開いた。いつも通りオリックスのページを開く、すると今日の試合は勝ちであることが分かった。李承？選手も先発で出場し3打数1安打とまずまずの成績を残していることが俺は嬉しかった。

「ほっとするな…やつぱり野球は面白い」

そんな事を呟きながら更にネットでいろいろなことを調べる。ロッテ・ジャイアンツのホームページには自分たちに対するお礼と共に今後の試合日程の変更なんかも既にアップされていた。度々自分たちのやったことがどれほどのものなのかと言うことを知る。嬉しい反面本当にこんな事を自分が成し遂げたのかという疑いの念さえも覚えてしまう。

”コンコン！”

その時であった。誰かが外にいるようだ。鈴がないのはみんな知っているはずだからおそらく俺に陽でもあるのだろう。

「どうぞ」

「失礼するぞ」

「ラウラさん、どうか？」

「少し話があつてな…」

「話か…まあまあ、どうぞ」

そついいながら俺はラウラさんを席に座らせた。この人は俺の口からは言えないが何か恐ろしさを覚える。まあ初見があんな風だったこともあるのだろうが。恐ろしさというか威圧感があるといった方がいいだろう。とは言えども幾たびの修羅場をこちらも超えてきているのだからある程度の抗体はある。早速お茶を出してラウラさんの話を聞くことにした。

「はいよ…お茶ぐらいしかないけど」

「済まないな」

そう言いながらお茶をすすった後、ラウラさんは話し始めた。

「私は戦闘用に作られた人間なんだ」

「傭兵って事か？」

「まあそんな風に思っていてくれればいい。その影響もあって、お前に初対面でいきなり暴力を与えようとしたことについては謝罪する」

「今更何言ってるんだよ。気にするなって、ところで話したいことはもっと別なことだろ？」

「わかるか？」

「多分お前の嫁さんネタだと俺は思ってるけど？」

さすがにこれにはラウラさんと言えども驚いているようだ。何で分かったのかという顔をしているがこれは俺にとっては簡単な事であった。なんだか顔を赤くしてポーツとしているんだからきつとねえ。おっと、この後は俺から言わなくても分かっていただけだろう。

「…さすがにいつも行動を嫁と共にしているだけのことはある」

「それで、さっきの傭兵のことと何か関係があるのか？」

「お前の言っていたとおりで今まで私は戦うこと以外に何も考えたことがなかった。だから、あいつがどんなものを好むだとか言うことがわからないのだ。今度臨海学校があるんだろ？」

「ああ、そうみたいだね。それで？」

「私には部下が本国にいてな…」

そう言い始めた瞬間、俺は改めて凄みを覚えた。さすがにドイツで軍事教育をここまでさせられているのだから部下がいると言われても分からなくもないが、やっぱり凄い。

「聞いているか？」

俺はどうやらそんな事を思っている内に上の空になってしまっていたようだ。

「ああごめんごめん。続けてちょうだいな」

「ああ、それでその部下に聞いたところ、どうも日本の男…とりわ

「けこの思春期にはいろいろなことを思っただろうな」

「まあね、でもそれはどの国でも同じ事だろ？」

「そうなのか、中でも女が着る水着には相当な興味を持っていると……」

「うーん、確かにそうと言えるだろうね。そんなこと部下から聞いたのか？」

「ああ。私の部下はかなりの日本通だな」

少し意外でおかしかった。多分IS操縦者の部下なんだろうからきつと女性なんだろう。日本通と言うよりも他の言い方をした方が適切かもしれないな……。

「そこでだ。私の嫁がどんな水着に興味があるのか分からないか？」

「織斑がか！？」

「そんなに驚くことか？」

「いや悪い悪い。少々取り乱した」

「ふむ、ということなんだ。わかるか？」

「いやあ、俺もそれは分からないな。でもまあ、その部下を頼ってみるのもいいんじゃないかな？」

俺の助言に少しばかりラウラさんは驚いたようだ。

「本当か？」

「聞いている限りだと、だいぶ俺達の思っていることが分かるみたいだからさ」

するとラウラさんは安心して

「助かった。ありがとう」

とお礼を言い、部屋を去っていった。ラウラさんも女性なんだなあ。こういうことには疎いとは言えども少なからず関心を最近抱くようになってきているようだ。時計を見るともう消灯の時間であった。

「おっと、そろそろ寝るか」

それからしばらくして病室で寝ている鈴のことを思いながら俺はベッドに潜り込んだ…。

96話 Midnight (前書き)

皆様のおかげで本日、遂に30000ユニークアクセスを達成することが出来ました。今後とも頑張つて書いていく所存でございますので、引き続きよろしくお願いいたします。

平成23年6月

13日 直通特急

96話 Midnight

とんでもない時間に俺は起こされた。時計の針は午前1時半を指している。何も早起きをしたわけではない。俺はほんの数分前までは爆睡していたのだが…

「織斑もかぁ…ふわぁ」

「お前も起こされたのかぁ」

「ゴメンね。何だかボク達の部屋から変な音が聞こえるんだ」

「変な音ねえ…おい織斑、歩きながら寝るなやぁ」

「わるい…ふわぁ」

俺も織斑もあくびをしながら廊下を歩いてデュノアとラウラさんの部屋に向かう。一体何が出たんだろうか。

早速部屋に到着した。ラウラさんも目を赤くしながら起きている。

「夜分遅くに済まない。実はな…」

聞いた限りだとシャワー室から変な音が聞こえるとのこと。確かに近づいてみると、何というかカンカンと変な音が聞こえる。ひとまずソックをして入ってみた。すると中には誰もいなかった。見る限りだとどうやら水道管のネジが緩んでいたみたいで滴に共鳴して音がしていたようだ。

「ペンチ！」

そう言うのと早速デュノアが俺に差し出す。みんな眠そうな顔をしながら俺の作業が終わるのを待っていた。

「ふう〜、おわったあ…」

みんなほっとしたのか俺も含めて再び猛烈な睡魔が襲ってきた。

「ありがと〜、一夏、いい…ふわあ」

「お前さん達も早く寝た方がいい、明日も早いからなあ…行くぞ織斑」

「ああ〜」

そう言うのと俺達はデュノア達の部屋を後にした。

部屋に戻るとしーんとしていて今度はこっちが怖くなるような錯覚に陥りそうだ。月がとっても綺麗な澄んだ夜空は美しいの一言に尽きる。

「はあ…とんだ時間に起こされたもんだなあ…」

輝くその月に照らされながら俺は再び眠りに就いた…。

9 6 話 M i d n i g h t (後書き)

今回はつなぎ要素が強い文章です。

97話 Early Morning

変な時間に起きたせいで結局よく眠ることが出来なかった。今日は1時に一度起こされたから二度目の起床になるわけだが：時間は朝の4時、いつもよりも30分くらい早い。起きて何かをしようにもさすがに早すぎるしかと言って再び寝るにしても少し都合が悪い。お相子と言うことでデュノア達に起きて貰うというのもあるがそんな事をするとな後が怖い気もする。

「ふわあ……」

俺がうとうとしていると突然ドアが開いた。誰かが入ってきたようである。織斑先生という可能性も否定出来ないため、一応俺は寝ているふりをしていた。

「やっぱりダメか：こんなに朝早くじゃあ章？もまだ寝てるか：はあ」

声の主は鈴だ。少し驚かしてやるか：

「おい！」

「きゃっ！」

帰ろうとした鈴を後ろから声を掛けると共に抱きしめた。

「あ、章？……」

「お前が帰ってきてるのに寝てるわけがないだろ？。そりゃあ少し

驚いたけど」

「う、うん……」

首元を触ると熱もなく、十分に回復していることが分かった。まあ今日は大事を取って休むべきだろうが、もう問題はなさそうだ。

「治ったみたいだな……まあこっちに来いよ」

そう言いながら鈴を椅子に座らせた。幾ら6月のお終いとは言ってもここまで朝早くだと結構寒い、灯りは消したままだがとりあえずお茶を入れてあげた。さつき鈴を抱きしめたときに気がついたのだからだ。体が冷えていたようだった。だからこそお茶を入れてあげようと思ったわけだ。

「ほら、飲めよ。温まるぞ」

「ありがと……」

「……」

俺も少し早めだがお茶を飲み始める。いつもは4時半に起きてとりあえず身支度なりなんなりを30分くらいで済ませてそれから素振りに行くわけだが今日はそう言う面ではまだかなり時間に余裕がある。外からは新鮮な海風が舞い込んでくる。それに太陽も……まさにのんびりしたい朝だ。

「どうしてここにやってきたんだ？」

「えっ？」

鈴に俺は当たり前のようなことを聞いた。

「お前病室で寝てたはずだろ？」

「うん」

「なのはどうして…？」

「…たかったから」

「えっ？」

「章？に会いたかったから…」

俺の予想していた答えと大体合っていた。俺も鈴に会いたくて会いたくて仕方がなかった。自分の思っていた答えと合っていて嬉しかった。

「そうか…」

「くしゅん!!」

その時だ。前にもあったような感じに鈴がくしゃみをした。チャンスだ。

「大丈夫か？」

お茶を二人とも飲み干して俺が流しに湯呑みを持って行っているときにくしゃみを鈴がしてくれた。

「寒い…」

鈴もボソツと呟く。確かに二人も寝間着姿だから寒くなるのは当然と言ったら当然だろう。手を触ってみるとだいぶ冷えていた。お茶を飲んでしてもこれだけ冷えているのかと再認識させられた。

「寝ていきなよ。朝まで、ここはお前の部屋なんだしさ」

「うん…」

俺も一服したら疲れたから布団の中でのんびり本でも読むことにしよう。丁度この間韓国から取り寄せたプロ野球の歴史について書かれた本があるから、それでも読んでいれば十分だ。

俺が早速ベッドの中に入った。だが鈴は動かない。

「どうかしたのか？」

「…うう…」

鈴はうめき声を上げながら椅子に座ったままだ。

「大丈夫か？」

俺は心配になって起き上がった。すると、

「章？って簡単だよな」

そんなことをいいながら鈴は俺に飛びついてきた。いやタツクルし

てきたといった方がいいかもしれないな。威力が強すぎる。

「なっ、何なんだよ！……っ！！」

俺が驚いていると鈴はいきなり口づけをしてきた。とつてもとつても長かった。驚きのあまり息が続かなくなってしまいそうだった。

「はぁ……はぁ……驚くじゃないか」

「だって章？に会えて嬉しかったんだもん。こんなんじゃ私の嬉しさを伝えきれないよ」

「鈴……今度は……」

「えっ？」

「今度はこっちの番……だよな？」

「なっ、ちよつと……！」

俺も鈴に対抗して口づけを自分の意志でする。口づけだけで終わらせない、舌まで入れて念入りにしてやった。

「ぷはぁ。章？、嬉しい……」

「俺もだ。さて、お前も体調も心配だから寝るぞ」

「うん！」

そう言うと鈴も隣にある自分のベッドに戻った。瞬く間に寝息が聞

こえてきた。

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z」

「あいつ、よっぽど嬉しかったんだろうな。お互い様ってところか」

俺はそんな事を呟くと朝日をランプ代わりにして、さっきの本を読み始めた。今日の朝練は中止でいいや…。

98話 朝のHitotoki

1時間半近く気がつくと時間が経過していた。それでも時間は大体朝の6時前。まだまだ十分すぎるほど朝だ。

「zzzzzzzzzz」

隣で寝ている鈴を時たま眺めながら本を読み続ける。ようやく1990年代に話は突入し始める頃だ。

”1992年のシーズンは韓国プロ野球発足10周年であると共に後世に語り継がれるであろう名選手が続々とプロの世界に足を踏み入れた年でもあることを忘れてはならない。この年、三星には後に数々の韓国記録を打ち立てることになる梁ヤン？ジユンヒョク赫が、ヘテには後から「風の子」と親しまれ後に日本イルボンの中日ドラゴンズでも活躍する李鍾範イジョンボムがそれぞれ入団した。梁？赫に至ってはルーキーでありながらも打率・341、本塁打23本でかつ首位打者をももぎ取るという快挙を見せて新人王をとって見せた。この翌年には李鍾範チヨルラナムドが打率393で首位打者を獲得することになる。球団の数も全羅南道チヨの全州市をホームとした‘サンバンウル・レイダース’が設立されて計8球団となった。”

大体文章を要約するとざっとこんな感じである。まあひたすら韓国プロ野球の歴史を歴史の教科書のようにたどっていただけなのだが俺にとっては大変新鮮だ。

「もう6時か…」

そんな事を俺はボソツと呟きながらベッドの脇にある小さなテープ

ルの上に置いてあるお茶をすする。気がついた頃にはもう鈴も目を覚まして唸っていた。

「ううん…あれ、もう…こんな時間」

「よお。起きたのか？」

「うん。よいしょっと」

「ああ、まだ病み上がりなんだから横になつてろ」

「いいわよ、これぐらい」

「ダメだつて。さあほら…」

そう言いながら俺は鈴を寝かし続ける。これは昔俺がおばあちゃんから教わったことだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「風邪って言うのは治りがけの時が一番肝心なんだよ。へたに動き回ったりしないで、のんびり布団の中で休むんだよ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は結構おばあちゃん子だったところもあるからそういうことは今までずっと守ってきた。

「テレビつけてもいいか？」

「うん」

俺はそう言つと早速行動に移した。ニュースはいつも通り政治のくだらない話をたくさんしている。”なんとか降ろし”だとか”新政权”だとか本当にろくな事を考えていない。

「章？、顔が怖くなってる」

「ああごめんごめん」

気がつかないうちに俺の顔は本当にそうなっていたみたいだ。

「さて、続いてスポーツです。昨日はセパ合わせて6試合が行われました。オリックスは李承？選手のホームランで快勝しています。それではその時の映像を…」

久しぶりの李承？選手のホームランが俺は嬉しかった。

「章？、今度は凄い喜んでるね」

「そんなに顔に出てるか？」

「とつても」

俺も鈴もお互いを見ながら笑い合った…。

99話 return

俺は言った鈴を病室に連れ戻すことにした。本当はまだ戻っちゃ行けないんだから…

「鈴」

「ん？」

「そろそろ病室に戻るぞ」

「何だよ！」

鈴はどうもここから離れるというか、また病室に戻りたくないらしいようで駄々をこねているみたいだ。

「何でって、お前一応は病人って扱いなんだから当然だろ？」

「でも…」

往生際が悪いやつだなんて思いながら俺は更に追い打ちを掛ける。

「織斑先生に仲良く怒られたいのか？」

「うっ、千冬姉に…」

織斑から聞いた話なんだが、どうも織斑自身も鈴も織斑先生のこと
は苦手のようだ。確かにまあ何というか普通の女性とは違ってどこ
となく威圧感があるような気がする。世界大会で優勝したことは伊

達ではないようだ。とは言えどもこの学校ではあくまでも先生。俺は別に先生に怒られるという意味で言ったのだがどうも鈴には別の意味で捉えられているようだ。

” 章？とは一緒にいたい。でも千冬姉に怒られる…”

「…イヤ、それだけはイヤ」

「だろ？」

そう俺が聞くとこっくりと頷いて俺に応答する。さすがに鈴もとうとう折れたようだ。

「さてと、それじゃあ俺がお前を病室まで連れてってやるよ。でもなあ…」

「どうかしたの？」

「いやさあ、なんていうか普通に歩いて送るのも怪しまれるかなあって」

「そうだね。確かに章？の思ってる通りかも」

「だろ？。だからさあ…よいしょっと」

俺は鈴を背中におぶった。これなら幾らかごまかしが利くだろう。

「これで大丈夫じゃないか？」

「うん。行こう行こう」

「了解、でもまだ朝早いんだから騒ぐなよ」

「わかってるわ」

「よし」

俺は鈴を背負い病室に向かった。幸いな事ながらあと少しというところまで誰とも会わなかった。しかしまあこういうときに何で現れるのか分からないがいきなり織斑先生がジャージ姿で前からやってきた。

” 鈴、寝たふりしてろ！”

” わかった！”

俺と鈴はあうんの呼吸というか、以心伝心というかでとにかくお互いの意志を伝え合った。まもなくして織斑先生がこっちにやってきた。

「おはようございます。先生」

「背中に背負っているのは鈴か、どうしたんだ？」

「いや昨日の夜のことなんですけど、忘れ物したって部屋に来てそのまま寝ちゃったんですよね。だから今なら病室に送っておいても大丈夫かなって…」

「そうか」

「ところで先生。今何時ですか？」

自分の腕時計を織斑先生は見る。

「6時20分だ。それがどうかしたのか？」

「いえ特には……」

「そうか、早く送って行ってやれ体調が悪いんだからな」

”よかった”

そんな事を思いながら俺は

「わかりました」

と受け応えをすると急いで病室に連れて行つた。

「いやあさつきは怖かったなあ」

「私もよ。ハラハラしちゃった」

「さてと……それじゃあ行かないとな」

「うん、今日の夕方にはまた戻れるといいな」

「楽しみにしてるよ」

最後に鈴を俺が軽く抱きしめるととても喜んでくれた。だがこれで終わってくれないのだ。部屋の前につくと張り紙がセロテープで

くつついていた。

”石井章？、戻り次第制服に着替えた上で直ちに寮長室まで来ると。織斑”

いわゆるお呼び出してやつだ。どうやら先生には俺のウソは見透かされていたようだ。

「やれやれ…」

俺はそう呟きながら張り紙をはがして部屋の中に入った…。

皆様へのご案内

このたびはIS:The top of Asiaをここまでお読み下さいまして誠にありがとうございます。作者が本作品を読み返しましたところ

- ・内容が急展開過ぎる

- ・主人公の性格の変化があまりにも急激

と言った不具合を多数発見いたしました。

ですので、本作品を一旦ここで打ち切りにいたしまして別に内容を大幅に修正いたしました作品を順次投稿していこうと考えております。ただ、最初の5話前後まではそこまで大きな修正は行わないつもりでございます。

最後になりますがここまでお読みになられました皆様には誠に申し訳なく思います。本当にすいませんでした。また今後とも引き続きのご支援を心からお待ち申し上げます。

追伸、修正版は名前を「IS:Plays as a bridge」と言うタイトルで、主人公やヒロインの設定等は変えない方針で書いていく所存でございます。ただ、一部の携帯電話からお読みの際に主人公の名前が変になってしまおうと言う不具合が発生いたしましたのでこの点につきましては主人公の名前を変更する形で修正させていただきます。

<http://ncode.syosetu.com/n1036>

u /

これが新しい小説のURLでございます。

2011年6月16日 作者 直通特急

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5085s/>

IS...The top of Asia

2011年6月16日11時48分発行